

美沢川流域の遺跡群XVII

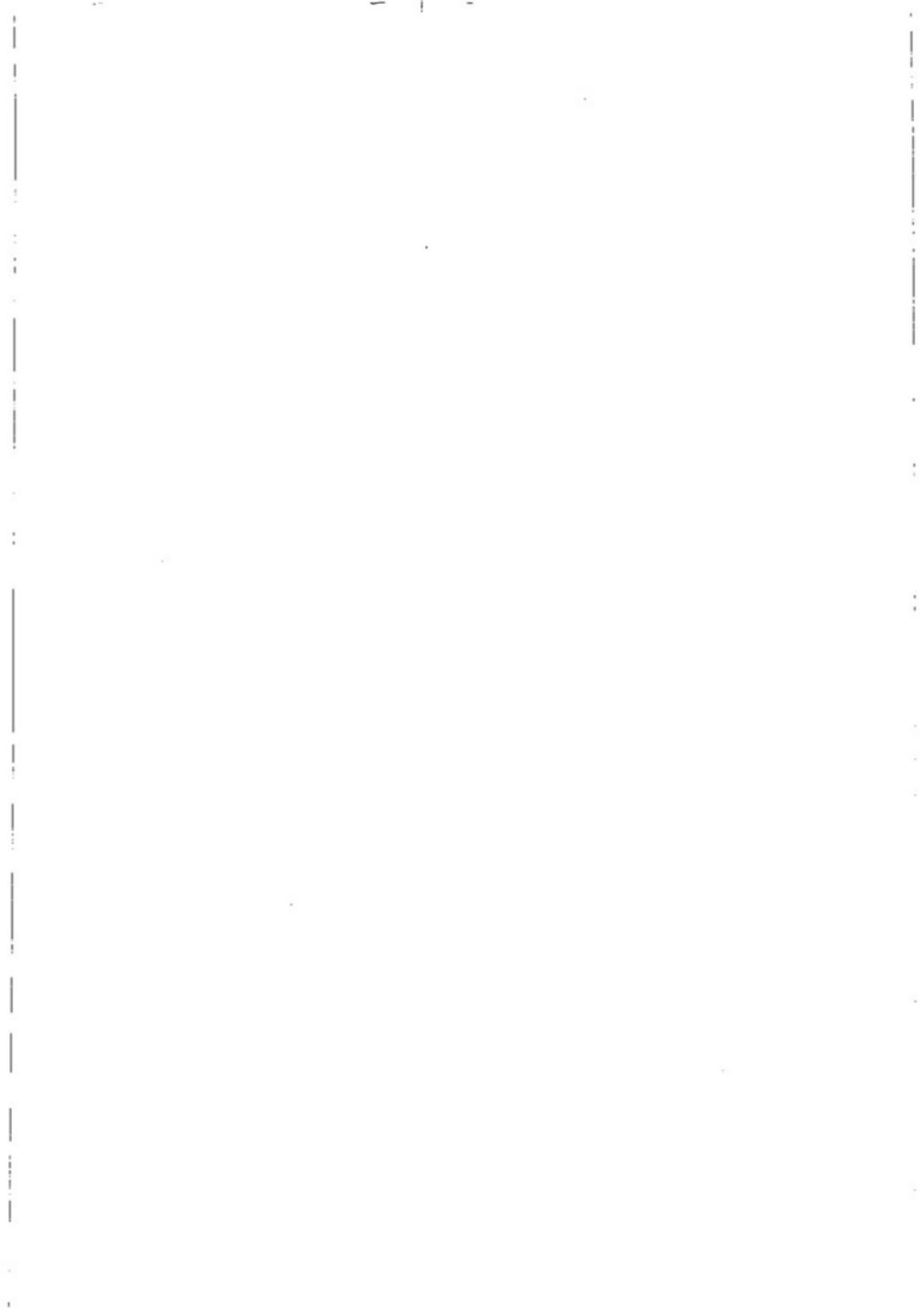
——新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書——

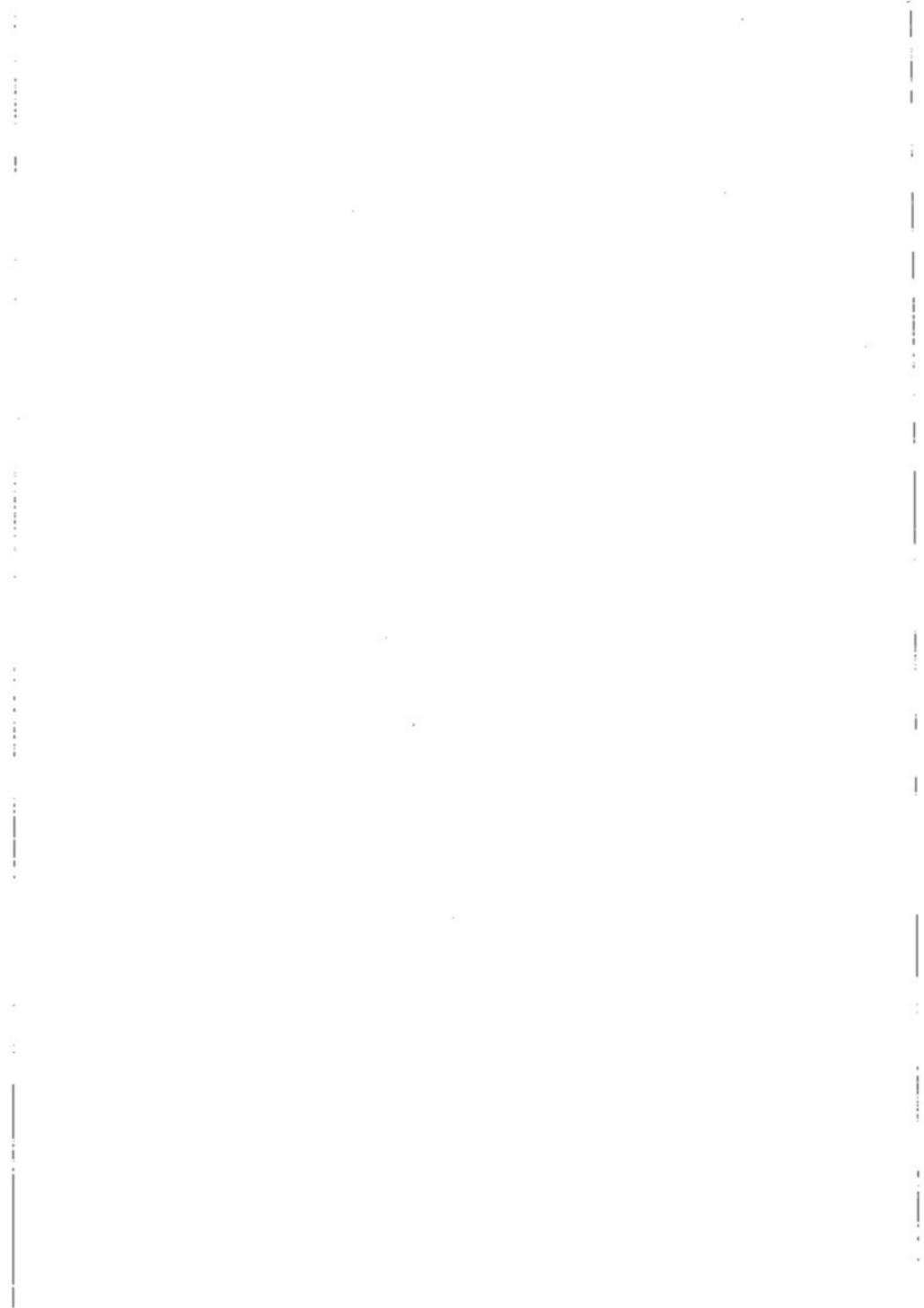
美 沢 3 遺 跡

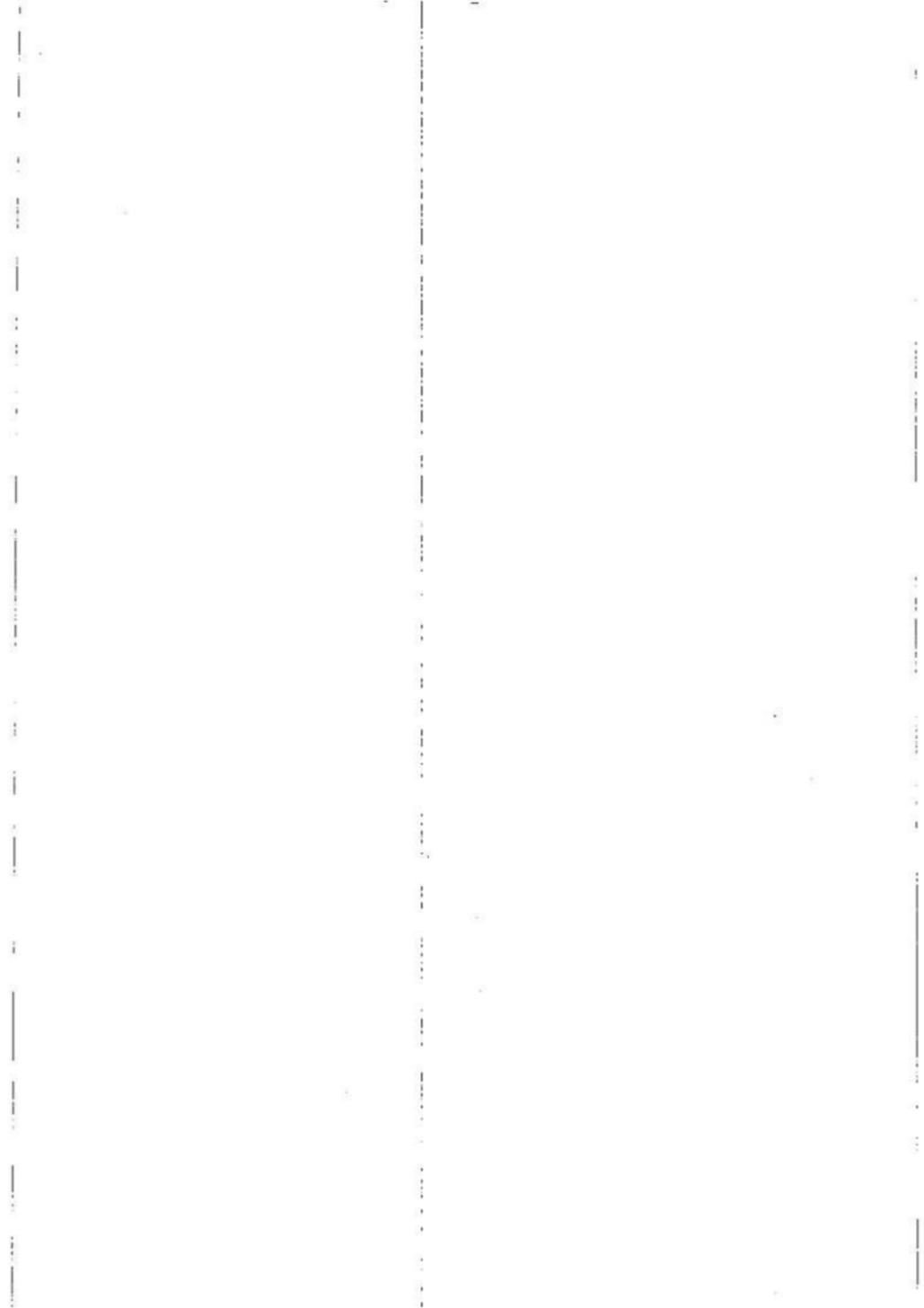
美 々 8 遺 跡

平成5年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター







美沢川流域の遺跡群XVII

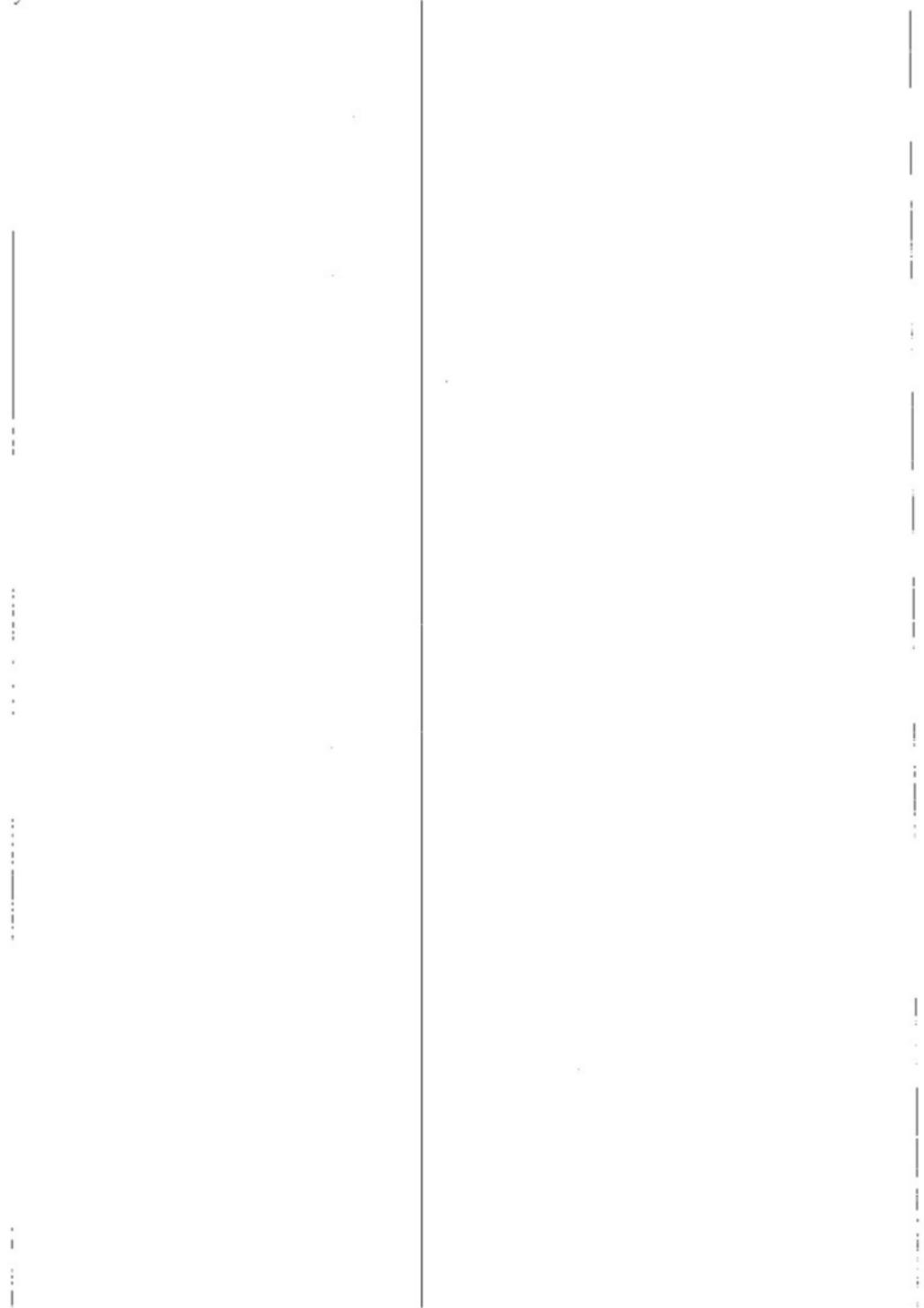
—新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

美 沢 3 遺 跡

美 々 8 遺 跡

平成5年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



例 言

1. 本書は平成5年度に当センターが実施した新千歳空港建設用地内の埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告である。
2. 本書の執筆は、Ⅰ：佐藤和雄、Ⅱ：三浦正人・千葉英一・佐藤和雄、Ⅲ：佐藤和雄・千葉英一・三浦正人が担当した。
3. 各種測定、同定、分析等は下記に依頼した。

動物遺存体	千歳市教育委員会	高橋 理氏
金属製品	岩手県立博物館	赤沼英男氏
4. 石材鑑定は調査第4課 花岡正光による。
5. 調査報告終了後の出土遺物および記録類については北海道教育委員会が保管する。
6. 調査にあたっては下記の諸機関、各氏からご指導ご協力をいただいた。

文化庁、北海道教育委員会、千歳市教育委員会、北海道開発局札幌開発建設部新千歳空港建設事業所、渡辺重建工業株式会社

北海道開拓記念館 平川善祥、千歳市教育委員会 田村俊之・豊田宏良・松田淳子・遠藤昭浩、
苫小牧市埋蔵文化財調査センター 二階堂啓也・兵藤千秋・赤石慎三、札幌市埋蔵文化財センター
上野秀一・仙庭伸久、江別市郷土資料館 野中一宏・稲垣和幸、恵庭市郷土資料館 上屋真一・
松谷純一、余市町教育委員会 宮 宏明、平取町二風谷アイヌ文化博物館 森岡健治

記号等の説明

1. 遺構の表記は以下に示す記号を用い、原則として発掘調査順に番号を付した。

P:土壇 T:Tピット F:焼土 S:集石 SP:小ピット

美々々遺跡の遺構記号の頭には0・I・IIのように層を表示してある。

2. 遺構図の数値は標高(単位m)である。
3. 遺構の規模は「確認面での長軸長×短軸長/床(底)面での長軸長×短軸長/確認面からの最大深」の順で記した。一部破壊されているものは現在長を()で示し、不明のものは一で示した。
4. 石器、石製品、の大きさについては最大長、最大幅、最大厚の順で記した。
5. 土層名は下記の略号、略称を用いた場合がある。

樽前a降下軽石層:Ta-a層(a)

第0黒色土層:0黒層(0黒または0B)

樽前b降下軽石層:Ta-b層(b)

第I黒色土層:I黒層(I黒またはIB)

有珠山b₂火山灰層:Us-b₁層

第II黒色土層:II黒層(II黒またはIIB)

苫小牧火山灰層:Tm層

第III黒色土層:III黒層(III黒またはIIIB)

樽前c₁降下軽石層:Ta-c₁層(c₁)

恵庭aローム層:En-aローム層(En-L)

樽前c₂降下岩片層:Ta-c₂層(c₂)

恵庭a降下軽石層:(En-P)

樽前d₁降下岩片層:Ta-d₁(d₁)

支笏軽石流堆積物:Spfl層(Spfl)

樽前d₂降下スコリア層:Ta-d₂層(d₂)、粒の明瞭なスコリアはd₂S、ローム状のスコリアはd₂L)

※火山灰の層名・略号は下記による。()内はそれをさらに簡略化したものである。

横山 泉・勝井義雄・大場与志男・江原幸雄(1973)『有珠山』

曾屋龍典・佐藤博之(1980)『千歳地域の地質』

北海道火山灰命名委員会(1982)『北海道の火山灰』

6. 土層の混在状態は上記の略号などを用いて下記のように現してある。

A+B:AとBがほぼ同量に混じる。

A>B:AにBが少量混じる。

A>>B:AにBが微量混じる。

目 次

例言

記号等の説明

I	調査の概要	1
1	調査要項	1
2	調査体制	1
3	調査の経緯	3
4	土層	3
5	調査結果の概要	3
(1)	美沢3遺跡	3
(2)	美々8遺跡	3
(3)	美々8遺跡低温部	3
6	遺物の分類	4
II	美沢3遺跡の調査	7
1	調査の概要	7
2	遺構	10
(1)	土壇	10
(2)	焼土	10
(3)	Tピット	12
(4)	動物の足跡	14
3	遺物	15
(1)	土器	15
(2)	石器・石製品	23
4	まとめ	29
III	美々8遺跡の調査	33
1	概要	33
2	表土層の遺構	34
(1)	小ピット群	35
3	表土層出土の遺物	36
(1)	全般	36
(2)	金属製品	37
4	0黒層・I黒層の遺構とその遺物	39
(1)	近世アイヌ墓	40
(2)	柱穴群	42
(3)	焼土	42
(4)	骨片集中	46
(5)	集石	46
(6)	道跡	74

5	I 黒層出土の遺物	75
(1)	土器	75
(2)	土器の分布	93
(3)	土製品	102
(4)	石器	103
(5)	0 黒層・I 黒層出土の金属製品	104
6	まとめ	113
	撥文時代の土器について	113
付属		
	美々8遺跡出土の動物遺存体	高橋 理 121
写真図版		
II	美沢3遺跡の調査	127
III	美々8遺跡の調査	141

挿 図 目 次

図 I-1	遺跡の位置	2
図 I-2	土層模式図	3
図 I-3	美沢川流域遺跡群の位置と発掘区の呼称	5
図 I-4	美沢川流域遺跡群の分布	6
図 II-1	美沢 3 遺跡 II 黒層 年度別調査区	7
図 II-2	美沢 3 遺跡 II 黒層全体遺構位置図	8
図 II-3	P-71・F-43	11
図 II-4	T-24・T-25・T-26	13
図 II-5	動物の足跡	14
図 II-6	土器(1)	17
図 II-7	土器(2)	19
図 II-8	土器(3)	20
図 II-9	土器(4)	21
図 II-10	土器(5)	22
図 II-11	石器(1)	24
図 II-12	石器(2)	25
図 II-13	石器(3)	26
図 II-14	石器(4)・石製品	27
図 III-1	美々 8 遺跡 年度別調査区	33
図 III-2	表土層遺構位置図	34
図 III-3	小ピット群	35
図 III-4	表土層出土の金属製品	38
図 III-5	I 黒層遺構位置図	39
図 III-6	近世アイヌ基 (I P-1) の遺物	40
図 III-7	近世アイヌ基 (I P-1)	41
図 III-8	柱穴群	42
図 III-9	焼土(1)	43
図 III-10	焼土(2)	44
図 III-11	焼土(3)	45
図 III-12	骨片集中	46
図 III-13	集石(1)	48
図 III-14	集石(2)	49
図 III-15	集石(3)	50
図 III-16	集石(4)	51
図 III-17	集石(5)	52
図 III-18	集石(6)	53
図 III-19	集石(7)	54
図 III-20	集石(8)	55
図 III-21	集石(9)	56
図 III-22	集石 00	57

図III-23	集石01	58
図III-24	集石02	59
図III-25	集石03	60
図III-26	集石04	61
図III-27	集石05	62
図III-28	集石06	63
図III-29	集石07	64
図III-30	集石08	65
図III-31	集石09	66
図III-32	集石10	67
図III-33	集石11	68
図III-34	集石12	69
図III-35	集石13	70
図III-36	集石14	71
図III-37	集石の礫グラフ(1)	72
図III-38	集石の礫グラフ(2)	73
図III-39	道跡-1・2	74
図III-40	土器(1)	86
図III-41	土器(2)	87
図III-42	土器(3)	88
図III-43	土器(4)	89
図III-44	土器(5)	90
図III-45	土器(6)	91
図III-46	土器(7)・須恵器	92
図III-47	土器の分布 (VII群-I・II)	93
図III-48	土器の分布 (VII群-III)	94
図III-49	土器の分布 (VII群-IV)	95
図III-50	土器の分布 (VII群-V・VI)	96
図III-51	土器の分布 (VII群-VII)	97
図III-52	土器の分布 (VII群-VII a)	98
図III-53	土器の分布 (VII群-VII b)	99
図III-54	土器の分布 (VII群-IX)	100
図III-55	須恵器の分布	101
図III-56	土製品	102
図III-57	石器	103
図III-58	金属製品(1)	106
図III-59	金属製品(2)	107
図III-60	金属製品(3)	108
図III-61	金属製品(4)	109
図III-62	金属製品分布図	112
図III-63	弥文時代の土器(1)	114
図III-64	弥文時代の土器(2)	115
図III-65	弥文時代の土器(3)	116

表 目 次

表 I-1	美沢川流域遺跡群の年度別調査面積	1
表 II-1	掲載土器一覧	18
表 II-2	掲載石器一覧	28
表 II-3	美沢3遺跡 II 黒層遺構一覧	30
表 III-1	表土層出土遺物集計	36
表 III-2	表土層出土金属製品一覧	37
表 III-3	骨片集中出土土器観察表	46
表 III-4	集石出土土器観察表	47
表 III-5	土器観察表(1)	75
図 III-6	土器観察表(2)	76
表 III-7	土器観察表(3)	77
表 III-8	土器観察表(4)	78
表 III-9	土器観察表(5)	79
表 III-10	土器観察表(6)	80
表 III-11	土器観察表(7)	81
表 III-12	土器観察表(8)	82
表 III-13	土器観察表(9)	83
表 III-14	土器観察表(10)	84
表 III-15	土器観察表(11)	85
表 III-16	土製品一覧	103
表 III-17	石器一覧	103
表 III-18	金属製品一覧(1)	110
表 III-19	金属製品一覧(2)	111
表 III-20	まとめ掲載土器一覧	117
付篇 表 1	出土動物遺存体一覧(1)	122
表 2	出土動物遺存体一覧(2)	123

写 真 図 版

II 美沢3遺跡の調査	127
図版II-1 美沢3遺跡A地区・B地区調査風景	127
図版II-2 P-71・T-24・T-25	128
図版II-3 T-26・動物の足跡	129
図版II-4 遺物出土状況ほか	130
図版II-5 A地区・B地区完掘状況	131
図版II-6 復元土器	132
図版II-7 土器	133
図版II-8 土器	134
図版II-9 土器	135
図版II-10 土器	136
図版II-11 剥片石器	137
図版II-12 剥片石器・石製品	138
図版II-13 礫石器	139
図版II-14 礫石器	140
III 美々8遺跡の調査	141
図版III-1 表土層調査風景	141
図版III-2 小ピット群	142
図版III-3 表土層出土の遺物	143
図版III-4 I黒層調査風景	144
図版III-5 I黒層調査風景	145
図版III-6 近世アイヌ墓(I P-1)	146
図版III-7 I P-1出土の鉄製品	147
図版III-8 集石	148
図版III-9 集石・土製品出土状況ほか	149
図版III-10 道跡-1	150
図版III-11 土器出土状況	151
図版III-12 集石・骨片集中出土の土器	152
図版III-13 土器(VII群I・II・III類)	153
図版III-14 土器(VII群IV・V・VI類)	154
図版III-15 土器(VII群VII・VIII類)	155
図版III-16 土器(VII群VIII b・IX類)	156
図版III-17 土器(坏)	157
図版III-18 土器(坏)	158
図版III-19 土器(鉢・甕・底面の砂粒付着状態)	159
図版III-20 須恵器	160
図版III-21 ガラス玉・石鏝・土製品	161
図版III-22 金属製品出土状況	162
図版III-23 金属製品	163
図版III-24 金属製品	164
図版III-25 金属製品	165
図版III-26 低湿度土壌水洗・選別	166

I 調査の概要

1 調査要項

事業名：新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道開発局札幌開発建設部

受託期間：平成5年4月13日～平成6年3月25日

発掘期間：平成5年5月10日～平成5年10月28日

調査遺跡（北海道教育委員会登録番号）・所在地・調査面積

美沢3遺跡（J-02-81）苫小牧市美沢164-40ほか 6,340㎡

美々8遺跡（A-03-94）千歳市美々1292-381 5,597㎡

2 調査体制

財団法人北海道埋蔵文化財センター

理事長 寺山敏保（平成5年8月10日まで）

理事長 阿部 茂（平成5年8月11日から）

専務理事 永田春男

常務理事 中村福彦

業務部長 中野眞吾

調査部長 森田知忠

調査第3課長 千葉英一

主任 佐藤和雄（美沢3遺跡・美々8遺跡発掘担当者）

主任 三浦正人（ 〃 ）

主任 田口 尚（美々8遺跡低湿部整理担当者）

囑託 越田雅司

写真技師 菊池慈人

表1-1 美沢川流域遺跡群の年度別調査面積（単位㎡）

遺跡名	51-52年	53年	54年	55年	56-57年	58年	59年	60年	61年	62年	63年	元年	2年	3年	4年	5年	計
美々8							10,906	5,000*									10,906*
3									4,585			6,000	9,225*	2,075*			16,415*
4	1,160	5,033**		7,150		6,475	6,180	5,899									26,864
5	300	6,628	752	8,450			6,544										22,674
6		5,000		3,450													8,450
7		5,000		3,400										2,323	1,547		11,270
8					15,775			1,828		11,112		4,182	215*	5,161	10,769	5,597	54,557*
9						5,000											5,000
美沢1	8,620	11,330		2,340													22,300
2	10,380																10,380
3	1,750			3,480							17,454	5,478*	7,150			6,340	40,694
4			23,760														23,760
5			6,800						680								7,480
10									4,027								4,027
11									1,570	5,720							7,290
13										2,185							2,185
計	22,400	27,958	31,312	27,270	15,775	11,475	23,630	7,729*	10,822	19,007	17,464	14,682*	12,009*	8,609*	12,316	11,937	274,383

* 美々8遺跡の60年度5,000㎡、美沢3遺跡の元年のうち978㎡、美々3遺跡の2年度のうち4,500㎡、美々3遺跡の3年度のうち950㎡については、【黒層の調査のみで、それぞれ前年度の【黒層の面積に計上されているので、面積集計から除外してある。また美々8遺跡の2年度のうち62㎡は前年度の下位（水付部分）の調査なので、同様に面積集計から除外してある。***約240㎡を調査。面積集計から除外。



図 I - 1 遺跡の位置

1 : 美々8遺跡 2 : 美沢3遺跡

この図は国土地理院発行の5万分の1の地形図「千歳」を使用したものである

3 調査の経緯

新千歳空港建設に伴う美沢川流域の遺跡群の発掘調査は、昭和51年度から北海道教育委員会によって始められたが、昭和54年9月からは当センターの設立にともなって引き継がれており、今年度で18年目である。この間、表I-1に示すとおり16遺跡、27万㎡余について発掘調査が行われた。

今年度はB滑走路本体にかかる美沢3遺跡、美々8遺跡の発掘調査を行った。

4 土層

美沢川流域の遺跡群における基本的な層序は、図I-2に示すとおりである。今年度は表土（1739年以降）、0黒層（1667年～1739年）、I黒層（縄文時代晩期～1667年）、II黒層（縄文時代早期～晩期）から遺構・遺物が発見されている。

5 調査結果の概要

(1) 美沢3遺跡

遺跡は、標高約22mの台地平坦部から斜面部分にかけて位置する。今年度の調査区は遺跡の南西側（A地区）と南側中央部（B地区）の2カ所である。発掘調査はII黒層のみを対象に行った。過去5度にわたる調査も今年度で最後である。

遺構は、A地区で土壇1基、焼土2カ所が検出された。土壇は縄文時代晩期のものと考えられる。B地区ではTピット3基、焼土1カ所が検出された。Tピットはいずれも墳底に杭穴をもつものである。

遺物は約7,000点出土しており、大半が縄文時代早期の土器である。このうち中茶路式はB地区に東朝鮮IV式はA地区にまとまって分布する。このほかわずかに早期（コックロ式）、前期（網文式）、後期（手稲式、堂林式）の土器片がみられる。

石器には、石鏃、つまみ付ナイフ、すり石、たたき石などがある。

(2) 美々8遺跡

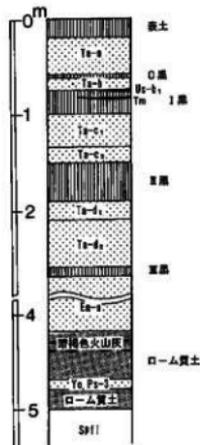
遺跡は標高約20mの台地とそれに続く斜面に位置する。今年度は、昭和56年度調査区の北側に隣接する部分の表土層とI黒層を調査した。表土層では小ピット52個が検出された。旧室蘭街道に関係する杭跡の可能性が強いものである。出土した遺物には鉄鍋・薬莢・陶磁器などがある。I黒層では土壇墓1基、柱穴58個、道跡2条、焼土425カ所、骨片集中7カ所、集石100カ所が検出された。土壇墓は長楕円形で、土壇内から鉄鍋と小刀が伴出している。出土した遺物は縄文時代の土器が大半で、次いで鏃が多い。この他には陶磁器、石鏃、砥石、鉄鍋、鎌、鉄斧、鉄鏃、刀子、刀、釘、古銭、土錘、紡錘車などがある。自然遺物にはクルミ、魚骨、獣骨などがある。おもに焼土や骨片集中から検出されている。

なお、昭和54年度から続いていた発掘調査は今年度で終了した。

(3) 美々8遺跡低湿部

本年度は物送り場の土壇やクラムシェルであげた土壇約22,000袋の水洗作業をおこなった。作業能率を上げるため、工業用洗濯機も使用した。その結果、木製品、織維製品、金属製品、縄文土器、陶磁器、石製品、動植物遺存体などの遺物が検出された。

(佐藤 和雄)



図I-2 土層模式図

6 遺物の分類

(1) 土器

I群 縄文時代早期に属するもの。

a類 貝殻縁線痕文、条痕文のある土器群。

b類 縄文、蒸糸文、結条体痕文、組紐痕文、貼付文などの施される土器群。

b-1類 東銅路II式、東銅路III式に相当するもの。

b-2類 コックロ式に相当するもの。

b-3類 中茶路式に相当するもの。

b-4類 東銅路IV式に相当するもの。

II群 縄文時代前期に属するもの。

a類 縄文の施された丸底、尖底を特色とする土器群。

a-1類 網文土器に相当するものと結束のない羽状縄文の施された丸底を特色とするもの。

a-2類 春日町式、中野式など縄文の施された尖底を特色とするもの。

b類 円筒土器下層式、植苗式に相当するもの。

III群 縄文時代中期に属するもの。

a類 円筒土器上層式に相当するもの。

b類 a類以外のもの。

b-1類 天神山式に相当するもの。

b-2類 柏木川式に相当するもの。

b-3類 北筒式(トコロ6類)、ノグップ2式、煉瓦台式に相当するもの。

IV群 縄文時代後期に属するもの。

a類 余市式、入江式に相当するもの。

b類 船泊上層式、手稻式、鮫淵式、エリモB式、煉瓦台式に相当するもの。

c類 堂林式、三ツ谷式、御殿山式に相当するもの。

V群 縄文時代晩期に属するもの。

a類 大洞B式、上ノ国式に相当するもの。

b類 大洞C₁式、大洞C₂式に相当するもの。

c類 大洞A式、大洞A'式に相当するもの。

VI群 統縄文時代に属するもの。

VII群 弥文時代に属するもの。

(2) 石器・石製品

剥片石器には石鏃、ポイントもしくは両面加工のナイフ、つまみ付きナイフ、スクイーパー類、石錐、楔形石器などが、礫石器には石斧、たたき石、すり石、砥石、石皿・台石、石錘などがある。ほかに石核、剥片・石屑、加工痕ある剥片(Rフレイク)、刃こぼれ状の使用痕ある剥片(Uフレイク)がある。

石製品には蛇紋岩製の垂飾がある。

(3) 土製品 紡錘車、土錘

(4) 金属製品 鉄鍋、鎌、鉄斧、鉄鏃、刀子、刀、釘、古銭など

(5) ガラス製品 玉

(6) 自然遺物 獣骨・魚骨などの動物遺存体、クルミの植物遺存体がある。

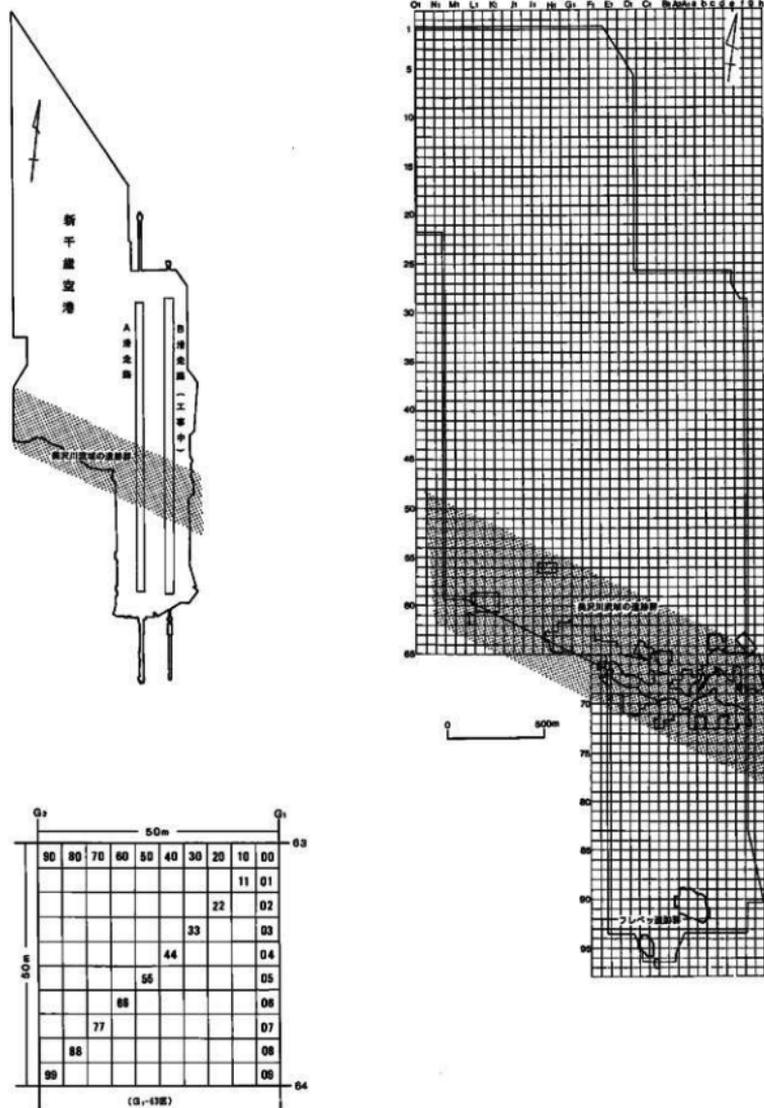


図 I - 3 美沢川流域遺跡群の位置と発掘区の呼称

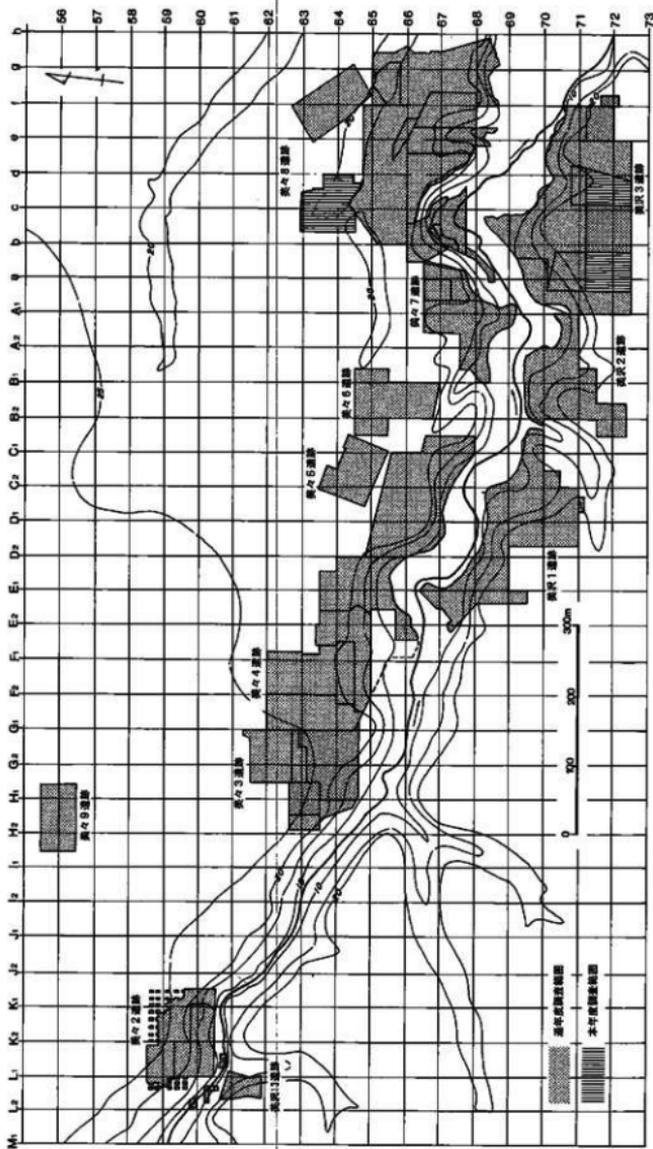


図 I-4 美沢川流域鳥群の分布

II 美沢3遺跡の調査

1 調査の概要

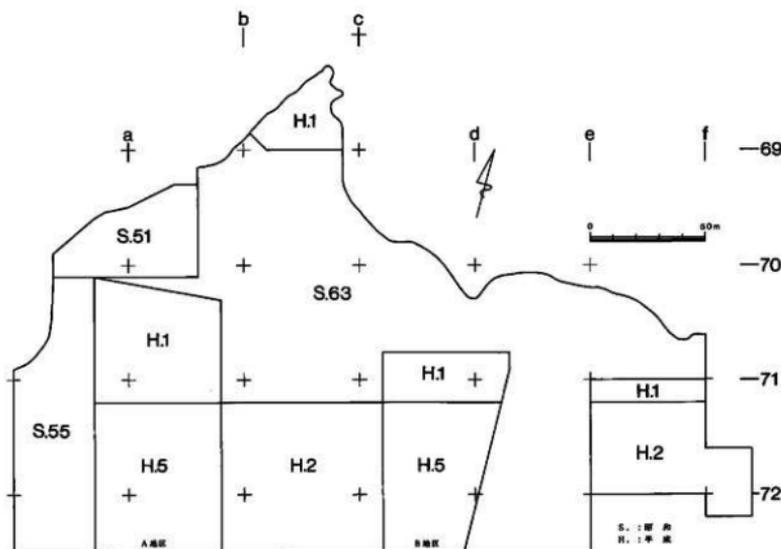
美沢3遺跡は、美沢川流域の遺跡群の中では下流寄り右岸にあり、美沢川と美々川の合流点からは、直線距離で北西に約1.7kmの位置にある。新千歳空港建設用地内の遺跡では、対岸の美々8遺跡とともに最も東側に位置する。遺跡の範囲は、美沢川の蛇行地点に突出する標高6mの低位段丘面を主体とし、背後の斜面とさらに標高22mの台地上部の平坦面にかけて広がる。

本遺跡は、昭和51・55・63年度及び平成元・2年度と断続的に35,322㎡が調査されている。今年度はその6ヵ年目、最終調査年度である(図II-1)。6ヵ年の調査総面積は、41,662㎡におよぶ。そのため終節に、第II黒色土層の遺構・遺物の概略的総括を掲載してある(図II-2)。

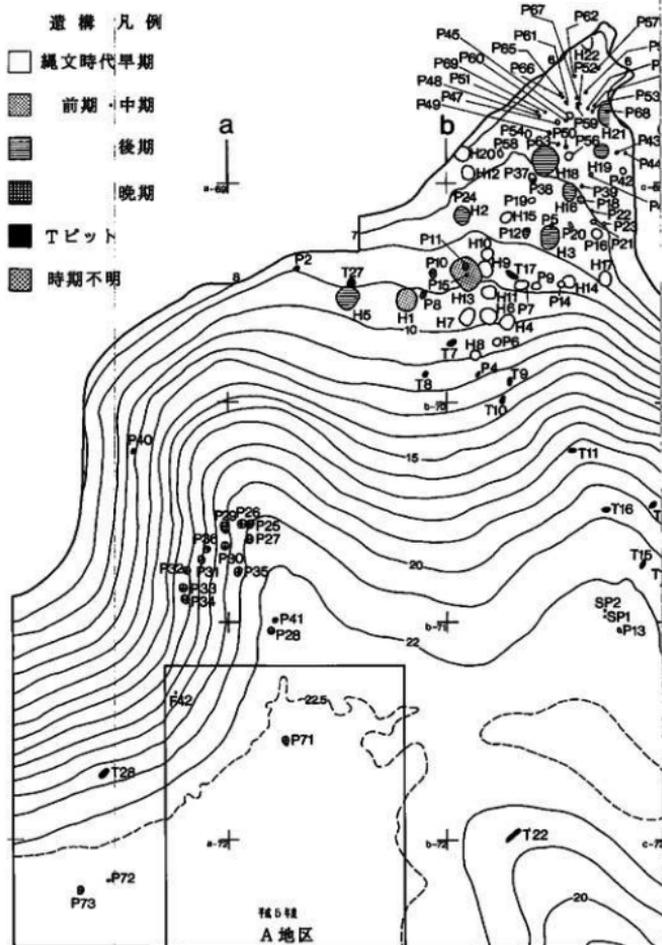
今年度の調査面積は6,340㎡で、a-71・72区とb-71・72区にまたがるA地区(3,575㎡)と、d-71・72区とe-71区にまたがるB地区(2,765㎡)の2ヵ所に分かれている。

A地区は、標高22.5m前後のほぼ平坦な台地上の広がりて、北西部に美沢川へ向かう急斜面がある。昭和55・平成元・2年度の調査区と三辺を接し、南辺は調査境界線である。遺構は、b-71-75区で、II黒層上面ですでに浅い窪みが確認できた円形ピット(P-71)1基を検出した。遺物はなく、覆土は自然堆積である。周縁には、揚げ土であるTa-d火山灰が広がっていた。この北側にあり平成元年度に調査された13基の円形ピットと類似しており、これらと同様、縄文時代晩期の遺構と考えられる。

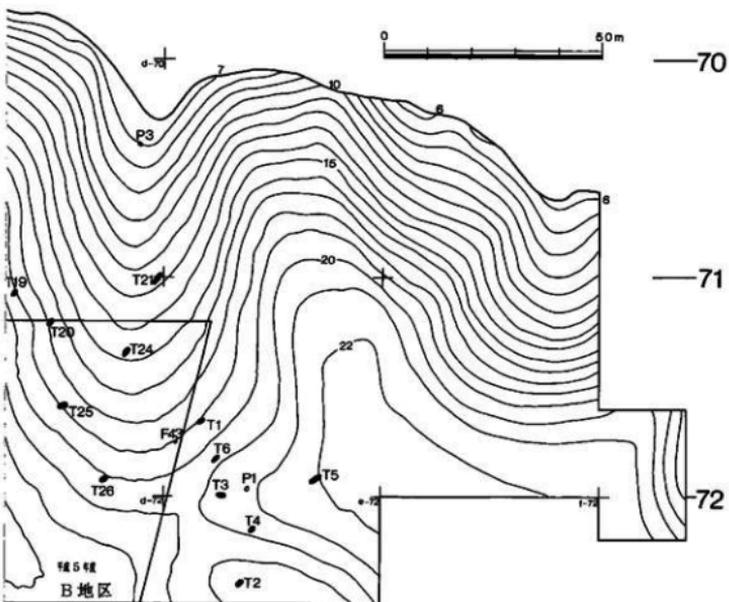
B地区は、台地平坦面と、美沢川へと差し込む小沢の沢頭にあたり、全体的に北向きに傾斜を持つ。



図II-1 美沢3遺跡II黒層 年度別調査区



図II-2 美沢3遺跡II黒層全体遺構位置図



地区内の高低差は約8mである。昭和63・平成元・2年度の調査区と三辺を接し、南辺はやはり調査境界線である。工事用道路の切り通し等の影響で北西辺一帯が擾乱を受けている。遺構は、3基のTピット(T-24・25・26)を検出した。3基とも平面プランが楕円形で、直方体形の掘り込みがあり、墳低には2本の杭穴が確認できた。いずれも過年度まで調査された楕円形プランのTピットと、列をなす配置となっている。他に同地区で、焼土とウサギやキツネ等の動物の足跡も検出している。

遺物は6,936点で、8割近くの5,473点が土器である。A地区では、西辺から北半を中心に縄文時代早期の東銅路IV式が主体的に分布し、稀に一括で出土する。他に前期縄文式と後期手稲式が少数出土するほか、後期堂林式の一つ体が確認できた。B地区では南東辺を中心にして、北西向き斜面から沢頭中央部にかけて、縄文時代早期の中茶路式土器が主体的に分布し、稀に一括土器として存在する。石器は、上記の早期土器に伴うもので、剥片石器が162点、礫石器が32点ある。剥片石器には、頁岩製のつまみ付ナイフや黒曜石製の石鏃が多くみられ、礫石器には、石斧・すり石・たたき石等がある。A地区では、黒曜石のフレイクがやや密度濃く出土する部分があった。特殊な遺物では、A地区b-72-60区で出土した蛇紋岩製の垂飾がある。

(三浦 正人)

2 遺構

(1) 土 墳

P-71 (図II-3)

位置 b-71-75

規模 1.80×0.95/1.54×0.95/0.73m

特徴 Ta-cを除去したII黒層上面で、すでに浅い窪みが確認できた。その窪みの周縁には、揚げ土であるTa-d火山灰が広がっていた。平面形は墳口部で不整形円形、墳底部で円形である。平坦な墳底は、III黒層をやや掘り込んでいる。壁は墳口部で崩れているが、底からはほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は自然堆積である。遺物はない。この北側にあり平成元年度に調査された13基の円形ピットと類似しており、これらと同様、縄文時代晩期の遺構と考えられる。

(2) 焼 土

F-42

位置 a-71-13

規模 0.35×0.30×0.05m

特徴 A地区の西向き斜面下方にある。II黒層の下層部、Ta-d粒の混入する面に、小範囲で少量炭化物が散布しており、そこに薄い焼土部分が見られた。周辺の土器から縄文時代早期東銅路IV式の時期の所産と思われる。

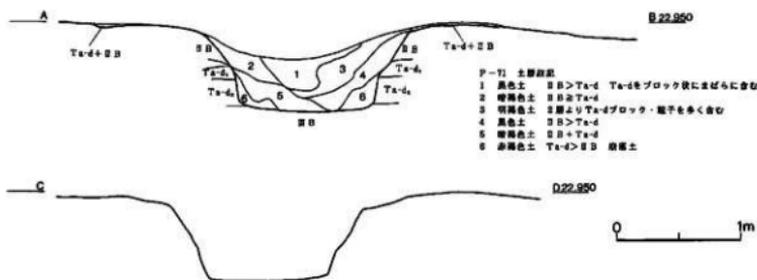
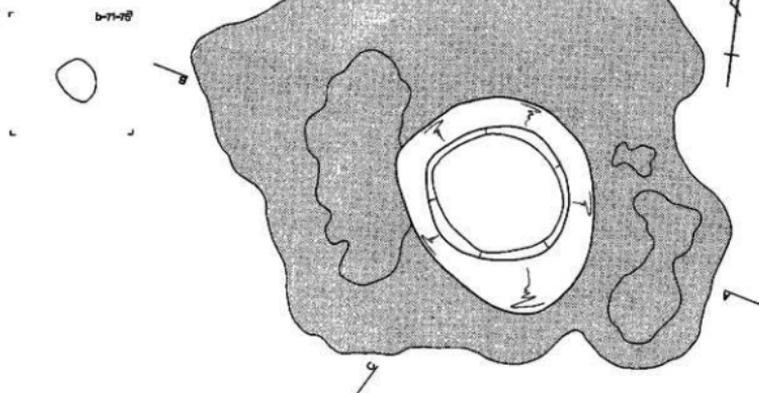
F-43 (図II-3)

位置 e-71-97

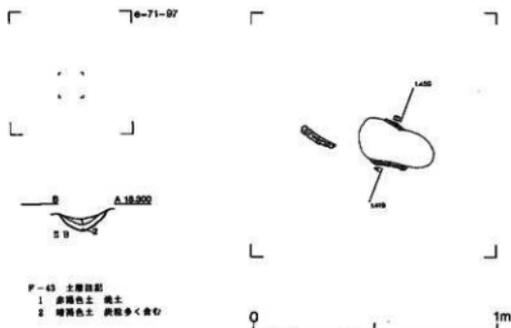
規模 0.55×0.28×0.10m

特徴 B地区の沢筋に向かう北西斜面にある。II黒層の下層部、Ta-d粒の混入する面に、炭化材とそれに囲まれるように、焼土の広がりが見出された。焼土の下層のII黒層には炭化物が多く含まれる。周辺の土器から縄文時代早期中茶路式の時期の所産と思われる。

P-71



F-43



図II-3 P-71・F-43

(3) Tピット

T-24 (図II-4)

位置 d-71-13

規模 2.02×1.26/1.53×0.45/1.14m

特徴 B地区の北部、北面する小沢の中央部(標高14.7m)の斜面に立地する。II黒層の中ほどからEn-L粒の混入が見られたため、掘り下げてゆき、Ta-d₁面で楕円形のプランを確認した。長軸方向はN-20°-Eで、コンターラインと直交する。

III黒層より上は鉢状になっているが、En-L層とEn-P層はほぼ垂直に掘り込まれて、平面形は長方形を呈している。墳底面は平坦で、2本の杭穴が確認できた。杭穴は、北側が径3cm・深さ33cm、南側が径6cm・深さ43cmで、ともに長軸方向でやや北に傾いている。

覆土は、崩落土と自然堆積からなる。明確な掘り揚げ土は確認できなかったが、覆土中にTa-dやEn粒が多く認められる。

T-25 (図II-4)

位置 d-71-29

規模 1.77×1.22/1.33×0.53/1.16m

特徴 B地区の中央部、標高19.1mの沢頭端傾斜面に立地する。遺構確認のためにII黒層を掘り下げたところ、Ta-d₁面で楕円形のプランを確認した。長軸方向N-44°-Eで、コンターラインと直交する。

Ta-dとIII黒層では急傾斜の漏斗状をなすが、En-L層はほぼ垂直に掘り込まれている。平面長方形を呈する墳底面は平坦で、南角に向けて緩い傾斜をもつ。土層断面と墳底面で2本の杭穴を確認した。杭跡は、北東側が径3cm・長さ63cm・うち深さ17cm、南西側が径5cm・長さ60cm・うち深さ18cmである。北東側のみ長軸方向でやや北東に傾いている。

覆土は、崩落土と自然堆積からなる。少なくとも12層(T-26の14層に相当)形成中までは、杭が残存していたようである。掘り揚げ土は、北側斜面直下のEn-L粒の散在しか確認できなかった。

T-26 (図II-4)

位置 d-71-45・46

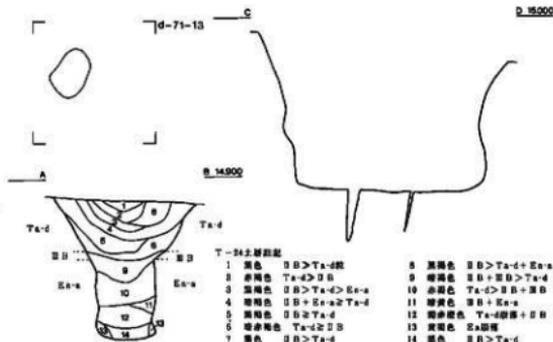
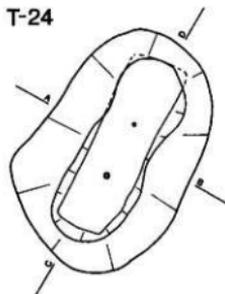
規模 1.84×1.32/1.35×0.49/1.17m

特徴 B地区北西部の標高17.8m、北東に面するややきつい傾斜面に立地する。遺構確認のためにII黒層を掘り下げたところ、Ta-d₁面で楕円形のプランを確認した。長軸方向N-48°-Eで、コンターラインと直交する。

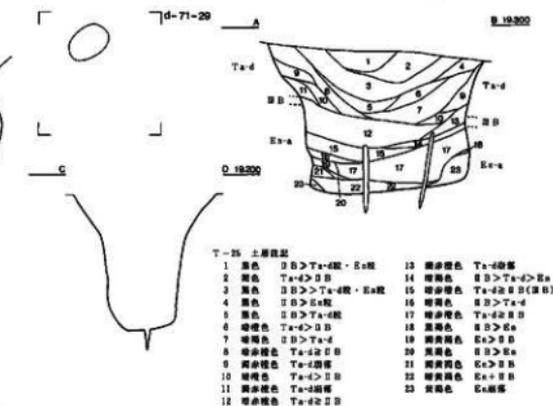
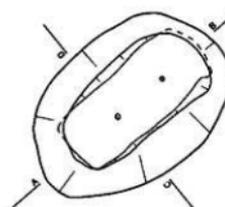
北東側は、Ta-dからEn-Lまでほぼ垂直に掘り込まれているが、他壁はやや角度を持っている。En-L層からは前二者と同様、平面長方形に掘り込まれ、En-P上層に墳底面が作られている。墳底面は、全体的に北東に向かって傾斜があり、北西壁側は持ち上がり気味である。2本の杭穴が確認され、北東側は径4cm・深さ16cm、南西側は径5cm・深さ12cmを計る。北東側の杭穴は土層断面でも確認され、長さ69cmで長軸方向やや南西に傾いている。

覆土は、崩落土と自然堆積からなる。少なくとも14層(T-25の12層に相当)形成中までは、杭が残存していたようである。明確な掘り揚げ土は確認できなかった。

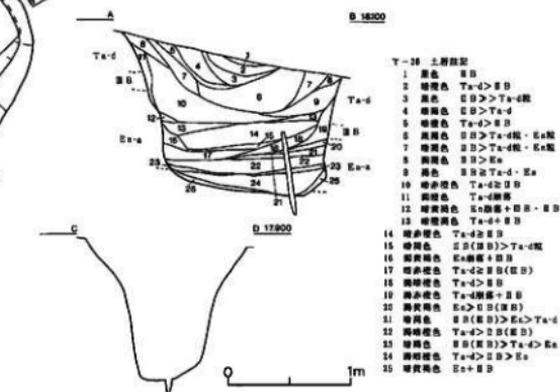
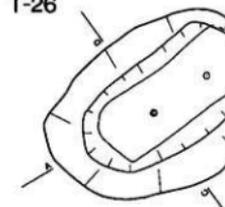
T-24



T-25



T-26

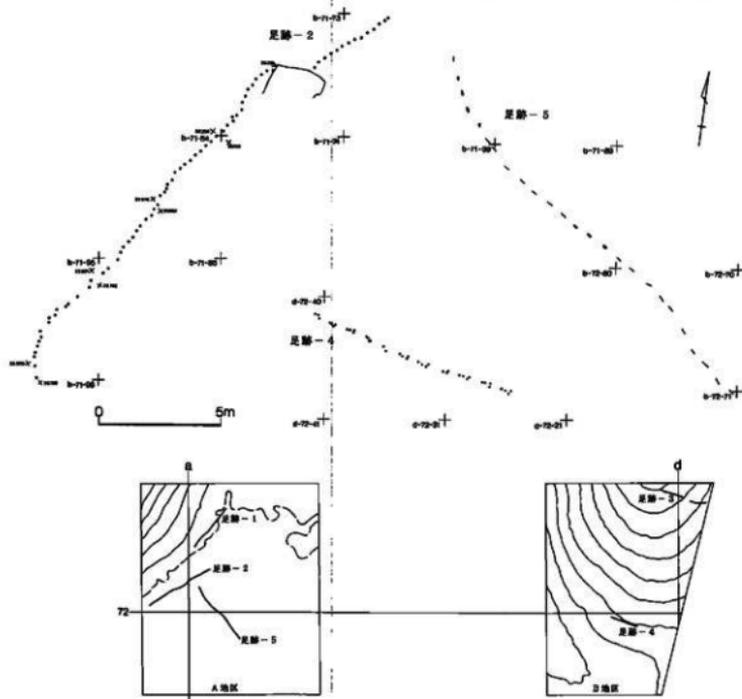


図II-4 T-24・T-25・T-26

(4) 動物の足跡 (図II-5)

Ta-c 除去後のII黒層上面で、小さな窪みが点々と続く、動物の足跡を5条確認した。縄文時代晩期のフィールドサインである。

- 足跡-1 動物名 キツネ 位置 b-71-63・73・83・84・85・95
 特徴 西向き斜面の縁に沿って、径5cmほどの円形の窪みの列を確認した。
- 足跡-2 動物名 キツネ 位置 b-71-87・97・a-71-07・08・18・19・29
 特徴 西向き斜面縁近く、コンターに沿って、径5cmほどの円形の窪みの列を確認した。
- 足跡-3 動物名 キツネ 位置 d-71-12・02・e-71-92・93・83
 特徴 沢筋のコンターと直交するように、径5cmほどの円形の窪みの列を確認した。
- 足跡-4 動物名 ウサギ 位置 d-72-20・30・40
 特徴 沢頭付近で、ほぼコンターに沿って、4個一組で各々径5cm前後の円形の窪みの列を確認した。
- 足跡-5 動物名 ヒト? 位置 b-71-98・99・89・79・b-72-70・71・61
 特徴 西向き斜面に向かって、長さ25cm・幅10cmほどの足跡が続いている。大きさや形、歩幅からみて、人間が小走りしたように見うけられる。 (三浦 正人)



図II-5 動物の足跡

3 遺物

(1) 土器 (図Ⅱ-6~10、図版Ⅱ-6~10)

5,473点が出土した。縄文時代早期のものが大半である。分類別の出土頻度は、I群b-3類37.2%、I群b-4類57.4%、IV群b類4.6%、IV群c類0.7%である。この他I群b-2類・II群a類が0.8%ある。

I群b-2類土器 出土点数：2点 (図Ⅱ-6)

口唇部に刻み目をもつ。地文はLRとRLの原体による斜行縄文。胎土に多量の砂粒を含む。

I群b-3類土器 出土点数：2,040点 (図Ⅱ-6・7)

B地区の斜面部分に集中して出土した。土器片はあまり散らばらず、個体ごとにまとまりを持つ。器形は、胴部がやや膨らむ深鉢形と、船形のものがある。口縁は、緩やかに波状になるものと、平縁のものがある。底部は、直角に近いものと、丸味があるものがある。文様は、貼付帯・絛状体圧痕文・短縄文・斜行縄文・絛絡文・無文のものがある。

貼付帯には幅広いもの(4・6~8)、やや細いもの(2・3・9・15)、極細のもの(5・10・11)がある。貼付帯の間隔は、比較的広いもの(6・7・9・10)、やや狭いもの(2・3・8・11)、狭いもの(5)がある。貼付帯の施文は、直線的になるものと曲線的につけられるものとが組み合わせられたものが多い。

4・6~8は地文が貼付帯上におよんでいるため、貼付帯がつぶれて扁平になっている。4は角形に近い底部で地文はLR原体の斜行縄文。6・7はRL原体の斜行縄文、8は短縄文が施され無文部が比較的多い。7・8の口唇部には縄の圧痕がつく。

2は胴部がやや膨らみ、口縁部は直立する。底部は直角気味である。口唇部には部分的に縄の圧痕が施される。口縁部から胴部中位にかけて短縄文、胴部中位から底部にかけてLR原体の斜行縄文が施されている。3は胴部のみが復元されたもので、2と同様に上部短縄文、下部にLR原体の斜行縄文が施されている。

9~11は短縄文が施されている。9の口唇部には縄端の圧痕がつく。

5は胴部がやや膨らむ船形の土器である。貼付帯は微隆起線に近いもので、鋸歯状・縦位・斜位・階段状あるいは直線的にめぐらされている。貼付帯の中には短縄文・絛条体圧痕文が密に施され、胴部下位にはRL原体の斜行縄文が施されている。

12はRL原体の斜行縄文と絛絡文がつくものである。

13は無文帯をはさんでRL原体の斜行縄文が施されている。

14は無文土器で、器面に凹凸がある。斜位・横位の調整痕がつく。

15~17は底部である。15・16は角形、17は丸味がある。15・16はRL原体の斜行縄文、17はLR原体の斜行縄文に縄の末端がつく。

I群b-4類 出土点数：3,135点 (図Ⅱ-8・9)

A地区の台地縁辺部から平坦面にかけて出土している。B地区からは4点出土したのみである。最も多く出土した土器群であるが、復元できた個体はない。

文様から、a類：絛絡文のあるもの、b類：自縄自巻あるいは摺糸文のみのもの、c類：短縄文や縄端による圧痕のあるもの、d類：魚骨回転文のあるもの、e類：沈線のあるものに分けられる。この他に底部を一括してf類とした。

a類 (18~22)

18は小さな山形突起のある口縁部である。口唇断面は薄い。絛絡文には0段の条を結節したもの

(19・21・22)と、1段の縄を結節したもの(18・20)がある。これらの器面には自縄自巻1段と2段の異なる原体による羽状縄文が施されている。

b類 (23~37)

撫余文のものは26のみである。LとRの原体による羽状縄文が施されている。他のものはすべて自縄自巻の原体によるものである。口縁には山形突起をもつもの(24・29・32)と緩い波状になるもの(23・26・30)がある。24は0段多糸R LとRの原体による羽状縄文が施される。23・31はR LとRの原体による縄文が施されている。23の口縁は薄く、器壁は凹凸がある。25・27・28は1段の原体による縄文が施されている。27は部分的に調整により地文が消されている。28は糸の太い原体である。29・30・33~35はL RとRの原体による縄文が施されている。29はやや厚手であるが口縁は薄くなる。30は薄手の土器で、手に持った感じが軽いものである。内外面の一部が剝離している。33~35は器壁には凹凸がある。36・37は1段の原体による縄文が施されたものである。36は底部に近い破片と思われる。37は厚手の土器である。

c類 (38~43)

38~40・43は縄端の圧痕がみられるものである。39・41・43はR LとL Rの原体による縄文が施されている。43の内面は凹凸がある。38はR L原体の縄文が施されている。40はL RとRの原体による縄文が施されている。胎土に小石が混入している。41・42は口縁部に短縄文が施されるものである。いずれも口縁部が薄くなっている。41はL RとR Lの原体による羽状縄文が施されている。42はR LとL Rの原体による斜行縄文が交互に施されている。内面は凹凸がある。

39・41・43の内面には炭化物が厚く付着している。

d類 (44・45)

44・45ともニシンの腹椎骨による回転文が施されている。44は口縁がやや内彎する。口唇の内外面と口縁部に縄端の圧痕が施され、胴部には自縄自巻L原体の斜行縄文が施されている。45は横位の魚骨回転文に斜位の魚骨回転文が重ねられている。

e類 (46)

胴部破片のみで器形のわかるものはない。斜位の沈線が多い。沈線は器面調整によって粘土で埋まった部分もある。内外面は凹凸がある。内面は横位にナデ調整される。

f類 (47~50)

角形に近いもの(47・50)と丸味のあるもの(48・49)がある。47は器表面が剝離している。48・49は底部の立ち上がり部分に縄端の圧痕がつく。48は自縄自巻R原体の羽状縄文、49は自縄自巻R L原体の羽状縄文が施されている。50は底面にR L原体の縄文、内面と底部の立ち上がり部分に縄端の圧痕がつくものである。

II群 a類 出土点数：2点 (図II-10)

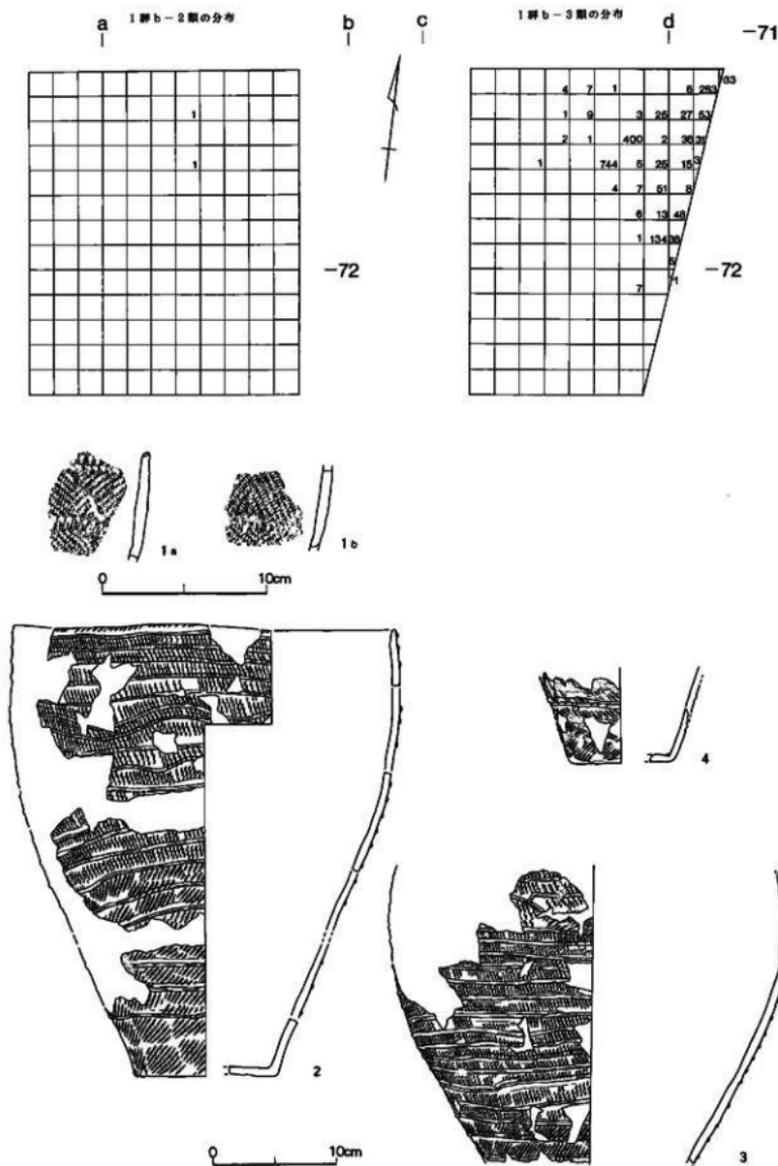
A地区の平坦部で出土した。平成元年の調査では、B地区に隣接する調査区で出土している。

51は縄文式土器に相当するものである。糸が太く、ていねいなナデにより節がみえない。52はやや厚い土器で、胎土に繊維と小砂利を含む。器表面の一部が剝落している。

IV群 b類土器 出土点数：254点 (図II-10)

A地区の平坦部で2個体出土した。

53は底部のみが復元された。器表面と底面が剝落している。地文はR L原体の斜行縄文である。底部からの立ち上がり部分は、無文帯となっている。54は沈線によって文様帯が区画され、縄文が磨消され無文帯になる部分と、地文が残る部分とがある。地文はL R原体の縄文である。内面はよく研磨



図II-6 土器(1)

されている。内外面の一部が剥落している。

IV群c類土器 出土点数:40点(図II-10)

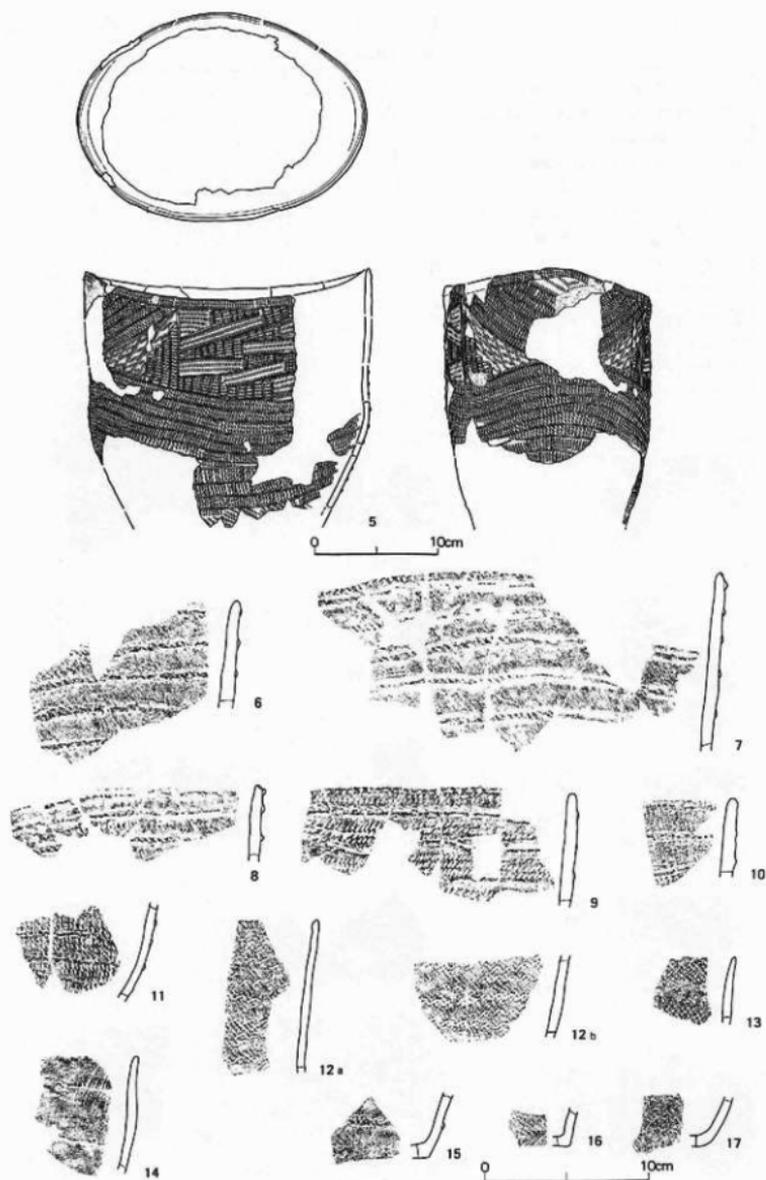
A地区の台地縁辺部で1個体出土した。

器形は底部から開き気味に立ち上がり、口縁部は内傾する。口縁は6対の山形突起をもつものと推定される。突起の頂部には円形刺突文、突起の内面には縦の刻目が施されている。口縁部には内側からの刺突による突瘤がつく。地文はLR原体の縄文で部分的に磨消されている。地文を切って細い弧状の沈線が器面全体に施されるが、底部近くでは横線の沈線になる。

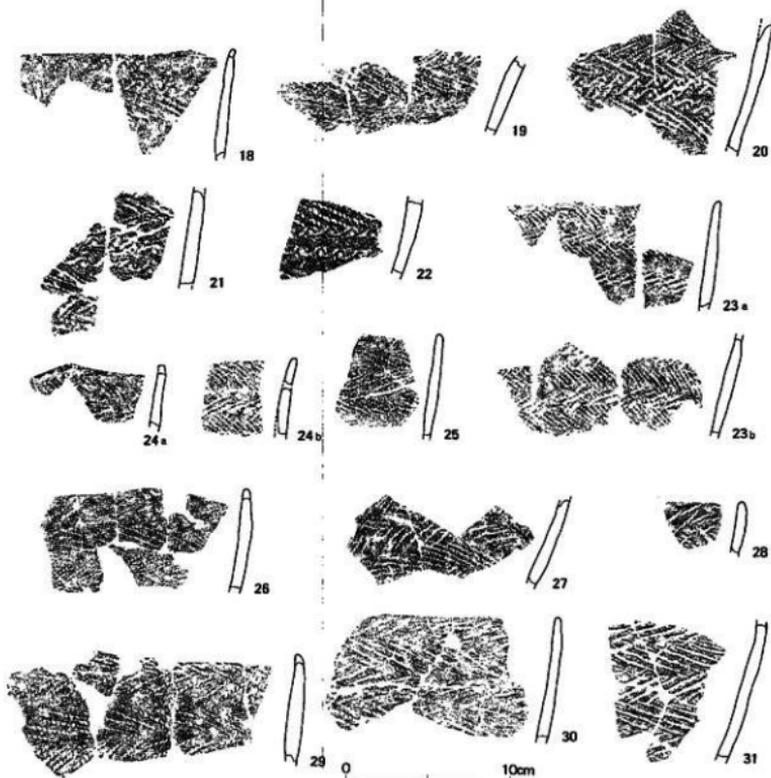
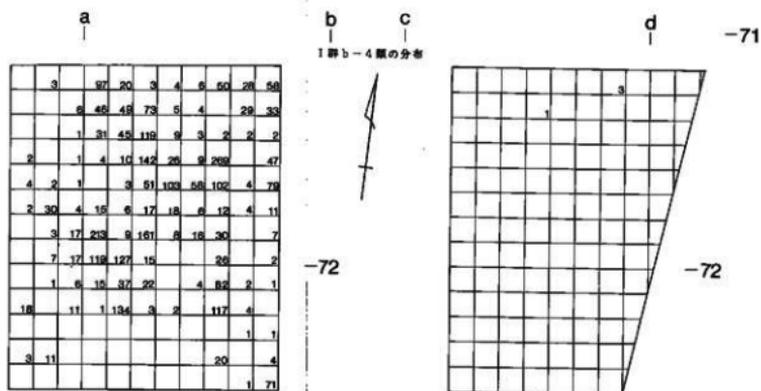
(佐藤 和雄)

表II-1 掲載土器一覧

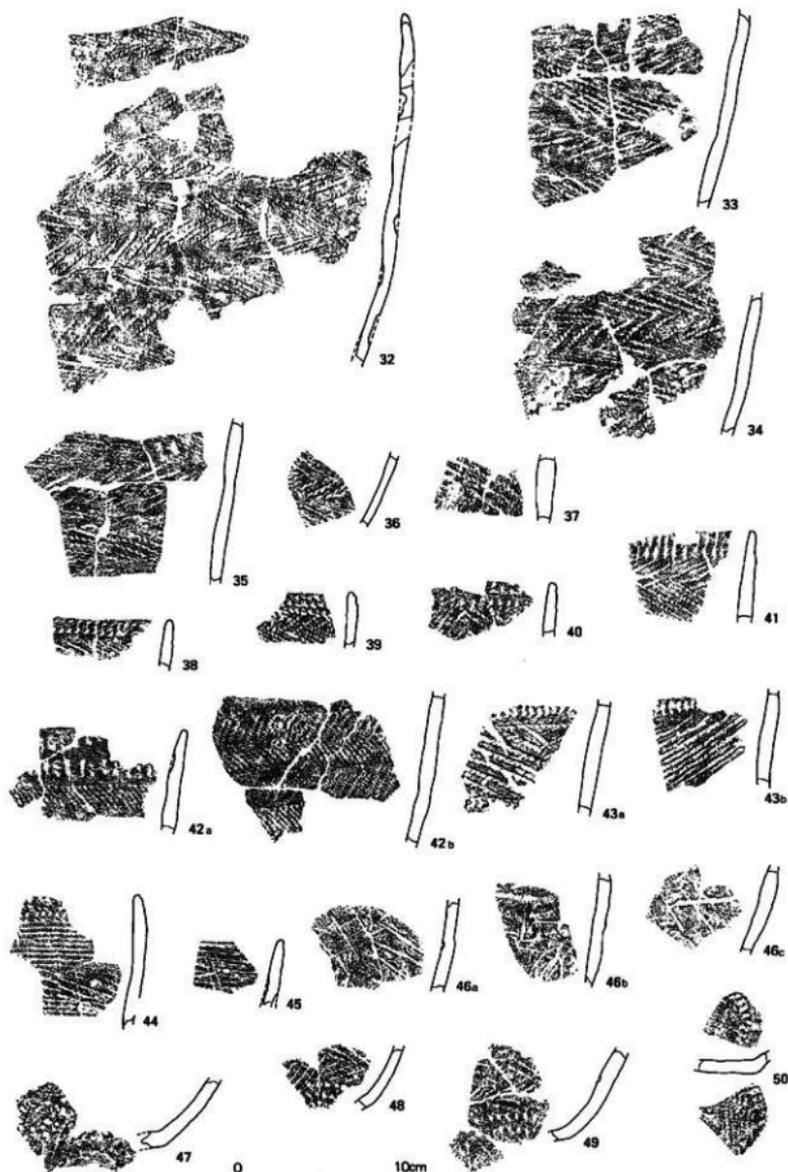
図番号	分類	発掘区	層位(回目)	図番号	分類	発掘区	層位(回目)
II-6-1a	I b-2	b-71-65	2	II-8-28	I b-4	b-71-56	1
1 b	*	b-71-63	1	29	*	b-71-45	1・2
2	I b-3	d-71-25	2・3	30	*	b-71-89	3
3	*	e-71-82	1	31	*	b-71-92	2・3
II-7-4	*	d-71-05-06-07 e-71-96-97	2・3・4	II-9-32	*	b-71-75	2
5	*	d-71-08-17 e-71-97	3・4	33	*	b-71-89	2・3
6	*	e-71-97	3・6	34	*	b-71-78	3
7	*	d-71-03-05 e-71-97	2・3・5	35	*	b-71-89	3
8	*	d-71-05 e-71-97	3	36	*	d-71-43	4
9	*	d-71-14	3・4・5	37	*	b-71-74	2
10	*	e-71-82	1	38	*	b-71-66	3
11	*	e-71-93	2	39	*	b-72-90	2
12a	*	d-71-07-14	3	40	*	b-71-98	2
12b	*	d-71-14 e-71-82	1・4	41	*	b-71-98	1
13	*	d-71-08	2	42a	*	b-71-99	3
14	*	d-71-05	4	42b	*	b-71-99	3
15	*	d-71-33	2	43a	*	d-71-12	3
16	*	e-71-94	2	43b	*	d-71-12	3
17	*	e-72-90	2	44	*	b-71-42	2
II-8-18	I b-4	b-71-74-94	2	45	*	b-71-65	8
19	*	b-71-93	2・4	46a	*	b-71-99	2
20	*	b-71-94	1・2・3	46b	*	b-71-99	4
21	*	b-71-98	3	46c	*	b-71-98-99	2・3
22	*	a-71-08	1	47	*	b-71-74	3
23a	*	b-71-49	2	48	*	b-71-76	3
23b	*	b-71-49	2	49	*	b-71-98	3
24a	*	a-72-40	3	50	*	b-71-65	3
24b	*	a-72-40	2	II-10-51	II a	a-71-18	1
25	*	b-71-95	2	52	*	b-71-45	1
26	*	a-72-21	1・2	53	IV b	b-71-88	1・2・3
27	*	b-71-26	2	54a	*	b-71-42	2
				54b	*	b-71-52	1・2
				55	IV c	a-71-04-05	1・2
						b-71-94-95	



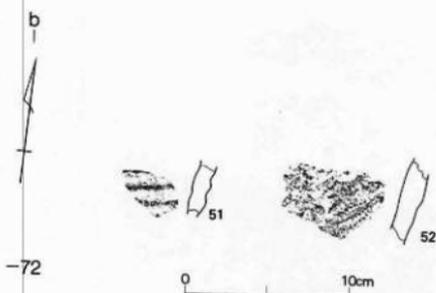
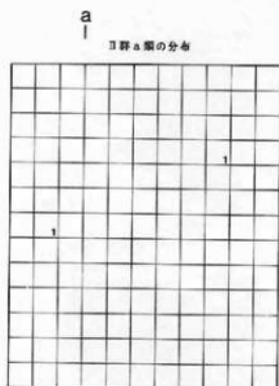
図II-7 土器(2)



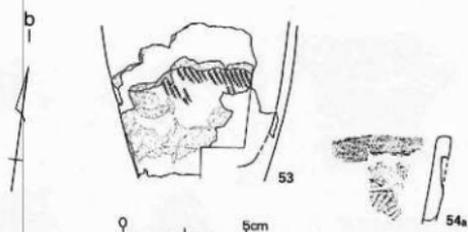
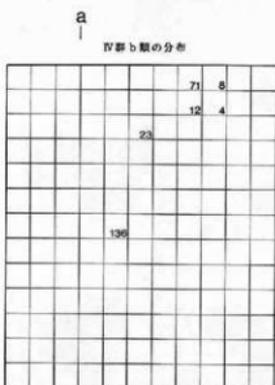
図II-8 土器(3)



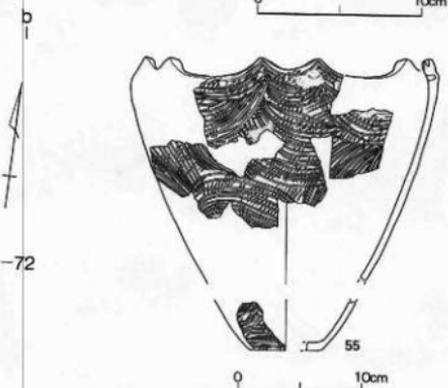
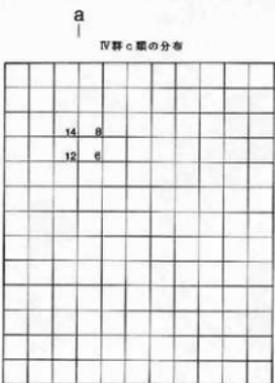
图II-9 土器(4)



-72



-72



-72

図II-10 土器(5)

(2) 石器・石製品 (図II-11~14)

石器類は下記の器種および点数のほかに、フリイク・チップ1,083点、礫・礫片185点が出土した。

石鏃 (1~31)

61点出土。1~8は柳葉形鏃で、1・8は凹基、2~5・7は平基のものである。9~16は五角形鏃で、10・13~15は凹基、12は平基のものである。17~23は無茎鏃で、17・19・21は平基、それ以外は凹基のものである。24~30はすべて有茎凸基のものである。31は下半部に最大幅のある尖基鏃である。

これらの石材は18が頁岩、ほかすべて黒曜石である。

ポイントもしくは両面加工のナイフ (32・33)

5点出土。32は小型の菱形を呈するもの。33は厚手でかえしの不明瞭な有茎のものである。

石錐 (34・35)

図示した2点のみ出土した。34はつまみ部のあるもの。35は剝片の一端に機能部を作り出したものの。

つまみ付きナイフ (36~56)

76点出土。36~38が斜形のほかはすべて縦形のもので、55・56が両面加工のほかはすべて片面加工である。これらのうち、36~48・55は二次加工の際の打面調整が裏面に施される特徴を有し、I群b類土器に伴うものである。

スクレイパー類 (57~65)

18点出土。57~59はラウンドスクレイパー。60は外彎する刃部をもつもの。61・62は直線状の外彎する刃部を併せもつもの。63・64はエンドスクレイパーで、63は両面加工、64は両側に刃部を有する。65は両側に抉り込みの施されたノッチドスクレイパーである。

磨製石斧 (66~71)

21点出土。66・68~70は両刃一曲刃のものである。67は諸刃のもので、図の下側は両刃一曲刃となっており、上側は破損箇所を片刃一斜刃に再生している。71は石斧製作に関する蛇紋岩の擦り切り残片である。

すり石 (72~75)

5点出土。図示したいずれも三角柱状礫の稜を使用したもので、かつ両端はたたき石としても用いられている。

たたき石 (76・77)

図示した2点のみ出土した。76は円礫の周縁を使用したもの。77は扁平な棒状礫の一端を使用したもの。

くぼみ石 (78)

2点出土。78の両面にくぼみがあるが、面の状態から元来は砥石として使用されたと考えられる。

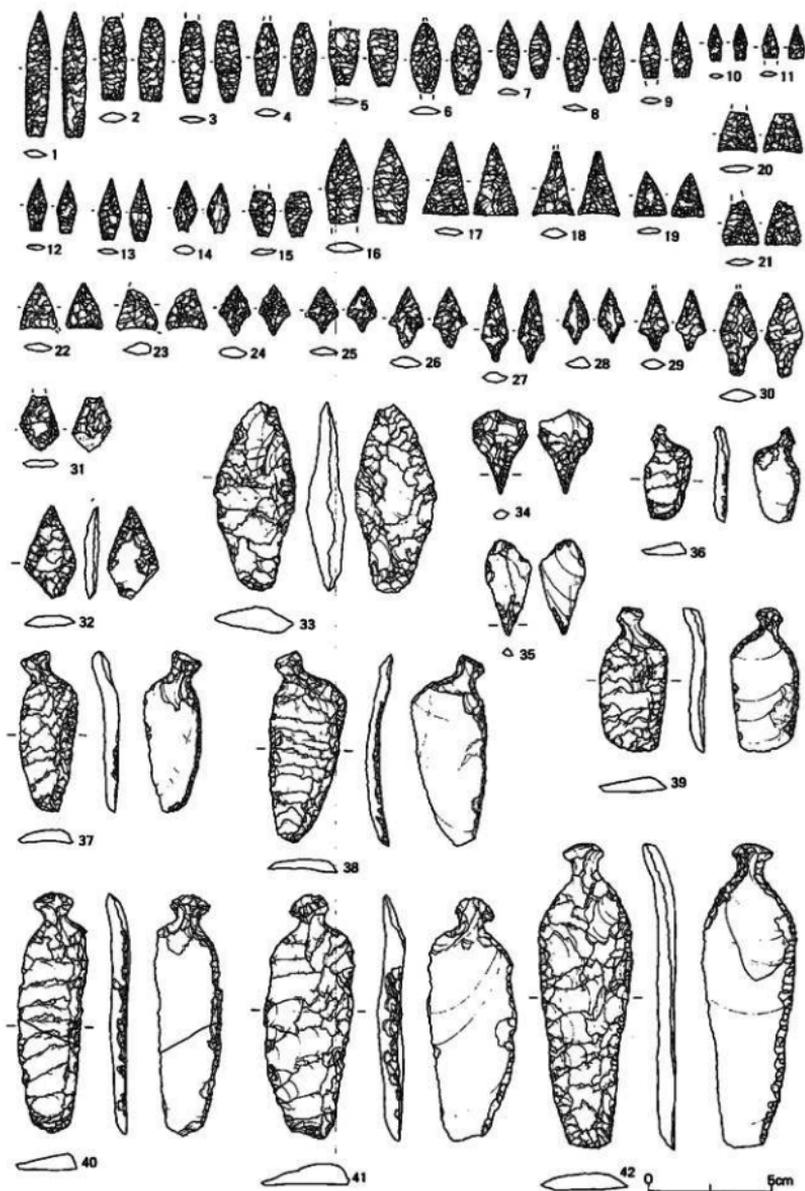
石皿・台石

破片が2点出土している。図示しない。

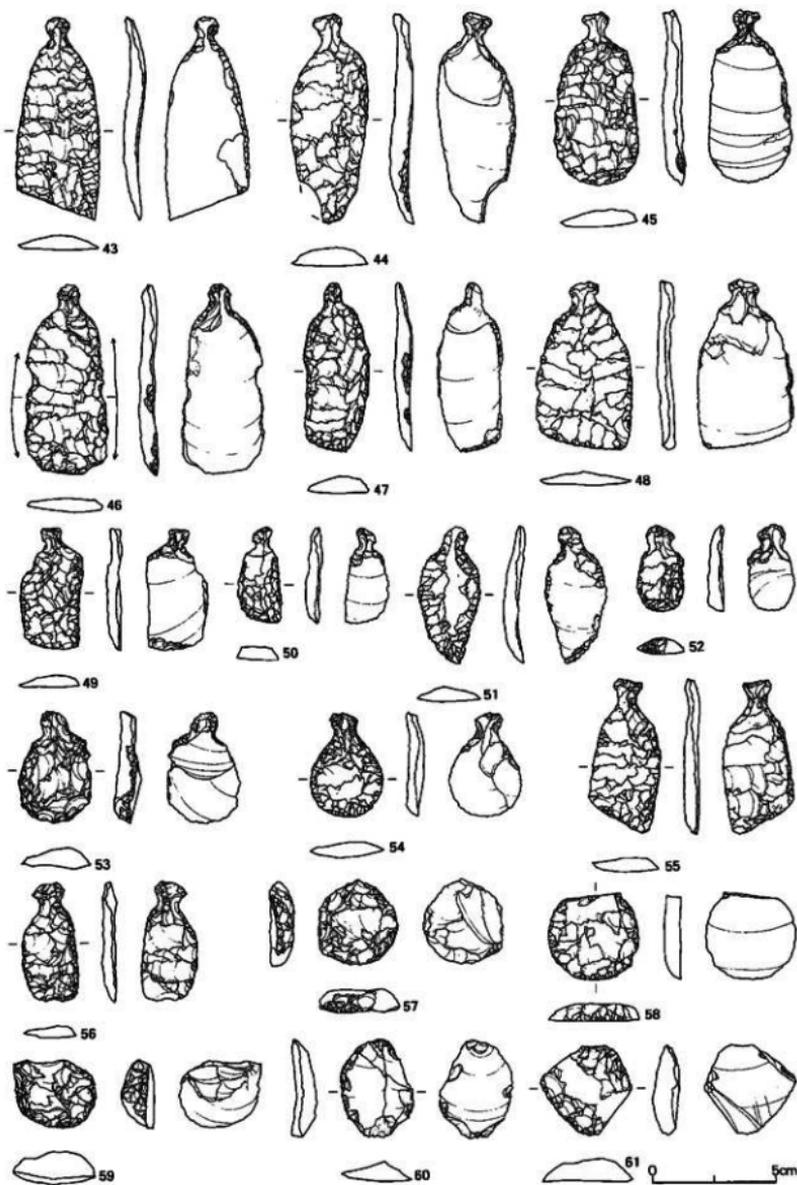
石製品 (79)

図示した1点が出土。蛇紋岩製の瓢箪形を呈する垂飾品で、上半部には両側からの穿孔がある。下半部両面には中心および円環状に穿孔当初の痕跡が認められるが、これは穿孔を意図したというよりも、何らかの意匠と考えられる。

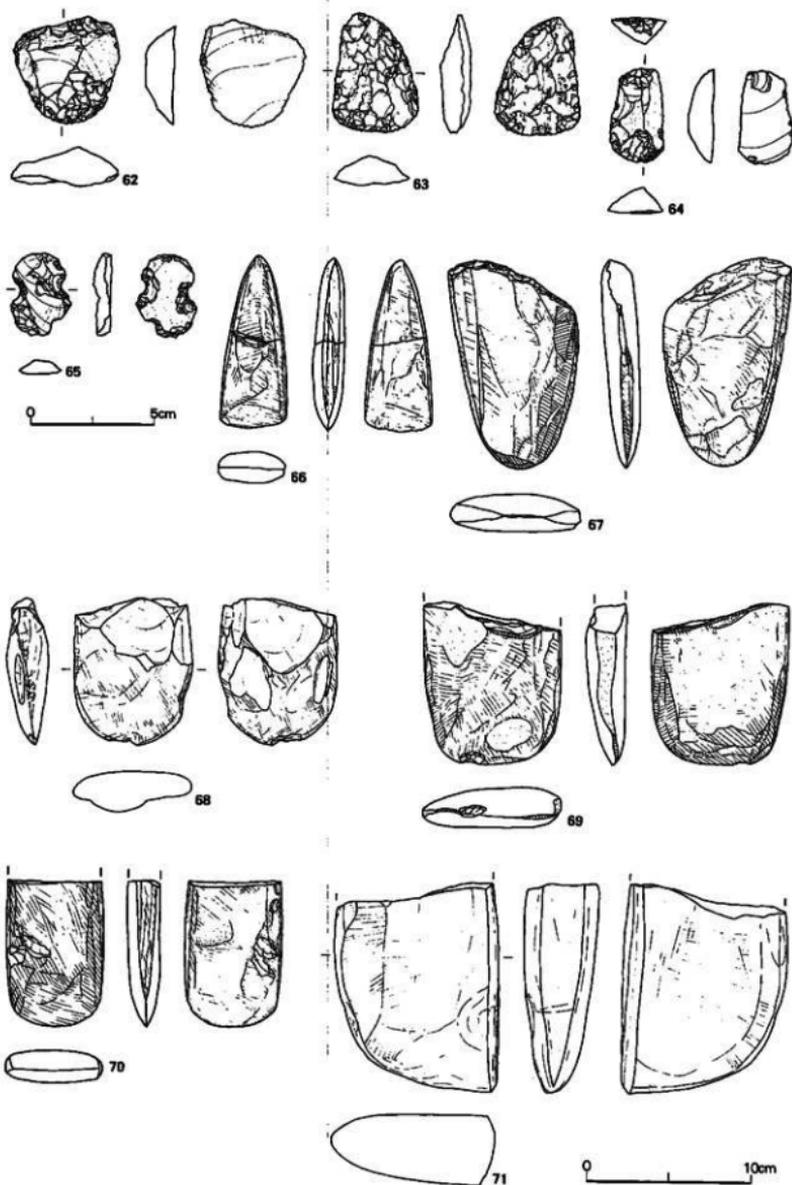
(千葉 英一)



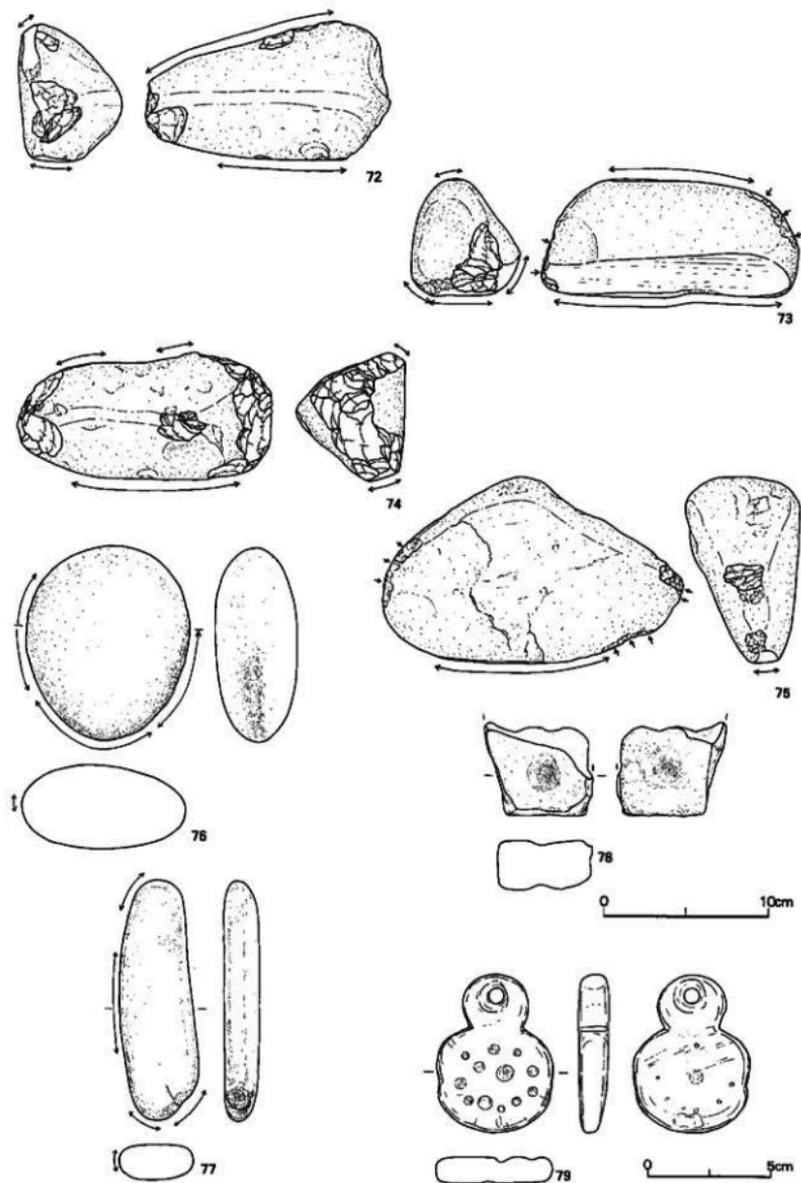
図II-11 石器(1)



图II-12 石器(2)



図II-13 石器(3)



圖II-14 石器(4)・石製品

表II-2 掲載石器一覧

図版番号	名称	発掘区	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質
II-11-1	石鏃	b-71-36	5.08	0.95	0.32	1.60	黒曜石
II-11-2	石鏃	d-71-06	3.36	1.05	0.36	1.30	黒曜石
II-11-3	石鏃	d-71-25	3.30	1.01	0.23	0.80	黒曜石
II-11-4	石鏃	a-71-82	2.95	1.00	0.31	0.90	黒曜石
II-11-5	石鏃	a-72-12	2.30	1.20	0.22	0.60	黒曜石
II-11-6	石鏃	d-71-25	2.80	1.20	0.28	0.80	黒曜石
II-11-7	石鏃	e-71-82	2.30	0.85	0.22	0.40	黒曜石
II-11-8	石鏃	d-71-06	2.85	0.95	0.27	0.50	黒曜石
II-11-9	石鏃	d-71-33	2.20	0.80	0.22	0.40	黒曜石
II-11-10	石鏃	b-71-88	1.47	0.51	0.17	0.10	黒曜石
II-11-11	石鏃	b-72-81	1.35	1.20	0.17	0.10	黒曜石
II-11-12	石鏃	新土	2.10	0.73	0.20	0.20	黒曜石
II-11-13	石鏃	d-71-33	2.46	0.88	0.20	0.30	黒曜石
II-11-14	石鏃	b-71-33	2.03	0.90	0.33	0.50	黒曜石
II-11-15	石鏃	a-71-18	1.83	1.04	0.22	0.40	黒曜石
II-11-16	石鏃	a-72-21	3.40	1.48	0.37	1.80	黒曜石
II-11-17	石鏃	d-71-33	2.90	1.81	0.26	1.00	黒曜石
II-11-18	石鏃	b-71-55	2.54	1.70	0.39	1.00	頁岩
II-11-19	石鏃	d-71-03	1.76	1.34	0.22	0.40	黒曜石
II-11-20	石鏃	d-71-22	1.60	1.53	0.27	0.60	黒曜石
II-11-21	石鏃	d-71-22	1.06	1.45	0.24	0.50	黒曜石
II-11-22	石鏃	a-71-25	1.90	1.50	0.32	0.60	黒曜石
II-11-23	石鏃	d-71-03	1.62	1.64	4.48	0.80	黒曜石
II-11-24	石鏃	d-71-35	1.82	1.18	0.30	0.40	黒曜石
II-11-25	石鏃	a-71-23	2.47	1.39	0.41	0.80	黒曜石
II-11-26	石鏃	b-72-64	2.45	1.20	0.38	0.80	黒曜石
II-11-27	石鏃	b-72-51	2.20	1.03	0.38	0.60	黒曜石
II-11-28	石鏃	b-72-74	2.95	1.04	0.40	0.90	黒曜石
II-11-29	石鏃	d-71-22	2.02	1.28	0.40	0.70	黒曜石
II-11-30	石鏃	b-71-67	3.39	1.50	0.49	1.70	黒曜石
II-11-31	石鏃	a-71-06	2.20	1.55	0.30	0.90	黒曜石
II-11-32	ポイント	b-71-55	3.70	2.02	0.52	3.20	黒曜石
II-11-33	ポイント	b-71-53	7.64	3.25	1.55	24.80	黒曜石
II-11-34	石鏃	b-71-45	3.40	2.30	0.62	3.10	黒曜石
II-11-35	石鏃	b-71-94	3.80	1.82	0.79	3.60	黒曜石
II-11-36	つまみ付きナイフ	b-71-25	3.88	1.84	0.60	4.10	頁岩
II-11-37	つまみ付きナイフ	e-71-93	6.50	2.32	1.10	8.50	頁岩
II-11-38	つまみ付きナイフ	b-71-25	7.80	3.10	1.00	12.20	頁岩
II-11-39	つまみ付きナイフ	b-71-34	5.85	2.74	0.90	9.80	頁岩
II-11-40	つまみ付きナイフ	b-71-78	9.79	2.80	1.00	19.40	頁岩
II-11-41	つまみ付きナイフ	b-71-98	9.96	3.61	1.05	2.99	頁岩
II-11-42	つまみ付きナイフ	a-72-13	12.46	3.50	1.38	36.90	頁岩
II-12-43	つまみ付きナイフ	a-71-72	8.26	3.38	0.90	16.60	頁岩
II-12-44	つまみ付きナイフ	a-72-01	8.52	3.16	0.98	15.00	頁岩
II-12-45	つまみ付きナイフ	b-71-78	6.94	3.41	0.91	19.20	頁岩
II-12-46	つまみ付きナイフ	b-71-52	7.75	3.37	0.78	18.10	頁岩
II-12-47	つまみ付きナイフ	b-71-73	6.80	2.70	0.71	13.90	頁岩
II-12-48	つまみ付きナイフ	b-72-23	6.82	3.90	0.70	16.60	頁岩
II-12-49	つまみ付きナイフ	b-71-48	4.96	2.51	0.60	6.70	頁岩
II-12-50	つまみ付きナイフ	b-71-45	3.90	1.75	0.65	4.10	メノウ
II-12-51	つまみ付きナイフ	b-71-54	4.83	2.96	1.08	11.10	黒曜石
II-12-52	つまみ付きナイフ	b-71-55	5.53	2.50	0.88	7.40	黒曜石
II-12-53	つまみ付きナイフ	b-71-55	3.50	1.89	0.65	3.60	黒曜石
II-12-54	つまみ付きナイフ	b-71-64	4.22	2.93	0.72	8.00	黒曜石
II-12-55	つまみ付きナイフ	b-71-57	6.24	2.50	0.61	10.70	頁岩
II-12-56	つまみ付きナイフ	b-71-46	4.83	2.25	0.60	6.40	頁岩
II-12-57	スクレイパー	b-71-32	3.40	3.20	0.94	11.80	黒曜石
II-12-58	スクレイパー	b-71-55	3.52	3.66	0.70	12.00	黒曜石
II-12-59	スクレイパー	b-71-14	2.75	3.31	1.33	12.60	黒曜石
II-12-60	スクレイパー	b-71-53	3.98	2.97	10.00	8.80	黒曜石
II-12-61	スクレイパー	b-71-14	3.60	3.70	1.05	11.40	黒曜石
II-12-62	スクレイパー	b-71-56	4.30	4.30	1.56	19.30	黒曜石
II-12-63	スクレイパー	b-72-41	4.75	3.47	1.25	18.60	黒曜石
II-12-64	スクレイパー	b-71-56	3.80	2.20	1.04	7.80	黒曜石
II-12-65	スクレイパー	b-71-92	3.30	2.42	0.70	5.00	黒曜石
II-12-66	石斧	d-71-35	6.97	2.70	1.28	33.90	緑色砂岩
II-12-67	石斧	a-71-93	8.48	5.28	1.50	86.40	鉾紋岩
II-12-68	石斧	d-71-32	3.99	4.86	1.69	62.20	緑色砂岩
II-12-69	石斧	b-71-29	6.53	5.60	1.65	97.50	緑色砂岩
II-12-70	石斧	b-71-38	6.92	3.90	1.35	57.50	鉾紋岩
II-12-71	石斧 (磨り切り残片)	d-71-08	8.50	6.75	3.00	283.00	鉾紋岩
II-14-72	すり石	b-71-68	8.60	15.12	6.41	862.00	安山岩
II-14-73	すり石	a-72-13	7.84	15.80	6.70	1014.00	砂岩
II-14-74	すり石	a-72-24	7.26	16.01	6.78	1075.00	安山岩
II-14-75	すり石	b-71-57	11.47	18.80	7.10	1631.00	安山岩
II-14-76	たたく石	a-72-24	12.10	10.20	5.15	858.00	砂岩
II-14-77	たたく石	a-72-24	14.94	4.62	2.20	285.00	砂岩
II-14-78	くぼみ石	d-71-07	5.80	6.80	3.12	183.00	砂岩
II-14-79	石製品	b-72-60	6.48	4.75	1.20	55.10	鉾紋岩

4 まとめ

美沢3遺跡の調査は、今年度で終了した。そこで、美沢3遺跡のⅡ黒層の遺構等を整理して、今年度報告のまとめとしておきたい。なお、Ⅰ黒層の遺構については、昭和63年度の報告分のみなので、ここでは割愛する。

美沢3遺跡Ⅱ黒層の遺構が掲載されている報告書は、以下の6冊である。

昭和51年度調査分：北海道教育委員会	1977『美沢川流域の遺跡群Ⅰ』
昭和55年度調査分：北海道埋蔵文化財センター	1981『美沢川流域の遺跡群Ⅳ』北埋調報3集
昭和63年度調査分：北海道埋蔵文化財センター	1989『美沢川流域の遺跡群ⅩⅡ』北埋調報58集
平成元年度調査分：北海道埋蔵文化財センター	1990『美沢川流域の遺跡群ⅩⅢ』北埋調報62集
平成2年度調査分：北海道埋蔵文化財センター	1991『美沢川流域の遺跡群ⅩⅣ』北埋調報69集
平成5年度調査分：北海道埋蔵文化財センター	1994『美沢川流域の遺跡群ⅩⅦ』北埋調報89集 (当報告書)

これらの中で、遺構ナンバーの重複するものを整理し、欠番を埋めたのが、表Ⅱ-3の遺構一覧表である。

(1) 遺構の時期と立地

住居跡は全22軒で、早期13・中期2・後期7の時期別となる。土壌は小土壌を含めて75基確認されており、内訳は早期41(うち基4)・前期5・中期4・後期7・晩期15・不明3である。Tピット28基は、すべて後期の所産と考えている。焼土は43基あり、早期39・後期4となる。注目されるのは、早期の住居跡・土壌・焼土の多さ、後期の住居跡とTピット、晩期の土壌である。美沢3遺跡では、早期と後期に定住のピークがあり、特に早期段階の利用の顕著さが窺える。Tピットと晩期の土壌を除くほとんどの遺構が、c-68区の美沢川に向かう低位段丘の突出部と、その後背の緩斜面に造られている。

これを時期別に見てみると、早期は、低位段丘の突出部の西面と、その後背の標高7~11mの緩斜面に、土器分類のⅠb-4(東銅路Ⅳ式相当)の時期の住居跡のまとまりがある。この突出部と緩斜面住居跡群・中央台地端に土壌が存在し、特に突出部に小型の土壌が集中する。このうちⅠb-3(中茶路式相当)の時期といえる土壌は、P-13・61・56の基・P-1・17・21・22・23・24・62・65・66・77とS P-1・2の小土壌で、他の26基はⅠb-4の時期とできる。中央台地端のまとまりは、Ⅰb-3の時期に限定される。焼土は、ほとんどが突出部の人為的盛土中にあり、F-42を除く38基がⅠb-4の時期の所産である。bラインより西には早期の遺構は見られない。

前期には、5基の土壌が突出部に散在するのみである。

中期では、b-69区からc-69区にかけて標高7~10mの北面する緩斜面に住居跡と土壌が小範囲でまとまっている。土器分類のⅢa(円筒上層式相当)の時期である。また美沢川に差し込む沢の口に土壌が1基みられる。

後期は、突出部とその後背の北面する緩斜面の標高10mまでに、住居跡と土壌が点在する。8m以下の平坦面に、より集中度が高い。住居跡は、H-16とH-19が土器分類のⅣa(余市式相当)の時期、他の5軒がⅣb(手稲~エリモB式相当)の時期である。Tピット列については後述する。

晩期では、遺跡西縁部の西面する斜面とその台地端にのみ、土壌が検出されている。特にa-70・b-70区の斜面上方から中位に集中する傾向がある。西南の台地縁に広がりかけて、造られなくなるのは、縄文時代の人々がこれでこの遺跡から、いなくなったことを示唆しているのであろうか。

表II-3 美沢3遺跡 II黒層遺構一覽

(住居跡：H 土壇：P 小土壇：SP Tビット：T 焼土：F)

遺構番号	調査年度	変更前番号	位置	時期 (縄文時代)	遺構番号	調査年度	変更前番号	位置	時期 (縄文時代)	
H-1	*		B69-14-15-24-25	早期	P-63	*	平成元年	e68-48	早期	
H-2	*		e69-81-91	後期	P-64	*		e68-36	早期	
H-3	*		e69-41-43-52-53	後期	P-65	*		e68-45	早期	
H-4	*		e69-66-75-76	早期	P-66	*		e68-45-46	早期	
H-5	昭和51年	H-1(平成元年 1P-1)	B69-34-35-44-46	後期	P-67	*		e68-36-48	早期	
H-6	昭和53年		e69-75-78-86-86	早期	P-68	*		e68-36	早期	
H-7	*		e69-85-86-95-96	早期	P-69	*		e68-56	早期	
H-8	*		e69-85	早期	P-70	*		e68-36	早期	
H-9	*		e69-72-74-83-84	早期	P-71	*	平成5年	B71-75	不明	
H-10	*		e69-72-73-82-83	早期	P-72	*	昭和15年	e71-25	不明	
H-11	*		e69-74-75-84-85	早期	P-73	*		e72-52-72	不明	
H-12	*		e68-89-99	早期	SP-1	*	昭和16年	e70-59	早期	
H-13	*		e69-83-84-93-94	中期	SP-2	*		e70-29	早期	
H-14	*		e69-44	早期	T-1	*		e71-86	後期	
H-15	*		e69-61-71	早期	T-2	*		e72-63-64	後期	
H-16	*		e68-49-e69-40	後期	T-3	*		e71-75+e72-70	後期	
H-17	*		e69-24	早期	T-4	*		e72-51-61	後期	
H-18	平成元年		e69-48-49-58-59-68-69	早期	T-5	*		e69-44-73-74	後期	
H-19	*		e68-75-78	後期	T-6	*		e71-78	後期	
H-20	*		e68-88-98	早期	T-8	*		e69-08-18	後期	
H-21	*		e68-25-27-36-37	後期	T-9	*		e69-78-79	後期	
H-22	*		e68-33	早期	T-10	*		e69-79	後期	
P-1	昭和53年		e71-69	早期	T-11	*		e70-42	後期	
P-2	昭和51年	P-1(平成元年 1P-1)	B69-63	不明	T-12	*		e70-04	後期	
P-3	昭和53年		e70-03-13-14	後期	T-13	*		e70-87-97	後期	
P-4	*		e69-88	後期	T-14	*		e70-08-470-68	後期	
P-5	*		e69-51-52	中期	T-15	*		e70-07-17	後期	
P-6	*		e69-77	早期	T-16	*		e70-34	後期	
P-7	*		e69-64	早期	T-17	*		e69-64-73-74	後期	
P-8	*		e69-04-06-14-15	早期	T-18	*		e70-79-471-70	後期	
P-9	*		e69-54	早期	T-19	*		e71-49	後期	
P-10	*		B69-03-04	中期	T-20	*		e71-41-42-51-52	後期	
P-11	*		e69-88-49-39-4	後期	T-21	*		e71-00-470-09	後期	
P-12	*		e69-62	後期	T-22	*	平成5年	e71-69-79+e72-70	後期	
P-13	*		e71-20	早期(遺)	T-23	*		e71-95	後期	
P-14	*		e69-44	早期(遺)	T-24	*	平成5年	e71-13	後期	
P-15	*		e69-84-84	早期	T-25	*		e71-29	後期	
P-16	*		e69-22-32	早期(遺)	T-26	*		e71-45-46	後期	
P-17	*		e70-06-470-58	早期	T-27	*	昭和51年	B69-44	後期	
P-18	*		e69-30-40	後期	T-28	*	昭和55年	P-3(平成元年 5P-3)	e71-56-57-66-67	後期
P-19	*		e69-50-60	早期	P-1	*	昭和53年	e69-21-22	早期	
P-20	*		e68-41	早期	P-2	*	昭和53年	e69-71	早期	
P-21	*		e69-31	早期	F-3	*		e69-31	早期	
P-22	*		e69-31	早期	F-4	*	平成元年	e68-36	早期	
P-23	*		e69-21	早期	F-5	*		e68-49	後期	
P-24	*		e69-90	早期	F-6	*		e68-68	後期	
P-25	平成元年		B70-96	後期	F-7	*		e68-68	後期	
P-26	*		B70-96	後期	F-8	*		e68-69	後期	
P-27	*		B70-96-97	後期	F-9	*		e68-18-19	早期	
P-28	*		B71-80	後期	F-10	*		e68-48	早期	
P-29	*		e70-06-470-96	後期	F-11	*		e68-47-48-57-58	早期	
P-30	*		e70-07-370-49	後期	F-12	*		e68-48-49	早期	
P-31	*		e70-07-17	後期	F-13	*		e68-36	早期	
P-32	*		e70-17-18	後期	F-14	*		e68-36	早期	
P-33	*		e70-18	後期	F-15	*		e68-36	早期	
P-34	*		e70-19	後期	F-16	*		e68-37-38	早期	
P-35	*		B70-97-98	後期	F-17	*		e68-47	早期	
P-36	*		e70-07	後期	F-18	*		e68-47	早期	
P-37	*		e68-59-69	前期	F-19	*		e68-47	早期	
P-38	*		e68-59-69	前期	F-20	*		e68-47	早期	
P-39	*		e68-39-e69-30	前期	F-21	*		e68-47	早期	
P-40	昭和55年		e70-31-41	不明	F-22	*		e68-27	早期	
P-41	平成元年	P-4	B70-99	後期	F-23	*		e68-27	早期	
P-42	*		e68-19-29	早期	F-24	*		e68-36	早期	
P-43	*		e68-28	早期	F-24	*		e68-34-35	早期	
P-44	*		e68-18	早期	F-25	*		e68-45	早期	
P-45	*		e68-46-47	早期	F-26	*		e68-58	早期	
P-46	*		e68-59	早期	P-27	*		e68-68	早期	
P-47	*		e68-47-57	早期	F-28	*		e68-47	早期	
P-48	*		e68-56	早期	F-29	*		e68-45	早期	
P-49	*		e68-57	前期	F-30	*		e68-36	早期	
P-50	*		e68-48	早期	F-31	*		e68-36	早期	
P-51	*		e68-56	早期	F-32	*		e68-37	早期	
P-52	*		e68-35-46	早期	F-33	*		e68-36	早期	
P-53	*		e68-36	早期	F-34	*		e68-36	早期	
P-54	*		e68-67	早期	F-35	*		e68-36	早期	
P-55	*		e68-35	前期	F-36	*		e68-35	早期	
P-56	*		e68-48	早期(遺)	F-37	*		e68-35	早期	
P-57	*		e68-34-34	前期	F-38	*		e68-35	早期	
P-58	*		e68-78	後期	F-39	*		e68-35-35	後期	
P-59	*		e68-36-48	早期	F-40	*		e68-35-35	後期	
P-60	*		e68-47	早期	F-41	*		e68-34-34	早期	
P-61	*		e68-46	早期(遺)	F-42	*	平成5年	e71-13	早期	
P-62	*		e68-45	早期	F-43	*		e71-97	早期	

(2) Tピットの種類と配列

Tピットは28基確認されている。そのうち溝状のものがT-5・17・21・22・23の5基で、T-23の墳底には4本の杭跡が見られた。他の23基はすべて、平面形が楕円形を呈するタイプで、墳底に杭跡のないもの7基(T-3・6・11・13・15・27・28)、杭跡1本のもの3基(T-7・10・16)、杭跡2本のもの13基(T-1・2・4・8・9・12・14・18・19・20・24・25・26)に分類できる。ただしT-15は、掘りかけのようで浅い。

溝状のもの5基は列をなさず、単独で存在するようである。長軸の向きは、T-5がコンターに直交し、他の4基はコンターと平行する。T-21とT-5やT-22は、調査範囲外の南側に列をつくる可能性は残る。

平面形が楕円形を呈するタイプは、西端のT-28を除くと、遺跡の北西から南東に列をなしている。T-27を北西端、T-2を南東端として、基本的に2列並列で緩斜面-台地端-沢-沢頭を高低繰り返し斜めに横断している。すべて同時期のものとする、少なくとも直線距離で10~20mの間隔で200mほど続いている。個々に若干の時期差があるにしても、ほぼ同一線上にあり、列をなすことには変わらない。また杭跡の有無や数の分類では、規則的な配置をなすことはなく、これが時期や列分けを示すものではない。いずれにしてもこの場所が縄文時代の後期に、Tピットの仕掛け場所であったことは疑いない。

(3) 土器の時期と分布

c-68区の低位段丘の突出部と、その後背の緩斜面を中心に、6ヵ年で約13万点の土器が出土している。この突出部と緩斜面には、晩期以外のすべての時期の土器がみられた。以下、時期別に概観してみる。

早期の土器は11万点以上、総数の9割近くを占め、そのうちI b-1・2類は7,000点未満だが、I b-3類は2割近く、I b-4類は7割以上もある。I b-4類は全体の3分の2と、圧倒的な量の多さである。I b-3類とI b-4類は全範囲で確認されているが、遺構のある突出部と后背のb-69・c-69・70区では混在し、斜面から台地にかけてはかなり明確に、西半にI b-3類、東半にI b-4類と分布する。

前期は3,000点ほどのII a類が、突出部と后背のc-69区を中心に分布し、周辺はスポット的に散在する傾向にある。

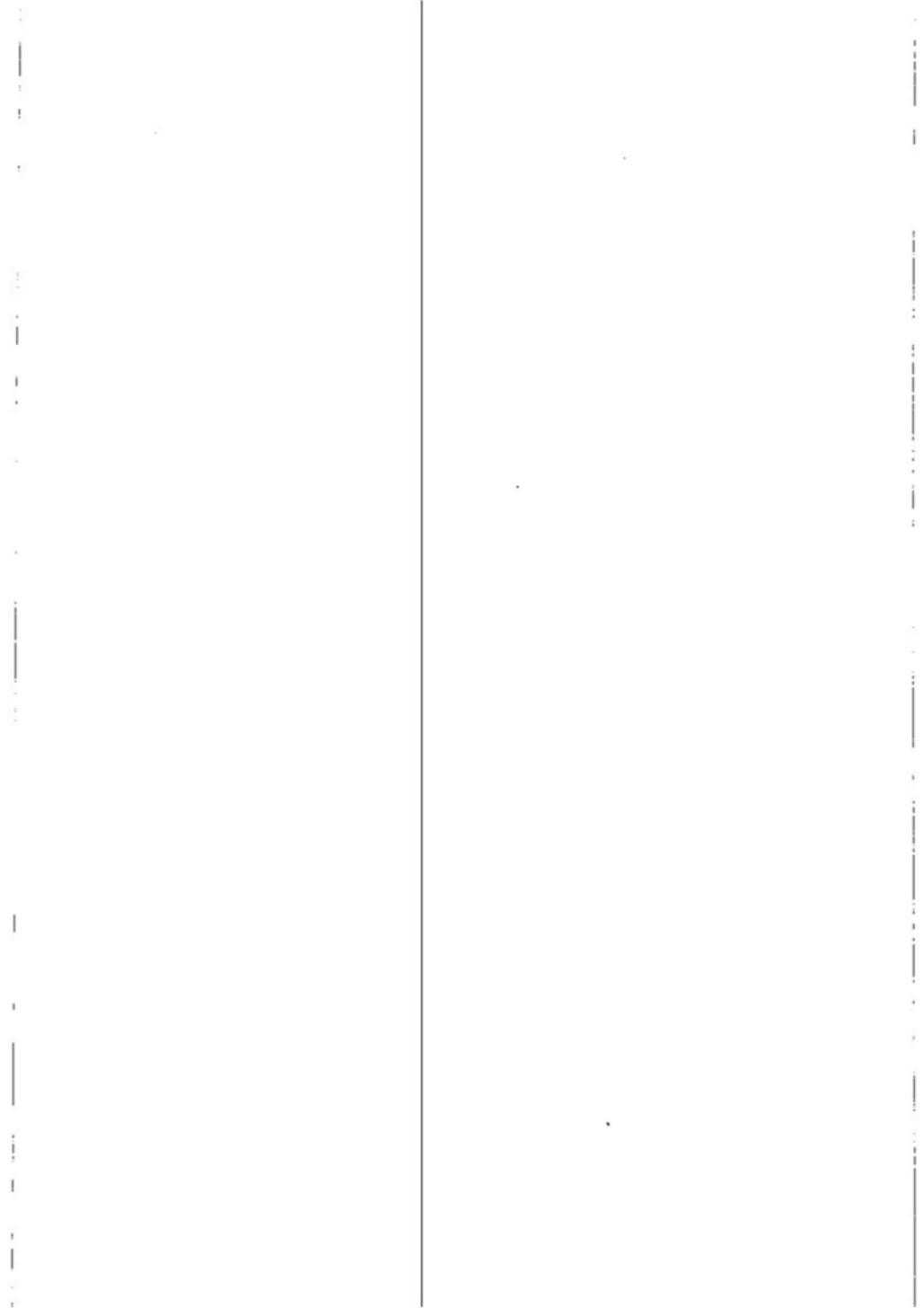
中期も3,000点ほどで、うちIII a類が8割近くを占め、残りはIII b-1類である。突出部と遺構のあるb-69・c-69区を中心に分布し、台地や斜面では散在するにとどまる。

後期の土器は約1万点と早期以外では多く、IV b類が8割以上、ついでIV c類、少量のIV a類となる。遺構のある突出部とb-69・c-69区を中心に分布し、台地や斜面では散在するのみである。

晩期は全22点と少量の出土であり、V b類が台地中央部に、V c類が西側斜面に散在する。土壌群との整合性がみられない。

遺構と土器の分布から、美沢3遺跡は、縄文時代早期、とりわけI b-3類とI b-4類期が主体の遺跡であるといえる。そして、後期IV b類に再度、利用度が高まることもまた明らかである。

(三浦 正人)



III 美々8遺跡の調査

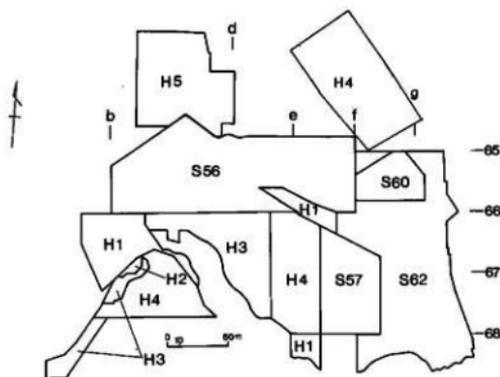
1 概要

美々8遺跡は、美沢川左岸の遺跡群の中では最下流に位置し、標高約22mの台地とそれに続く斜面に立地している。昭和56年度から断続的に行われていた発掘調査も今年度で最後である(低湿部の整理・報告を除く)。8回にわたる延べ調査面積は、54,557㎡におよぶ。

今年度の調査区域は、昭和56年度調査区の北側に隣接した濡れ沢及び斜面である。調査は、旧表土層とI黒層を対象に行った。調査面積は、当初3,635㎡であったが、遺物の広がり調査区域外に及ぶため、調査区を拡張した結果、5,597㎡となった。

旧表土層で検出された遺構は、小ピット52個である。調査区南西側でまとまって検出された。約50cmの間隔で列をなすものと、規則性のないものがある。検出された地点からみて旧室蘭街道に關係する杭跡の可能性がある。遺物には陶磁器・鉄鍋・葉萐・ビール瓶などがある。

0・I黒層で検出された遺構は、墓墳1基・小柱穴58個・道跡2条・焼土425ヵ所・骨片集中7ヵ所・集石100ヵ所である。墓墳は調査区南西側斜面部、18.5mの等高線上に位置している。平面形は長楕円形で、長軸方向の墓墳外に杭穴がみられた。伴出した遺物には、鉄鍋と刀子がある。鉄鍋は墓墳の北東側墳口部で、刀子は墳底の北東寄り検出された。小柱穴はおもに調査区中央部の濡れ沢上と南西側の平坦部に集中して検出された。道跡はその凹みが深く等高線に沿って続くものと、凹みが浅く等高線を横切るものがある。焼土の大半はI黒層の上面で確認された。このうち24ヵ所から焼けた骨片が検出された。骨片を伴う焼土は調査区南西側平坦部に集中している。集石のうち8ヵ所は同じような大きさの礫が2つ対に並ぶ「双礫」である。集石はI黒層上面あるいはI黒層を3～5cmほど除去した段階で現われるものが多い。ただし、0黒層で検出されたものもわずかにある。集石には、大きな礫が集中するものから、小さな礫が集中するものまで様々である。集中のありかたもバラつきのあるものや、密集するものがある。石材は片麻岩・チャート・珪岩が多い。I黒層で出土した遺物の大半は縄文時代の土器で、次いで礫が多い。この他には陶磁器・石鏃・鉄製品(鍋・鎌・斧・鏃・刀・

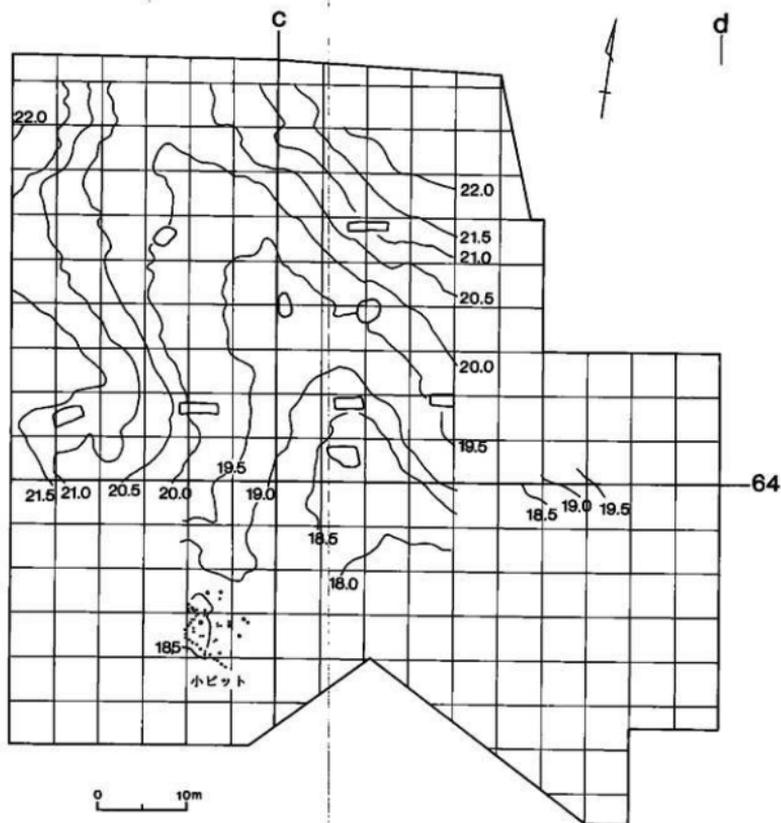


図III-1 美々8遺跡 年度別調査区

刀子・釘など)・古銭・土錘・紡錘車などがある。自然遺物にはサケ・ウグイ・シカ・クジラあるいは海獣などの動物遺存体とクルマなどの植物遺存体がある。
(佐藤 和雄)

2 表土層の遺構

平成3・4年度の調査では、溜れ沢の両側を削平した道跡が検出されている。今年度の調査区へその道跡が続く可能性があるため、溜れ沢およびその周辺を精査したが、道跡は確認できなかった。調査区から西側より道跡に続くものと思われる。調査の結果、表土層で検出された遺構は、旧室蘭街道に関係するものと思われる小ビット52個の一群のみである。



図III-2 表土層遺構位置図

3 表土層出土の遺物

(1) 全般(表III-1、図版III-3)

表土層からは、陶磁器・ビール瓶・罍・石剣片・金属製品・獣骨・貝殻・クルミなどが出土している。

表III-1 表土層出土遺物集計

グリッド	陶磁器片	ビール瓶片	罍	石剣片	金属製品	獣骨	貝殻	クルミ	その他
c63-01	1	3			1		1		
c63-02	7		2					2	
c63-04	1								
c63-06					1				
c63-07			4		1	1			
c63-09	1							1	
c63-11	12	3			2				
c63-12	4	7			2				
c63-15					1				
c63-17	1							1	
c63-18	2		24	1	4				
c63-21	2		2		1				
c63-22	1		4		2				
c63-25			2		1		1		
c63-31			5		2				
c63-34	1				3				
c63-37					1				
c63-39					1				
c63-41			3					1	
c63-42	1		4		1			1	炭化物1
c63-43				2					
c63-44			3						
c63-51			2		1				炭化物1
c63-52			2		4	2			
c63-56					1				
c63-61			2					1	
e64-00	1								
e64-04	2								
e64-11					1				
e64-12					1				
e64-21					1				
d63-67	1				1				
d63-68	1								ボタン1
d63-69			4						
d63-78							1		
d63-79			3		1				
d63-87	1								
d63-88			3						
d63-92	1						1		
d63-94								1	
d63-95	1								
d63-96	1								
d63-97	2								
d63-98			1		1				
d64-40							1		
d64-60			2						
d64-61	1								
d64-70			2						
d64-71	1		1						
d64-91					1				
計	47	13	75	3	37	3	5	8	3

いずれも、18世紀以降の遺物と考えられる。その出土グリッドと点数内訳は、表Ⅲ-1に示してある。

陶磁器は、15個体ほどの47破片がみられるが、完形に復元できるものはない。徳利・茶碗がほとんどで、出土地点も広範囲であり、セットとして捉えられるものもない。しかし、低湿部の表土層の陶磁器と酷似するものもあり、旧室蘭街道関係を考慮にいれながら、昨年度分や昭和56年度分を含めて、美々8遺跡全体の中で考察しなおさなければならない。

ビール瓶は、13片が接合し1個体となる。丸に点のマークから、大日本ビールであることがわかる。

礫は、径3cmほどの小円礫から拳大のものまで、礫片も含めて75点出土している。後述するI黒層の集石のような出土状況は示さないが、石質はその集石の礫とほぼ変わりはない。

金属製品は次項で別に述べてある。

(2) 金属製品 (図Ⅲ-4、表Ⅲ-2、図版Ⅲ-3)

表土層からは、26点の鉄製品と11点の銅製品が出土している。表Ⅲ-2に、その内訳を示し、一部を図Ⅲ-4に掲載してある。

鉄鍋はすべて破片で、3には底部の一字溝口が残っている。4は口唇部を欠いた口縁部から胴部にかけての破片である。いずれも内耳鉄鍋の部分と思われる。5の鍋は薄手の直刃で刃部の一部を欠くが、刃の推定長は約10cmである。釘は6が洋釘、7が頭巻の和釘である。

9のキセルの吸い口は銅製で、胴部の合わせは真鍮と思われる。長く細身の形状を呈している。10は銅の寛永通寶である。大きさと裏無文字、「寶」の字が終面がス形となるス寶であることから、明暦2(1656)年以前に鑄造された、いわゆる古寛永といえる。11~19は銅製の銃弾薬莖で、尻部の刻印から6種に分けられるが、形状はすべて同一である。朝鮮戦争当時の駐留アメリカ軍が演習時に使用したものであろう。

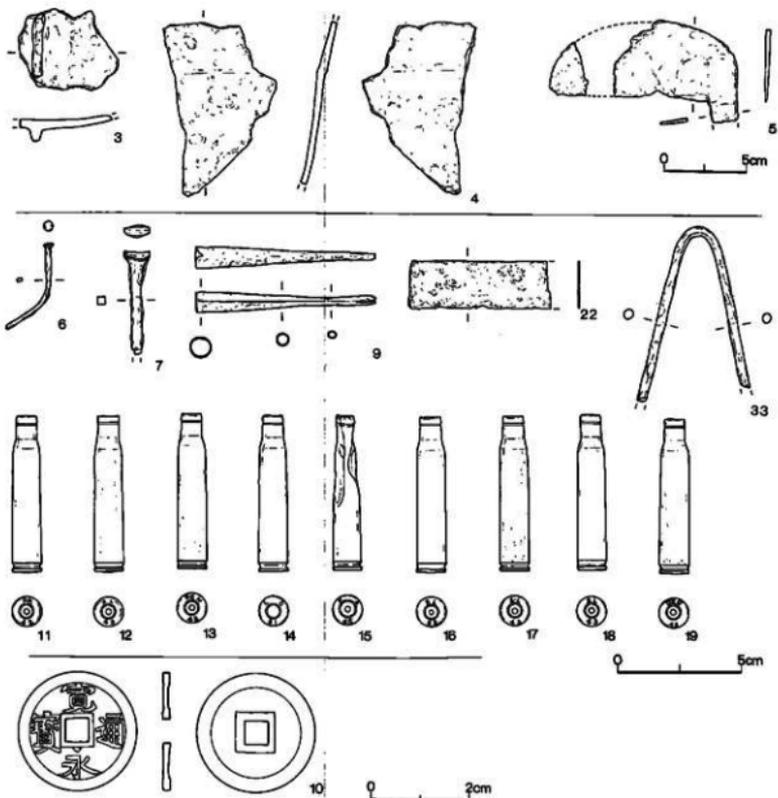
22は厚さ1mmに満たない帯状鉄板、33はV字状に曲げられた太めの針金である。このほか図示していない蹄鉄や缶類・針金等ほか陶磁器・ボタンなども、他の遺物と同様に、旧室蘭街道や駐留アメリカ軍に関する遺物と思われる。

(三浦 正人)

表Ⅲ-2 表土層出土金属製品一覧

No.	名 称	グリッド	大 き さ	cm	No.	名 称	グリッド	大 き さ	cm
1	鍋 胴部小片	e63-18	図なし		20	蹄鉄	e64-12	図なし	
2	鍋 胴部小片	e63-18	図なし		21	蹄鉄	e63-98	長 9.9 幅10.7	図なし
3	鍋 底部 一字溝口	e63-32	溝口長(3.9) 溝口幅 0.6		22	帯状鉄板	e63-15	長 (5.8) 幅 2.0	
4	鍋 口縁部	e63-56			23	鉄板	e64-91	長(13.6) 幅 6.9	図なし
5	鍋	e63-57	全長(11.6) 高 (6.1) 刃幅 4.6		24	湾曲鉄板	e63-06	長 (7.1) 幅 2.7	図なし
6	釘	e63-22	長 4.4 頭幅 0.4		25	缶	e63-01	図なし	
7	釘	e63-31	長(4.2) 頭幅 1.1		26	缶	e63-11	図なし	
8	釘? 縦内棒状	e63-18	長(1.6) 幅 0.6	図なし	27	缶片	e63-22	図なし	
9	キセル 吸口	e63-25	長 7.3 胴径 0.8		28	缶	e63-52	図なし	
10	古銭 寛永通寶	e63-52	径 2.43 厚 0.13		29	一斗缶	e64-12	図なし	
11	薬莖 刻印「DM 42」	e63-11	長 5.3 径 1.2		30	缶	e63-34	図なし	
12	薬莖 刻印「SL 45」	e63-12	長 6.4 径 1.2		31	缶	e63-34	図なし	
13	薬莖 刻印「DEN 43」	e63-18	長 6.3 径 1.2		32	缶	e63-78	図なし	
14	薬莖 刻印「LC 51」	e63-21	長 6.3 径 1.2		33	針金	e63-07	径 0.4	
15	薬莖 刻印「FA 45」	e63-34	長 6.3 径 1.2		34	針金	e63-12	径 0.4	図なし
16	薬莖 刻印「SL 43」	e63-37	長 6.3 径 1.2		35	針金	e63-42	径 0.3	図なし
17	薬莖 刻印「SL 43」	e63-39	長 6.3 径 1.2		36	ボルト・ナット・コイル等	e64-11	長(12.8) 径 1.2	図なし
18	薬莖 刻印「SL 43」	e63-51	長 6.3 径 1.2		37	不明 薄平棒状	e63-51	長(2.0) 幅 0.8	図なし
19	薬莖 刻印「DEN 43」	e63-52	長 6.3 径 1.2						

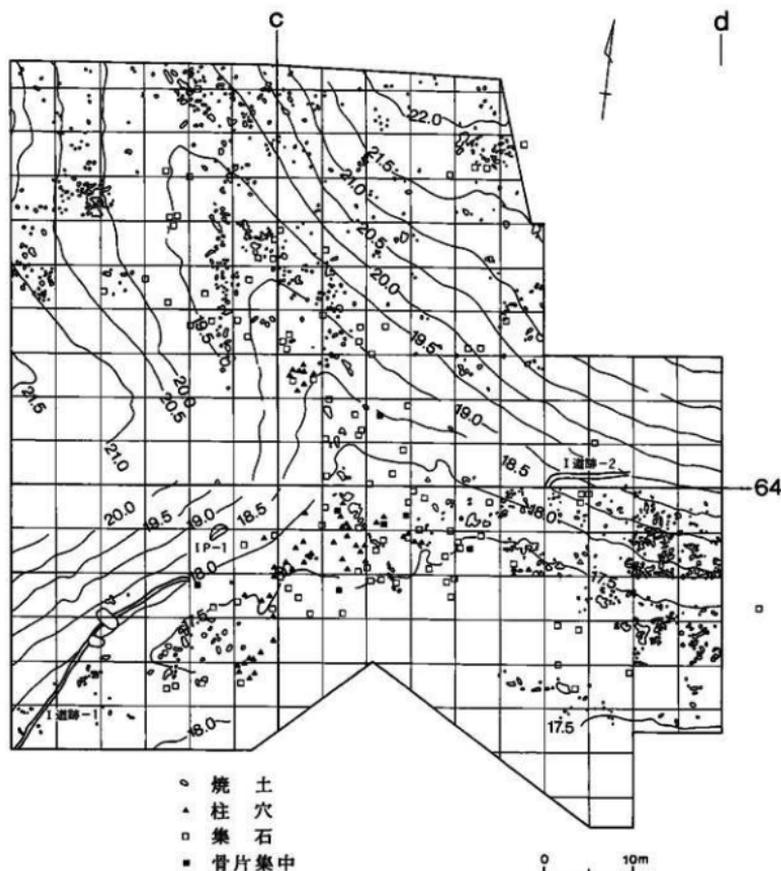
* Noは図と対応する。



図III-4 表土層出土の金属製品

4 0黒層・I黒層の遺構とその遺物

I黒層は、Ta-b層とTa-c層との間に形成された腐植土層である(図I-2 土層模式図)。検出された遺構は、墓墳1基・小柱穴58個・道跡2条・焼土425ヵ所・骨片集中7ヵ所・集石100ヵ所がある。集石のうち3ヵ所は0黒層で検出されたものである。0黒層はTa-a層とTa-b層との間に形成された腐植土層である。墓墳は副葬品などからみてアイヌ文化期のもと考えられる。焼土は25ヵ所から動物遺存体が検出された。これ以外の遺物は、ガラス玉が1個出土したのみである。集石は9ヵ所で土器が伴出している。時期は擦文時代前半(VII群-II類)期から後半(VII群-IX類)期の間である。なかでも中葉の土器が多い。(佐藤 和雄)



図III-5 I黒層遺構位置図

(1) 近世アイヌ墓

IP-1 (図III-6・7)

位置 c-64-10・11

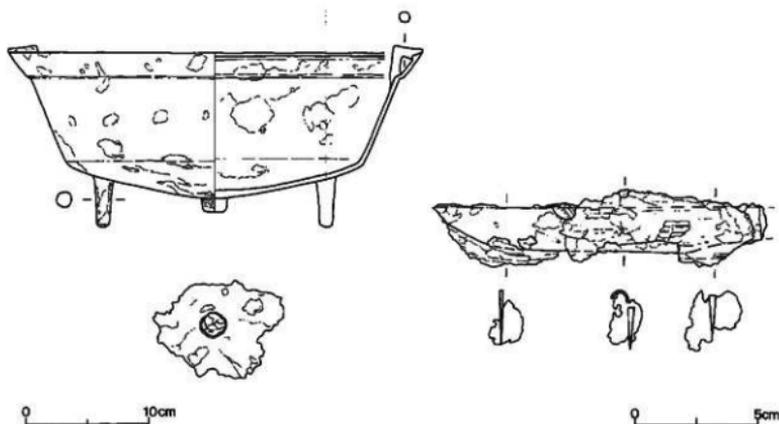
規模 2.24×1.08/2.06×0.45/0.40m

特徴 Ta-b除去後、南東面する斜面の18.5mコンターに乗るように、ゆるいI黒層の窪みが確認できた。窪みの周辺は、I黒層がTa-c上に薄くしか堆積しておらず、窪み内の中央部にはI黒層(0黒層?)にTa-b粒の混じった層がみられた。さらに窪み北東端には鉄鍋があり、近世アイヌ墓であることが、予想された。

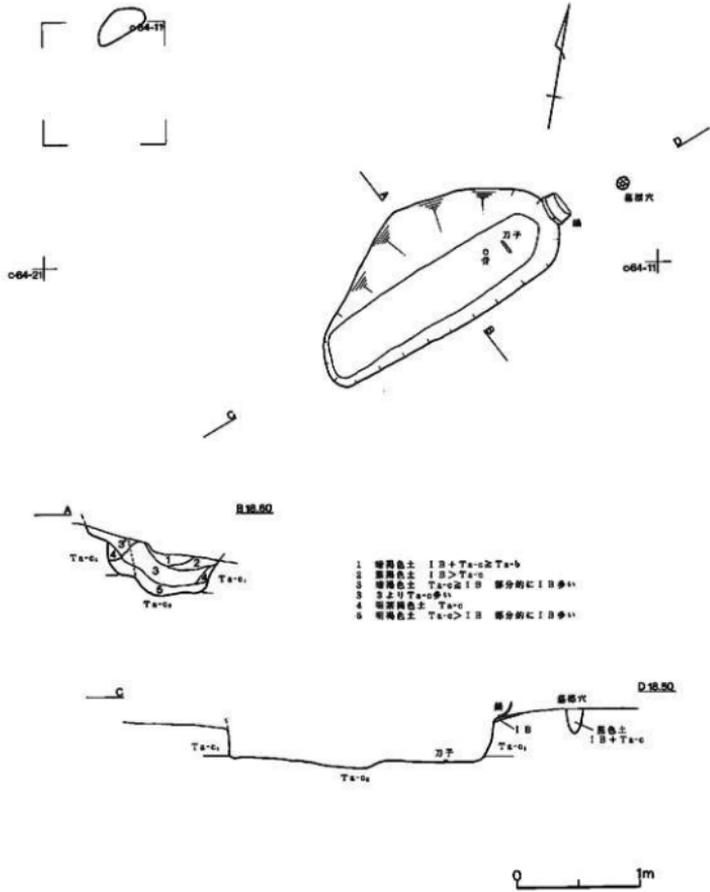
この墓墳は、Ta-c層に掘り込まれており、底面もTa-cからなる。長軸は北東-南西である。斜面上方の崩落はあるが、墳底の形からみて、ほぼ長方形の平面形を示すものと思われる。墳底は中央部が少し凹んでいる。周辺には掘り揚げ土は見られないが、覆土の3・5層は、掘り揚げ土の埋め戻しと考えられる。墓標穴は、墓墳の北東端から約60cm離れた位置にあり、径13cm・深さ20cmを計る。覆土にTa-bが入っていないことから、比較的早くに墓標が失われたものと思われる。

骨の残存状態は悪く、墳底の一部に骨片が見られる程度である。副葬品は、墳口部北東端に置かれた半分に割れた内耳鉄鍋と、墳底北東端近くの刀子1本のみである。内耳鉄鍋は、墓墳北東側グリッドc-64-00区の数箇所の内耳鉄鍋片と接合し、丸湯口で3本脚付きとなることがわかった。図上で口径34cmの内耳鉄鍋に復元できた。刀子には鞘や柄の木質が残存付着している。両者とも別項の金属製品で後述する。

墓標穴と副葬品の位置から、北東に頭部を向けていたことになり、骨片は頭骨の一部、墳底中央部の凹みは尻の部位と考えられる。
(三浦 正人)



図III-6 近世アイヌ墓 (IP-1) の遺物

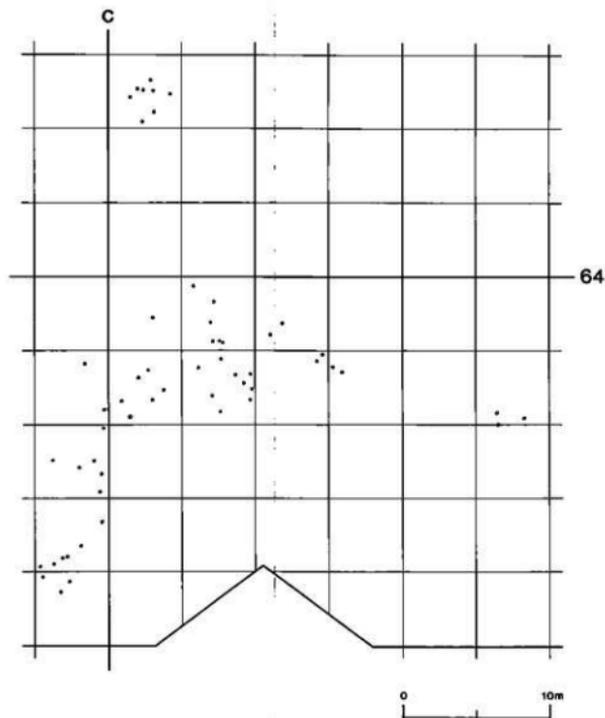


図III-7 近世アイヌ墓 (IP-1)

(2) 柱穴群 (図III-8)

c-64区の北東側・c-63-97・d-64区の北西側で検出された。Ta-c 上面で58個の柱穴が確認された。規模は、径7~36cmとばらつきがある。断面形は先端が細くなる杭状をなす。柱穴の分布には建物跡や柵のように規則性はみられない。なお昭和156年度の柱穴群は南西約80mの地点である。

時期は、柱穴群と擦文時代の土器 (VII群VI~IX類) の分布と一致することから、土器群の時期とほぼ同様とみられる。

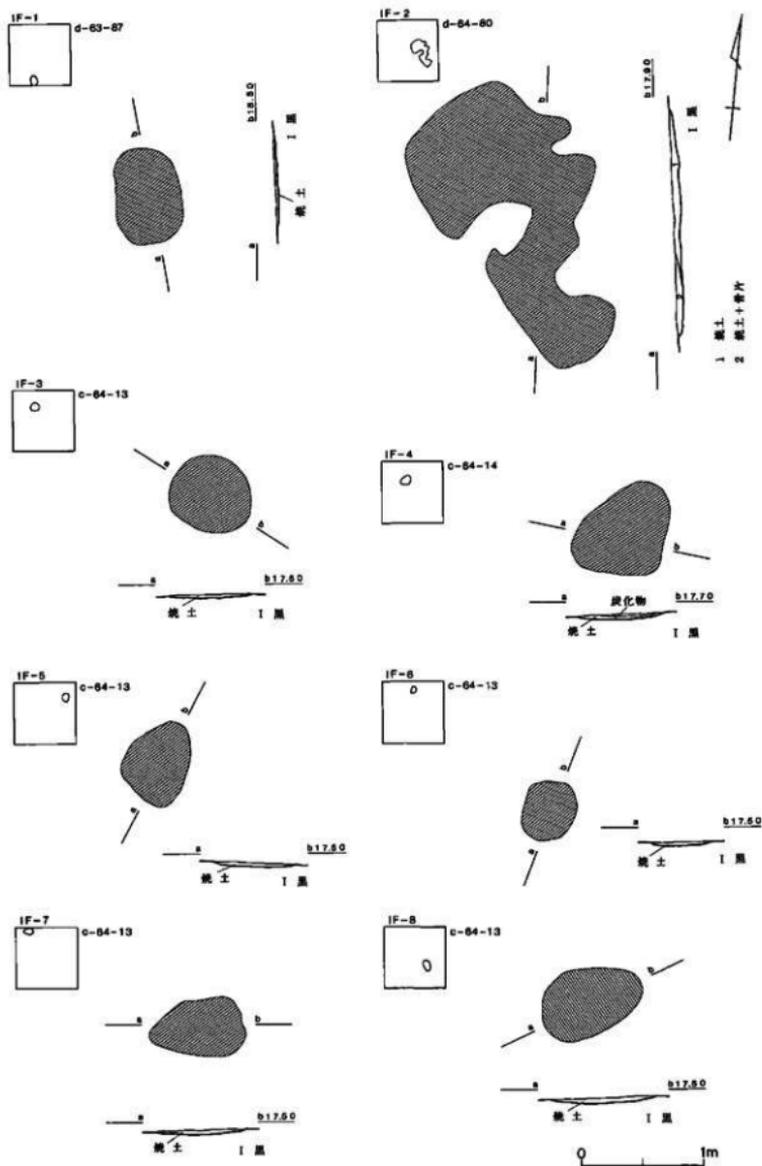


図III-8 柱穴群

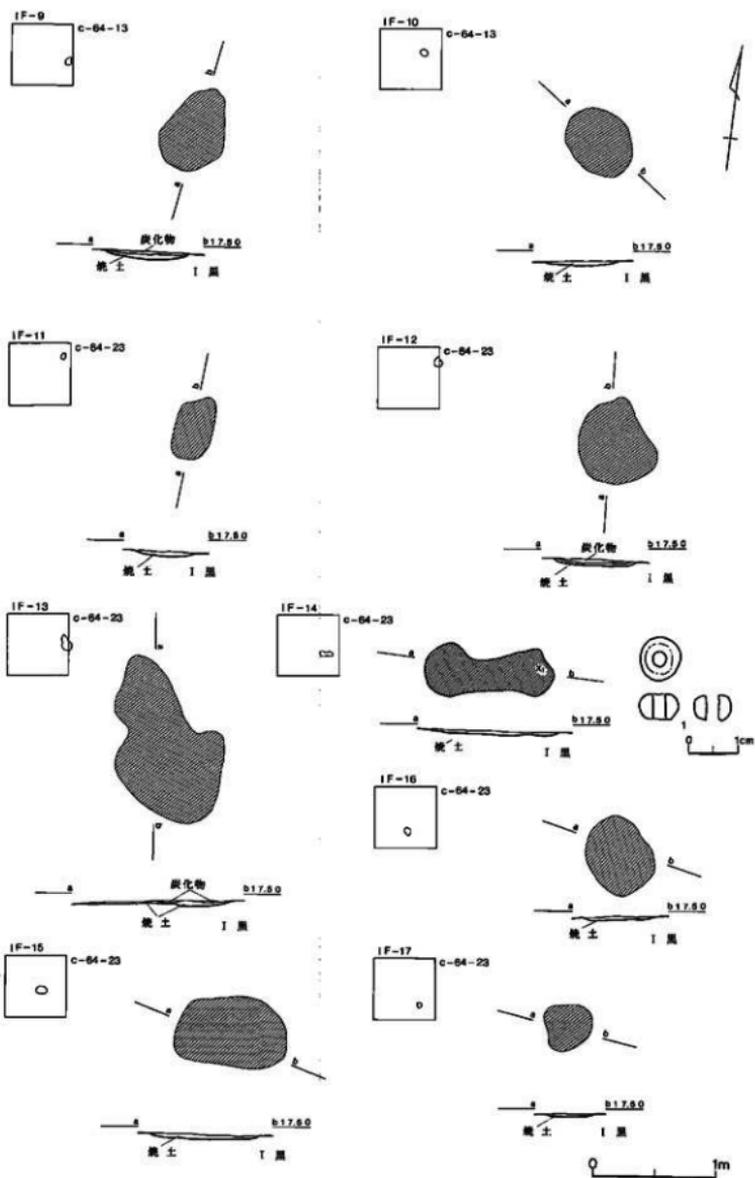
(3) 焼土 (図III-9~11)

c-64ライン付近とd-63区の北東側を除くほぼ全域で検出された。総数は425カ所である。確認面はI黒層を5cmほど掘り下げた面である。焼土の多くは人為的なものと自然によるものとの判別が困難である。ここでは獣骨・魚骨・炭化物などが含まれている、炉跡とみられるものを図示した。骨については付篇 高橋理氏の報文で述べてある。遺物は、IF-13から青色のガラス玉 (0.6g) が出土している。

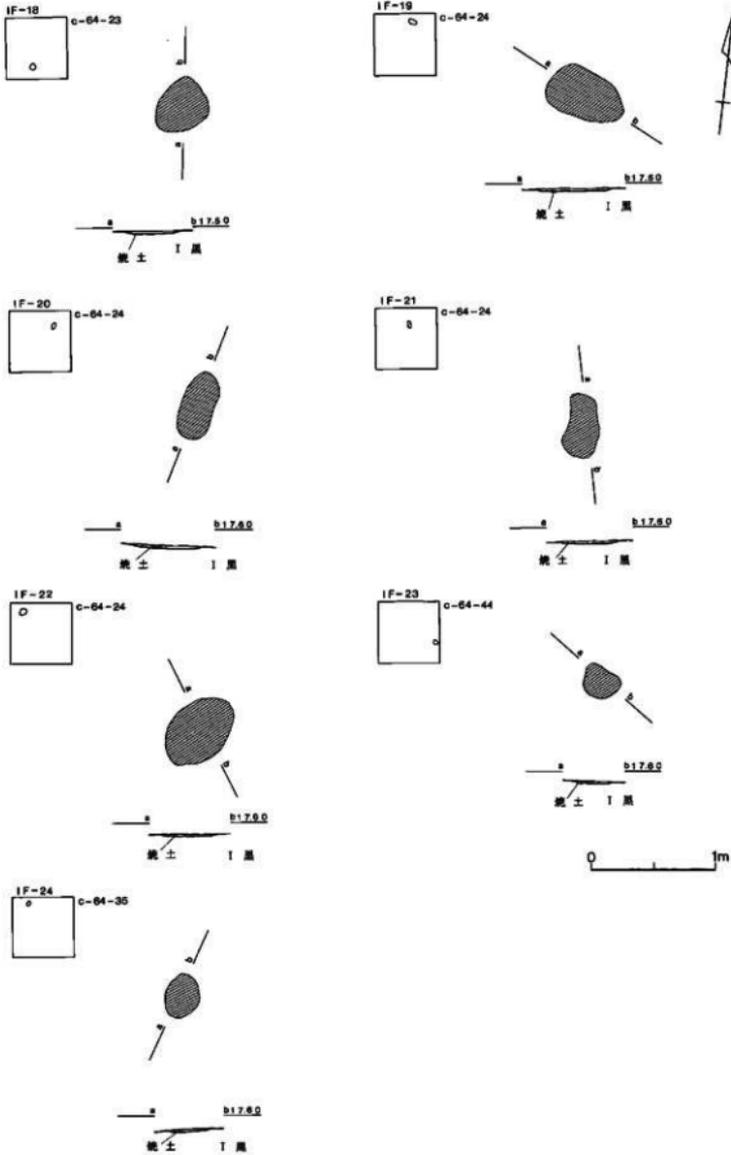
時期は出土遺物および周辺の遺物から、擦文時代後半~近世の間と考えられる。



図III-9 焼土(1)



図III-10 焼土(2)



図III-11 焼土(3)

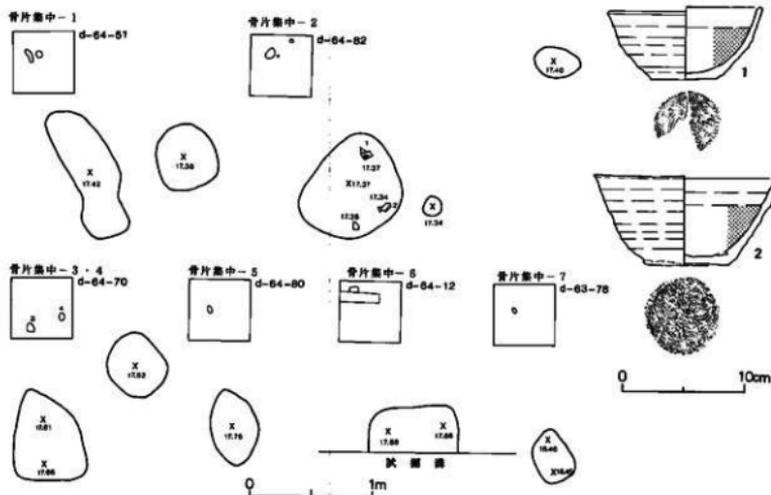
(4) 骨片集中 (図III-12)

7ヵ所検出された。調査区中央部南側の平坦部に集中している。焼土と同じくI黒層を5cmほど下げた面で確認された。骨片は獣骨・魚骨で、被熱している。詳細は付篇 高橋理氏の報文で述べてある。遺物は、骨片集中-2で環が2個体伴出している。

時期は、伴出遺物 (VII群-V・VI類) と確認面の層準からみて、擦文時代中葉と考えられる。

表III-3 骨片集中出土土器観察表

No.	遺構番号	名称	質量 cm	器形の特徴	技法の特徴	文様	備考
1	骨片集中-2	環	口径 12.6 高さ 5.9 底径 5.5		外面 回転ヨコナデ 回転糸切り		内黒 補修孔1対 d-64-82-92のものとの接合 時期: VII-V・VI
2	骨片集中-2	環	口径 15.1 高さ 7.4 底径 6.9		外面 回転ヨコナデ 回転糸切り		内黒 d-63-99-d-64-81-82のものとの接合 時期: VII-V・VI



図III-12 骨片集中

(5) 集石 (図III-13~38)

磯・礫片は17,219点出土した。集石となっていたものは100ヵ所である。これまでの調査の中で最も多いものである。このうち8ヵ所は「双磯」である。分布は、溜れ沢とその周辺にあつまるもの、調査区北東側の台地縁辺部に位置するもの、南側の平坦部にみられるものがある。

集石の検出面から、4つに分けられる。0黒層で検出されたもの (IS-1・双磯-1・2)、I黒

表III-4 集石出土土器観察表

No	遺構番号	名称	法量 cm	器形の特徴	技法の特徴	文様	備考
1	IS-13	坏		頸部 内彎 口縁部 外傾	回転コナナ		内黒 d-64-71のものとの接合 時期：Ⅴ-Ⅵ
1	IS-17	坏					時期：Ⅴ-Ⅵ
1	IS-21	甕	底径 (8.0)	外面 ヘラミガキ 内面 ハケメ			内黒
1	IS-23	坏	口径 13.5 高さ 7.3 底径 5.7	口縁部 外傾	外面 回転コナナ 体部 部分的に ヘラミガキ 回転未切り		内黒 補修孔3対 時期：Ⅴ-Ⅵ
1	IS-38	坏	口径 15.6 高さ 5.5 底径 10.0	口縁部 やや内傾 体部下位 段 内面下位 緩い段 底部 丸底気味	内外面 ヘラミガキ		内黒 d-64-90のものとの接合 時期：Ⅴ-II
1	IS-63	坏	口径 16.8 高さ (6.8) 底径 (7.3)		外面 カキメ後 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	口縁部 沈線	内黒 d-63-96のものとの接合 時期：Ⅴ-IX
2	IS-63	坏			外面 ナデ ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	横走沈線	内黒 時期：Ⅴ-IX
1	IS-65	坏	口径 (9.5) 高さ (2.4) 底径 (5.0)		外面 回転コナナ 内面 放射線状に ヘラミガキ 回転未切り		d-64-33-34のものとの接合 時期：Ⅴ-Ⅵ
2	IS-65	甕			内面 ヘラミガキ	横・斜位の沈線	内面炭化物付着 時期：Ⅴ-Ⅵ
1	IS-68	甕	高さ (11.0) 底径 5.8		外面 ハケメ 内面 ヘラミガキ		内外面炭化物付着 d-63-97のものとの接合
1	IS-80	甕			外面 ハケメ後 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	短刻文 横・斜位の沈線	内黒 時期：Ⅴ-Ⅷa
2	IS-80	甕			内面 ヘラミガキ	横・斜位の沈線	時期：Ⅴ-Ⅷa

層上面で検出されたもの (IS-2~4・15・19・双罍-3・4・6)、I 黒層2 回目で検出されたもの (IS-38・80)、これら以外の87カ所は I 黒層1 回目で検出されたものである。

d-64-30区では、大きな罍の集中・中位の罍の集中・小さな罍の集中が近接して検出された (IS-2~4)。これらの罍は全て棒状罍で、大中小のセットでとらえられる例である。

今回検出した双罍の中には、集石より小さい罍がみられるが、形状や出土状態から双罍に含めてあ

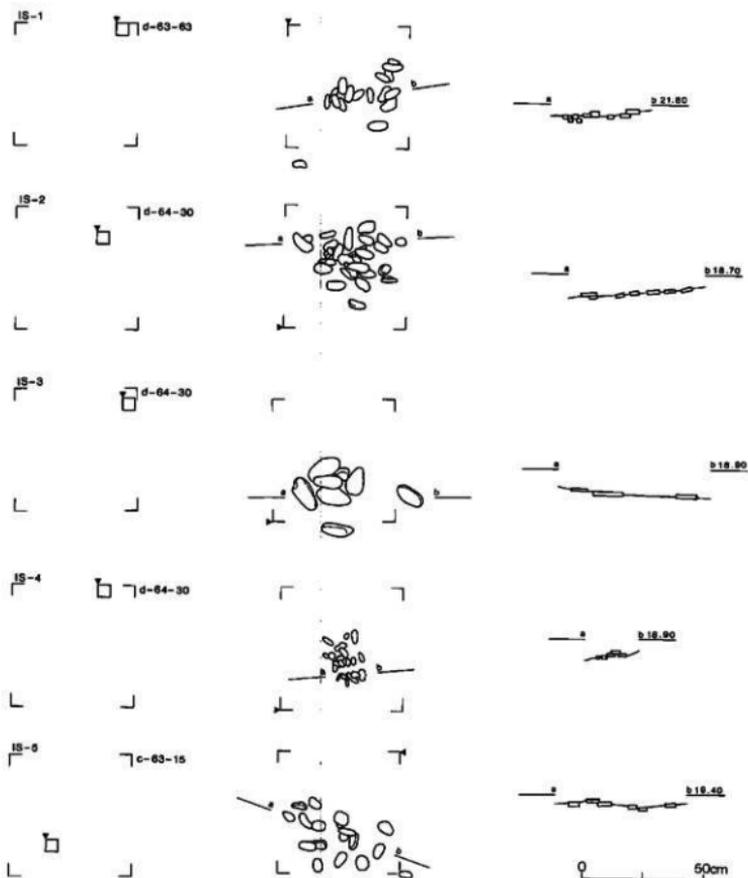
る。
遺物は、IS-6 から鉈のような鉄製品 (図III-61-105)、IS-13・17 から坏の破片、IS-21 から甕の破片、IS-23・38・63 から坏、IS-65 から甕の破片と坏、IS-68・80 から甕の破片が出た。その他の集石 (IS-32・33・50・56・59・74・78) から土器片が出土している。これらの土器片は細片になっていたり、器表が剥離していたり、識別が不可能であった。ただ色調や胎土からみて、濠文時代の土器の可能性が高い。

周辺から土鍾 (図III-56) や浮子と考えられる軽石が出土していることと、動物遺存体のうち魚骨

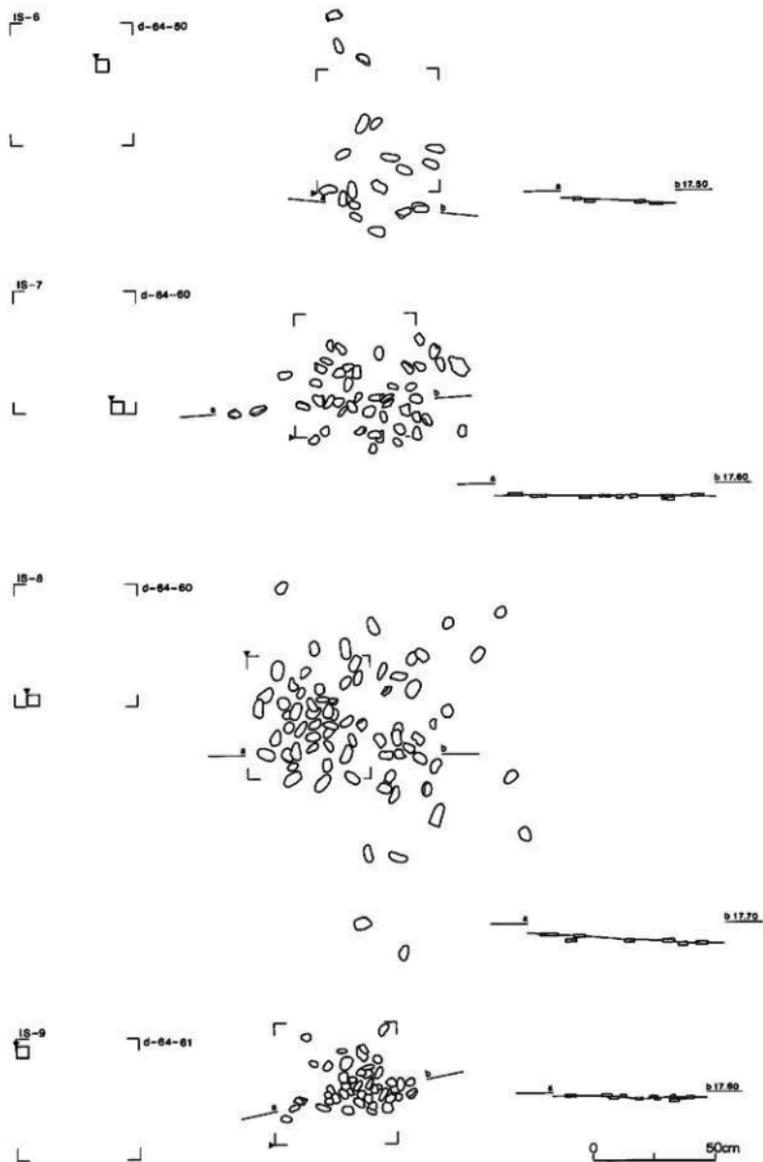
が多数を占めることを考え合わせると、昭和56度報告「美沢川流域の遺跡群V」で指摘のある、網の
 錘としての用途が考えられる。

時期は共伴した遺物から、7ヵ所判明した。IS-38は縄文時代前葉(VII群-II類)期、IS-13・
 17・21・23・65は縄文時代中葉(VII群-V・VI・VII類)期、IS-63は縄文時代後葉(VII群-IX類)
 期と考えられる。

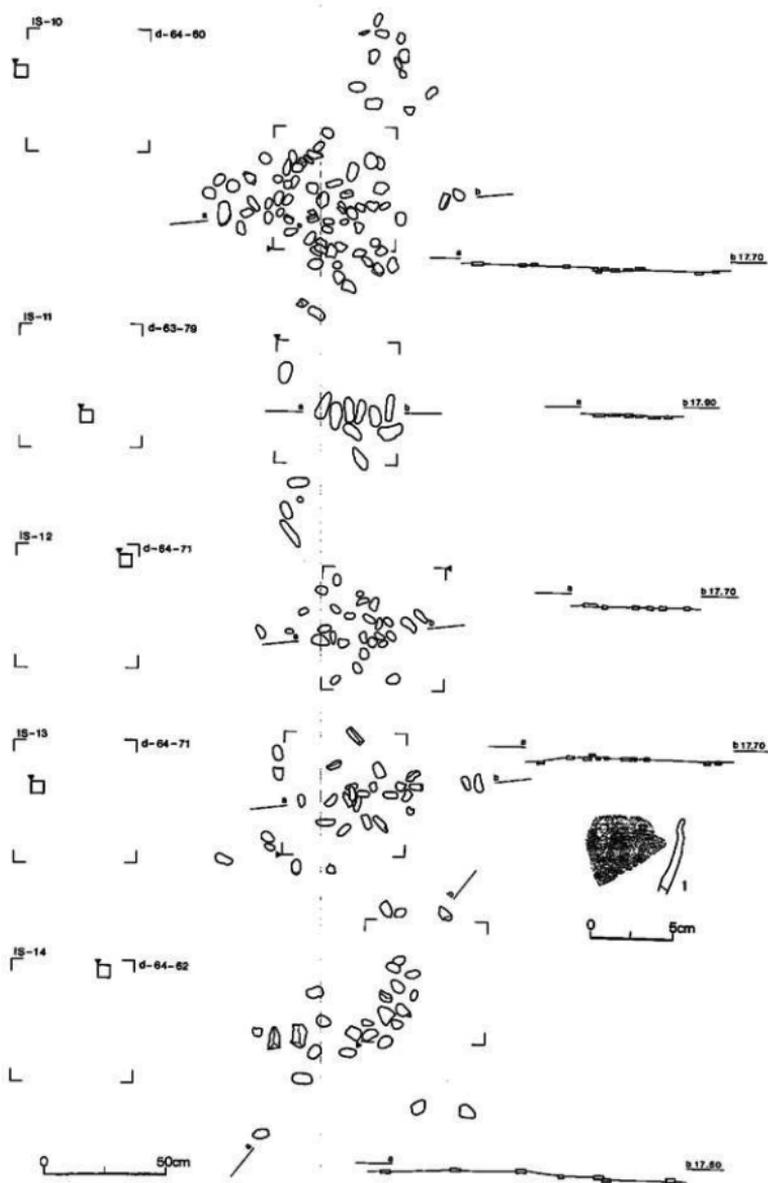
なお集石のうち16ヵ所については、石材の割合をグラフで示してある(図III-37・38)。礫の大きさ
 や形状については「礫のまとめ」と同じく、低湿部の報告で述べる予定である。(佐藤 和雄)



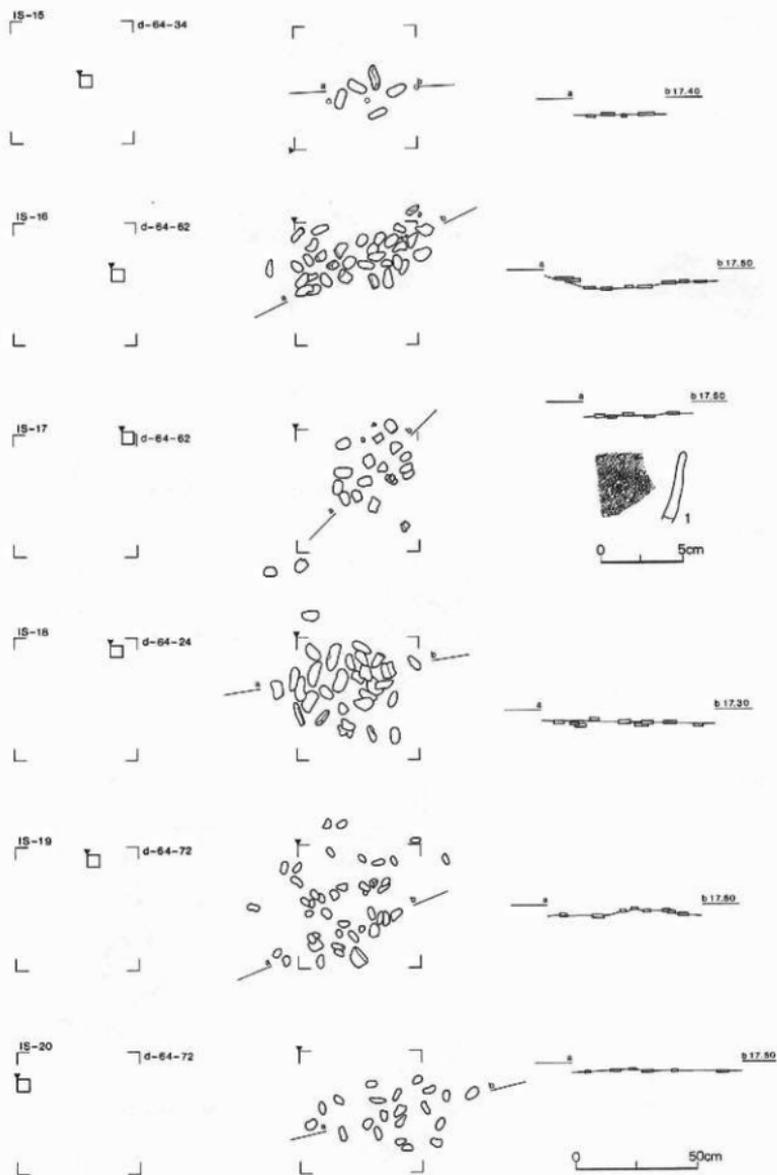
図III-13 集石(1)



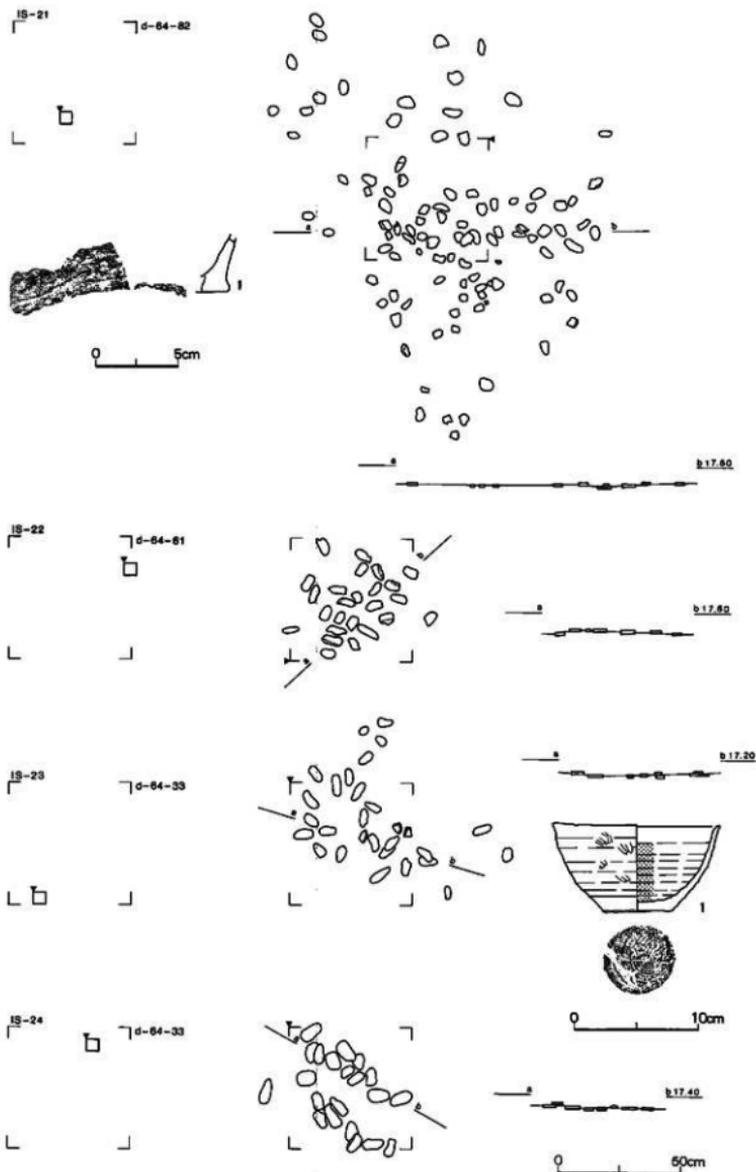
図III-14 集石(2)



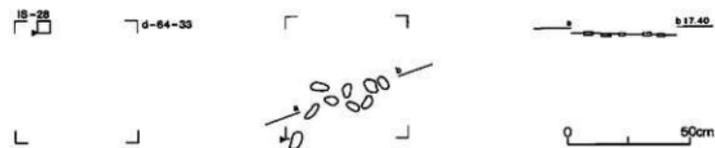
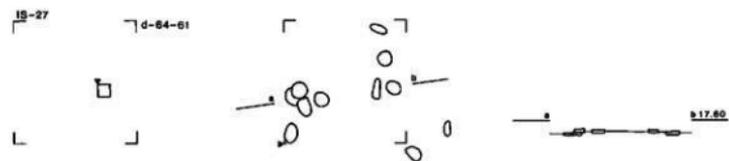
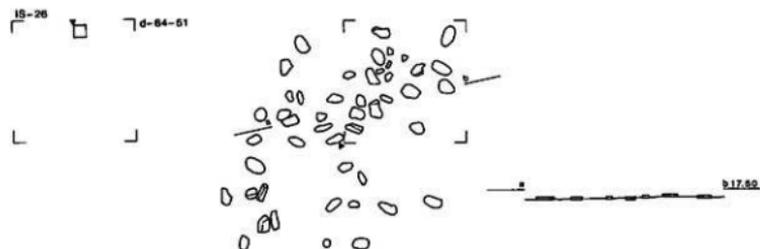
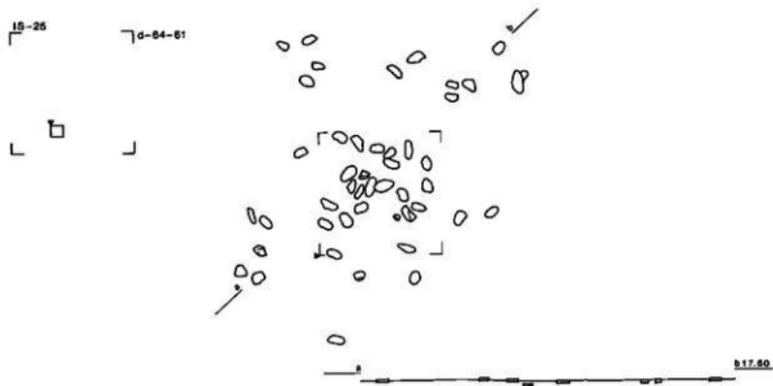
図III-15 集石(3)



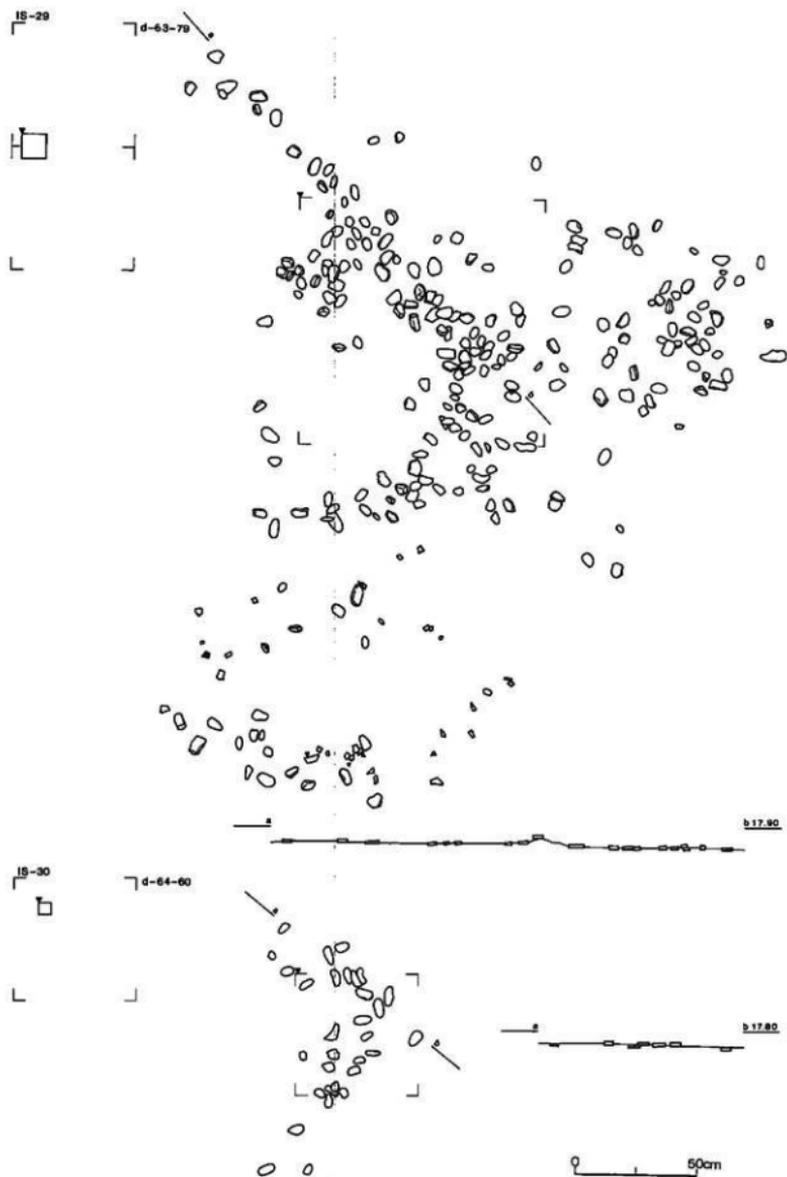
図III-16 集石(4)



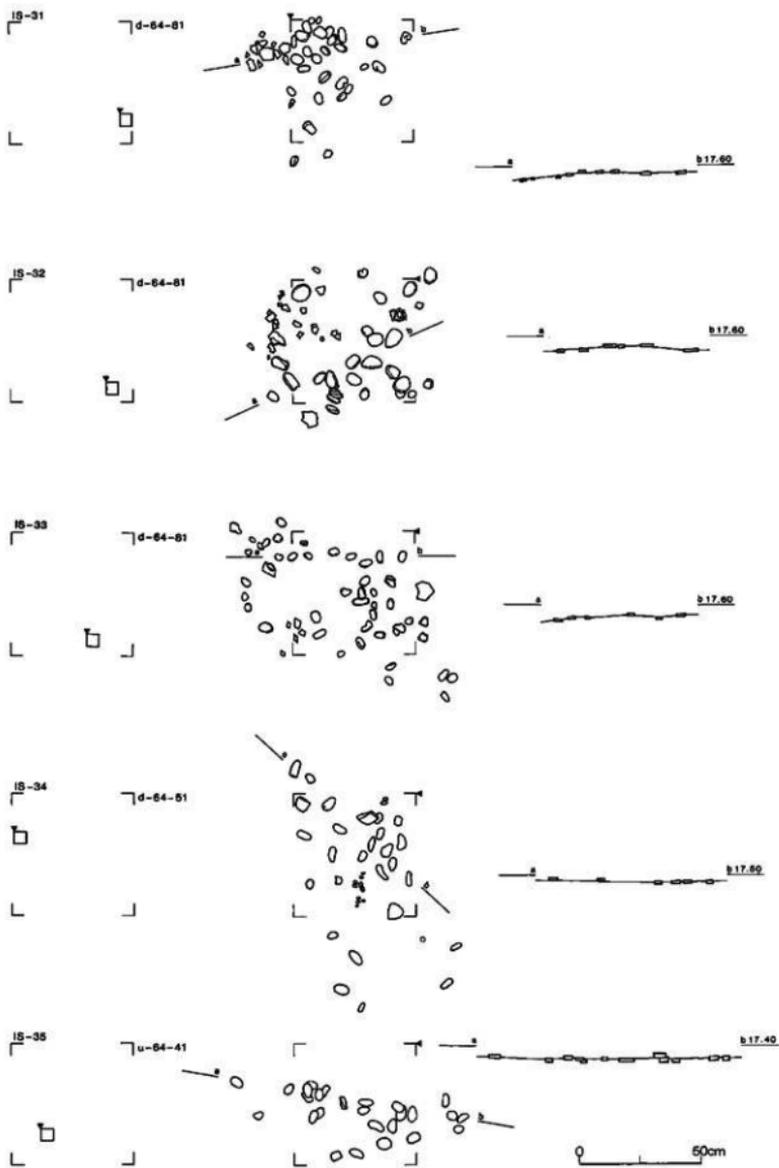
図III-17 集石(5)



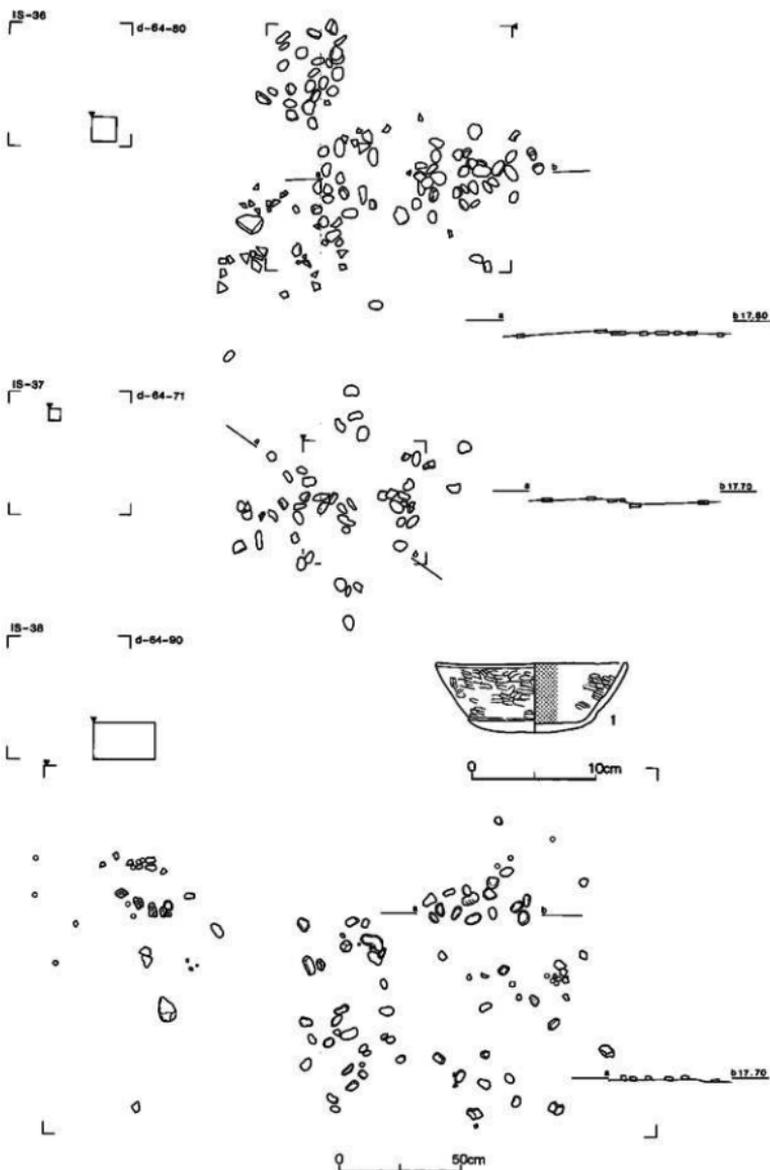
図III-18 集石(6)



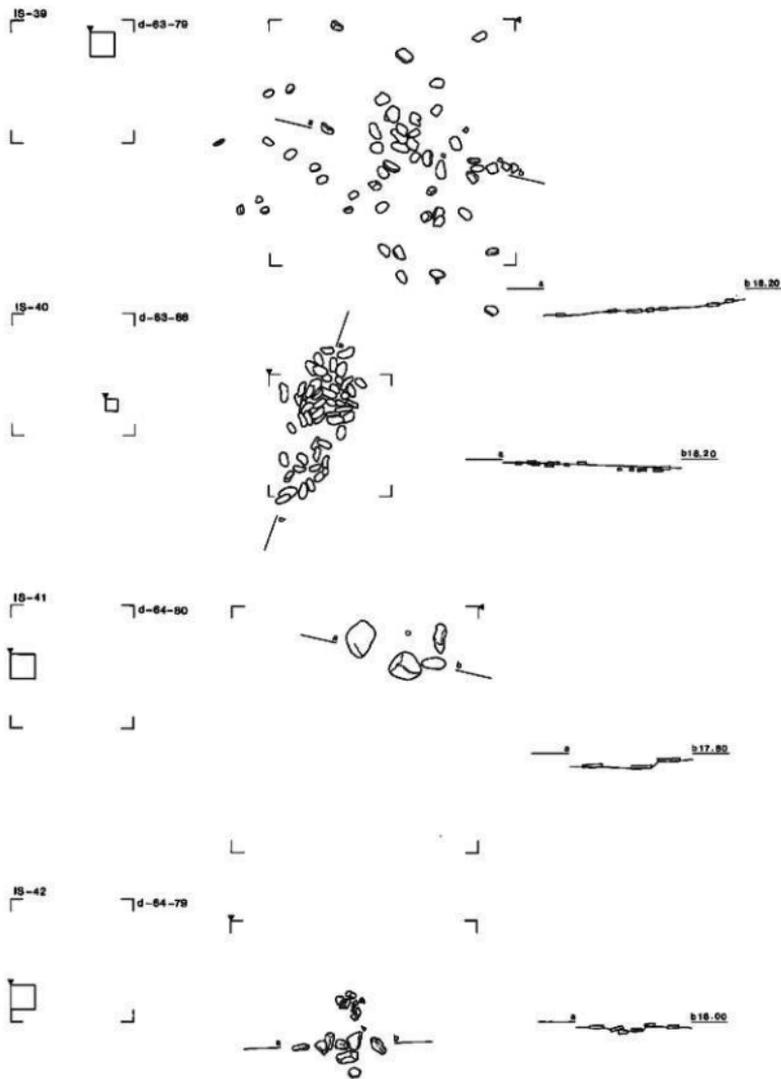
図III-19 集石(7)



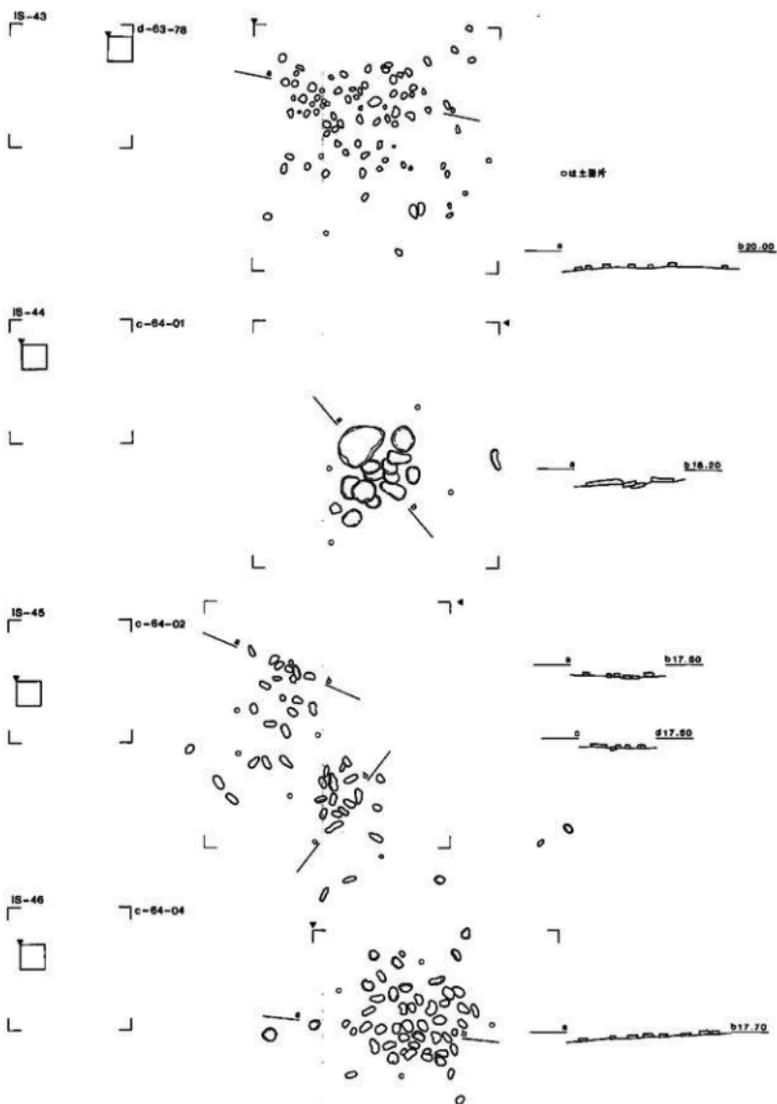
図III-20 集石(8)



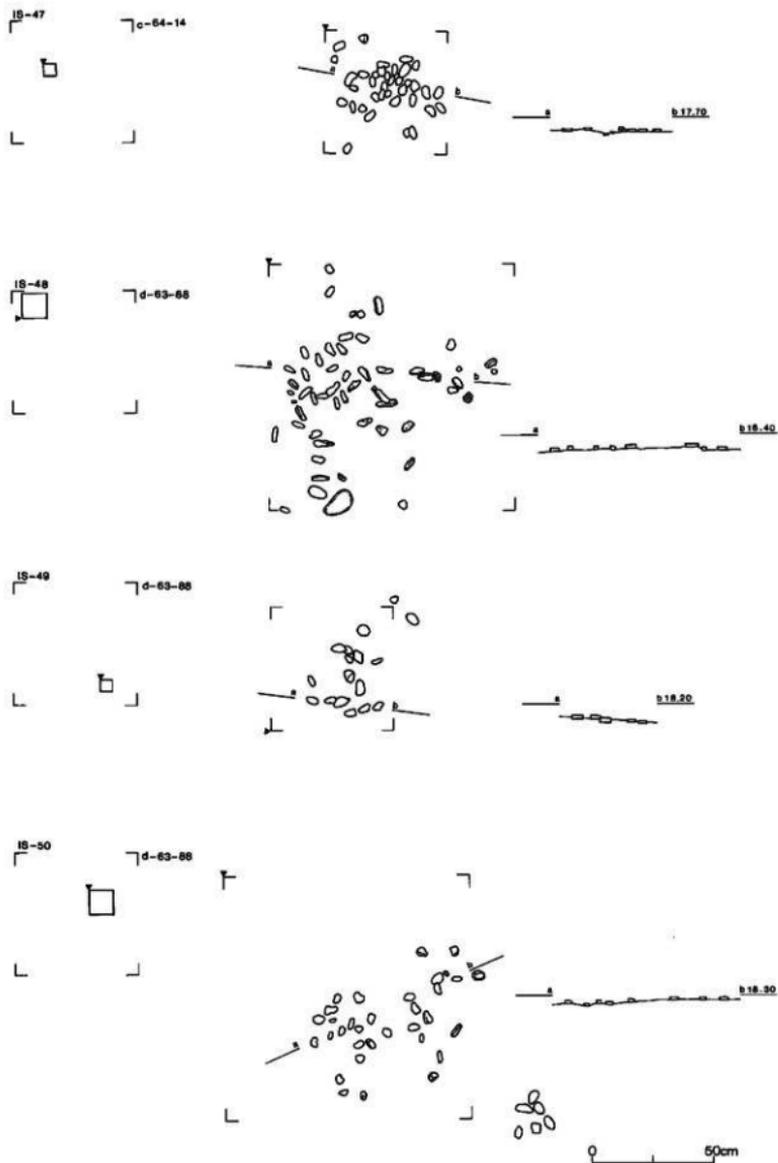
図III-21 集石(9)



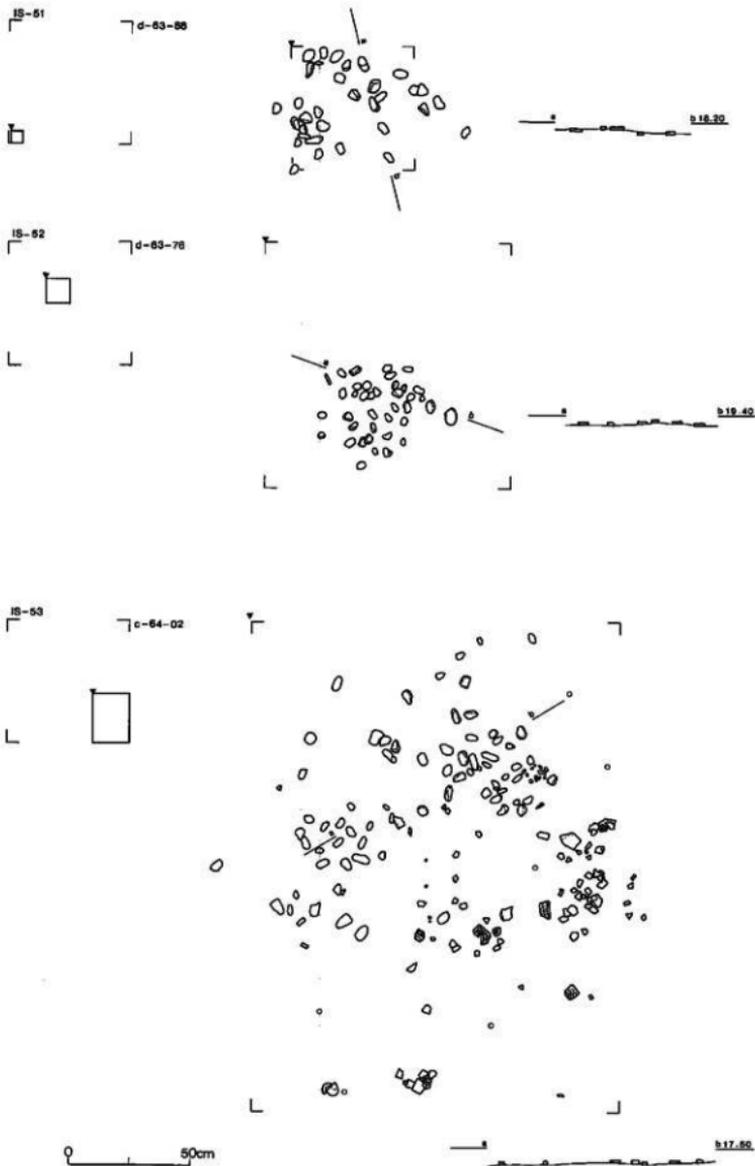
図III-22 集石(10)



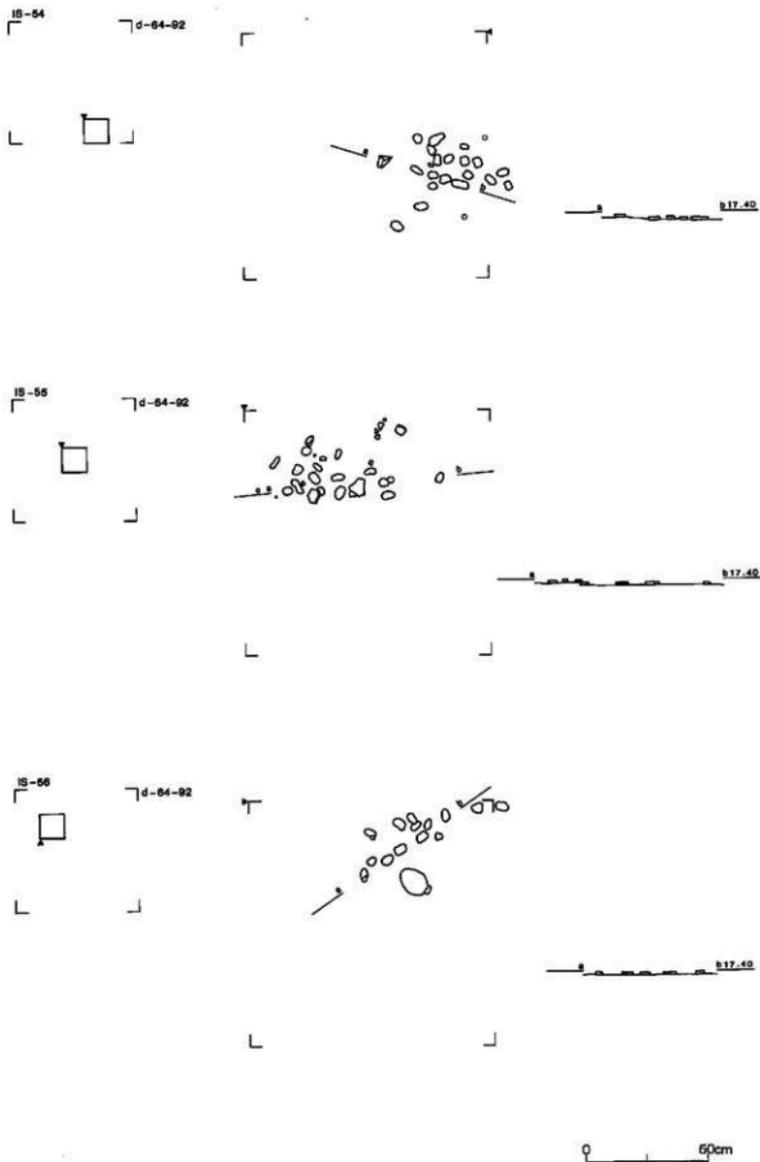
図III-23 集石(1)



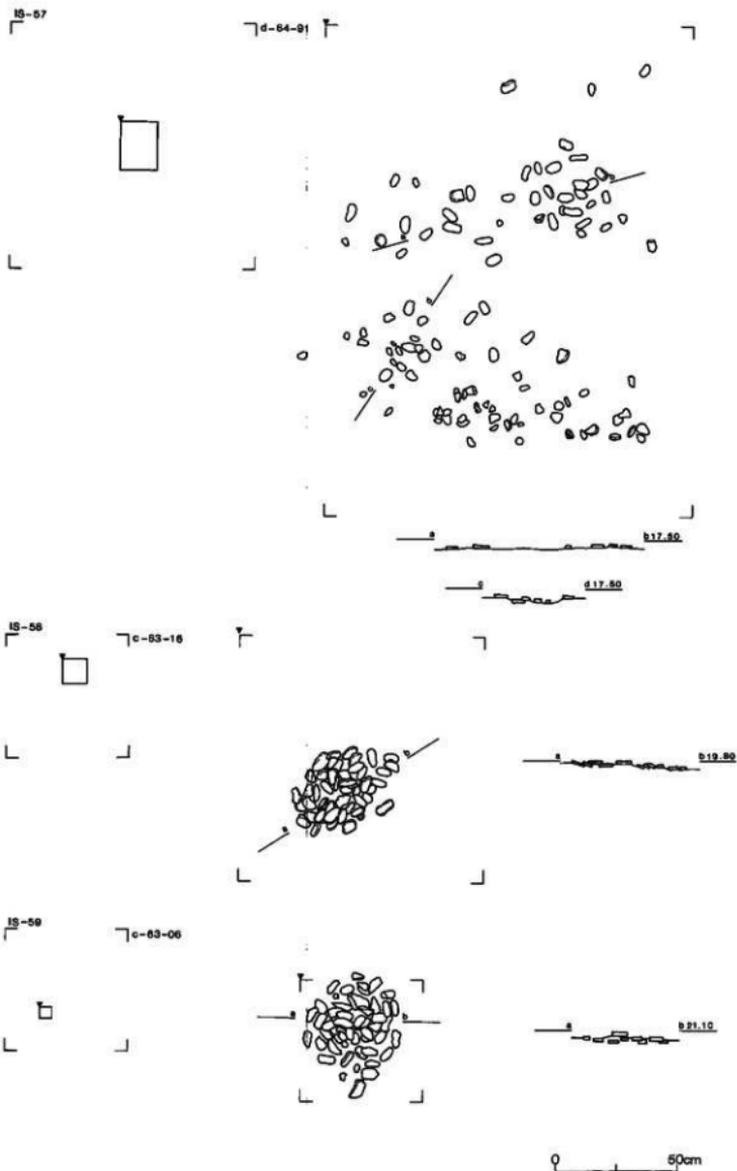
図III-24 集石跡



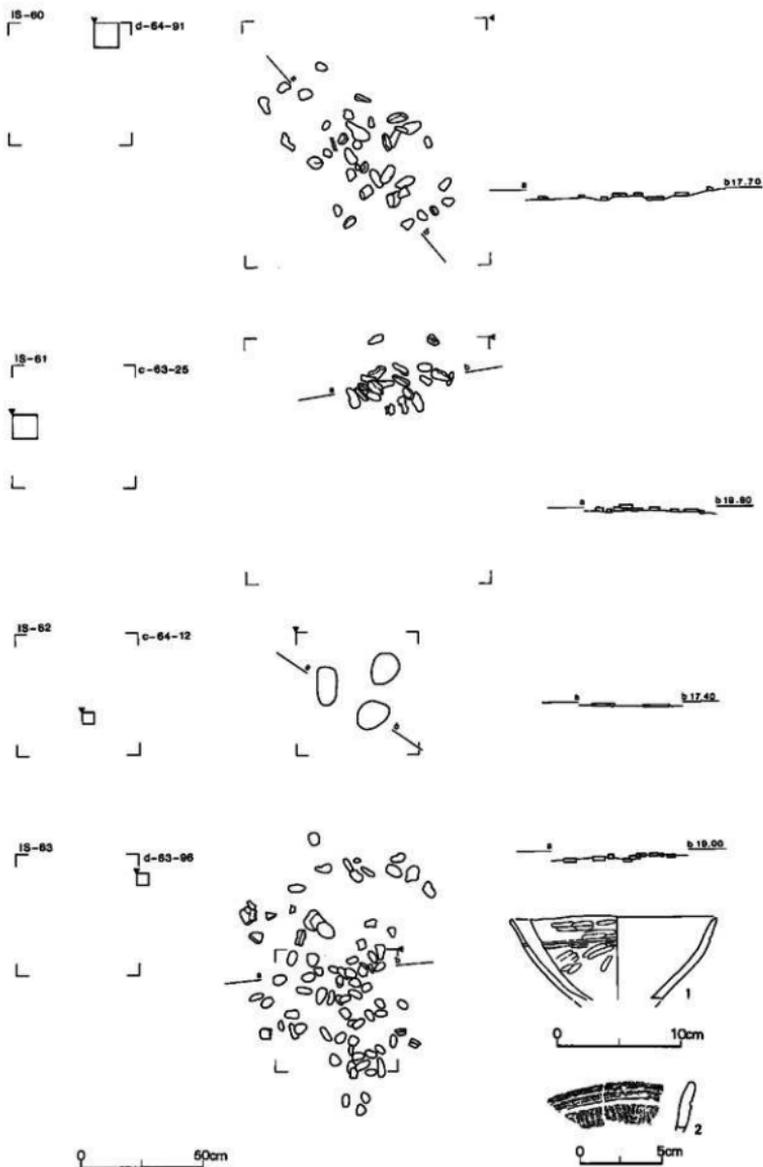
図III-25 集石03



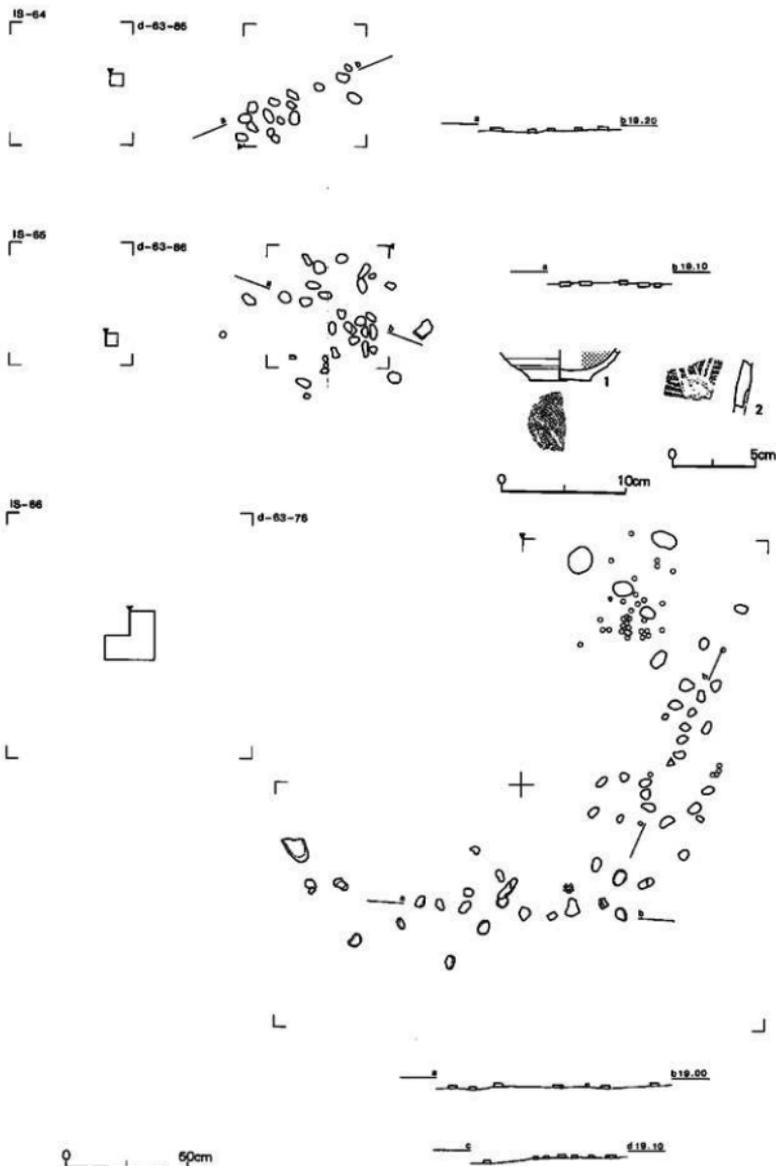
図III-26 集石(4)



図III-27 集石(5)



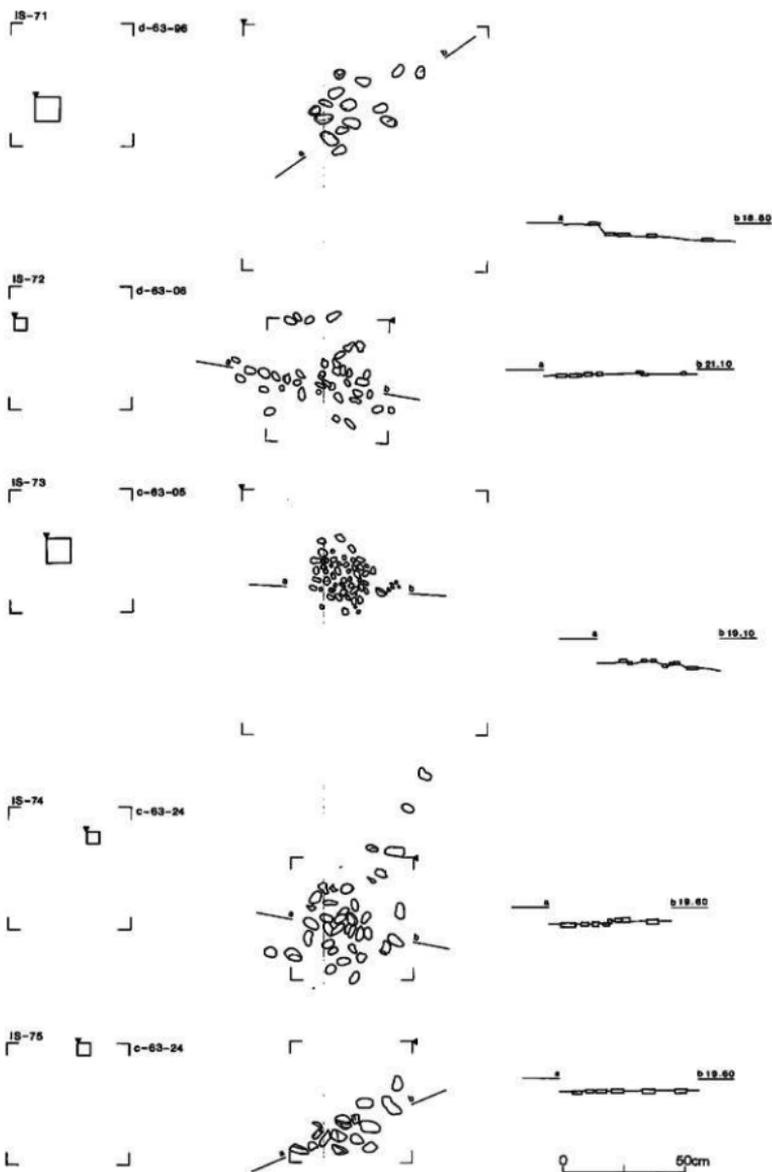
図III-28 集石④



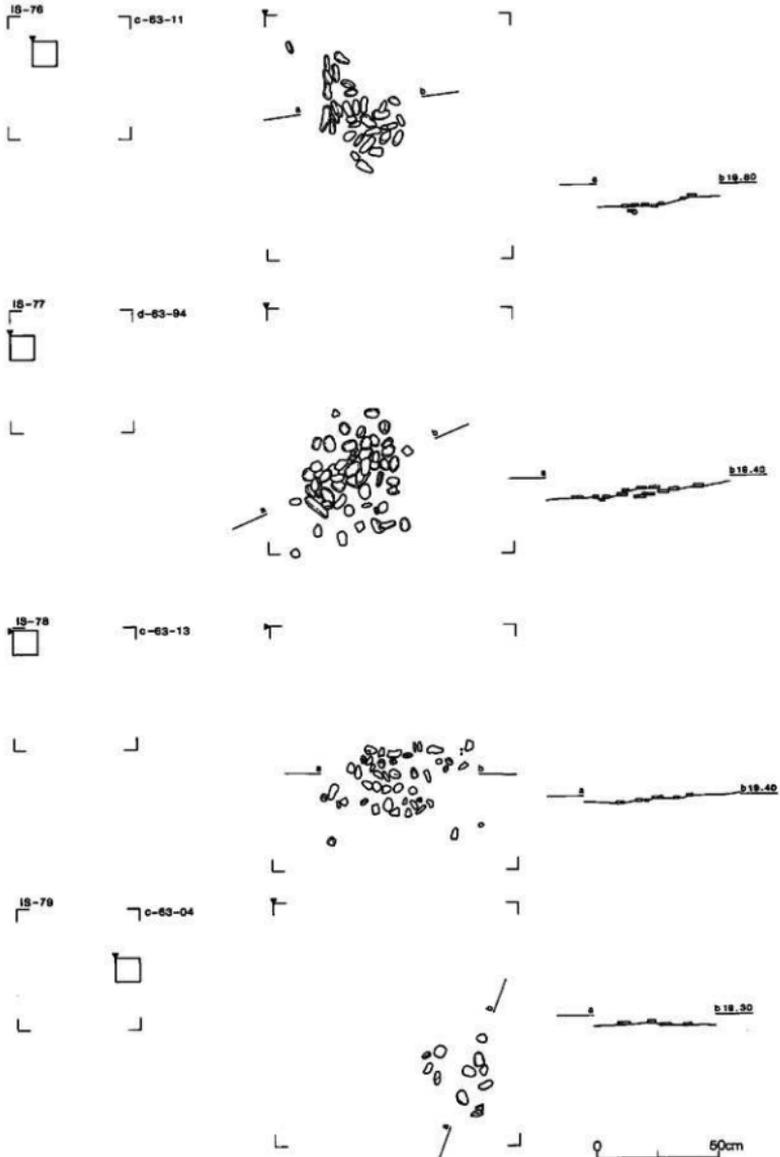
図III-29 集石(1)



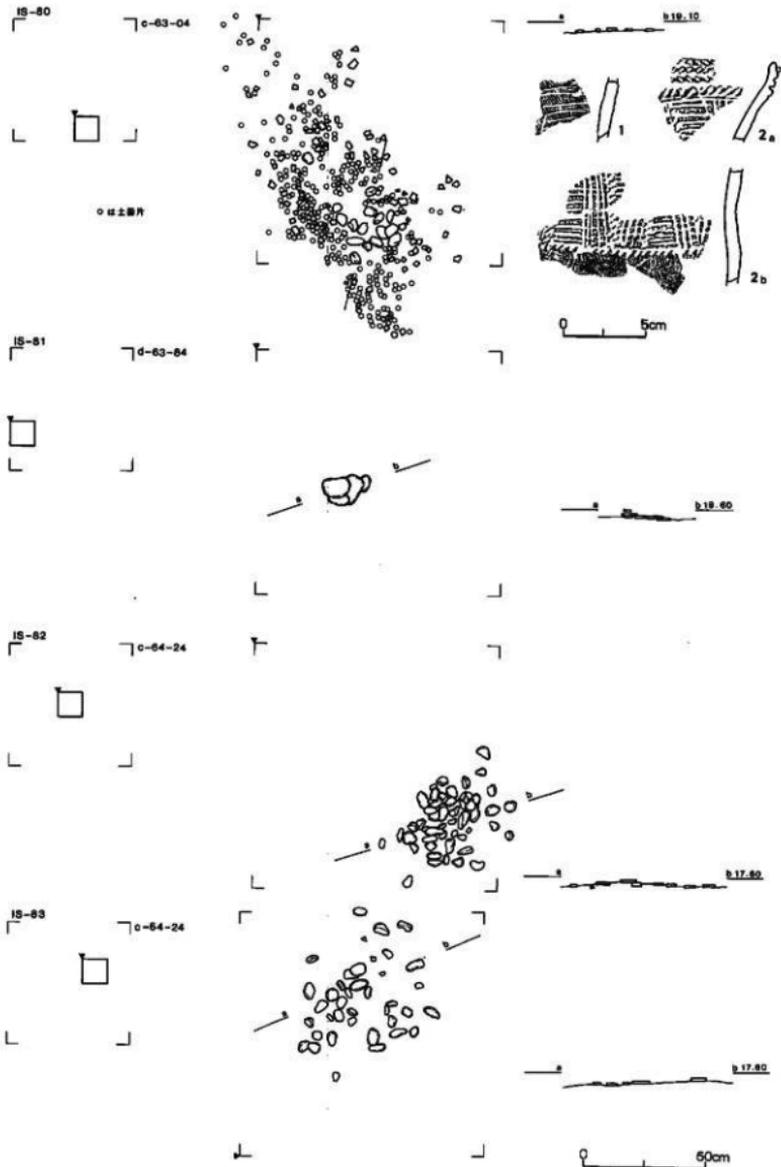
図III-30 集石場



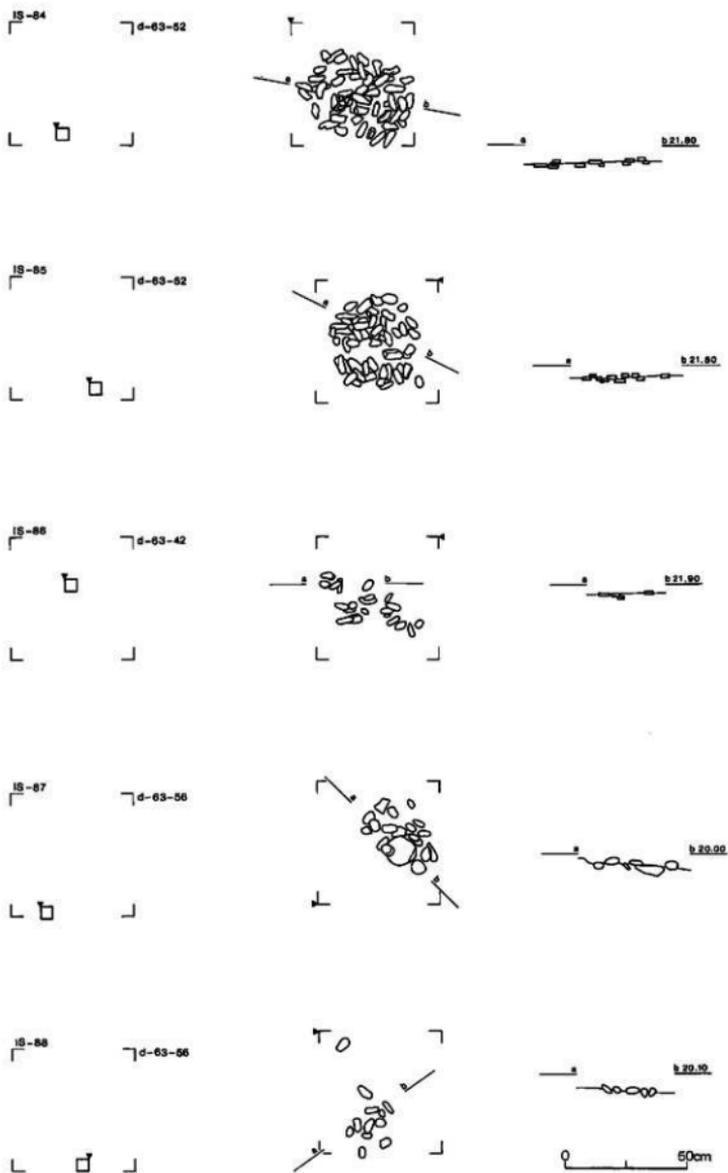
図III-31 集石(9)



図III-32 集石例

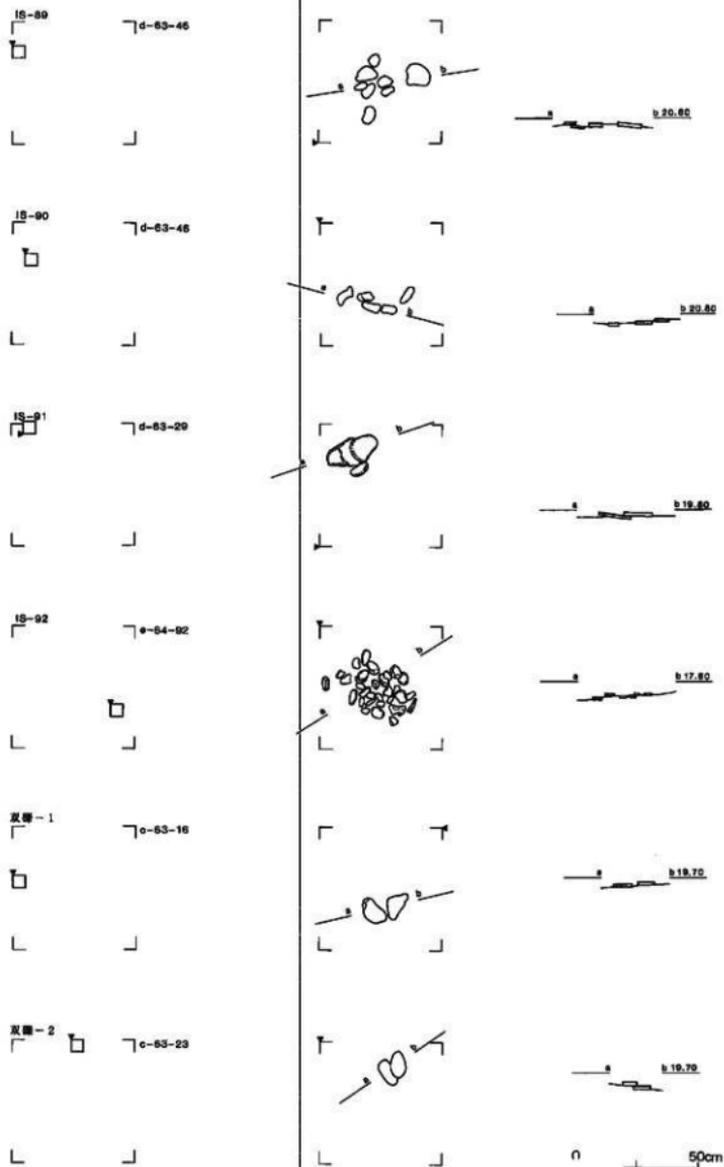


図III-33 集石(2)

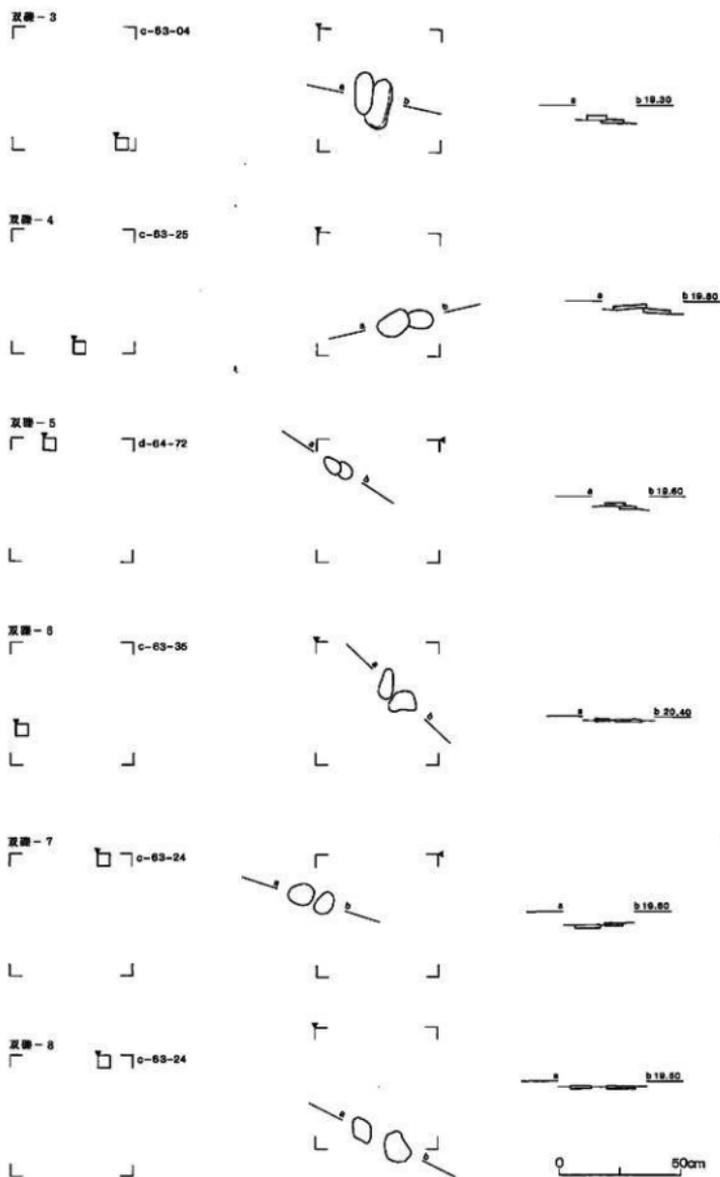


圖III-34 集石(2)

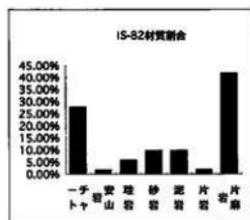
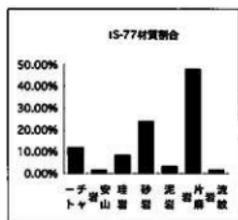
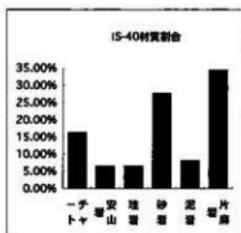
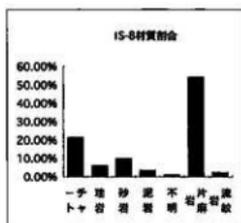
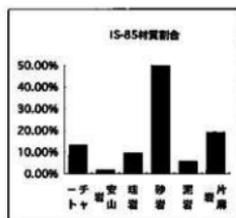
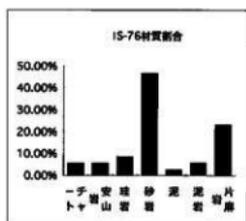
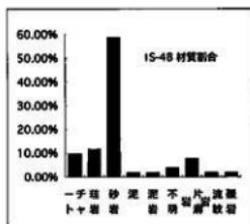
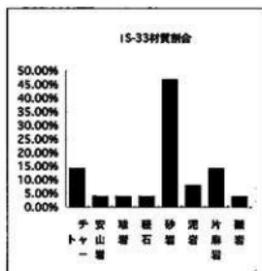
III 美々8遺跡の調査



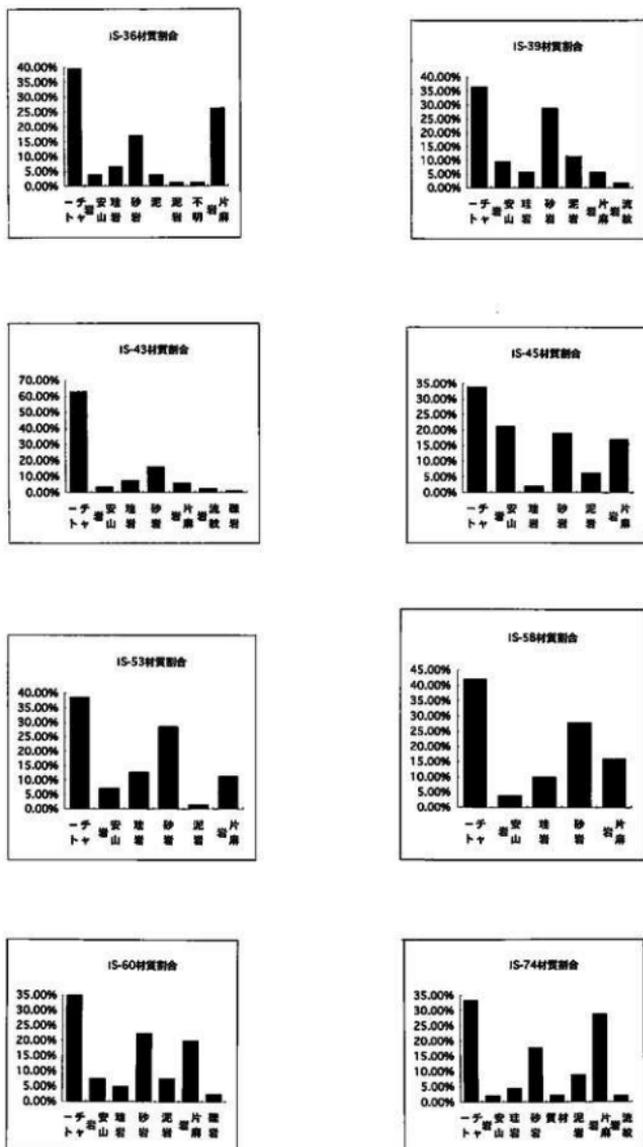
図III-35 集石(2)



図III-36 集石04



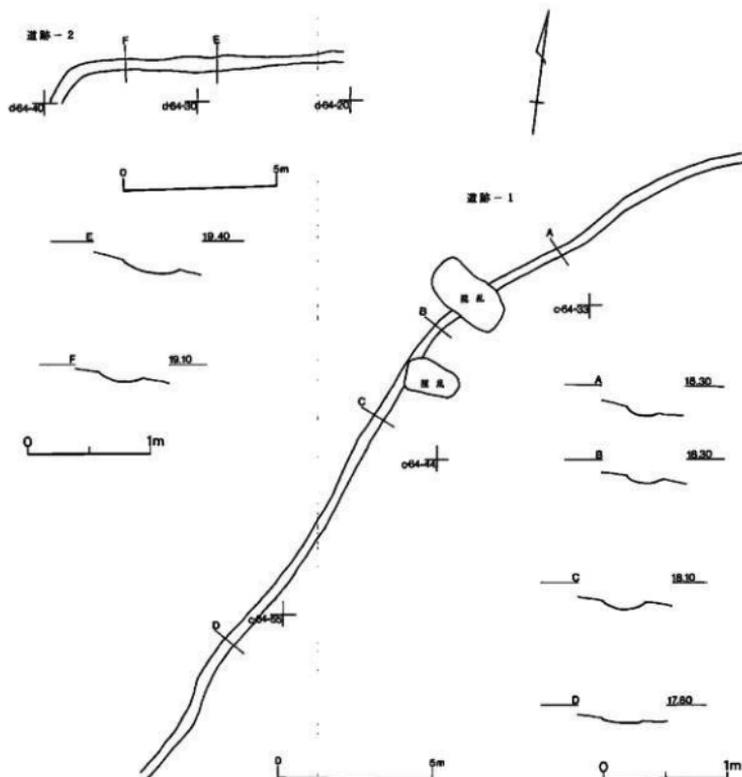
図III-37 集石の礫グラフ(1)



図III-38 集石の礫グラフ(2)

(6) 道跡 (図III-39)

今回検出された道跡は2条である。道跡-1はc-64区の緩い傾斜面場で確認された。18mの等高線に沿って南北方向へのびている。道跡-2はd-63区の64ライン付近で確認された。等高線を横切るように東西方向へのびている。幅は30~45cm、深さは5~10cmである。道跡-1と2は間の40mほどが確認されなかったが、のびている方向からみて、同じ道跡の可能性がある。道跡-1の南方向は低湿部へ向かっており、平成元年度に検出された道跡A~Cの3条のうちどれかに続くものと思われる。道跡-2の東側は調査されておらず不明であるが、位置とのびている方向からみて、昭和162年度に検出された道跡のうち、北側のものに続く可能性がある。このようにみていくと、美沢川へ出る道跡は、昭和57・62年度に検出された台地の平坦部を過っているものと、さらに北側の斜面部を過っているものの、2つのルートがあったものと考えられる。(佐藤 和雄)



図III-39 道跡-1・2

5 I 黒層時代の遺物

(1) 土器 (図Ⅲ-40~46)

土器は30,248点出土した。全て擦文時代のものである。図Ⅲ-40~46・表Ⅲ-5~15に個々の土器を示してある。分布・接合状態については図Ⅲ-47~55に示してある。時期区分は「6 まとめ 擦文時代の土器について」による。これは平成元年度報告『美沢川流域の遺跡群Ⅵ』「5 まとめ」に新資料を追加し、若干変更を加えたものである。

坏のうち内黒のものはスクリントーンを張り、他のものと区別してある。須恵器の断面は黒く塗りつぶしてある。今年度は擦文時代後半の資料、昭和56年度報告の第2グループ・第3グループの土器が充実している。(佐藤 和雄)

表Ⅲ-5 土器観察表(1)

No	発掘区	名称	法量 cm	器形の特徴	技法の特徴	文様	備考
1	d-63-35-45 -46-55-56	甕	口径 18.9 くびれ径 16.0 高さ 21.1 底径 7.2	口縁部 外反 肩・底部 張り出す	外面 口縁部 ナデ 体部 ハケメ 内面 ヘラミガキ	斜交叉沈線	内外面炭化物付着 器表面刺蝋 時期：Ⅴ-I
2	c-63-19	甕	口径 14.0 くびれ径 11.0 高さ 15.5 底径 5.6	口縁部 外傾 肩・底部 張り出す	外面 口縁部 ナデ 体部 ハケメ 内面 ヘラミガキ	口縁部 浅い沈線	内黒 内外面炭化物付着 器表面刺蝋 時期：Ⅴ-II
3	c-63-09-33 -78-79-89 d-64-42-80	甕	口径 (9.8) くびれ径 (15.1) 高さ 15.05	口縁部 外傾 頸部 くびれる 肩部 段	外面 口縁部 ナデ 体部 ハケメ 内面 ハケメ後 ヘラミガキ		内外面炭化物付着 時期：Ⅴ-III
4	d-64-81-82	甕	口径 19.7 くびれ径 15.0 高さ 16.0	口縁部 外反 口端部 凹む	外面 口縁部 ナデ 体部 ハケメ後 ヘラミガキ 内面 ハケメ後 ヘラミガキ	肩部 2~3条の沈線	補修孔1対 時期：Ⅴ-III
5	d-64-81	鉢	口径 11.4 くびれ径 11.0 高さ 11.0	口縁部 内傾 頸部 ややくびれる 肩部 段	内外面 口縁部 ナデ 体部 ハケメ		内外面炭化物付着 器表面刺蝋 時期：Ⅴ-III
6	c-63-12	甕	口径 17.1 くびれ径 12.9 高さ 17.2 底径 7.6	口縁部 外反 口縁部~肩部 段 体部中位 膨らむ	外面 口縁部 ナデ 体部 ハケメ 部分的に ヘラミガキ 内面 口縁部 ナデ 体部 ヘラミガキ		内面炭化物付着 時期：Ⅴ-III

表III-6 土器観察表(2)

No	発掘区	名称	法量 cm	器形の特徴	技法の特徴	文様	備考
7	d-63-78	甕	口径 14.3 くびれ径 10.2 高さ 14.9 底径 5.5	口縁部 外反 底部 やや張り出す	外面 口縁部 ナデ 体部 ハケメ 内面 ヘラミガキ 体部中位 ハケメ		内面炭化物付着 時期: VI-II
8	d-64-13-14	甕	口径 19.1 くびれ径 13.6 高さ 19.3 底径 7.0	口縁部 外反 口端部 直立	外面 口縁部 ナデ 体部上位 ハケメ 体部～底部 ヘラミガキ 内面 口縁部 ナデ 体部 ハケメ	口縁部～肩部 横走沈線	内面炭化物付着 器表面剝離 時期: VI-IV
9	e-63-10	甕	口径 23.3 くびれ径 16.6 高さ (20.5)	口縁部 外反 口端部 凹む	内外面 口縁部 ナデ 体部 ハケメ	口縁部～肩部 横走沈線	内面炭化物付着 器表面剝離 時期: VI-IV
10	d-63-89	鉢	口径 12.9 くびれ径 10.1 高さ 10.7 底径 6.4	口縁部 外傾 体部 やや膨らむ 底部 やや張り出す	内外面 口縁部 ナデ 体部 ハケメ 一部ヘラミガキ	頸部～肩部 横走沈線	内黒 器表面剝離 時期: VI-V・VI
11	d-64-80-81	甕	口径 14.9 くびれ径 10.4 高さ 16.2 底径 (4.9)	口縁部 外反 口端部 直立	外面 口縁部 ナデ 体部 ハケメ 内面 口縁部 ナデ 体部 ヘラミガキ	短刻文 多条の横走沈線	器表面剝離 時期: VI-V・VI
12	d-64-80	鉢	口径 10.6 くびれ径 9.7 高さ 9.2 底径 6.3	口縁部 外反 肩・底部 張り出す	内外面 口縁部 ナデ 体部 ヘラミガキ		時期: VI-V・VI
13	d-63-96	甕	口径 15.6 くびれ径 11.8 高さ 17.2 底径 6.4	口縁部 外反 体部中位 膨らむ	外面 口縁部 ナデ 体部 カキメ 内面 口縁部 ナデ 体部 ヘラミガキ	短刻文 横走沈線 縦位沈線	内黒 内外面炭化物付着 時期: VI-VI
14	d-63-66-68	甕	口径 19.0 くびれ径 14.9 高さ 22.9 底径 7.5	口縁部 外傾 体部中位 膨らむ 底部 張り出す	外面 口縁部 ナデ 体部 ハケメ 内面 ヘラミガキ	短刻文 横走沈線 斜位沈線	内黒 内面炭化物付着 補修孔1対 時期: VI-VI

表III-7 土器観察表(3)

No	発掘区	名称	法量 cm	器形の特徴	技法の特徴	文様	備考
15	c-64-03	甕	口径 20.6 くびれ径 16.2 高さ 21.2 底径 (6.8)	口縁部 外反 体部中位 張り出す	外面 口縁部 ナデ 体部 ハケメ後 ヘラミガキ 内面 ハケメ後 ヘラミガキ	短刻文 横走沈線 斜位沈線	内外面炭化物付着 器表面剝離 時期: VI-VII
16	d-63-45	甕	口径 23.0 くびれ径 17.3 高さ 25.2 底径	口縁部 外傾 口端部 やや内傾 体部 やや膨らむ	外面 口縁部 ナデ 体部 ハケメ後 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	短刻文 横走沈線	内外面炭化物付着 器表面剝離 時期: VI-VII
17	c-63-06	甕	口径 23.8 くびれ径 17.7 高さ 27.7 底径	口唇断面 丸い 体部中位 膨らむ	外面 口縁部 ナデ 体部 ハケメ 内面 ヘラミガキ	短刻文 横走沈線 縦位沈線	内黒 内外面炭化物付着 器表面剝離 時期: VI-VII
18	d-63-94	甕	口径 (24.1) くびれ径 (18.4) 高さ 27.5 底径 7.6	口唇断面 丸い 口縁部 外傾 体部 下位から 張り出す 底部 張り出す	外面 口縁部 ナデ 体部 カキメ後 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	横走沈線 龜歯状文	時期: VI-VII
19	d-64-41-42 -51	甕	口径 10.0 くびれ径 9.5 高さ 11.2 底径 5.8	口縁部 外傾 体部中位 膨らむ	内外面 口縁部 ナデ 体部 ヘラミガキ		底面砂粒付着 時期: VI-VII
20	d-63-98	甕	高さ (5.2) 底径 5.1	上げ感気味	内外面 ヘラミガキ		内黒 底面砂粒付着 時期: VI-VII
21	d-64-71	甕	口径 13.4 くびれ径 11.8 高さ 11.5 底径 7.8	口縁部 外傾 体部中位 膨らむ	回転ヨコナデ		時期: VI-VII
22	d-64-70	鉢	口径 11.5 高さ 9.3 底径 6.5	口縁部 内傾 底部 張り出す	内外面 ヘラミガキ		時期: VI-VII
23	d-64-42	鉢	口径 14.5 高さ 8.4 底径 6.0	口縁部~体部中位 外傾 体部下位 膨らむ	内外面 ヘラミガキ		時期: VI-VII

表III-8 土器観察表(4)

No.	発掘区	名称	法量 cm	器形の特徴	技法の特徴	文様	備考
24	d-64-20-43	甕	口径 15.1 くびれ径 11.4 高さ 17.4 底径 6.4	口縁部 外傾 口端部 直立 肩部・底部 張り出す	内外面 口縁部 ナデ 体部 ヘラミガキ	短刻文 横走沈線 縦位・斜位沈線	内黒 内面炭化物付着 器表面剝離 補修孔1対 時期:Ⅴ-Ⅵa
25	d-64-52-53	甕	口径 27.0 くびれ径 20.5 高さ 26.2	口縁部 外反 体部 張り出す	内外面 口縁部 ナデ 体部 ヘラミガキ	短刻文 横走沈線 縦位・斜位沈線	内外面炭化物付着 時期:Ⅴ-Ⅵa
26	d-64-81	甕	口径 16.3 くびれ径 12.3 高さ 14.9 底径 6.8	口縁部 外反 体部 やや膨らむ 底部 やや張り出す	内外面 口縁部 ナデ 体部 ヘラミガキ	短刻文 横走沈線 斜位沈線	内黒 内外面炭化物付着 時期:Ⅴ-Ⅵa
27	c-63-01-02	甕	口径 32.0 くびれ径 23.0 高さ 24.5	口縁部 外反 口端部 内傾	内外面 ヘラミガキ	短刻文 横走沈線 斜位沈線	内黒 器表面剝離 時期:Ⅴ-Ⅵa
28	e-63-23-30 33	甕	口径 29.6 くびれ径 21.4 高さ 36.5 底径 8.4	口縁部 外反 肩部 張り出す	外面 口縁部 ナデ 体部 ハケメ 内面 ヘラミガキ	短刻文 鋸歯状文 横走沈線 縦位・斜位沈線 斜交叉沈線	内外面炭化物付着 器表面剝離 時期:Ⅴ-Ⅵa
29	c-63-21-22 41	甕	口径 21.9 くびれ径 18.1 高さ 28.9 底径 7.8	口端部 直立 口縁部 外傾 底部 やや張り出す	外面 口縁部 ナデ 体部 ハケメ 内面 ヘラミガキ	短刻文 横走沈線 斜交叉沈線	内外面炭化物付着 時期:Ⅴ-Ⅵa
30	c-64-14-24	甕	口径 25.3 くびれ径 18.8 高さ (21.5)	口縁部 外反 体部 膨らむ	外面 口縁部 ナデ 体部 ハケメ 内面 ヘラミガキ	短刻文 横走沈線 縦位沈線 斜位沈線	内外面炭化物付着 器表面剝離 時期:Ⅴ-Ⅵa
31	c-63-11-30 31-51	甕	口径 23.6 くびれ径 17.7 高さ (21.0)	口端部 直立 口縁部 外傾 体部 膨らむ	外面 口縁部 ナデ 体部 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	短刻文 横走沈線 斜位沈線 鋸歯状文	内黒 外面炭化物付着 時期:Ⅴ-Ⅵa

表III-9 土器観察表(5)

No	発掘区	名称	法量 cm	器形の特徴	技法の特徴	文様	備考
32	c-63-31-32	甕	口径 16.3 くびれ径 13.1 高さ 16.6 底径 6.2	口縁部 直立 頸部 外傾 肩部 張り出す	内外面 ヘラミガキ	短刻文 横走沈線 斜交叉沈線	内黒 内外面炭化物付着 器表面剝離 補修孔1封 時期: VI-Ⅷa
33	d-63-19-10	甕	口径 (26.3) くびれ径 (20.4) 高さ 31.0 底径 7.6	口縁部 外傾 底部 やや張り出す	外面 口縁部 ナテ 体部 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	短刻文 横走沈線 斜位沈線 貼付帯上短刻文	内外面炭化物付着 器表面剝離 時期: VI-Ⅷb
34	d-63-19	甕	口径 16.5 くびれ径 12.7 高さ 17.4 底径 7.7	口縁部 外反 肩部・底部 張り出す	外面 口縁部 ナテ 体部 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	短刻文 斜交叉沈線	内黒 内外面炭化物付着 器表面剝離 時期: VI-Ⅷb
35	d-63-79	甕	口径 18.5 くびれ径 14.4 高さ 22.3 底径 (6.0)	口縁部 外反 口端部 直立	外面 口縁部 ナテ 体部 ハケメ 内面 ヘラミガキ	短刻文 横走沈線 貼付帯上短刻文	内黒 内外面炭化物付着 補修孔1封 時期: VI-Ⅷb
36	d-64-81-91 -92	甕	口径 27.7 くびれ径 20.9 高さ 32.1 底径 7.4	口縁部 外反 口端部 直立 底部 やや張り出す	外面 口縁部 ナテ 体部 ハケメ 内面 口縁部 ナテ 体部 ヘラミガキ	短刻文 横走沈線 貼付帯上短刻文	内外面炭化物付着 器表面剝離 時期: VI-Ⅷb
37	c-63-06・ d-63-88・ d-64-50-60 ・70-81・ 88-91	甕	口径 19.3 くびれ径 14.8 高さ 25.5 底径 6.7	口縁部 外反 内尊気味に 立ち上がる 体部中位 膨らむ 底部 張り出す	外面 口縁部 ナテ 体部 ハケメ 内面 ヘラミガキ	短刻文 山形文 縦位沈線	内外面炭化物付着 器表面剝離 時期: VI-Ⅷb
38	d-63-96-97	甕	口径 17.7 くびれ径 13.3 高さ (12.9)	口縁部 外反 体部 やや膨らむ	内外面 口縁部 ナテ 体部 ヘラミガキ	短刻文 横位・斜位沈線 巔曲文 貼付帯上整型文	内黒 内外面炭化物付着 補修孔1封 時期: VI-Ⅷb
39	c-64-02・ d-64-92	甕	口径 20.8 くびれ径 16.9 高さ (21.8)	口縁部 外傾 体部 膨らむ	外面 口縁部 ナテ 体部 ハケメ 内面 ヘラミガキ	貼瘤 横走沈線 短刻文 幾何文 貼付帯上刻目	内黒 内外面炭化物付着 時期: VI-Ⅷc

表III-10 土器観察表(6)

No	発掘区	名称	法量 cm	器形の特徴	技法の特徴	文様	備考
40	d-64-81	甕	口径 17.1 くびれ径 15.5 高さ 16.9 底径 7.7	口縁部 やや外傾 体部 わずかに膨らむ 底部 やや張り出す	外面 口縁部 ナブ 体部 ハケメ後 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	横走沈線 短刻文	内黒 内外面刺線 炭化物付着 底面木葉痕 時期：Ⅱ-Ⅰ
41	c-63-05- d-63-83-94	甕	口径 (27.3) くびれ径 (20.0) 高さ (35.8)	口縁部 外反 口端部 直立 肩部 張り出す	外面 口縁部 ナブ 体部 ハケメ 内面 ヘラミガキ	横走沈線 短刻文 山形文 矢羽根状文 貼付帯上型押文	内外面刺線 炭化物付着 補修孔2対 時期：Ⅱ-Ⅰ
42	d-64-62	甕	口径 11.3 くびれ径 10.2 高さ 5.6	口縁部 外傾	外面 口縁部 ナブ 体部 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	短刻文 横走沈線 山形文 縦位沈線 貼付帯上型押文	内黒 時期：Ⅱ-Ⅰ
43	c-64-12	鉢	口径 9.6 高さ 6.1 底径 5.2	口縁部 直立 体部上位 膨らむ 底部 張り出す	内外面 ヘラミガキ		内黒 時期：Ⅱ-Ⅰ
44	c-63-13	坏	口径 13.7 高さ 4.6 底径 8.0	体部 中位段 底部 丸底気味	内外面 ヘラミガキ		内黒 時期：Ⅱ-Ⅱ
45	d-64-34	坏	口径 (16.6) 高さ 6.8 底径 (9.0)	体部 下位段 底部 平底風	内外面 ヘラミガキ		内黒 時期：Ⅱ-Ⅲ
46	d-64-40-41 ・80-81	鉢	口径 14.6 高さ 9.0 底径 7.1	口縁部 内彎 高台付	内外面 ヘラミガキ	口縁部 沈線	内黒 時期：Ⅱ-Ⅲ
47	d-64-81	坏	口径 13.2 高さ 5.5 底径 5.5	口縁部 外傾 底部 平底	内外面 ヘラミガキ		底面編物圧痕 時期：Ⅱ-Ⅲ
48	c-63-31	坏	口径 14.0 高さ 6.9 底径 5.5	口端部尖り気味	外面 カキメ後 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ		時期：Ⅱ-Ⅳ
49	d-63-74	坏	口径 15.6 高さ (5.2)	口縁部 外傾	内外面 ヘラミガキ	体部 上位沈線	時期：Ⅱ-Ⅲ

表III-11 土器観察表(7)

No.	発掘区	名称	法量 cm	器形の特徴	技法の特徴	文様	備考
50	d-63-95	鉢	口径 15.3 高さ 8.3 底径 6.6	口縁部 外傾 高台付	外面 カキメ後 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ		時期：Ⅴ-Ⅵ
51	d-63-69 d-63-86	鉢	口径 16.5 高さ 9.0 底径 6.5	体部 内彎気味 高台付	外面 口縁部～ 体部中位 ヘラミガキ 体部下位 カキメ後 ヘラミガキ	口縁部 沈線 体部 沈線 短刻文 高台2条の沈線 2本単位の 切り込み	内黒 時期：Ⅴ-Ⅵ
52	d-64-80-91	鉢	口径 14.9 高さ 8.2 底径 6.6	立ち上がり 内彎気味	外面 カキメ後 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	口縁部 太い横走沈線 体部 横走沈線 +矢羽根状文	時期：Ⅴ-Ⅵa
53	e-63-23	鉢	口径 13.7 高さ 8.5 底径 5.7	口縁部 内彎 高台付	内外面 ヘラミガキ	口縁部 横走沈線	内黒 時期：Ⅴ-Ⅵa
54	e-63-13	鉢	口径 17.0 高さ 9.2 底径 8.0	口縁部 内彎 口端部 垂直 高台付	外面 口縁部～ 体部中位 ヘラミガキ 体部下位 高台カキメ後 ヘラミガキ		時期：Ⅴ-Ⅵa
55	d-63-87	鉢	口径 15.4 高さ 9.0 底径 7.1	体部～口縁部 内彎 口端部 垂直 高台付	外面 口縁部～ 体部中位・高台 ヘラミガキ 体部下位 カキメ後 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ		内黒 時期：Ⅴ-Ⅵa
56	d-64-91	坏	口径 16.7 高さ 8.4 底径 7.5	口縁部 外傾 内面 体部下位段 高台付	外面 ハケメ後 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	口縁部 2条の横走沈線	内黒 時期：Ⅴ-Ⅵa

表III-12 土器観察表(8)

No.	発掘区	名称	法量 cm	器形の特徴	技法の特徴	文様	備考
57	c-64-02-03 d-64-92-93	環	口径 18.4 高さ 7.2 底径 6.6	体部 内脚 高台付	内外面 ハケメ後 ヘラミガキ 体部上位 粘土紐接合 部分調整痕 高台接合部 沈線風の調整痕	口縁部・ 体部上位 横走沈線	内黒 時期：Ⅱ-ⅠⅩ
58	d-64-82-92	環	口径 14.0 高さ 6.7 底径 6.7	口縁部 直立 高台付	内外面 ハケメ後 ヘラミガキ 高台接合部 沈線風の調整痕	口縁部 2条の横走沈線 短刻文	内黒 補修孔2対 時期：Ⅱ-ⅠⅩ
59	d-64-92	環	口径 16.0 高さ (7.1) 底径 (5.7)	口縁部 やや内傾	内外面 ヘラミガキ	体部上位 横走沈線 短刻文	内黒 高台欠失? 時期：Ⅱ-ⅠⅩ
60	d-64-71-81	環	口径 16.5 高さ 8.4 底径 6.5	内面 体部下位 ゆるい段 高台付	内外面 ヘラミガキ	体部上位 2条の横走沈線 2列の短刻文	内黒 時期：Ⅱ-ⅠⅩ
61	d-64-92	環	口径 14.7 高さ (7.6) 底径 6.9	体部 内彎気味 高台付	外面 ハケメ後 ヘラミガキ	口縁部 沈線 短刻文	内黒 時期：Ⅱ-ⅠⅩ
62	d-63-64	高環	口径 15.7 高さ 7.5 底径 5.8	体部 外傾 口縁部 立ち上る 脚低い	内外面 ヘラミガキ	体部上位 2条の横走沈線 脚部部 3条の沈線	内黒 時期：Ⅱ-ⅠⅩ
63	d-64-50-61 71	高環	口径 18.6 高さ 8.6 底径 7.2	口縁部 段 外傾	内外面 ヘラミガキ 脚底面 ハケメ後 ヘラミガキ	体部 矢羽横状文 短刻文 縦位沈線	内黒 時期：Ⅱ-ⅠⅩ
64	d-63-64	高環	口径 16.5 底径 6.0	口縁部・体部 内脚	外面 口縁部 ヘラミガキ 体部 カキメ 内面 ヘラミガキ	体部・脚部 沈線 短刻文	内黒 時期：Ⅱ-ⅠⅩ
65	c-64-32	高環	高さ (3.5) 底径 6.4		ヘラミガキ	脚部部 6ヶ所切り込み	内黒 脚部のみ 時期：Ⅱ-ⅠⅩ

表III-13 土器観察表(9)

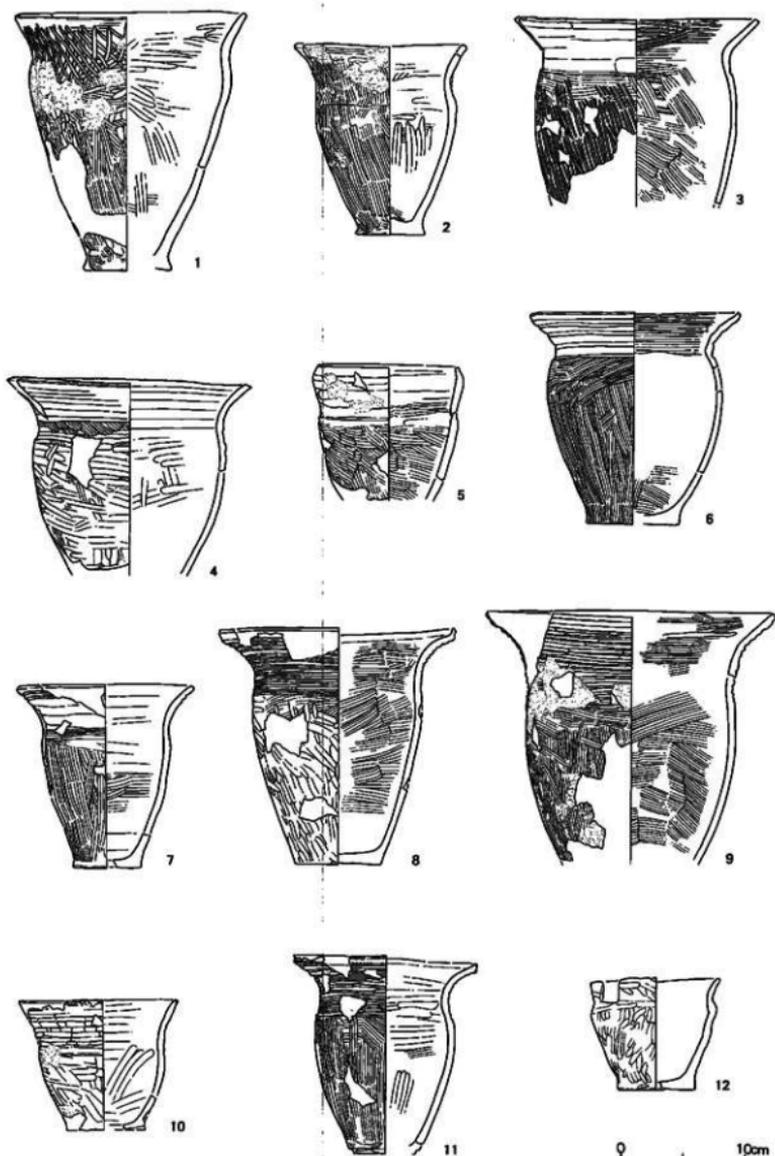
No	発掘区	名称	法量 cm	器形の特徴	技法の特徴	文様	備考
66	e-64-00-10	高環 ?		口縁部 段	内外面 ヘラミガキ	短刻文 斜位沈線 ヘラケズリ風の 縦位沈線	内黒 時期: VI-IX
67	d-64-22	高環 ?		口縁部 段	外面 口縁部 ナデ 体部 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	横走沈線 龍歯状文	内黒 時期: VI-IX
68	d-64-24	環	口径 15.2 高さ 4.6 底径 7.7	体部 内彎気味	内外面 回転ヨコナデ 回転ヘラ切り		時期: VI-V・VI
69	e-63-06	環	口径 11.6 高さ 3.8 底径 5.9	口縁部 外傾	回転ヨコナデ 口縁部 ナデ強い		時期: VI-V・VI
70	e-63-13	環	口径 (13.1) 高さ 4.2 底径 7.6	体部中位 やや内傾 底部 内面凹凸	回転ヨコナデ 回転ヘラ切り		内外面 一部剝離 時期: VI-V・VI
71	e-64-94	環	口径 12.9 高さ 5.0 底径 4.8	口縁部 外傾	回転ヨコナデ後 ミガキ		補修孔3対 時期: VI-V・VI
72	d-64-82-92	環	口径 (11.7) 高さ 5.5 底径 4.6	体部 内彎	回転ヨコナデ 回転糸切り		内黒 補修孔3対 時期: VI-V・VI
73	e-63-30	環	口径 (12.3) 高さ 5.5 底径 (4.9)	口縁部 外傾 体部 内彎	回転ヨコナデ 静止糸切り		内黒 時期: VI-V・VI
74	d-64-81	環	口径 13.2 高さ 4.5 底径 5.4		回転ヨコナデ 回転糸切り		内面剝離 時期: VI-V・VI
75	e-63-14	環	口径 16.2 高さ 7.2 底径 5.8	口縁部 外傾 体部 内彎	回転ヨコナデ 静止糸切り		補修孔5対 時期: VI-V・VI
76	d-64-50-51	環	口径 13.3 高さ 5.6 底径 5.6	口縁部 やや外傾	内外面 回転ヨコナデ 回転糸切り		時期: VI-V・VI

表III-14 土器観察表(Ⅱ)

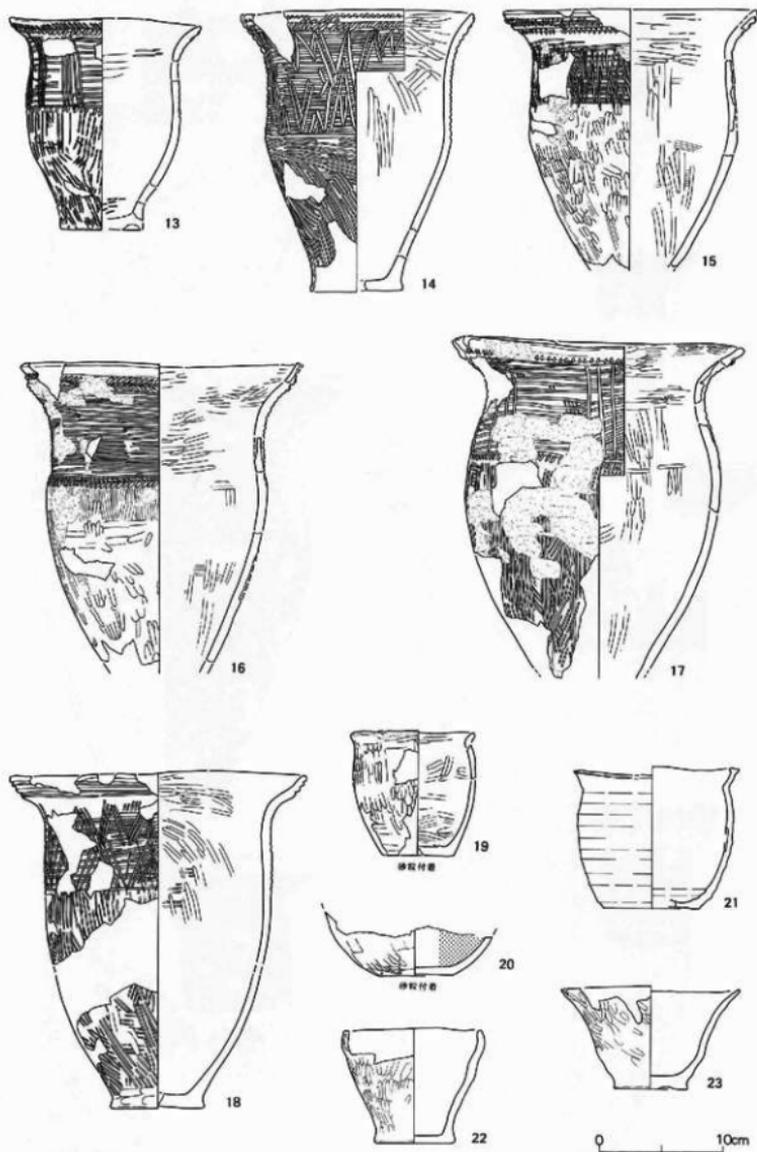
No.	発掘区	名称	法量 cm	器形の特徴	技法の特徴	文様	備考
77	d-64-91	環	口径 (12.0) 高さ 6.1 底径 (5.3)	体部 下位内彎	回転ヨコナデ		1/3残存 時期：Ⅴ-Ⅵ
78	c-63-07-17	環	口径 11.8 高さ 5.6 底径 (5.5)	口縁部 外傾 体部 内彎	回転ヨコナデ 回転糸切り		内黒 底部の一部剝離 時期：Ⅴ-Ⅵ
79	d-64-21・31 -81	環	口径 12.3 高さ 5.7 底径 5.2	口縁部 やや外傾	回転ヨコナデ 回転糸切り		時期：Ⅴ-Ⅵ
80	d-64-70	環	口径 12.5 高さ 5.7 底径 5.0	口縁部 外傾 体部 内彎	回転ヨコナデ 静止糸切り		時期：Ⅴ-Ⅵ
81	d-63-87 d-64-70	環	口径 12.9 高さ 5.5 底径 5.5	口縁部 外傾	回転ヨコナデ 回転糸切り		時期：Ⅴ-Ⅵ
82	d-64-92	環	口径 14.4 高さ 4.3 底径 6.1	皿形に近い 口縁部 外傾 体部 内彎 内面 やや凹凸	回転ヨコナデ 回転糸切り		時期：Ⅴ-Ⅵ
83	c-64-13・14	環	口径 12.1 高さ 6.5 底径 5.3	口縁部 外傾 体部 内彎 張付け高台	内外面 回転ヨコナデ 回転糸切り		内黒 時期：Ⅴ-Ⅵ
84	d-64-81-90	環 須恵器	口径 13.0 高さ (3.6)		回転ヨコナデ		内外面灰色 時期：Ⅴ
85	c-64-02	環 須恵器	口径 14.4 高さ (3.9)	口縁部 外傾	回転ヨコナデ		内外面灰色 時期：Ⅴ
86	d-64-81	環? 須恵器	口径 15.0 高さ 3.7	口縁部 外傾	回転ヨコナデ		内外面灰色 時期：Ⅴ
87	c-63-02-13	壺? 須恵器	高さ (15.2)	体部 膨らむ	回転ヨコナデ		低瀬部出土のもの と接合 内外面 灰色・灰緑色 時期：Ⅴ
88	d-63-96	壺? 須恵器	高さ (12.7) 底径 10.0	体部 膨らむ	回転ヨコナデ		外面暗灰色 内面灰褐色 時期：Ⅴ

表III-15 土器観察表(1)

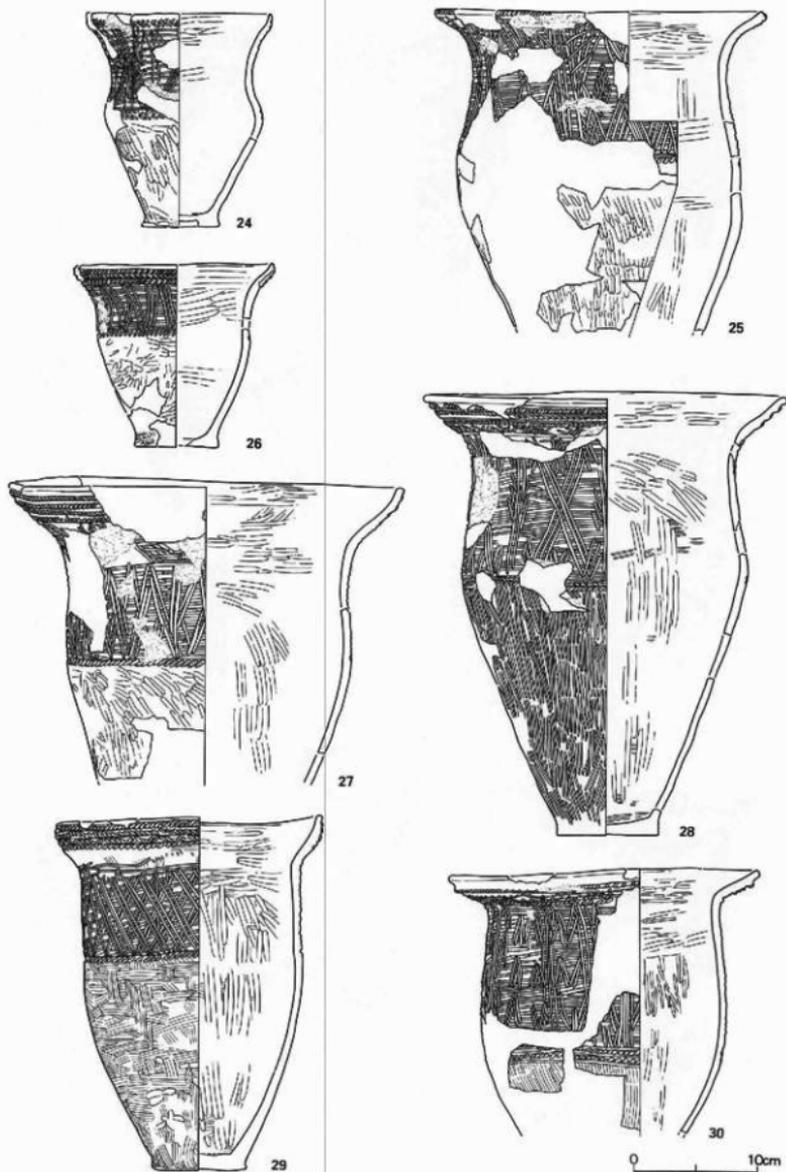
No	発掘区	名称	法量 cm	器形の特徴	技法の特徴	文様	備考
89	d-63-96	瓶? 須恵器					外面暗灰色 内面灰色 時期: VI
90	d-64-70	瓶? 須恵器			外面 回転ヨコナゲ後 叩き目・ ミガキ 内面 回転ヨコナゲ		外面灰色 内面灰茶褐色 時期: VI
91	e-63-04	壺? 須恵器			回転ヨコナゲ		内外面黒青色 時期: VI
92	e-63-08	壺? 須恵器			外面 叩き目		外面灰褐色 内面灰茶色 時期: VI
93	d-63-79	壺? 須恵器			外面 叩き目		外面灰緑色 内面灰色 時期: VI
94	e-64-02	壺? 須恵器			外面 叩き目 内面 当て具痕		外面 灰黒褐色 洗灰緑色 時期: VI



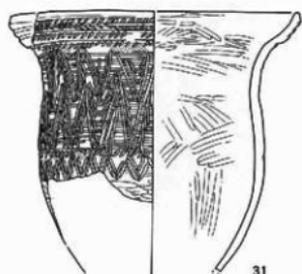
図III-40 土器(1)



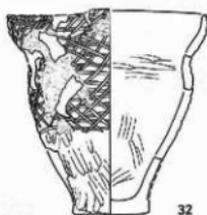
図III-41 土器(2)



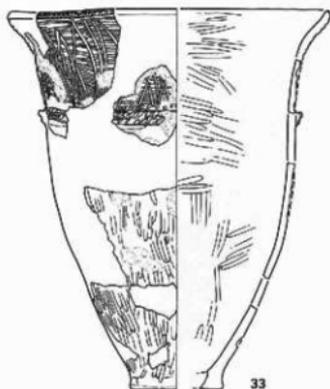
図III-42 土器(3)



31



32



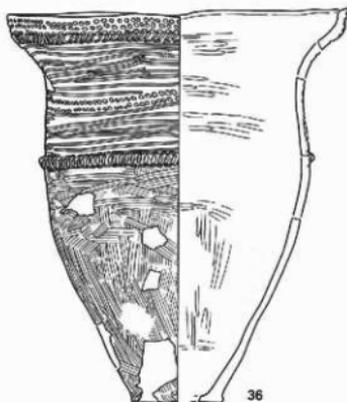
33



34



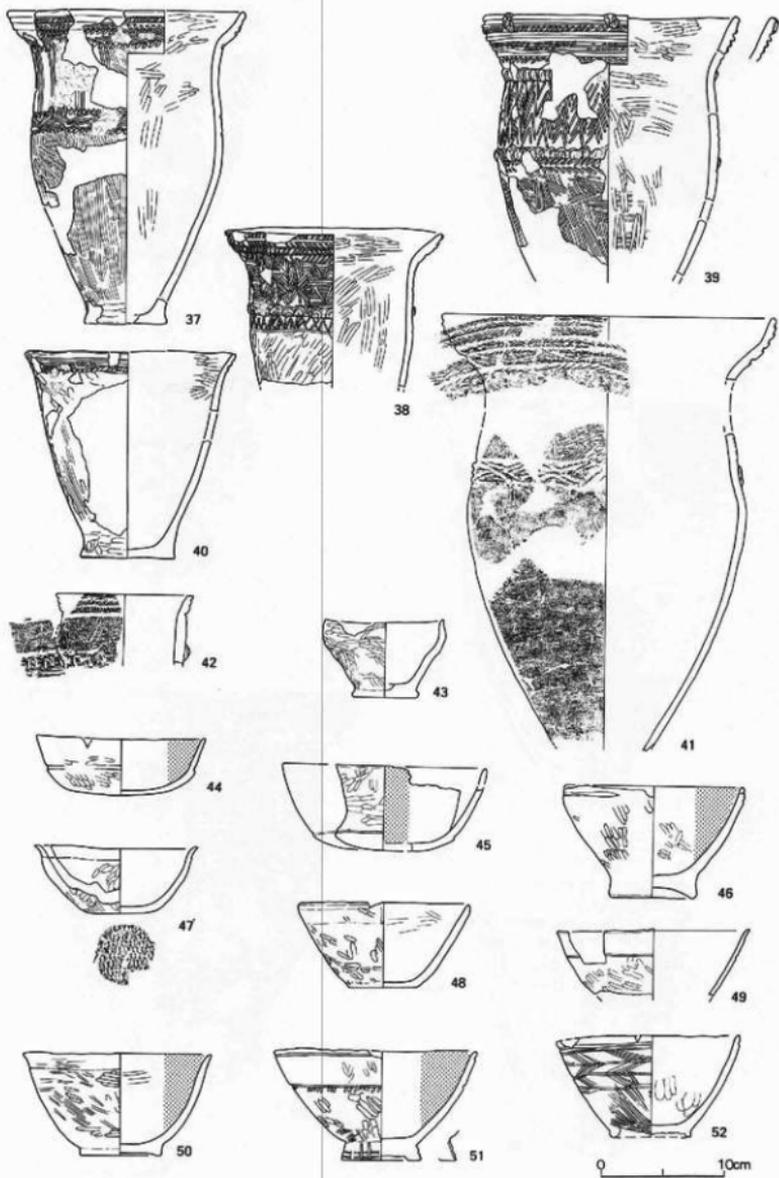
35



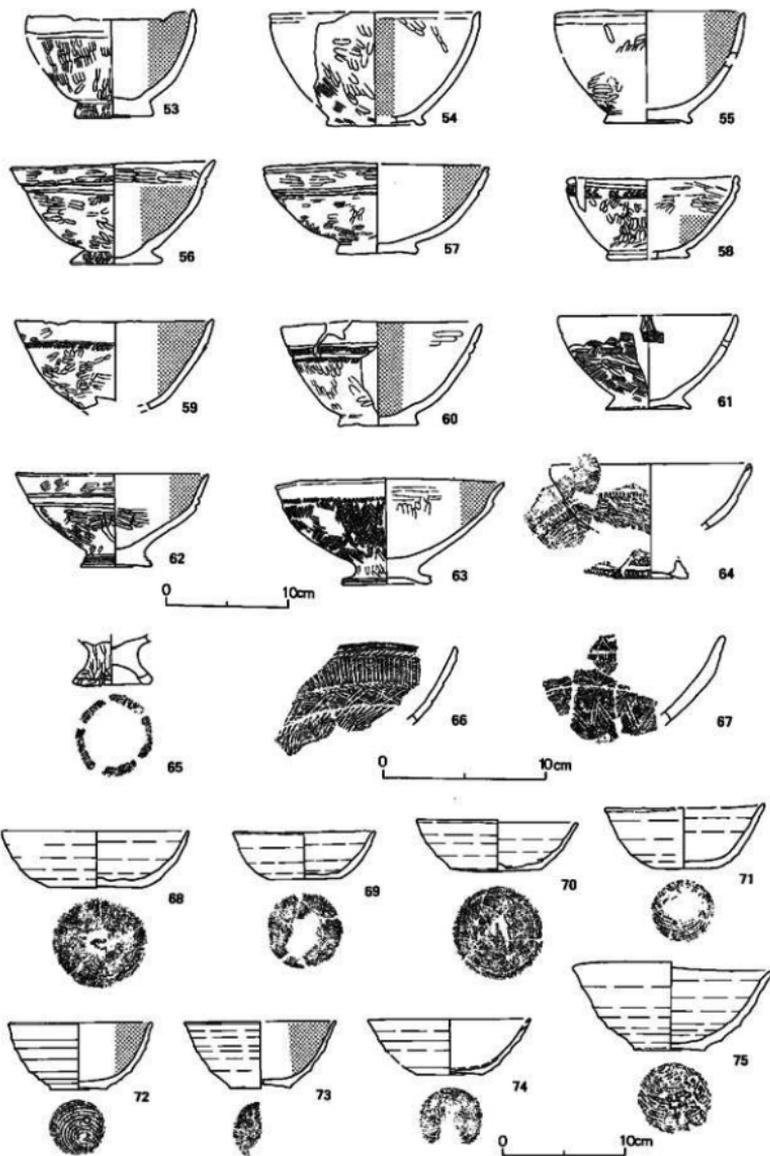
36

0 10cm

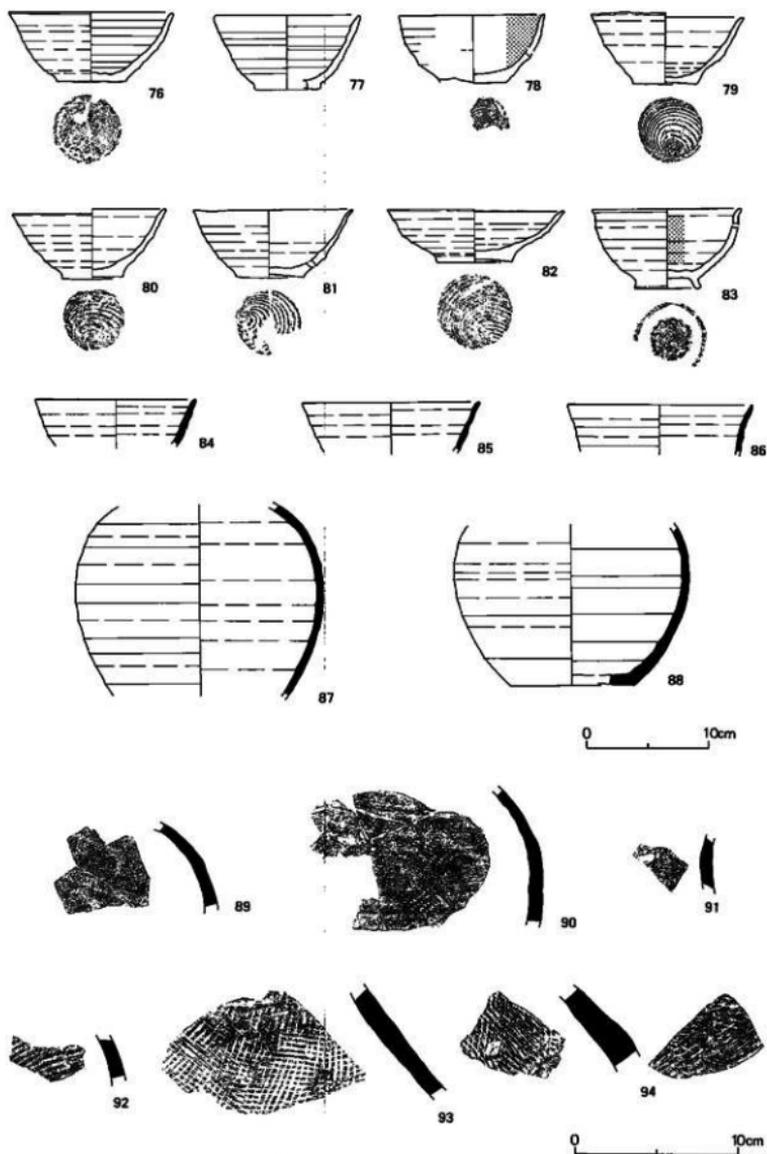
図III-43 土器(4)



図III-44 土器(5)



図III-45 土器(6)



図III-46 土器(7)・須恵器

(2) 土器の分布 (図III-47~55)

本遺跡では取り上げ回数ごとに、遺物の出土位置を記録した。これをもとに分布図を作成し、分布状況を示した。図の説明をすると、線で囲ったり、結んであるものは同一個体である。ドットは重なりがあるため出土点数と同じではない。掲載した土器のうち復元されたものは1/8、破片のものは1/6に縮小してある。土器の番号は(1) 土器で掲載したものと同一である。

VII群-I類 (図III-47)

調査区北東側の斜面で甕が1個出土したのみである。甕は口唇断面が角ばらず、肩部が強く張り出す特徴からみて、やや新しい時期の可能性もある。

VII群-II類 (図III-47)

口縁に浅い1条の沈線をもつ甕と丸底気味の環がある。調査区北西側の溜れ沢と中央部の沢の出口部分で出土している。出土状況は個体別に散らばっている。

VII群-III類 (図III-48)

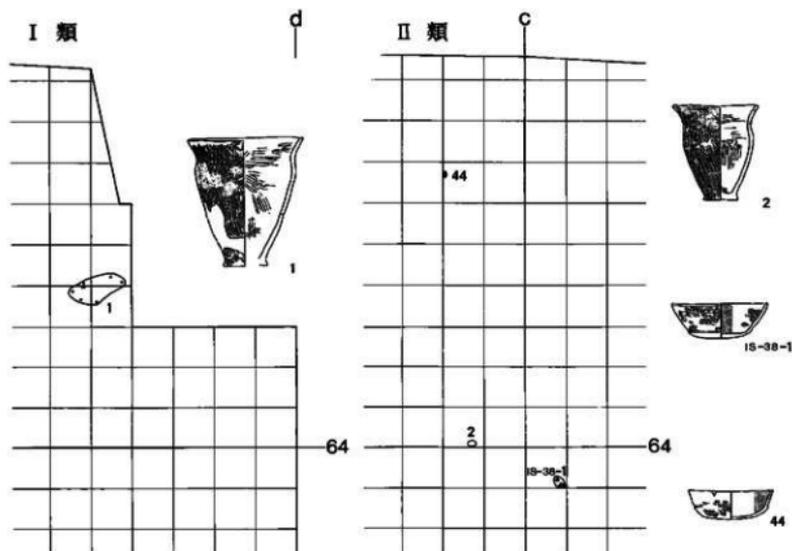
甕は口縁が強く外反するものとしないものがある。環は内黒のものとうでないものがある。5の甕と46・47の環が一括出土している。おもに溜れ沢の出口周辺に集中している。

VII群-IV類 (図III-49)

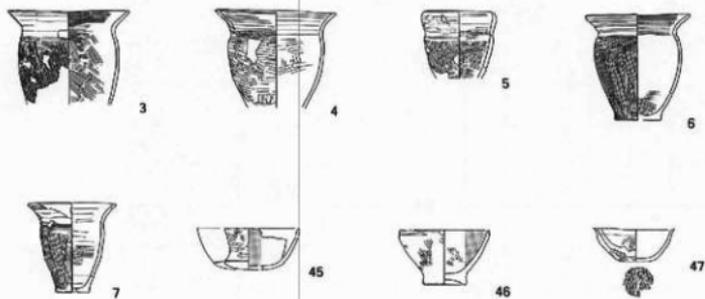
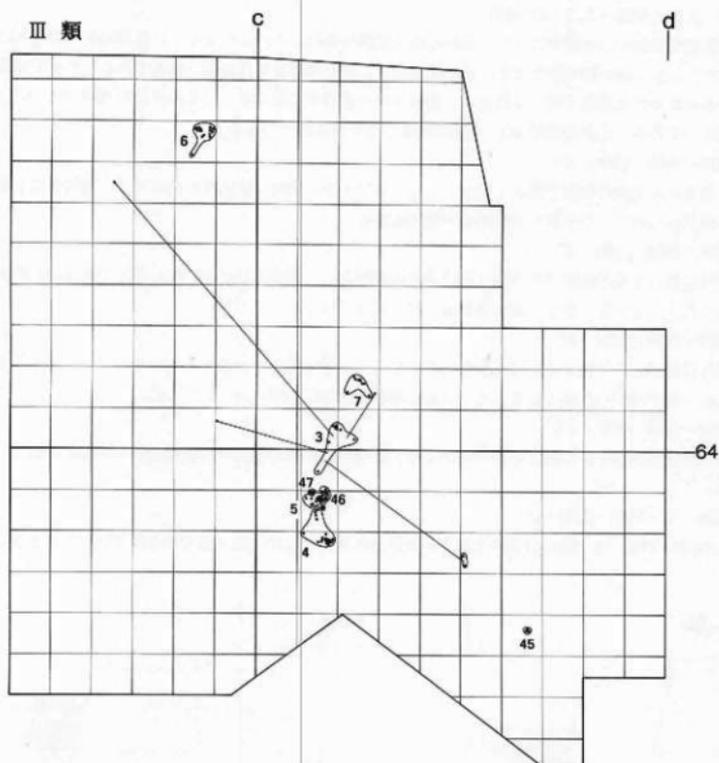
多条の横走沈線をもつ甕と平底の環がある。調査区北西側の溜れ沢と南東側の平坦部から出土している。

VII群-V・VI類 (図III-50)

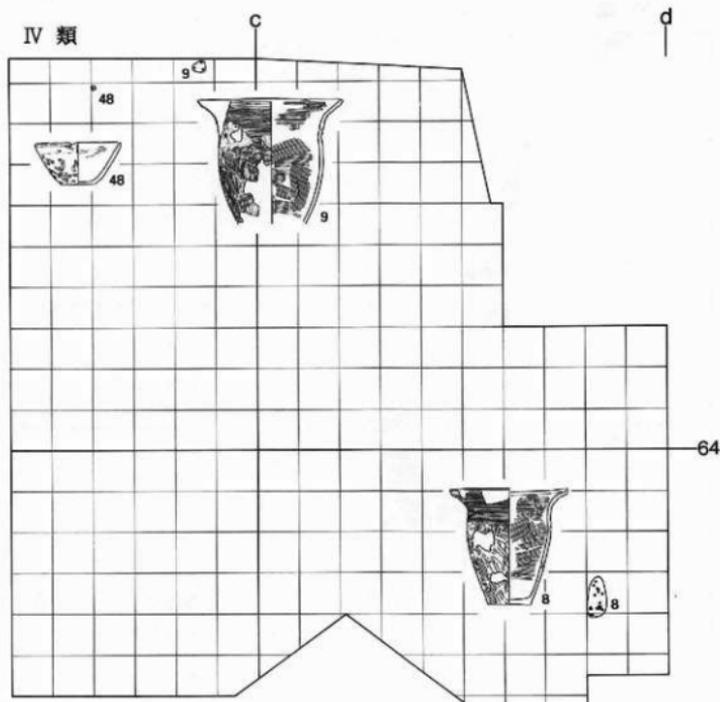
10の鉢はV類、11の甕はVI類になろうかと思われるが、出土位置・層準からみて分けることができ



図III-47 土器の分布 (VII群-I・II)



図III-48 土器の分布 (VII群-III)



図III-49 土器の分布 (VII群-IV)

ないため、今回はV・VI類を同じくした。このほか、糸切りの坏が15個ある。分布は瀬沢の出口付近に集中がみられるほか、瀬沢沢上で個別に散らばっている。11の甕と74・79の坏、72と骨片集中-2の坏が一括出土している。

VII群-VII類 (図III-51)

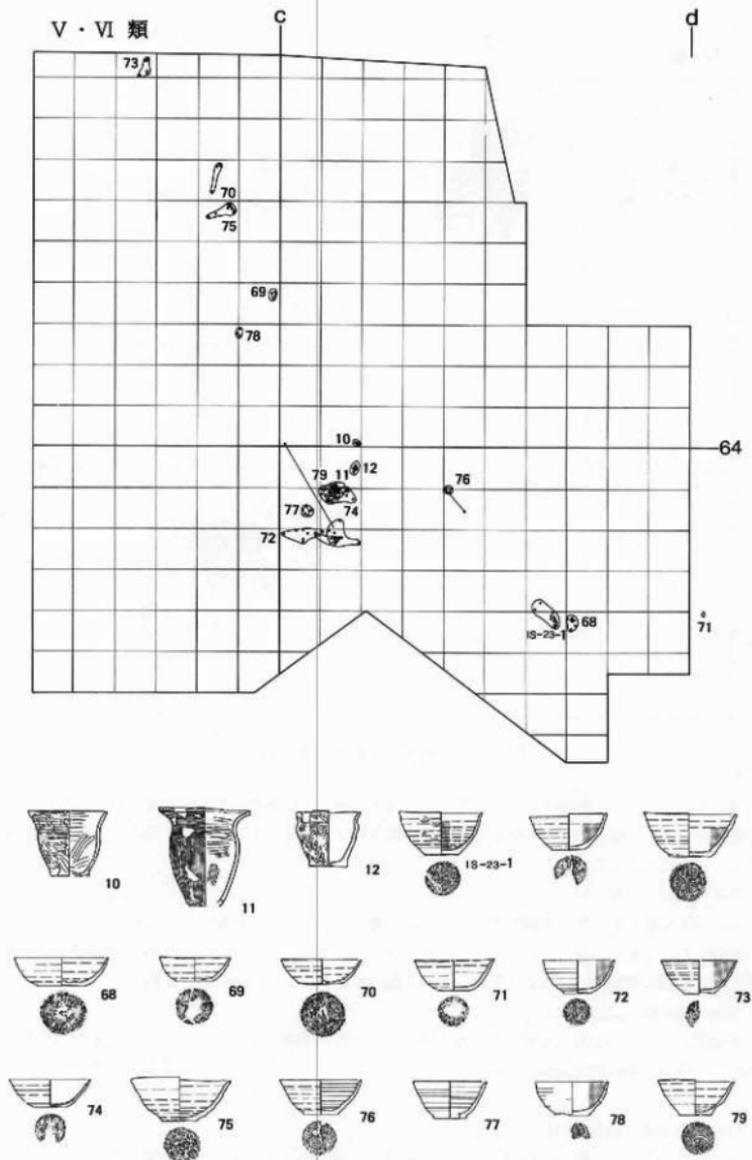
甕は横走沈線に縦・斜の沈線を重ねあわせた文様がつくものと、回転ヨコナデのもの、底面に砂粒が付着しているものがある。坏はヘラミガキのもの、回転ヨコナデのものがある。分布は瀬沢と調査区北東側の斜面部分に集中する。13と17の甕、22の鉢と80・81の坏が一括出土している。

VII群-VII a類 (図III-52)

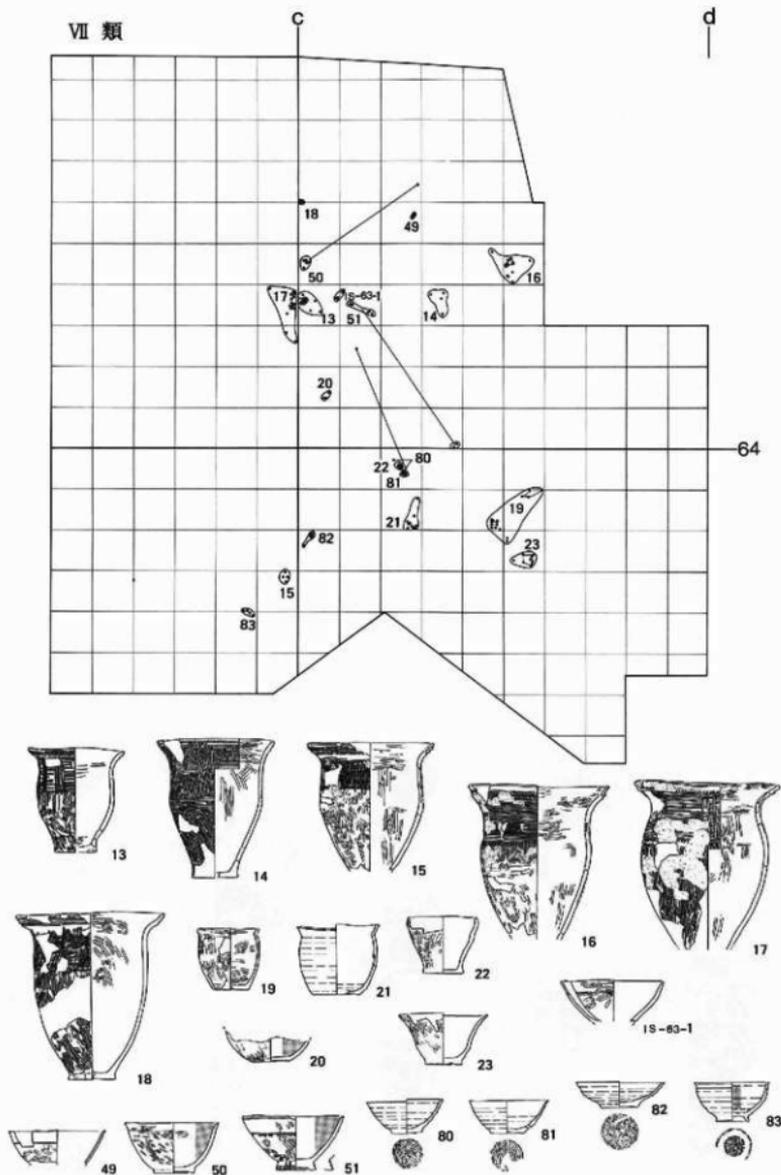
甕は斜交叉文・山形文などが緻密に施されている。坏は内黒で高台をもつ。分布は調査区北西側の瀬沢と南側の平坦部に分かれている。26の甕と52の坏、28の甕と53の坏、29と32の甕が一括出土している。

VII群-VII b類 (図III-53)

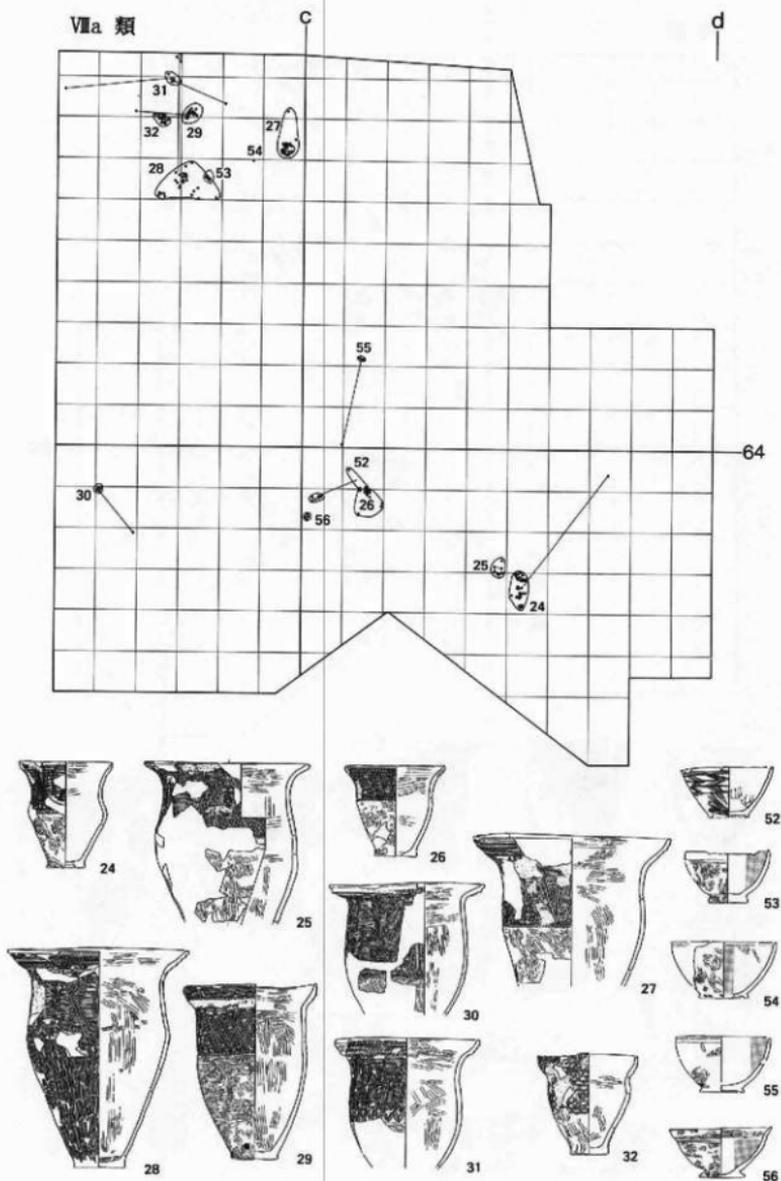
甕のみが出土した。胴部に貼付帯をもつ。調査区の東側斜面と南側の平坦部で一括出土したものが多。33・34の甕、36・37・38の甕が一括出土している。



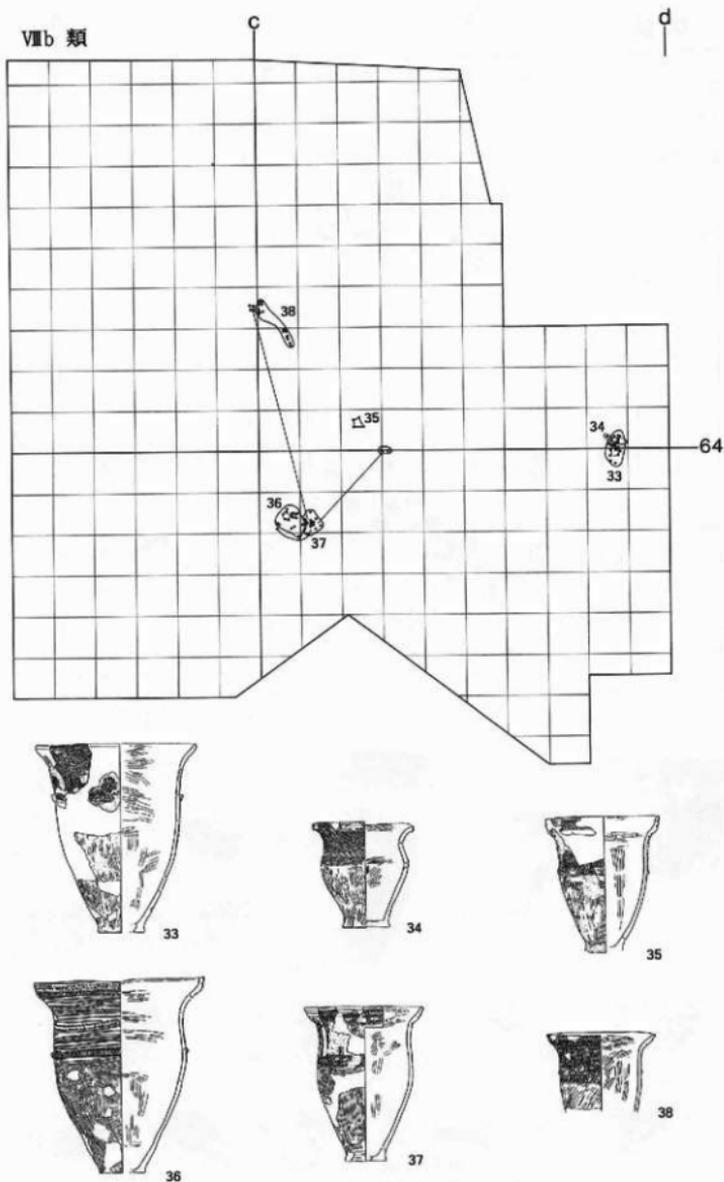
図III-50 土器の分布 (VII群-V・VI)



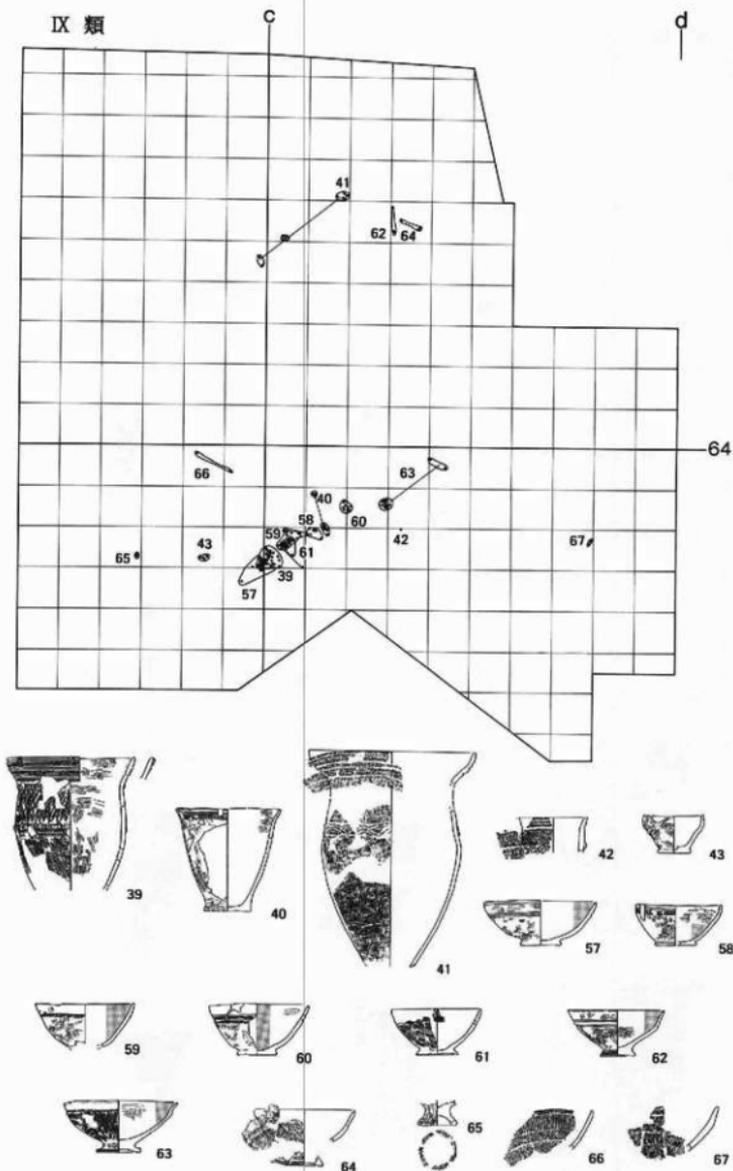
図Ⅲ-51 土器の分布 (Ⅶ群-Ⅶ)



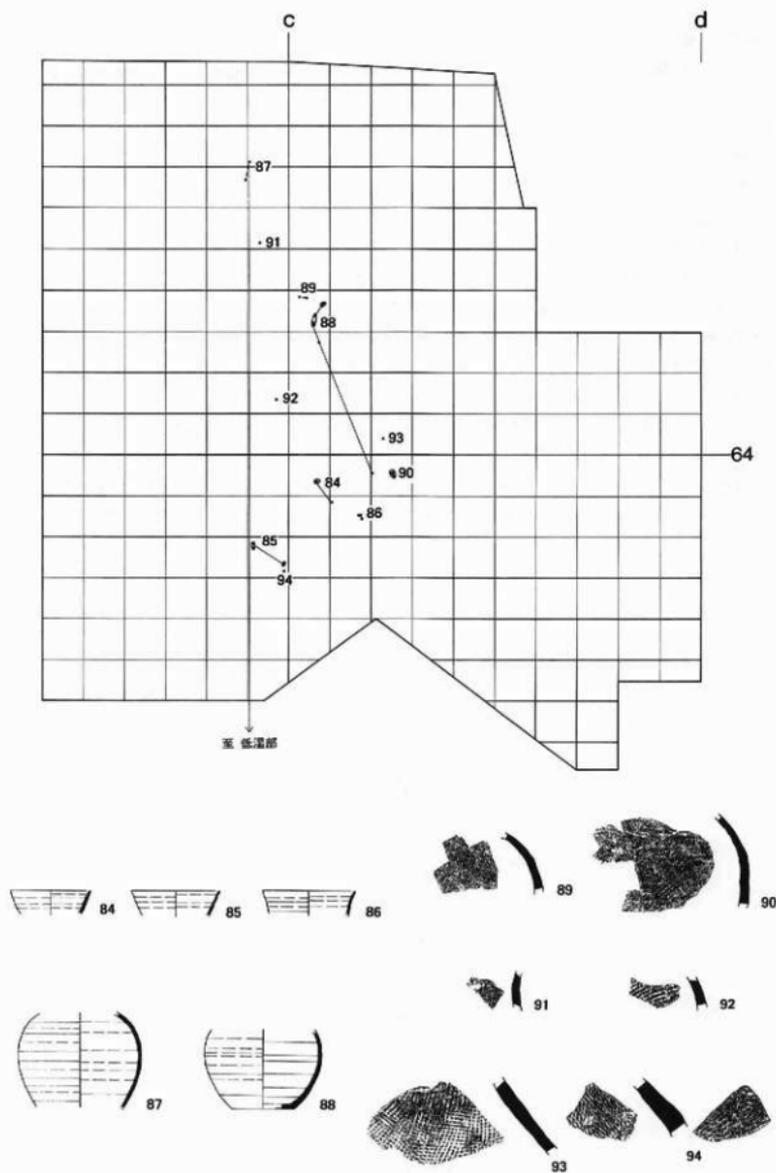
図III-52 土器の分布 (VII群-VIIa)



図III-53 土器の分布 (VII群-VIIb)



図III-54 土器の分布 (VII群-IX)



図III-55 須恵器の分布

Ⅶ群-Ⅸ類 (図Ⅲ-54)

甕は横走沈線が失われ、鋸歯状文・山形文が施されている。坏は高台がつく。高坏は脚が低いものである。分布は瀬れ沢の出口部分に集中がみられる。39の甕と57の坏、58・59・61の坏、62・64の坏が一括出土している。

須恵器 (図Ⅲ-55)

瀬れ沢上に点々と分布している。このうち87は低湿度のもと接合した。 (佐藤 和雄)

(3) 土製品 (図Ⅲ-56)

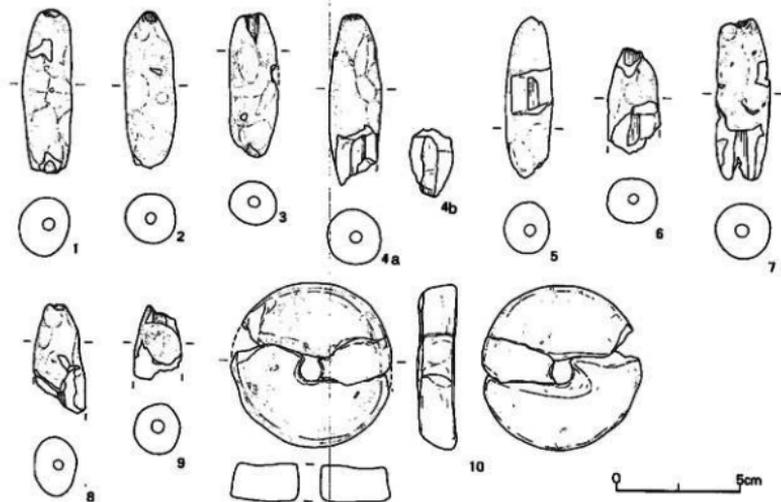
土鍾と紡錘車が出土した。

土鍾は昭和56年度に出土した地区の北側に当たる瀬れ沢の出口部分と東側の斜面部から出土した。大きさは、長さ5.8~7.2cm、幅1.9~2.2cmで、重さは19.6~30.4gである。孔の径は約5mmである。握り跡が残っていることからみて、棒状の軸に盛った粘土を手で握って形にしたものと思われる。部分的にヘラで調整されたものもある。個体数は昭和56年度に出土したものを加えると、20個体になる。ただし破片がすべて接合するものと仮定すると、17個体になる。

時期は、昭和56年度の周辺の遺物や、今回の調査でⅦ群Ⅶa~Ⅸ類土器の分布と一致することからみて、弥文時代中期~後期に位置づけられよう。

紡錘車は平成3年度に次いで2個目の出土である。ほぼ完形で、無文である。断面形は台形である。中央孔がやや盛り上がり、周縁が肥厚する。孔径が約0.8cm、直径6.5cm、厚さ1.6cm、重さ約70gである。

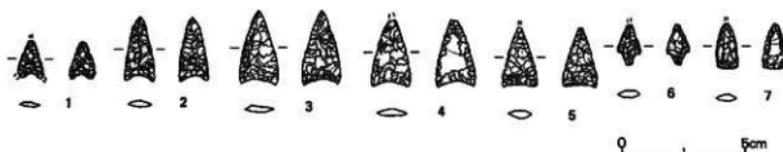
時期は、周辺の弥文時代の土器からみてⅦ群-Ⅶ類期の可能性が高い。 (佐藤 和雄)



図Ⅲ-56 土製品

(4) 石器 (図III-57)

出土した石器は石鏃7点だけで、全例図示した。1～5は無茎凹基のもので、1は正三角形に近く、2～5は二等辺三角形を呈する。5の底辺の挟り込みは他のものに比べ浅い。6は小型の有茎凸基のもの。7は二等辺三角形形状の無茎平基のものであるが、底辺はやや外彎する。これらの石材はすべて黒曜石である。(千葉 英一)



図III-57 石器

表III-16 土製品一覽

図番号	名称	発掘区	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
1	土鏃	d-64-82	6.62	2.05	2.05	27.30
2	土鏃	d-64-81	6.38	2.14	2.08	26.20
3	土鏃	d-64-82	5.82	2.00	1.90	19.80
4	土鏃	d-63-37・d-64-82	7.22	2.16	2.05	30.40
5	土鏃	d-64-82	6.58	1.90	2.10	19.60
6	土鏃	d-63-39	4.26	2.08	1.95	12.80
7	土鏃	d-64-82	6.52	2.20	2.23	26.20
8	土鏃	d-64-82	4.45	2.04	2.33	17.30
9	土鏃	d-64-82	3.02	1.98	2.16	7.30
10	紡錘車	d-64-40	径 6.50	孔径 0.85	1.65	68.90

表III-17 石器一覽

図番号	名称	発掘区	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質
1	石鏃	c-64-00	1.55	1.05	0.18	0.20	黒曜石
2	石鏃	d-63-72	2.62	1.20	0.30	0.70	黒曜石
3	石鏃	d-64-04	3.00	1.55	0.28	1.10	黒曜石
4	石鏃	c-63-04	2.70	1.60	0.31	1.20	黒曜石
5	石鏃	d-63-99	2.40	1.40	0.33	0.80	黒曜石
6	石鏃	c-63-20	1.62	0.90	0.30	0.30	黒曜石
7	石鏃	d-63-65	1.80	0.87	0.28	0.40	黒曜石

(5) 0黒層・I黒層出土の金属製品(図Ⅲ-58~62・表Ⅲ-18・19、図版Ⅲ-22~25)

金属製品の出土分布は、調査区の中央を走る沢を中心に、南側の沢口周辺に多いが、斜面にもみられ、調査区全域に広がっている印象を受ける。主体的な遺構である集石や焼土とは、重ならないものがほとんどである。また、器種別の分布の片寄りもない。近世墓(I P-1)に伴う内耳鉄鍋(10~19)と刀子(60)以外は、全体の生活の場の中で残されたものととらえることができる。時期はほとんどがアイヌ文化期のものととらえられ、明確に濠文時代とできるものはない。

全146点のうち、鉄製品が139点115個体、残りの7点は銅銭で、計122個体となる。その内訳は表Ⅲ-18・19に掲載し、形状の復元ができない鉄製品17個体を除く105個体を、図Ⅲ-58~61に示してある。分布図・実測図・一覧表の遺物Noは、対応するようになっている。

1は鉄滓で、溶解後固化した複雑な形状と、割れ面からの内部の「す」の状態が見てとれる。岩手県立博物館の赤沼英男氏から、鍛冶の際に出る滓ではなく、鋼を造る精錬の時に出る滓であるとの御教示を得た。美々8遺跡では、鉄滓以外は精錬関係の遺物は発見されていないが、濠文~近世に当遺跡でも鋼精錬が行われていた証拠となる遺物である。

2~27は鉄鍋で8個体ある。図上復元できたのは、近世墓(I P-1)とその近辺から出土した10~19と、20~24の2個体で、ともに内耳鉄鍋である。前者は3本脚を持ち丸湯口で、胴部がゆるやかに立ち上がり、内耳が口唇ラインよりもやや高く出る特徴を持っている。後者は底部がほとんど失われており湯口や脚は知ることができないが、胴部はほぼ垂直に立ち上がっている。口縁部の形態から、7を除く8・25・26も内耳鉄鍋の破片であろうし、27の一字湯口も内耳鉄鍋にしか見られない湯口形態である。

28・29は、接合しないが同一個体である曲刃の鎌で、柄を装着する折り返し突起が棟側に付いている。棟が厚く断面は刀状で、あるいは刀から作り替えられたものかもしれない。30・31は薄手の直刃鎌で、刃部と柄部の区界が不明瞭である。32は鎌か、木器内部を削るレウケマキリであろう。33は小型の袋柄式鉄斧で、バチ形を呈している。手斧として木の削りに利用されたものであろうか。

34はノミであろうか。ノミの出土例は全道的に少なく、瀬田内チャシ跡とポロモイチャシ跡で確認されているのみである。また赤沼英男氏から、当時流通していたと思われる鉄素材と形状が酷似しているとの指摘を受けた。最近、東北・北海道各地で発見されており、北海道の鉄・鉄器生産を検討する上で、重要な遺物である。

35と36はクサビカタガネと思われる小品で、特に35は先端への厚みの減じ方がすっきりとしている。37はやや厚みのある鉄片で、火打金の可能性がある。

38~48は鉄鏝で、39・40・43のような無茎の三角鏝と、茎と寛被ぎを持つタイプがある。そのうち38と44は柳葉形、41は鐘頭形を呈する。45・46・48は意図的に鏝部を落としている形跡があり、先端を尖がらせている。また41・42・45~48は、様々な曲げられており、鏝以外の用途を持っているようである。特に47・48は鏝として用いられたようで、103の鏝にもその可能性がある。38と44も転用品となり得るものである。

49は組み合わせで使う魚獲用のヤスと思われる。根元に比べて上半分が緩くカーブし、断面は隅丸の正方形となる。50~54に鉤形のものを一括したが、50のひっかけ鉤?と51のマレクの先端?が魚獲に関するものといえよう。

55~69は刀子・マキリである。完成品は69のみで、あとはすべて破損品か破片である。55の棟には、叩いたようなつぶれがある。57・58・60・70は刀子としてはやや大型で、小刀でもいいうべきものであるか。58には穿孔が見られる。60は、近世墓(I P-1)に副葬されていた大型の刀子で、鞘や柄

の木質が残存している。61・64は、外反する形態からマキリといえるものであろう。62・65・69は刃側に区がなく、棟区だけがある例である。63は鎌の可能性が高い。66は刀子の刃側や茎の両側が、めくれ上るように叩きつぶされたもので、87の舟釘としたものに類似している。使えなくなった刀子を転用したのか、あるいは鉄素材の可能性もある。

71・74・75は小刀である。74・75の茎には、目釘孔がある。75はもう少し長めだった刀が折れた後、折れ口を丸めて切先をつけ再利用したものであろう。72・73はタシロと呼ばれる、幅広の山刀である。両者ともほぼ同じ長さで、両区で刃部中央部に使用による減りがあるなど、よく似た形状をしている。72は柄に紐巻や木質が残っており、目釘孔中に木釘の残片もみられる。73は棟側中央部に叩かれたつぶれがあり、区部から目釘孔の周辺にかけては、木質が残存している。

76は刀子の鞘用と思われる、小型の石突。77は丸棒を環にしたものである。78～80は断面の平たい帯状の板を環にしたもので、78と80ではその合わせ目が観察できる。鎌やノミなどの柄木を固定する口金（タマクラ）であろう。81・82は鍔小札で、81は札頭の形状から基石頭伊予札と呼ばれるものである。81は半分に割れ、82は折れ曲がっており、いずれも他の用途への転用品と考えられる。

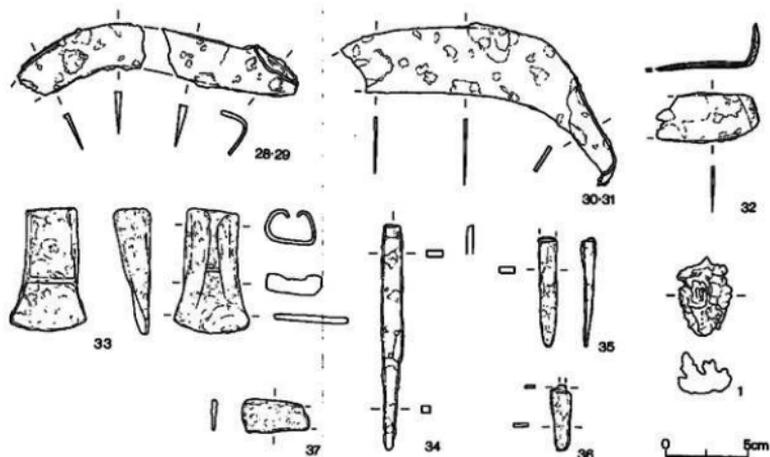
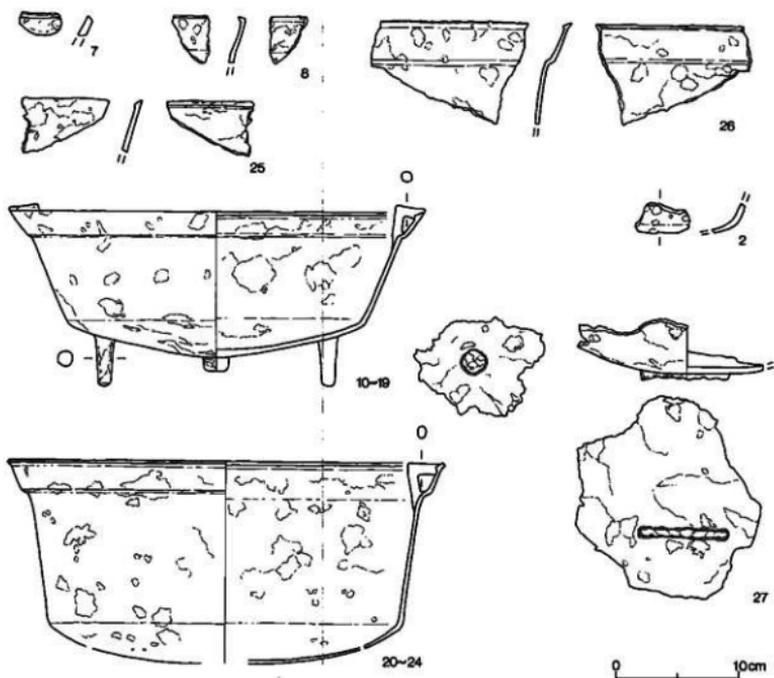
83～87は舟釘といわれる幅広の大型の釘で、頭部は84のようになるものが多い。これも鉄素材の可能性のあることを赤沼英男氏から指摘されている。87は66のような刀子からの転用品か素材であろうか。88～101は大小の釘。88は頭巻がみられ、89の角釘は頭部が叩かれつぶれている。89を除くほとんどが、基部が扁平な平釘である。釘もまた、釣針や鉤に転用されやすい製品である。102～108は鏝で、104～108が扁平な平鏝といわれるものである。103は47・48のような鉄鏝の転用と思われる。

その他破片となり用途不明のものを、109～139に集めた。109～103の中には、平釘の折損品があるものと思われる。116は環状に曲げれば、78～80のような口金になる。133・134は幅の小さい薄板が、輪状になるものの一部分。135・136は刀鞘の資金のようなカーブを持っている。139の小孔は、穿孔後の処理がなされておらず、小札とは思われない。

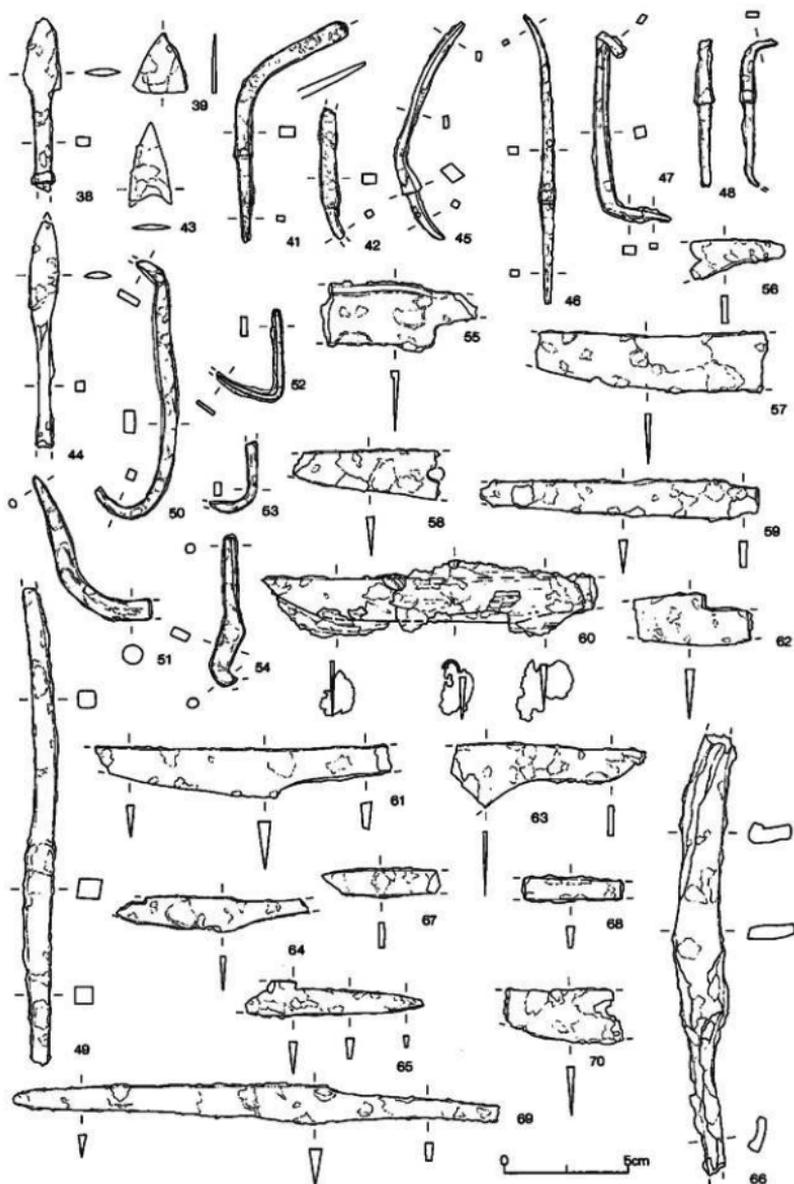
140～146の銅銭は、すべて渡来銭である。140は唐の武徳4（621）年初鑄の「開元通寶」、146は明の洪武元（1368）年初鑄の「洪武通寶」で、他の141～145は北宋銭である。141・142は宝元2（1039）年初鑄の「皇宋通寶」で篆書体、143・144は熙寧元（1068）年初鑄の「熙寧元寶」で真書体、145は元祐8（1093）年初鑄の「元祐通寶」で行書体である。5種類とも日本に大量に入り込んだ中国銭であるが、141・143～145のように文字の鑄潰れや孔の丸みがかつたものは、模鑄銭の可能性もある。144は孔と同幅の楕円が孔に通ったまま出土している。7枚とも単独の出土で、銭貨としての流通ではなく、装飾品的な意味合いを持つものであろう。

以上、出土した金属製品は、いずれも転用・再利用されべきものである。特に今回の遺物の中では、鎌と刀子にその例が顕著に現われているといえよう。金属製品が貴重で便利なものであったことを物語っている。あるいは、当初から作り替えの意図を持って、交易品として金属材料を得ていたのかもしれない。転用品への再加工は、現地で行っているものと思われ、なかには完全に溶かして形を変えてしまうものがあるのだろう。そういった意味でも、1の鉄滓の出土はなかなか興味深いものがある。また、赤沼氏から指摘を受けている鉄素材の存在と流通は、撫文から近世にかけての北海道の従来のイメージを革新する、問題提起である。赤沼氏に、関連する何点かについて金属学的分析を、お願いしてある。その結果は、美々8遺跡低湿部の金属製品の報告の際に発表する予定である。

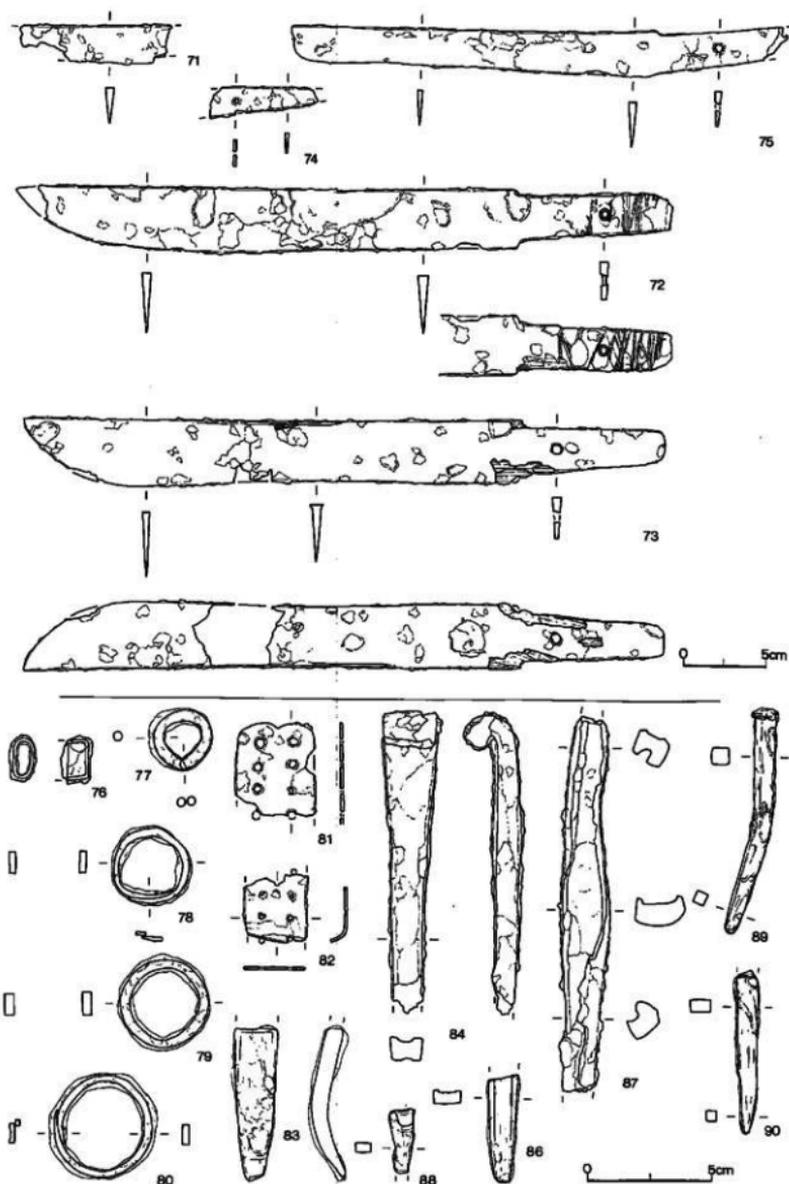
（三浦 正人）



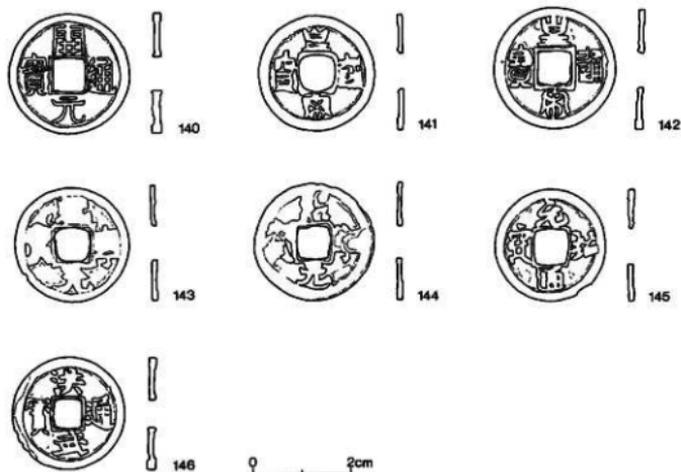
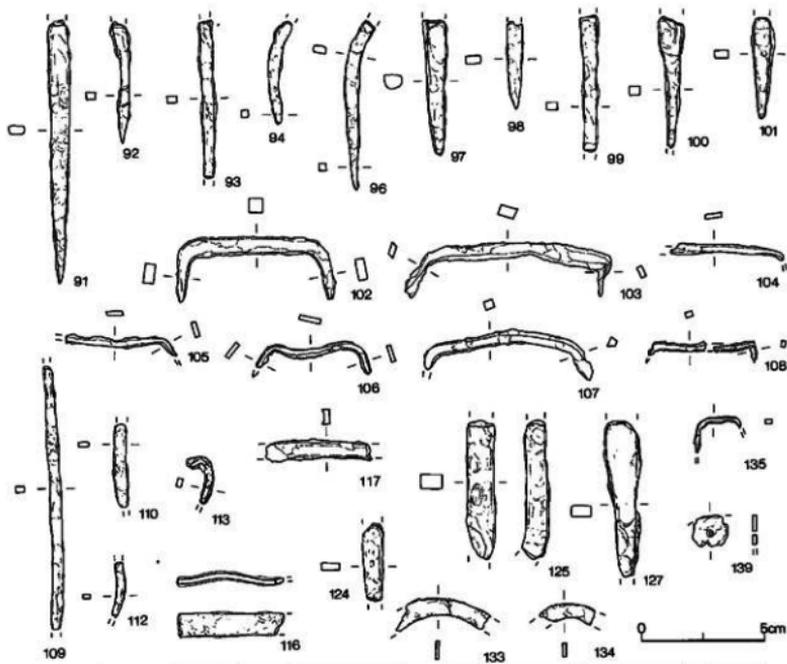
図III-58 金属製品(1)



図III-59 金属製品(2)



図III-60 金属製品(3)



図III-61 金属製品(4)

表III-18 金属製品一覧(1)

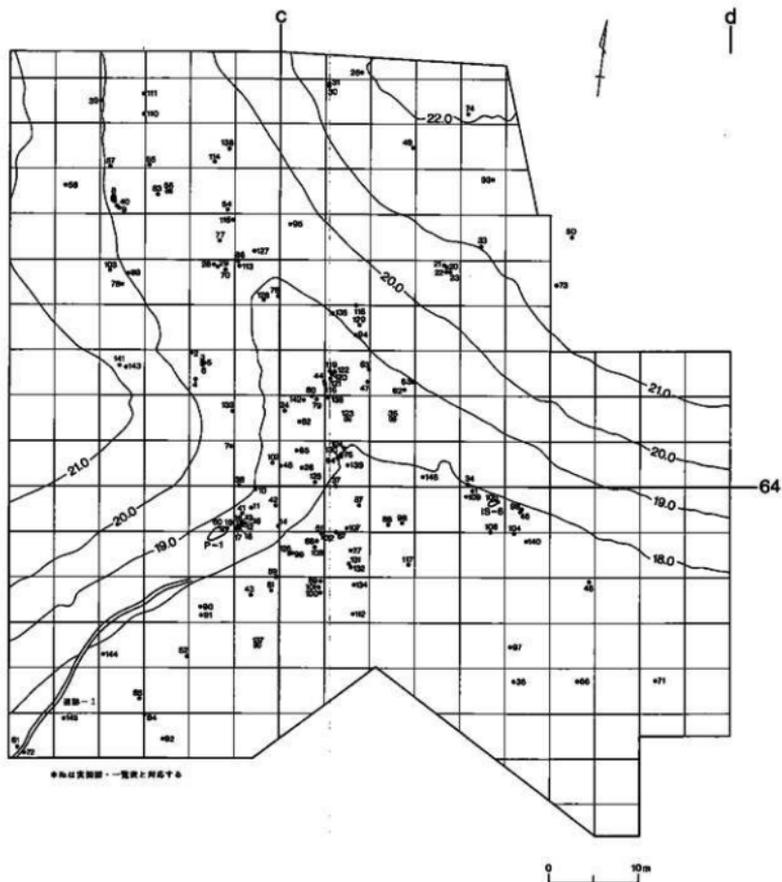
No	名 称	グリッド	層・透標	大 き さ	備 考
1	鉄洋	d64-50	I B 3回目	長 4.8 重 35.0g	
2	鉄 胴部	e63-17	O B		同一個体
3	鉄 胴部	e63-17	O B		
4	鉄 胴部	e63-17	I B 2回目		
5	鉄 胴部	e63-17	I B		
6	鉄 胴部	e63-17	I B		
7	鉄 口縁部	e63-19	I B		
8	鉄 口縁部	e63-33	I B 1回目		同一個体
9	鉄 胴部片	e63-33	I B 1回目		
10	鉄 内耳 脚	e64-00	I B 1回目	口径 34.0	
11	鉄 胴部	e64-00	I B 1回目	底径 24.2	同一個体
12	鉄 口縁部	e64-00	I B 1回目	高さ 14.2	
13	鉄 胴部	e64-00	I B 1回目	深さ 11.2	
14	鉄 胴部	e64-00	I B 1回目	脚高 3.9	
15	鉄 胴部	e64-00	I B 1回目	溝口径 2.0	
16	鉄 口縁部	e64-00	I B 1回目		
17	鉄 脚	e64-00	I B 1回目		
18	鉄 口縁部	e64-00	I B 1回目		
19	鉄 内耳	e64-10	I P - 1		
20	鉄 口縁部	d63-65	I B 1回目	指定口径 36.0	
21	鉄 口縁部 内耳	d63-65	I B 1回目	指定底径 29.0	
22	鉄 胴 - 底部	d63-65	I B 1回目	指定深 16.2	
23	鉄 胴 - 底部	d63-65	I B 1回目		
24	鉄 口縁部 内耳	d63-98	I B 2回目		同一個体
25	鉄 口縁部	d63-80	I B 残 乱	指定口径 36.0	
26	鉄 口縁部	d63-99	I B 1回目	指定口径 30.0	同一個体
27	鉄 基部 一文字溝口	d64-81	I B 1回目	溝口長 7.2 溝口幅 0.6	
28	線	e63-15	I B	全長(17.0) 幅 2.6	
29	線	e63-15	I B 上 面		
30	線	d63-81	I B 1回目	全長(16.9) 高 9.8 幅 4.0	
31	線 網	d63-81	I B 1回目		
32	線? レウケマキリ?	d64-91	I B 上 面	長 (6.3) 幅 3.0	
33	斧 小型	d63-54	I B 1回目	全長 7.6 刃幅 4.6 接口長さ 2.7	
34	ノミ	d63-59	I B 1回目	長 13.7 幅 1.1 刃厚 0.3	
35	クサビ?	d63-78	I B 上 面	長 (6.6) 幅 1.0	
36	クサビ?	d64-44	I B 2回目	長 (4.0) 幅 1.2	
37	大打金?	d63-89	I B 1回目	長 (4.2) 幅 1.5	
38	線 得意形	d63-09	I B 1回目	全長(7.1) 線長 3.0 線幅 1.5	
39	線 無蓋三角形	e63-31	I B 1回目	長 2.4 幅 2.2	
40	線?	e63-33	I B 1回目	小破片	図なし
41	線 巻線 加工品	e64-00	I B 1回目	長 10.9 幅 0.6	先尖曲 46と類似 先尖曲 45と類似
42	線 加工品	e64-00	I B 1回目	長 (5.4) 幅 0.6	
43	線 無蓋三角形	e64-02	I B 1回目	長 3.3 幅 1.7	
44	線 得意形	d63-97	I B 1回目	全長(6.2) 線長(4.0) 線幅 1.1	
45	線 加工品	d63-99	I B 1回目	長 8.9 幅 0.4	
46	線 加工品	d64-40	I B 2回目	長 11.7 幅 0.4	
47	線 加工品 網?	d63-87	I B 1回目	長 7.8 幅 0.4	
48	線 加工品 網	d64-32	I B 1回目	長 (6.0) 幅 0.8	
49	ヤス	d63-71	I B 上 面	長 (19.4) 幅 0.8	
50	鉤	d63-34	I B 上 面	高 (10.5) 幅 0.9	
51	鉤 アブ? マレブ?	d64-91	I B 1回目	長 (8.1) 幅 0.8	
52	鉤形平棒状片	e64-23	I B 1回目	高 (3.7) 幅 0.8	
53	鉤形平棒状片	d63-87	I B 1回目	高 (2.9) 幅 0.6	
54	鉤形棒状片	e63-13	I B 1回目	高 (6.2)	
55	刀子	e63-22	I B 上 面	長 (6.3) 刃幅 2.4	溝線内
56	マキリ 蓋片	e63-23	I B 2回目	長 (3.8)	
57	刀子	e63-32	I B 1回目	長 (9.4) 刃幅 2.2	
58	刀子	e63-43	I B 1回目	長 (6.0) 刃幅 2.0	
59	刀子	e64-02	I B 1回目	長 (11.3) 刃幅 1.4	
60	刀子	e64-10	I P - 1	長 (13.6) 刃幅 1.7	
61	マキリ	e64-55	I B 上 面	長 (12.1) 刃幅 1.9	
62	刀子	d63-77	I B 1回目	長 (4.8) 刃幅 2.0	
63	刀子	d63-77	I B 1回目	長 (7.9)	
64	マキリ	d63-89	I B 1回目	長 (7.8) 刃幅 1.3	
65	刀子	d63-99	I B 2回目	長 (7.2) 刃幅 1.4	
66	刀子? 舟釘?	d64-34	I B 2回目	長 (18.0) 刃幅 1.9	
67	刀子 切先?	d64-81	I B 1回目	長 (4.8) 幅 1.0	
68	刀子 蓋片	d64-91	I B 1回目	長 (4.1) 幅 0.8	
69	刀子	d64-92	I B 1回目	長 19.8 刃幅 1.4	
70	刀子 片	e63-15	I B	長 (4.7) 刃幅 2.0	
71	刀	d64-14	I B 上 面	長 (9.1) 刃幅 2.3	溝線 9.5
72	刀	e64-55	I B 上 面	長 (88.9) 刃幅 3.7	
73	刀	d63-35	O B	長 39.3 刃幅 3.5 溝長 8.7	
74	刀 蓋片	d63-51	I B 1回目	長 (6.0) 幅 1.6	
75	刀	d63-89	I B 上 面	長 (30.4) 刃幅 2.3	

* %は個と対応する。

表III-19 金属製品一覧(2)

No.	名 称	グリッド	厚・遺構	大 小	寸 法	備 考
76	石突 刀子鞘用	c63-05	I B 1回目	長径 1.6	長 0.9	
77	遺	c63-14	I B 2回目	径 2.4	幅 0.4	
78	遺 タマクラ	c63-85	I B 1回目	径 3.3	幅 0.9	
79	遺 タマクラ	d63-98	I B 1回目	径 3.9	幅 0.9	
80	遺 タマクラ	d63-98	I B 上面	径 4.4	幅 0.8	
81	小札	c64-02	I B 1回目	長 (5.8)	幅 3.3	
82	小札	d63-98	I B 1回目	長 (2.8)	幅 2.6	
83	釘	c63-23	I B 1回目	長 (6.0)	幅 1.6	
84	釘 舟釘	c64-25	I B 上面	長 (12.3)	幅 2.4 脚幅 1.5	
85	釘 舟釘片?	c64-34	I B 上面	長 (3.3)	幅 1.4 厚 0.8	図なし
86	釘 舟釘片	d64-70	I B 2回目	長 (4.5)	幅 1.1	
87	釘 舟釘片	d64-80	I B 1回目	径 (15.3)	幅 2.0	
88	釘	c63-05	I B 1回目	長 (2.6)	幅 0.9	
89	釘	c63-35	I B 1回目	長 2.3	幅 1.1	
90	釘	c64-12	I B 1回目	長 (6.4)	幅 0.8	
91	釘 ヤス?	c64-12	I B 1回目	長 (10.4)	幅 0.7	
92	釘	c64-25	I B 1回目	長 (4.9)	幅 0.4	消失
93	釘	d63-53	I B 1回目	長 (6.4)	幅 0.4	
94	釘?	d63-86	I B 1回目	長 (4.2)	幅 0.4	
95	釘?	d63-94	I B 2回目	長 (3.3)	幅 0.6 厚 0.5	図なし
96	釘	d64-40	I B 上面	長 (7.0)	幅 0.5	
97	釘	d64-43	I B 1回目	長 (5.5)	幅 0.7	
98	釘	d64-70	I B 2回目	径 (3.6)	幅 0.6	
99	釘?	d64-91	I B 1回目	長 (5.5)	幅 0.5	
100	釘?	d64-92	I B 1回目	径 (5.0)	幅 0.6	
101	釘	d64-92	I B 2回目	長 (4.1)	幅 0.6	
102	鏝	c63-09	I B 1回目	長 5.5	幅 5.5 脚高 2.6	
103	鏝	c63-35	I B 上面	長 8.4	幅 0.8 脚高 2.2	
104	鏝? 平盤? 平棒状曲	d64-41	I B 1回目	長 (4.6)	幅 0.7	
105	鏝? 平盤? 平棒状曲	d64-50	IB 上面 IS-5	長 (4.5)	幅 0.7	
106	鏝 平盤	d64-50	I B 1回目	長 (4.7)	幅 0.9 脚高 1.4	
107	鏝	d64-80	I B 1回目	長 (6.8)	幅 0.4 脚高 2.2	
108	鏝 小型	d64-91	I B 1回目	長 (4.4)	幅 0.3 脚高 0.9	
109	不明 細角棒状	d64-50	I B 2回目	長 (10.7)	幅 0.4	
110	不明 細平棒状 小型	c63-31	I B 1回目	長 (3.4)	幅 0.4	
111	不明 細棒状	c63-31	I B 1回目	小破片		図なし
112	不明 細棒状	d64-82	I B 3回目	径 (2.3)	幅 0.3	
113	不明 平棒状曲	c63-05	I B 1回目	幅 0.4		
114	不明 平棒状	c63-12	I B 上面	幅 0.6	厚 0.3	図なし
115	不明 平棒状	c63-14	I B 2回目	長 (1.9)	幅 0.8 厚 0.3	図なし
116	不明 平棒状 筋強?	d63-97	I B 1回目	長 (4.4)	幅 0.9	
117	不明 角棒状	d64-71	I B 2回目	長 (4.3)	幅 0.6	
118	不明 角棒状	d63-86	I B 1回目	長 (3.9)	幅 0.6 厚 0.3	図なし
119	不明 小片	d63-87	I B 1回目	幅 0.8		同一個体
120	不明 角棒状	d63-87	I B 1回目			図なし
121	不明 角棒状	d63-87	I B 1回目			
122	不明 角棒状小片	d63-87	I B 2回目			
123	不明 角棒状	d63-88	I B 2回目	長 (3.3)	幅 0.9 厚 0.5	図なし
124	不明 角棒状	d63-89	I B 2回目	長 (3.1)	幅 0.8	
125	不明 角棒状	d63-99	I B 1回目	径 (5.6)	幅 0.9	片端扁平曲
126	不明 角棒状	d64-91	I B 1回目	長 (3.4)	幅 0.6 厚 0.3	図なし
127	不明 棒状	c63-04	I B 1回目	長 (6.3)	幅 0.8	
128	不明 棒状	c63-05	I B 1回目	幅 0.7	厚 0.3	図なし
129	不明 棒状	d63-86	I B 1回目	長 (2.7)	幅 0.6 厚 0.3	図なし
130	不明 棒状	d63-89	I B 1回目	長 (5.6)	径 0.3	同一個体
131	不明 棒状	d64-81	I B 1回目	幅 0.4	厚 0.2	
132	不明 棒状	d64-81	I B 1回目			
133	不明 棒状 小片	c63-18	I B 上面	幅 0.7		134と類似
134	不明 棒状 小片	d64-82	I B 1回目	幅 0.5		133と類似
135	不明 小環状 真金?	d63-86	I B 1回目	幅 0.3	短径 (1.8)	
136	不明 小環状 真金?	d63-88	I B 1回目	幅 0.5		図なし
137	不明 板状 刀子?	c64-03	I B 1回目	幅 1.4	厚 0.3	図なし
138	不明 板状	c63-12	I B 1回目	長 (1.5)	厚 0.2	図なし
139	不明 小片 有孔	d63-89	I B 1回目	長 (1.4)		
140	古銭 開元通寶	d64-41	I B 2回目	径 2.45	厚 0.15	初辨 唐 武德4 (621)年
141	古銭 皇宋通寶	c63-37	O B	径 2.38	厚 0.11	初辨 北宋 淳化2 (1039)年
142	古銭 皇宋通寶	d63-98	I B 1回目	径 2.46	厚 0.11	
143	古銭 熙寧元寶	c63-37	O B	径 2.35	厚 0.12	初辨 北宋 熙寧元 (1068)年
144	古銭 熙寧元寶	c64-33	I B 1回目	径 2.45	厚 0.1	。 楊成付 針入孔?
145	古銭 元祐通寶	c64-45	I B 1回目	径 2.3	厚 0.1	初辨 北宋 元祐3 (1093)年
146	古銭 洪武通寶	d63-89	I B 1回目	径 2.3	厚 0.14	初辨 明 洪武元 (1368)年

*Noは図と対応する。



図III-62 金属製品分布図

6 まとめ

縄文時代の土器について

美々8遺跡では多量の縄文土器が出土した。これらは初頭から後半まで各時期の資料がある。ここでは一括土器を中心に器種の組み合わせを示した。時期区分については平成元年度報告「美沢川流域の遺跡群Ⅷ、5まとめ ③土器群の年代」に準拠した。

I類 (1~11)

甕：円形刺突文をもつもの(a)と、もたないもの(b)がある。

(a) 口縁部は外反し、底部は張り出す。口縁部はナデ、体部はヘラミガキもしくはハケメ後ヘラミガキされる。口縁部に円形刺突文が施される。頸部に鋸歯状などの沈線をもつものもある。

(b) 口縁部は外反する。口唇断面形は角形を呈する。肩部に稜をもつものもある。調整はハケメだけのものと、ハケメとヘラミガキによるものがある。口縁部から頸部にかけて鋸歯状文・山形文などが施される例が多い。

坏：丸底もしくは丸底気味で、体部外面下位に段・稜をもつ。口縁部は外傾する。内外面ともにヘラミガキされる。口縁部ヨコナデされるものもある。内面は黒色処理される。

高坏：口縁部は外傾する。体部に段をもち、内面にも段をもつ。脚部に3ヵ所の透しがつく。口縁部ナデ、体部ヘラミガキ、底部ハケメ後ヘラミガキされる。平成2年度報告「美沢川流域の遺跡群Ⅳ」図VI-69の3の坏は底部が欠失しており、器形や調整方法からみて高坏の可能性はある。

II類 (12~18)

甕：口縁部は外反し、端部が直立気味になるものがある。肩部に段をもつものともたないものがある。口縁部はナデられ、体部はハケメやヘラミガキだけのものとハケメとヘラミガキによるものがある。口縁部から頸部にかけて数本の沈線や段がつくものと無文のものがある。

球胴壺：口縁部は外反する。球形の胴部中位に最大径をもつ。口縁部はナデ、体部はハケメ後ヘラケズリ、体部下位から底部はヘラケズリされる。

坏：丸底と平底風のものがある。体部外面中位から下位にかけて段をもつ。体部外面はヘラミガキされるものと、カキメ後ヘラミガキされるものがある。内面はヘラミガキ後黒色処理されるものが多い。

III類 (19~33)

甕：口縁部は外反する。口端部が内傾するものがある。体部上位は張り出す。器面調整は口縁部がナデ、体部はハケメかヘラミガキのみのものと、ハケメ後ヘラミガキのものがある。口縁部、頸部に数本の横走沈線をもつものが多い。

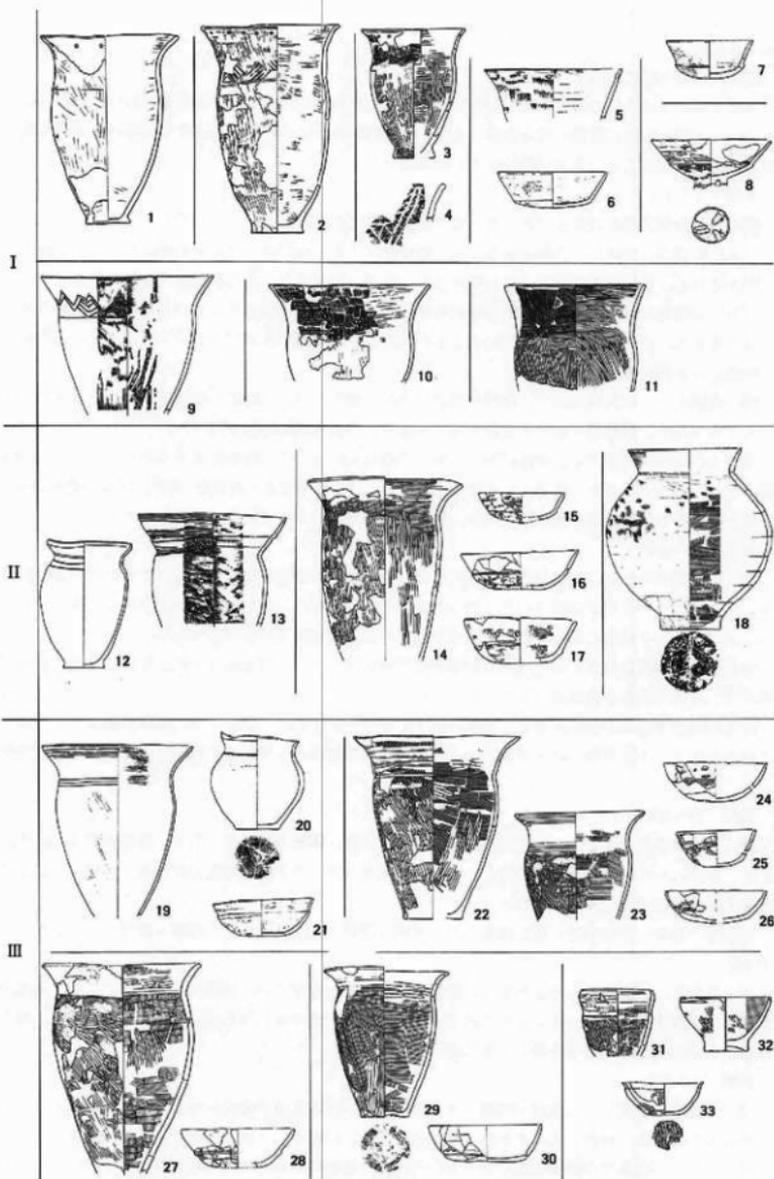
球胴壺：球形の胴部中位に最大径をもち、頸部に段がつく。頸部ナデ、体部・底部はヘラミガキされる。

坏：丸底風と平底風のものがある。口縁部は内彎するものが多い。体部に段・沈線をもつ。外面の調整は口縁部ナデ、体部ヘラミガキされる。内面はヘラミガキ後に黒色処理されるものが多い。32の高台付きは器形からみてやや新しくなる可能性がある。

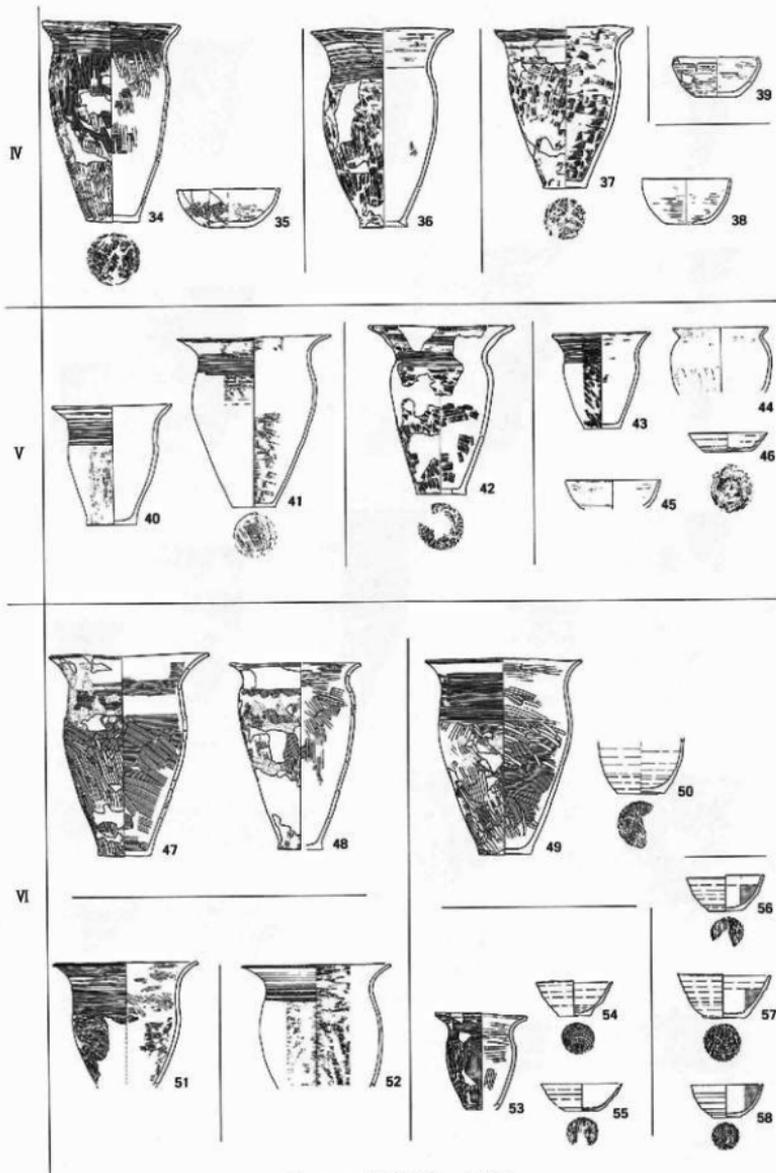
IV類 (34~39)

甕：口縁部は外反し、口端部が内彎するものが多い。体部上位~中位やや張り出す。調整はハケメのみのものとハケメ後ヘラミガキされるものがある。口縁部から頸部にかけて横走沈線をもつ。

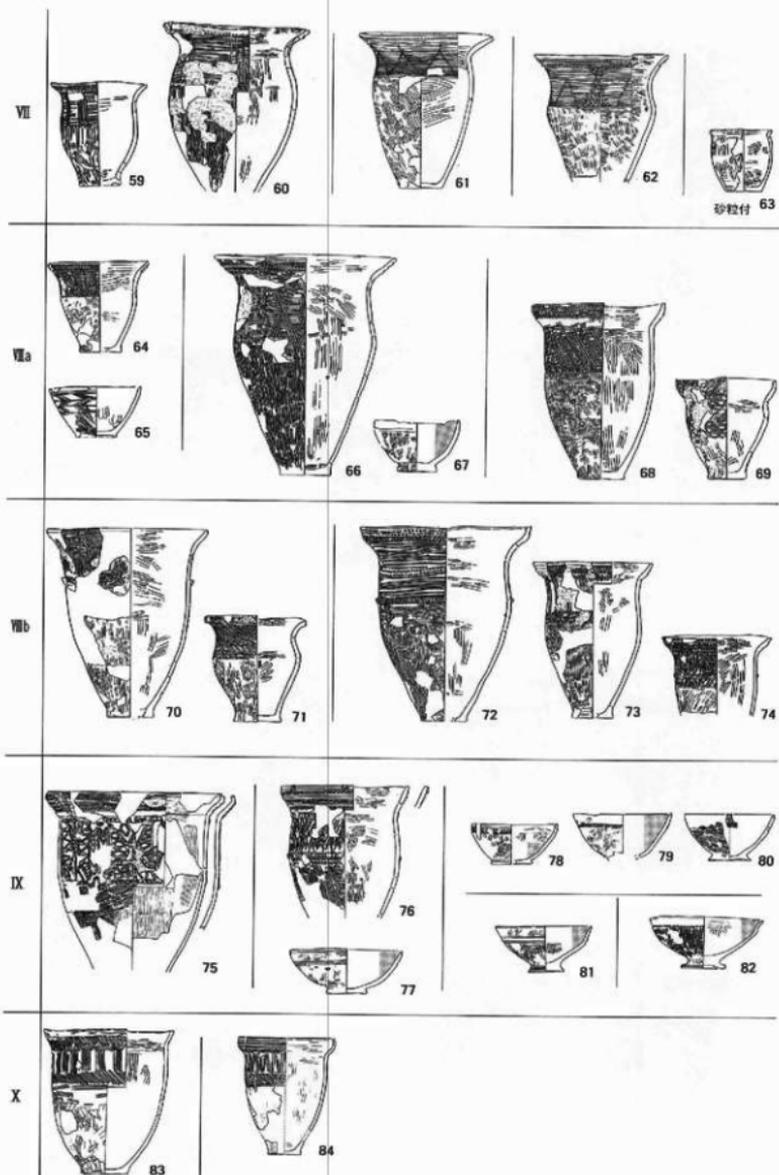
坏：平底、平底風で口縁部は直立するものと内傾するものがある。調整は内外面ともにヘラミガキされるが口縁部のみナデが施される例もある。



図III-63 弥文時代の土器(1)



図III-64 縄文時代の土器(2)



図III-65 埴文時代の土器(3)

表III-20 まとめ掲載土器一覧

土器No	名称	調査年度・北埋調査	土器No	名称	調査年度・北埋調査
1	甕	平成元年度 62集	43	甕	昭和56年度 7集
2	〃	〃 〃	44	球胴甕	〃 〃
3	〃	平成4年度 83集	45	坏	〃 〃
4	〃	〃 〃	46	〃	〃 〃
5	〃	昭和56年度 7集	47	甕	平成4年度 83集
6	坏	〃 〃	48	〃	〃 〃
7	〃	昭和57年度 8集	49	〃	〃 〃
8	高坏	平成4年度 83集	50	〃	〃 〃
9	甕	昭和56年度 7集	51	〃	昭和62年度 44集
10	〃	平成元年度 62集	52	〃	昭和56年度 7集
11	〃	平成3年度 77集	53	〃	平成5年度 89集
12	〃	昭和56年度 7集	54	坏	〃 〃
13	〃	〃 〃	55	〃	〃 〃
14	〃	平成4年度 83集	56	〃	〃 〃
15	坏	〃 〃	57	〃	〃 〃
16	〃	〃 〃	58	〃	〃 〃
17	〃	〃 〃	59	甕	〃 〃
18	球胴甕	昭和56年度 7集	60	〃	〃 〃
19	甕	〃 〃	61	〃	平成4年度 83集
20	球胴甕	〃 〃	62	〃	昭和62年度 44集
21	坏	〃 〃	63	〃	平成5年度 89集
22	甕	平成4年度 83集	64	〃	〃 〃
23	〃	〃 〃	65	坏	〃 〃
24	坏	〃 〃	66	甕	〃 〃
25	〃	〃 〃	67	坏	〃 〃
26	〃	〃 〃	68	甕	〃 〃
27	甕	〃 〃	69	〃	〃 〃
28	坏	〃 〃	70	〃	〃 〃
29	甕	〃 〃	71	〃	〃 〃
30	坏	〃 〃	72	〃	〃 〃
31	甕	平成5年度 89集	73	〃	〃 〃
32	坏	〃 〃	74	〃	〃 〃
33	〃	〃 〃	75	〃	昭和60年度 24集
34	甕	平成4年度 83集	76	〃	平成5年度 89集
35	坏	〃 〃	77	〃	〃 〃
36	甕	平成元年度 62集	78	〃	〃 〃
37	〃	〃 〃	79	坏	〃 〃
38	坏	〃 〃	80	〃	〃 〃
39	〃	〃 〃	81	〃	〃 〃
40	甕	昭和56年度 7集	82	〃	〃 〃
41	〃	〃 〃	83	甕	平成4年度 83集
42	〃	平成元年度 62集	84	〃	平成元年度 62集

V類 (40~46)

甕：口縁部は外反し、体部上位が張り出す。頸部に段をもつものが多い。頸部あるいは口縁部から頸部にかけて横走沈線をもつ。調整は口縁部ナデ、体部ハケメのみのもとのハケメ後にヘラミガキされるものがある。口唇部の一部に短刻文が施される。大小の大きさのものがある。

球胴壺：口縁部は外反し、体部上位に最大径をもつ。口縁部から体部上位はヘラミガキ、体部中位はヘラケズリされる。内面はヘラミガキされる。

坏：口縁部は外反し、体部下位に沈線をもつ。口縁部はナデ、体部内外面ヘラミガキで黒色処理される。

須臾器：回転ヘラ切りの皿形のものがある。

VI類 (47~58)

甕：口縁部は外反し、体部中位が張り出すものが多い。口縁部ナデ、体部はハケメあるいはハケメ後ヘラミガキされるものがある。口縁部~体部上位にかけて横走沈線が施されるものが多い。口唇部に短刻文をもつ。このほか回転ヨコナデ、糸切りの甕がある。

坏：体部が内彎する碗形に近いものが多い。成形は回転ヨコナデ、底部は回転糸切りである。内面は黒色処理されるものが多い。

VII類 (59~63)

甕：口縁部は外反し、口唇断面は丸味をもつ。体部中位は張出すものが多い。口縁部はナデられ体部・底部はハケメもしくはヘラミガキされる。口唇部の短刻文が口縁部寄りに下がり、肩部につくものもある。口縁部から体部上位にかけて横走沈線が施され、そのうえから縦位・斜位の沈線が重ねられるものが多い。甕にはこのほか無文で底面に砂粒の付着したものがある。

VIII類 (64~69)

VIII類は貼付圓綫帯をもつものともたないものに分けられる。もつものをVIII b、もたないものをVI a とした。

甕：口縁部は外反し、上部が直立するものがある。調整はヘラミガキとハケメがある。口縁部・体部中位には短刻文が施される。口縁部のは矢羽根状に数段にわたり施される。体部上半には斜格子状文、山形文などが密に施される。大きさには大小のものがある。

坏：碗形で高台の付くものと付かないものがある。調整はいずれも、ヘラミガキされる。高台のないものは口縁部に横襻する沈線もち、体部には矢羽根状の細い沈線がつく。台付きのものは口縁に1条の横走沈線をもつ。内面は黒色処理される。

VIII b類 (70~74)

甕：口縁部は外反し、端部が内傾するものが多い。体部中位がややふくらむ。調整はヘラミガキとハケメがある。ヘラミガキされるものが多い。体部上位に貼付圓綫帯をもつが、伴出したものの中には71のようにもたないものもある。貼付帯上には短刻文、同心円状・X型などの文様がつく。体部上半の文様はVIII a類とほぼ同様であるが横走沈線を下地にしないものもある。大きさは大小がある。

IX類 (75~82)

甕：口縁部は強く屈曲するものが多い。口端部が内傾して直立するものがある。調整はハケメが多い。体部上半の文様帯は横走沈線を下地としないで、矢羽根、山形などの文様を密に施される。複段あるいは縦の沈線による区画をもつものもある。体部上位に貼付圓綫帯・口縁部に貼瘤をもつものがある。

坏：体部が内彎気味で高台をもつ。体部はヘラミガキされ、内面はヘラミガキ後に黒色処理される。

口縁部に横走沈線をもつものが多い。

高坏：体部中位から上位で屈曲する。脚は低く、裾部に沈線による段がつく。内外面ともにヘラミガキされ、内面は黒色処理が施される。口縁部は沈線・短刻文がつく。

X類 (53・84)

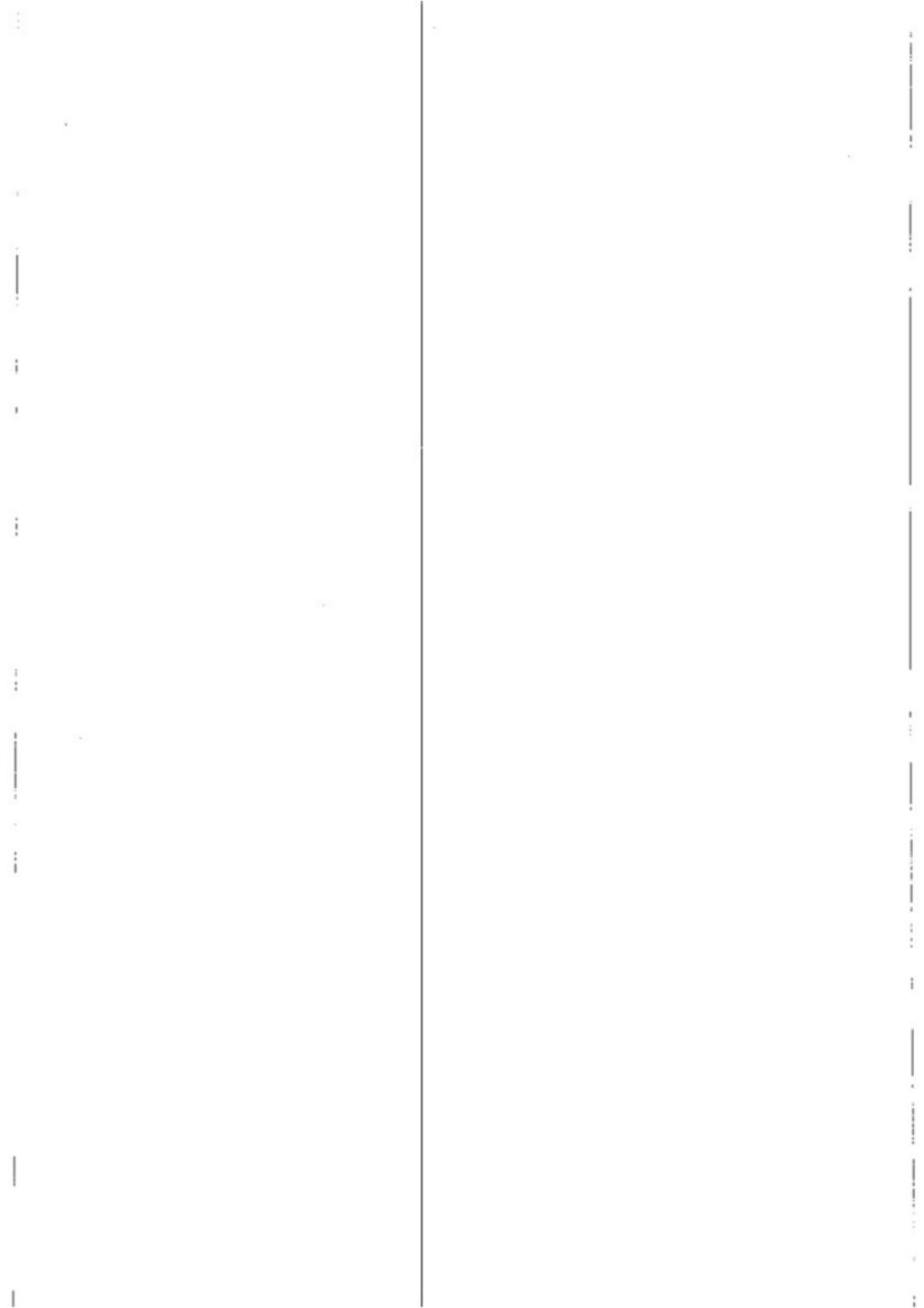
甕：小型である。口縁部は屈曲して外傾するものと、直立するものがある。口縁部はナデ、体部、内面はヘラミガキされる。短刻文は失われ矢羽根状の沈線になる。体部上半の文様帯は無文地に縦位、斜位の沈線が施される。

宇田川洋氏の編年(宇田川1979)ではI類は早期、II～VI類は前期、VII・VIII類は中期、IX・X類は後期に相当するものと考えられる。

I類は十勝茂寄式(大沼1979、1989)に相当する、3・4は狭義の北大III式と十勝茂寄式が伴出した例である。これらには東北部の栗田式と併行する坏が伴うものと考えられ、その年代は7世紀前半と推定される。ただし5・6の伴出例では北大III式の甕と8世紀前半のものと思われる坏が出土している。坏の形態のみで年代を決定できない例である。V類の回転ヘラ切りの須恵器は8世紀後半から9世紀初頭のものと考えられる。VI類は回転糸切り底の坏がサクシュコトニ川遺跡の例からみて9世紀のものと考えられる。VII類の無文で底面に砂粒の付着した甕は東北地方北部の例から10世紀ごろのものと考えられる。VIII・IX類の貼付縄帯のつくものは蓬田大館遺跡の例からみて11世紀ごろに位置づけられる。これらの土器のうちVII類までは白頭山-苫小牧火山灰(B-Tm)の下から出土している。このようにみていくと、I類は7世紀前半～8世紀初頭、II類は8世紀前半、III類は8世紀中葉、IV類は8世紀後半～9世紀初頭、V類は9世紀中葉、VI類は9世紀後葉～10世紀前葉、VII類は10世紀中葉～10世紀後葉、VIII類は11世紀前葉～中葉、IX類は11世紀後葉～12世紀前葉、X類は12世紀中葉となろう。(佐藤 和雄)

文 献

- | | | | |
|---------|------|-------------------|--------------|
| 宇田川 洋 | 1979 | 「70年代縄文文化の研究」 | どるめん22号 |
| 大沼 忠 善 | 1979 | 「北海道中央部の縄文文化」 | 〃 |
| 〃 | 1989 | 「北海道の文化 古代史復元9」 | |
| 道庁文センター | 1981 | 「美沢川流域の遺跡群」 | V 北郷調報7 |
| 〃 | 1982 | 〃 | VI 〃 8 |
| 〃 | 1985 | 〃 | IX 〃 24 |
| 〃 | 1987 | 〃 | XI 〃 44 |
| 〃 | 1988 | 〃 | XII 〃 58 |
| 〃 | 1989 | 〃 | XIII 〃 62 |
| 〃 | 1991 | 〃 | XV 〃 77 |
| 〃 | 1992 | 〃 | XVI 〃 83 |
| 横山 英 介 | 1990 | 「縄文文化」『考古学ライブラリー』 | 59 ニューサイエンス社 |



付 篇 美々 8 遺跡出土の動物遺存体

千歳市教育委員会 高 橋 理

はじめに

平成5年度の美々8遺跡の発掘調査では、第1黒色土層の上面において多量の焼土構構と骨片集中地点が検出された。このうち筆者に対して、25ヵ所の焼土と7ヵ所の骨片集中地点から回収された動物遺存体の分析が依頼された。

遺物の回収には調査時に土壌ごとサンプリングし、乾燥後土壌中より直接遺存体を取り上げるという方法がとられた。検出された動物遺存体はいずれも強く被熱しており、細片化し、また変形をきたしている。

出土した動物遺存体を表1・2に示した。表中には動物遺存体の種名(科・種)、遺存部位を示し、出土量は数量(点数)と重量の2法表記とした。なお、「椎骨 他」とあるのは椎骨以外にも遺存部位があるが、区別せずに秤量したものである。

出土動物遺存体

種レベルまで固定できた動物遺存体は多くはない。主体となるのはサケ科魚類である。内水域のサケ科魚類は認められず、遼河性のサケ科魚類が主体であろう(シロザケ *Oncorhynchus keta*など)。椎骨片と脱落歯が最も多いが、歯の植立した顎骨片や棘、関節骨あるいは角舌節骨、関節骨など他の特定できる部位も伴っており、遺存部位の偏在性はないものと考えられる。なお歯は著しく内湾したものが多く、魚類ではサケ科の他にコイ科魚類の椎骨が少量混在する。おそらくウグイクラスのそれと推定される。咽頭骨、咽頭歯は検出されていない。また焼土13において、ニシン科の椎骨が1点出土している。

哺乳類と考えられる遺存体ではシカ(エゾシカ *Cervus nippon yesoensis*)が認められた。角部のみが部位同定できたが、他の破片もシカのものである可能性は高い。また鯨類あるいは海獣類と考えられる遺存体が骨片集中6に認められた。このうち1点に金属器によると考えられる切断痕が観察された。

まとめ

平成5年度に発掘調査が行われた地点は、昭和56年度と同じく北海道埋蔵文化財センターによって調査(以下「前回の調査」という)が行われた(北海道埋蔵文化財センター 1981)地点の北に隣接する地域である。前回の調査区は美沢川左岸(北岸)の尾根の鞍部から北に落ちる斜面部であり、今回の調査区はその斜面下端および標高17m前後の狭い谷部および北に向かつてのぼる斜面部にあたる。

前回の調査においては前述した尾根の鞍部の第I黒色土層上面(標高21m付近)で焼土、貝(カワシンジュガイ)や骨の集中が認められ、同時に検出された柱穴群と関連づけられて、中世から近世初頭の建物の炉であろうとの推定がなされた(前出 p.24)。焼土や骨片集中地点からはサケ科魚類、シカ(エゾシカ)のほかカワシンジュガイ、アカニシ、ホッキガイ?、ホクテガイ、大型のクジラなどが出土し、今回と比較して種類が多く、特に海産の動物遺存体が多かったようである。今回出土した焼

土、骨片集中は前回に比してかなり低い位置（斜面下端～谷部）に立地している。柱穴様の小ピットとの整合は認められない（調査者所見）こともあり、同じ第I黒色土層上面検出ではあってもその性格は異なる遺構であることも考えられようか。

引用文献

財団法人 北海道埋蔵文化財センター 1981 『美尻川流域の遺跡群V—新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書』

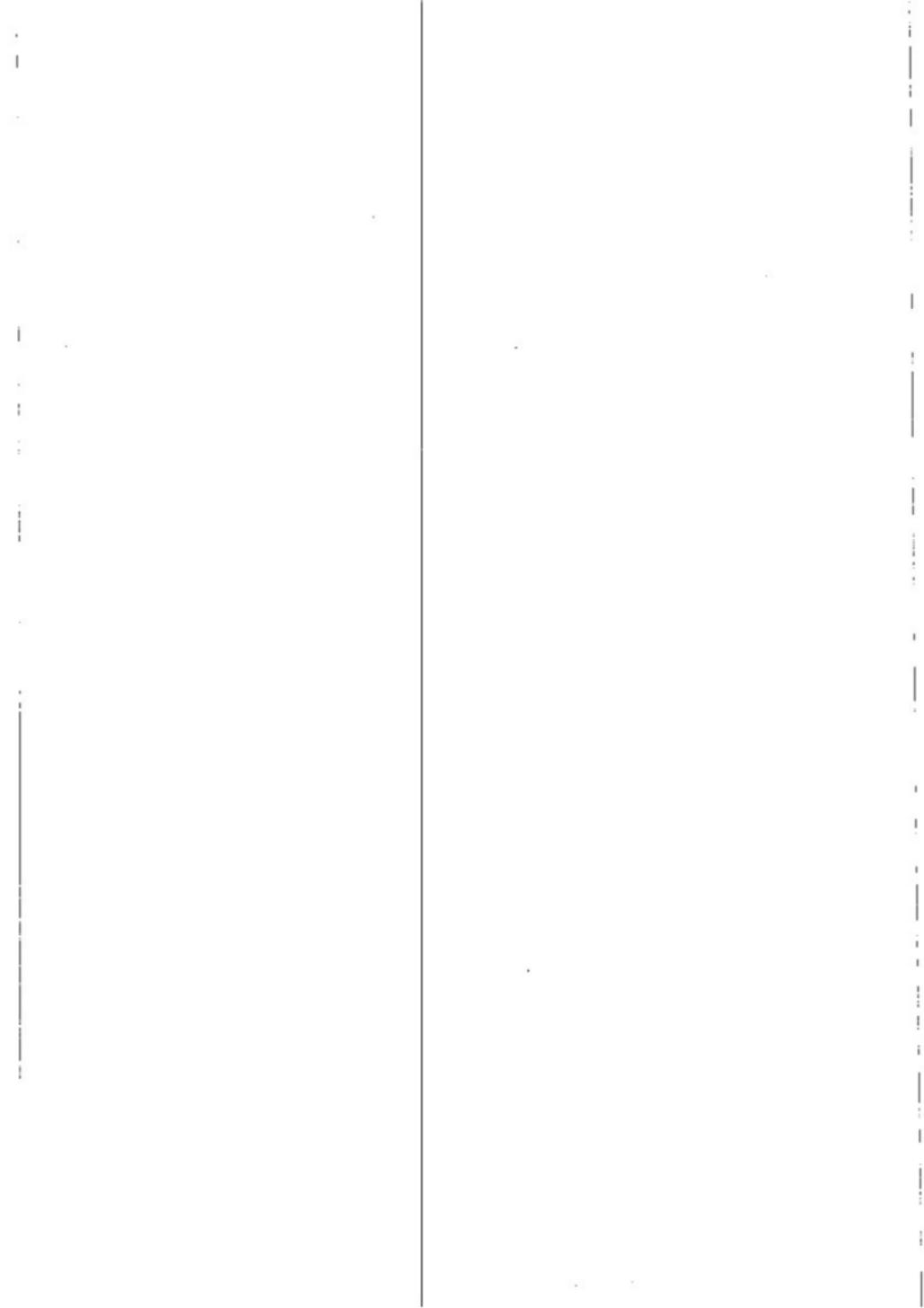
表1 出土動物遺存体一覧(1)

遺構名	検出区	検出層(回目)	種名(科・種)	遺存部位	数量(点)	重量(g)	備考
焼土1	d-63-87	I B-1	哺乳類	?		1.8	
焼土2	d-64-80	I B-2	哺乳類(シカ?)	鹿角片?		3.1	
			c-64-13	I B-1	サケ科	歯	
		椎骨他				3.7	
				棘	1		
焼土4	c-64-14	I B-1	サケ科	歯		0.1>	
				椎骨他		2.3	
			哺乳類	?		3.0	
焼土5	c-64-13	I B-1	サケ科	椎骨他	2		
			コイ科	椎骨	1		ウグイ?
			哺乳類	?		2.9	
焼土6	c-64-13	I B-1	サケ科	歯		0.1	
				椎骨他		0.3	
			哺乳類?	?		3.4	
焼土7	c-64-13	I B-1	サケ科	歯		0.2	
				椎骨他		1.0	
			哺乳類	?		0.5	
焼土8	c-64-13	I B-1	サケ科	歯		0.1>	
				椎骨他		3.6	
			コイ科	椎骨		0.2	ウグイ?
			哺乳類	?		3.2	
焼土9	c-64-13	I B-1	サケ科	歯		0.4	
				椎骨他		12.1	
			コイ科	椎骨	4		ウグイ?
			哺乳類	?		0.3	
焼土10	c-64-13	I B-1	?	?		0.1>	
焼土11	c-64-23	I B-1	サケ科	歯		0.2	
				椎骨他		8.4	
焼土12	c-64-23	I B-1	サケ科	歯		0.3	
				椎骨他		12.5	

表2 出土動物遺存体一覽(2)

遺構名	検出区	検出層(目)	種名(科・種)	遺存部位	数量(点)	重量(g)	備 考
焼土13	c-64-23	I B-1	サケ科	歯		1.4	
				椎骨他		52.7	
				コイ科	椎 骨	3	
			ニシン科	椎 骨	1		
焼土14	c-64-23		サケ科	歯		0.1	
				椎骨他		0.6	
焼土15	c-64-23		サケ科	歯		0.2	
				椎骨他		6.0	
焼土16	c-64-23	I B-1	サケ科	歯		0.3	
				椎骨他		6.4	
焼土17	c-64-23	I B-1	サケ科	椎 骨		0.8	
焼土18	c-64-23	I B-1	サケ科	椎骨他		0.6	
焼土19	c-64-24	I B-1	サケ科	歯		0.7	
				椎骨他		17.9	
焼土20	c-64-23	I B-1	?	?		0.1	
焼土21	c-64-24	I B-1	サケ科	歯		0.2	
				椎骨他		4.7	
焼土22	c-64-24	I B-1	サケ科	歯		0.2	
				椎骨他		7.2	
				鱗	2		
焼土23	c-64-44	I B-1	?	?		0.1 [±]	
焼土24	c-64-35	I B-1	サケ科?	?	6		

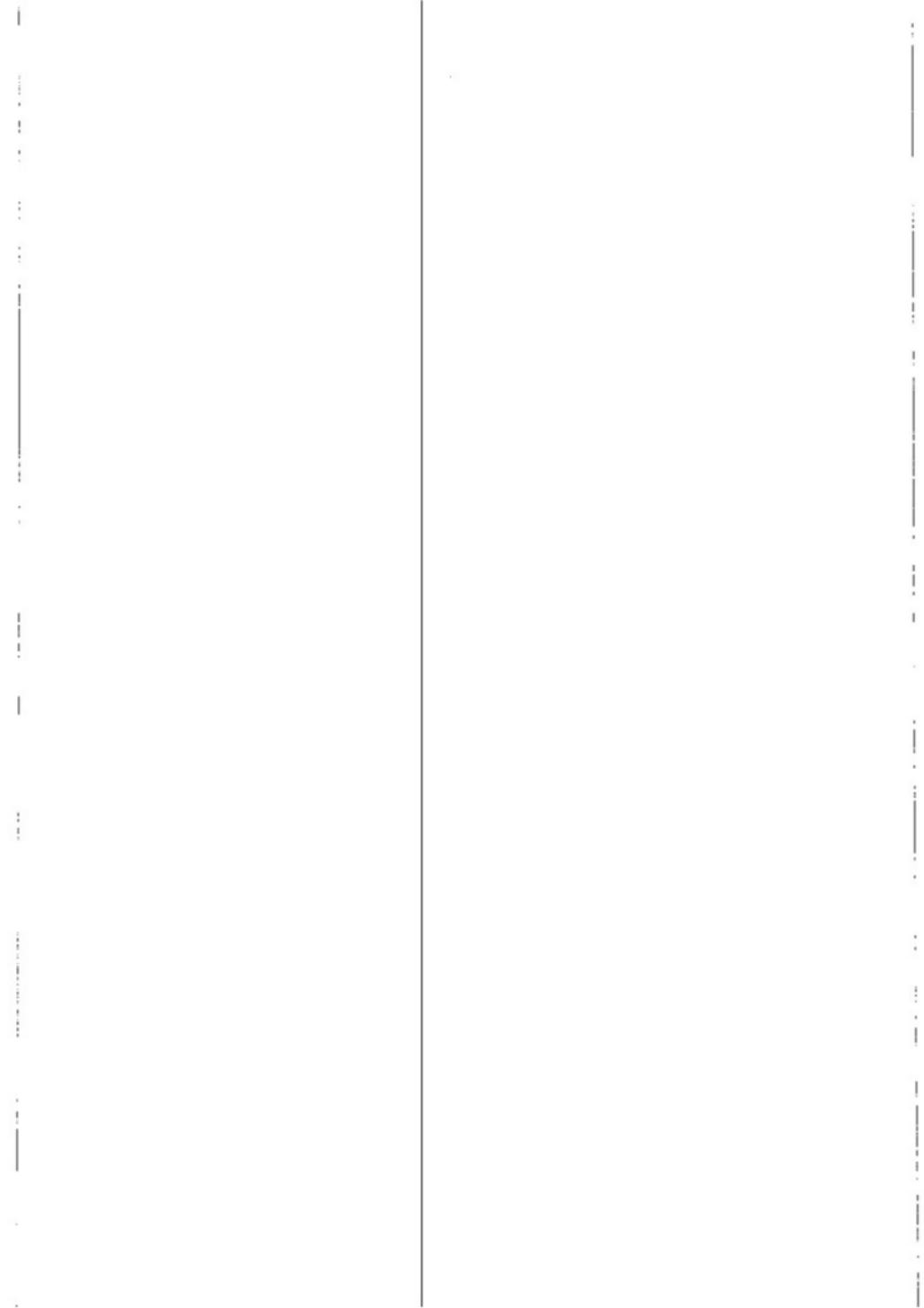
集中1	d-64-51	I B-1	哺乳類(シカ他)	鹿角他		39.2	
集中2	d-64-82	I B-2	哺乳類	?		22.8	
集中3	d-64-70		哺乳類(シカ他)	鹿角他		3.2	
集中4	d-64-70	I B	サケ科	歯	2		
				椎 骨	3		
			哺乳類			7.4	
集中5	d-64-80	I B-1	サケ科	椎 骨		0.1	
				哺乳類(シカ?)	鹿角?		9.7
集中6	c-62-12	I B-1	鯨類or海獣類?	?	1.9		骨表面粗 金属器による切断痕?
集中7	d-63-78	I B-1	哺乳類?	?	2.4		



写 真 図 版

II 美沢3遺跡 図版II-1~14

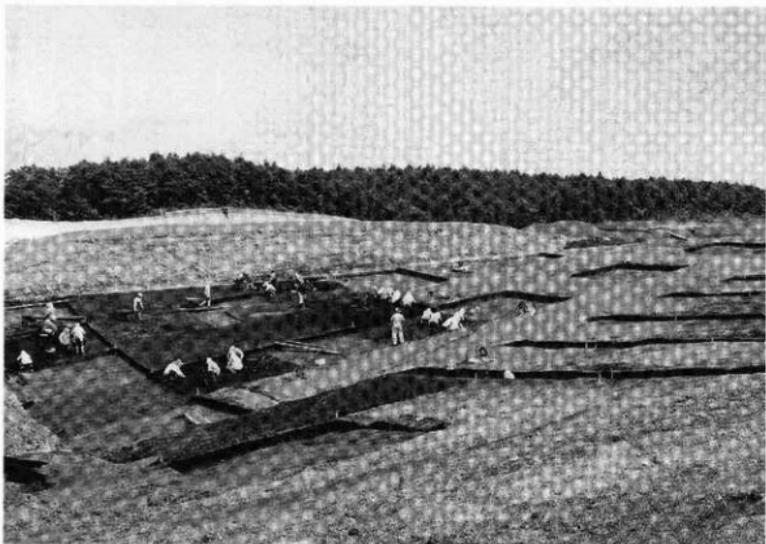
III 美々8遺跡 図版III-1~26



図版II-1



1 美沢3遺跡 A地区調査風景 (E→W)

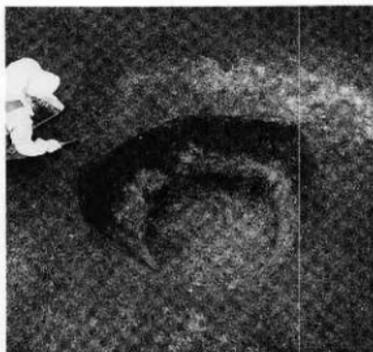


2 B地区調査風景 (NW→SE)

図版II-2



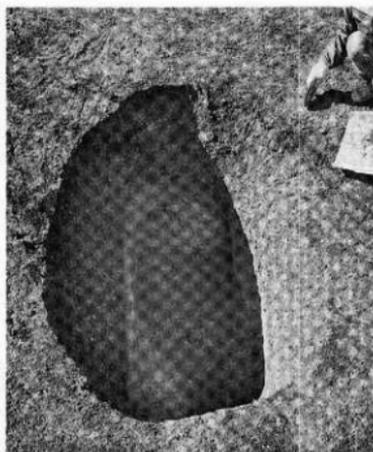
1 P-71 確認



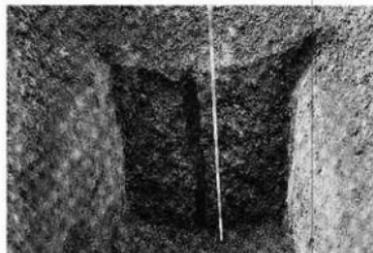
2 P-71



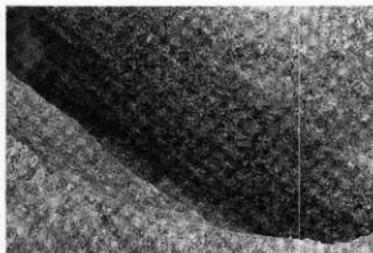
3 T-24



5 T-25

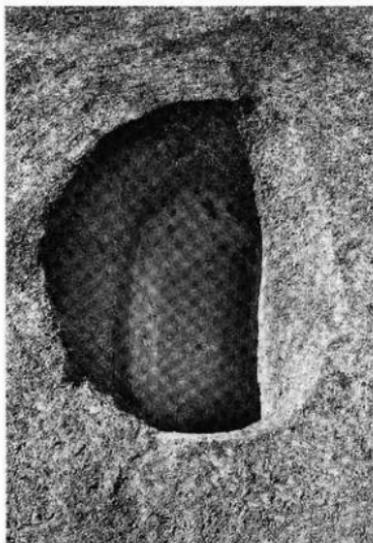


4 T-24 セクション



6 T-25 セクション

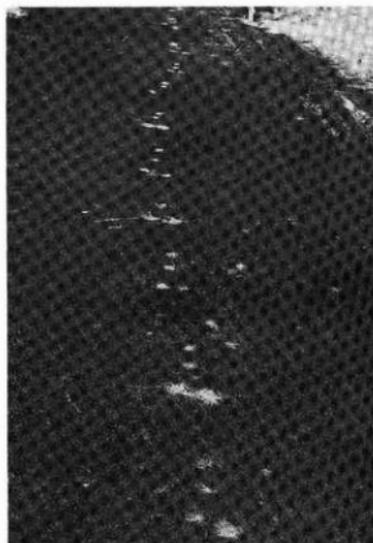
図版II-3



1 T-26



2 足跡-2 (キツネ)



3 足跡-4 (ウサギ)



4 足跡-5 (ヒト)

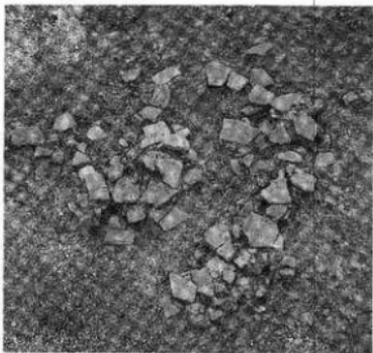
図版II-4



1 土器出土状況



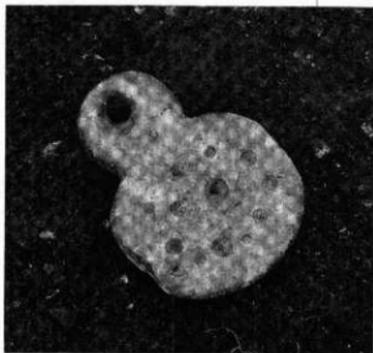
2 土器出土状況



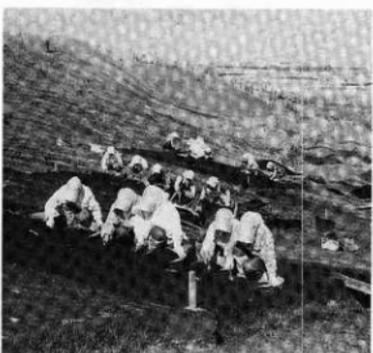
3 土器出土状況



4 土器出土状況

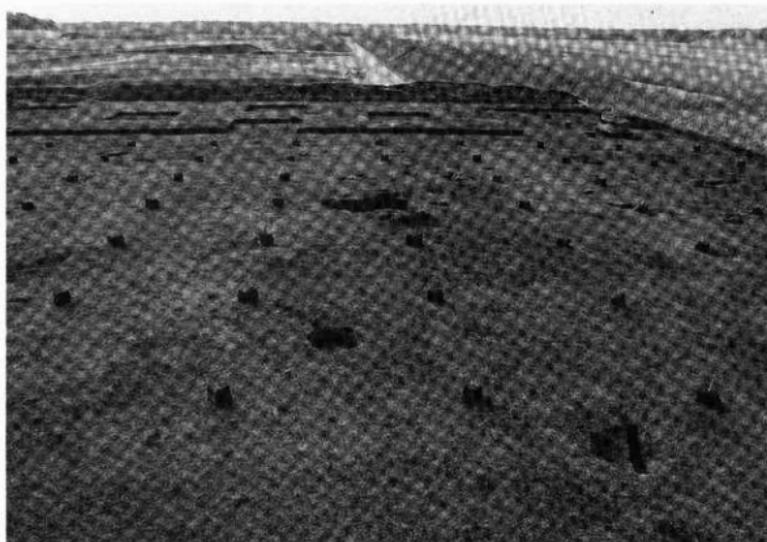


5 石製品出土状況



6 調査風景

図版II-5

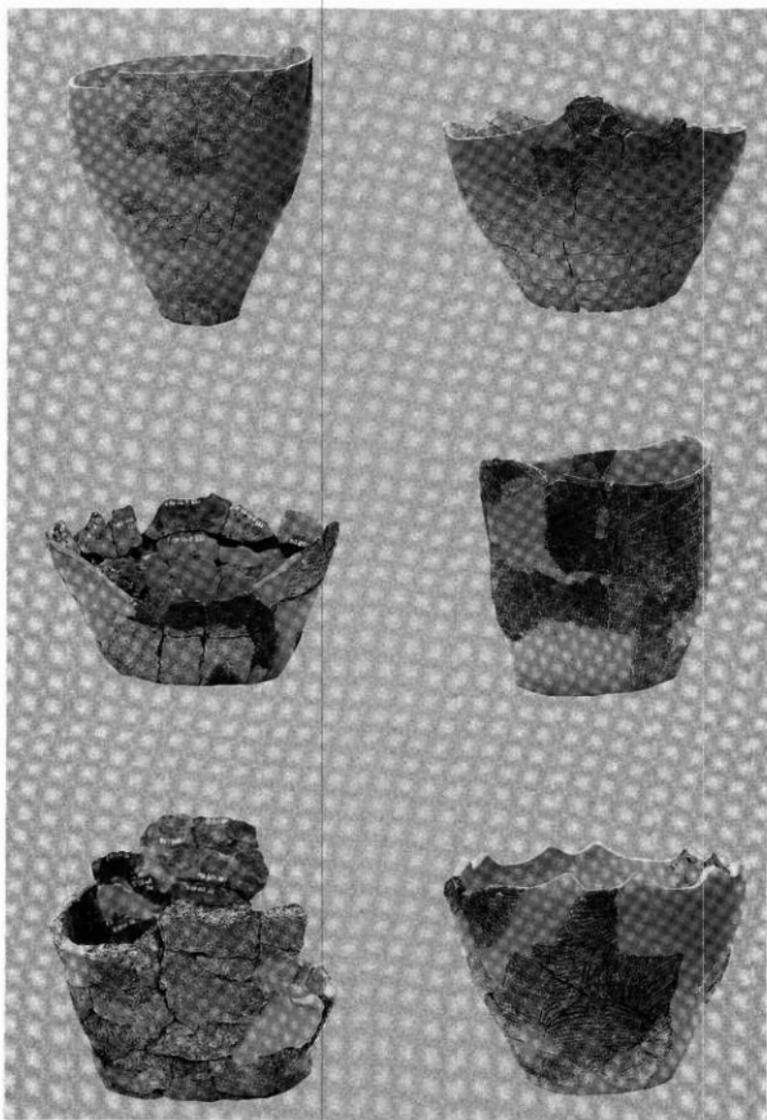


1 A地区 完掘状況 (N→S)



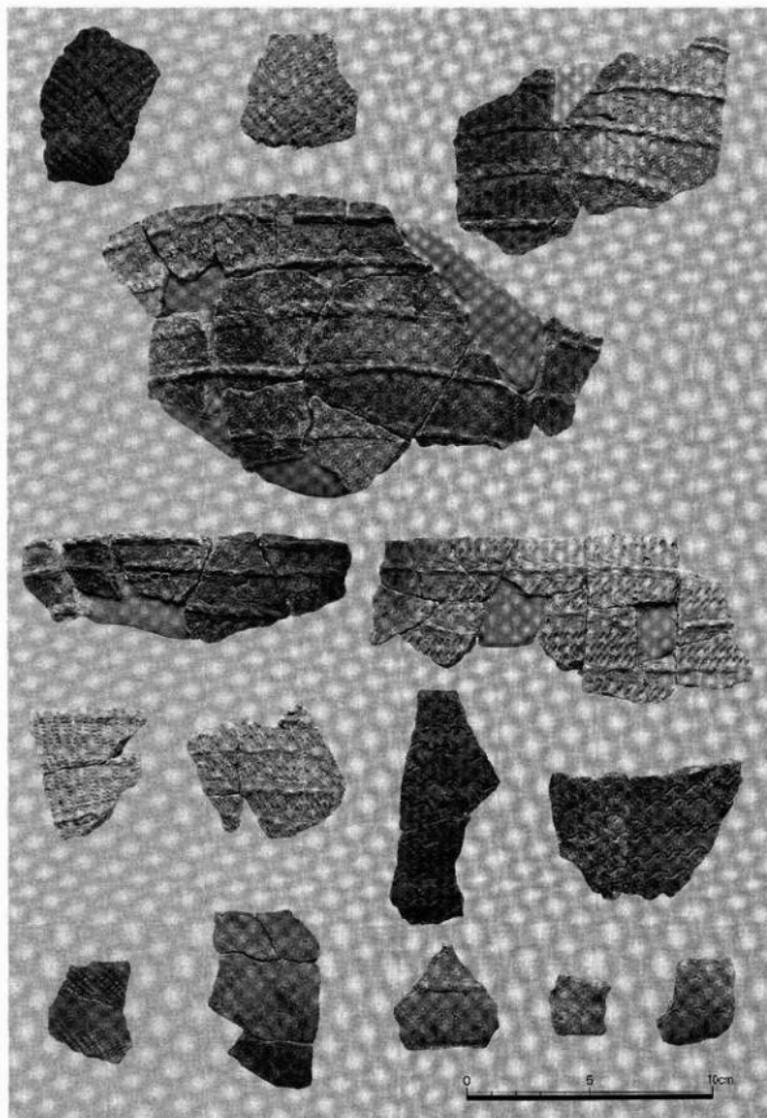
2 B地区 完掘状況 (NE→SW)

図版II-6

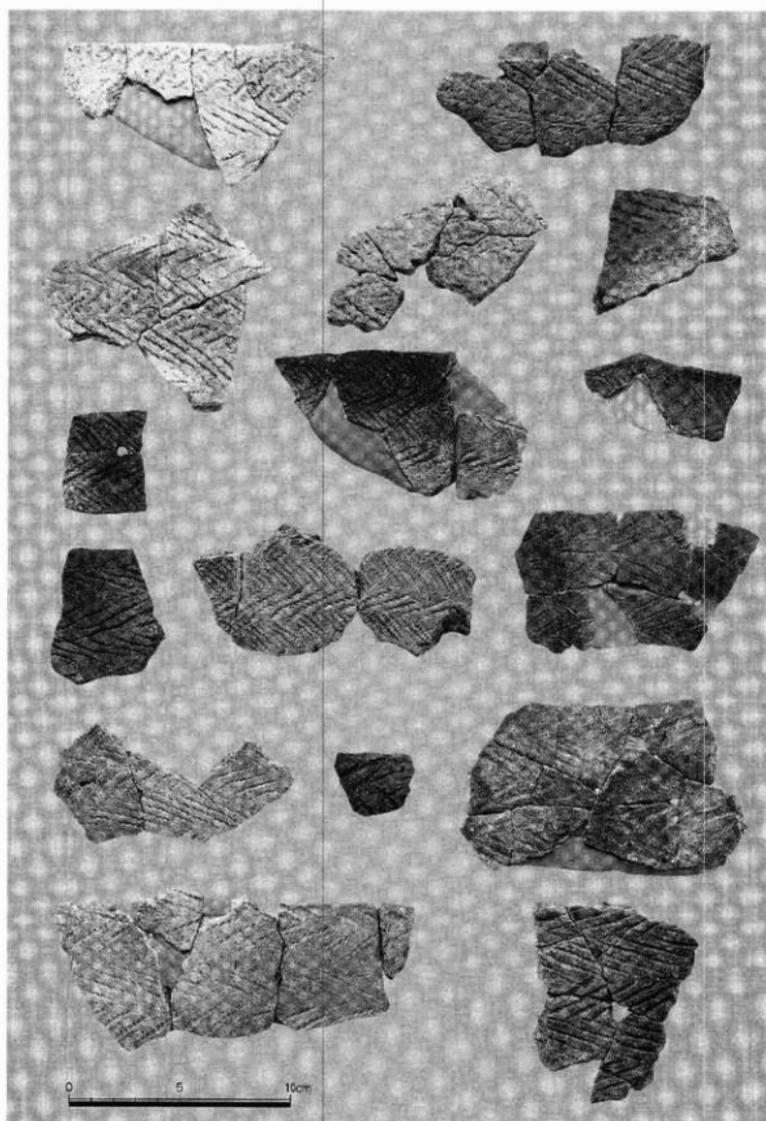


復元土器

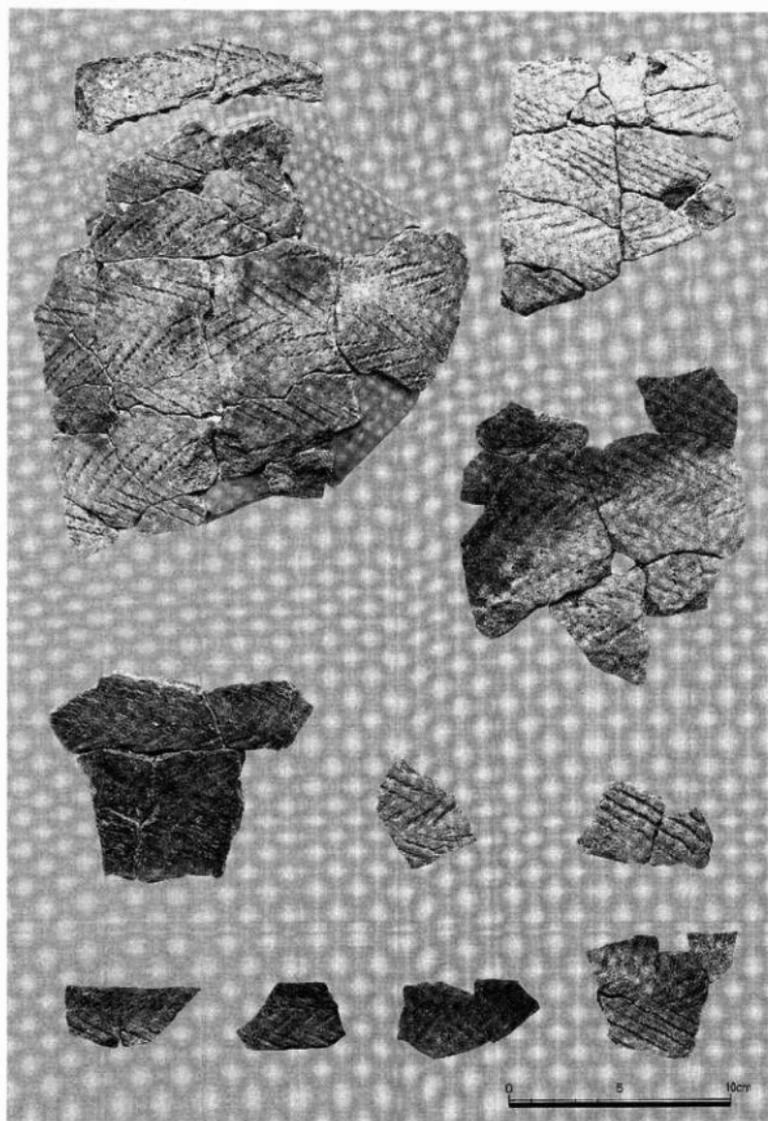
図版II-7



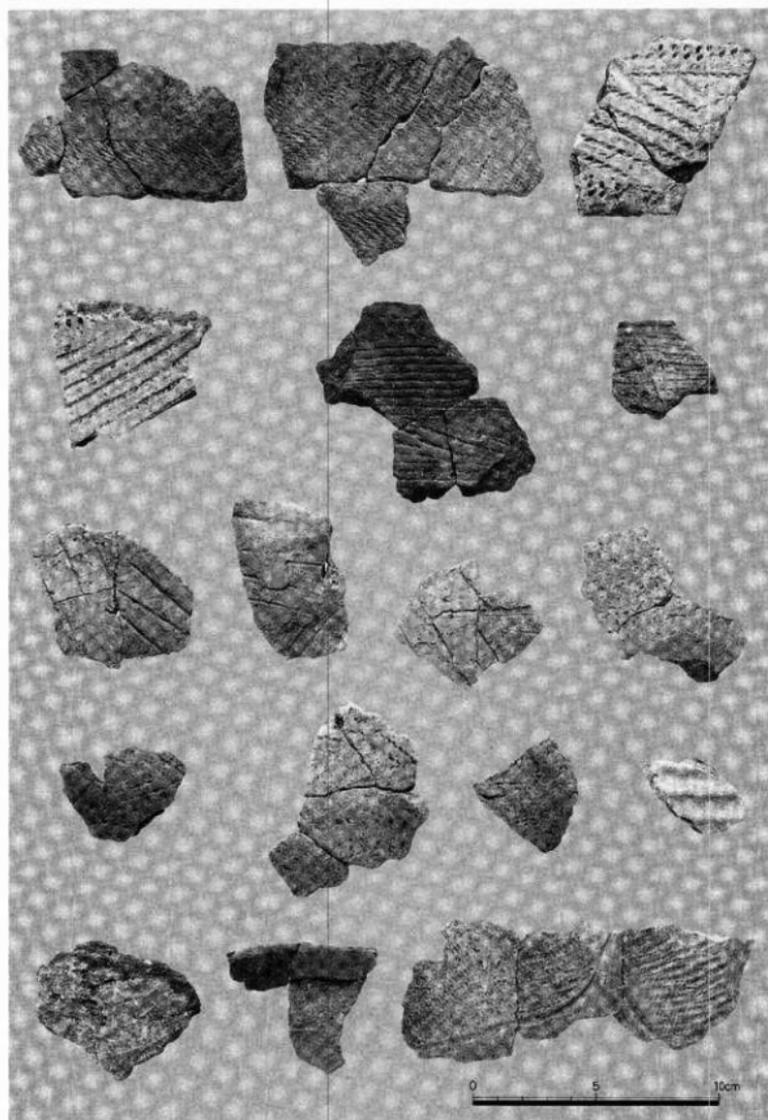
図版II-8



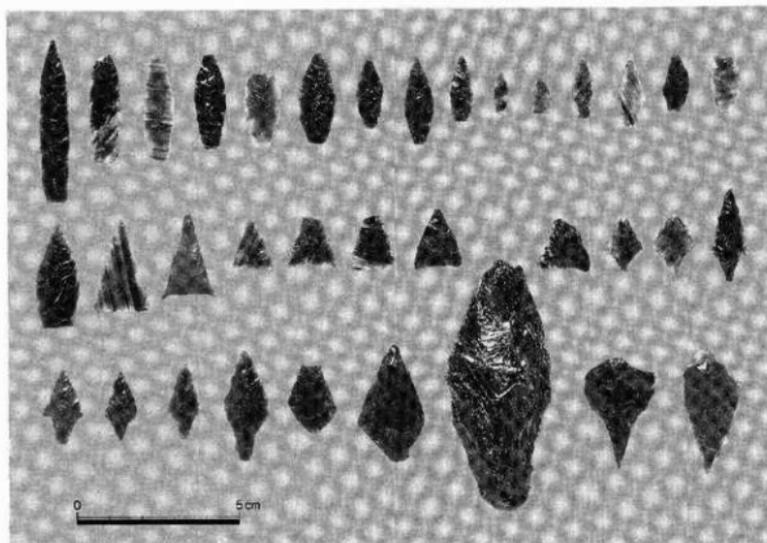
図版II-9



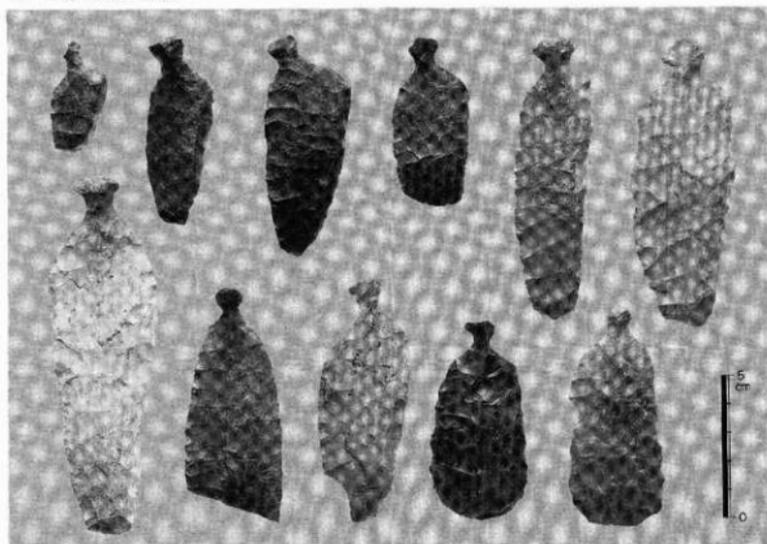
図版II-10



図版II-11

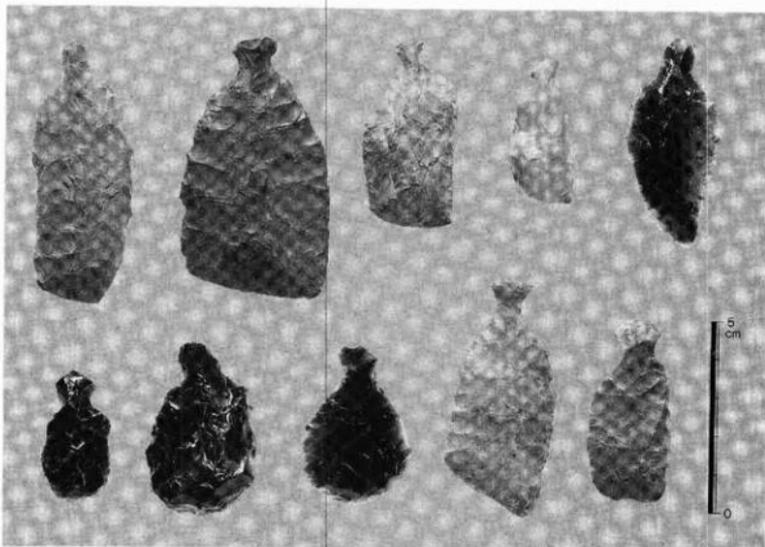


1 石鏃・槍先・石錐

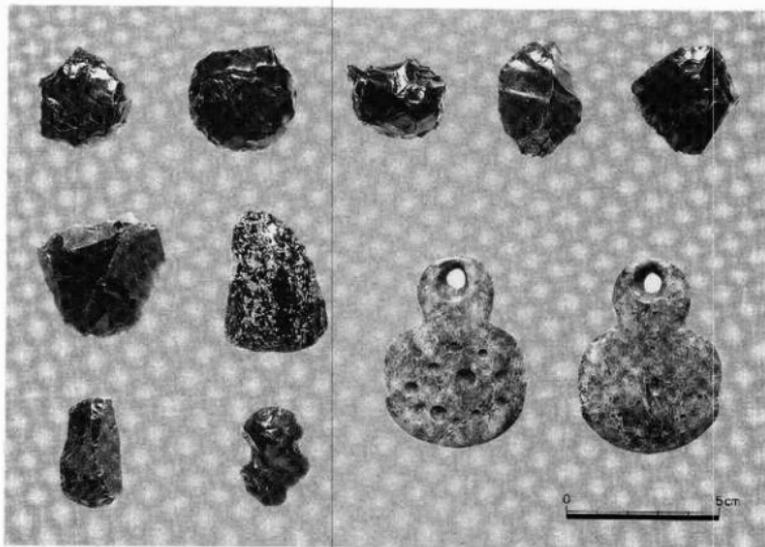


2 つまみ付きナイフ

図版II-12

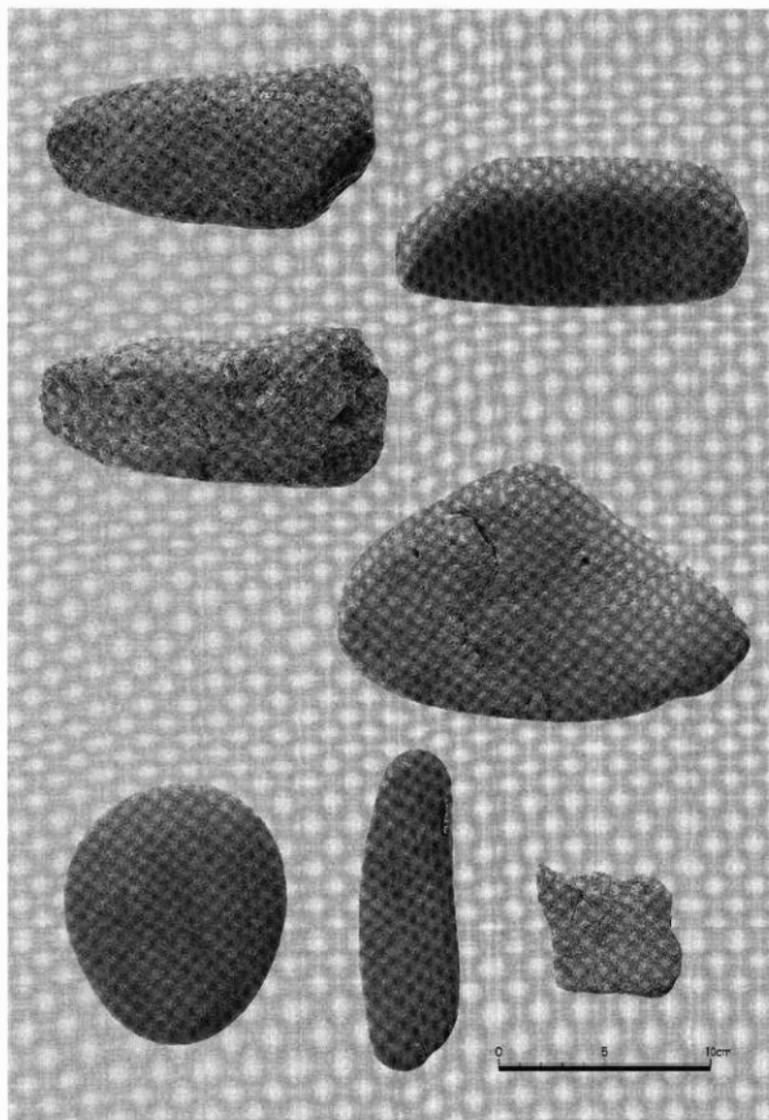


1 つまみ付きナイフ



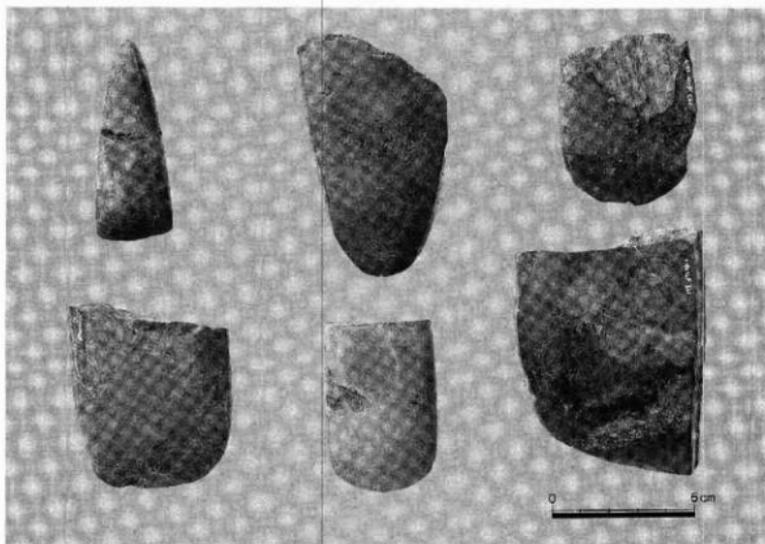
2 スクレイパー・石製品 (表裏)

図版II-13



礫石器

図版II-14



石斧

図版III-1



1 美々8遺跡 表土層調査風景 (NE→SW)

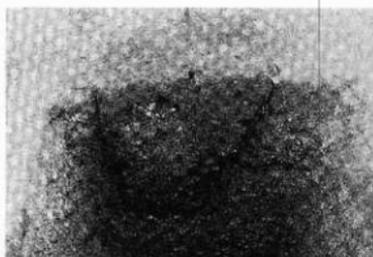
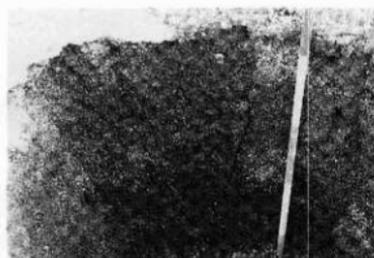
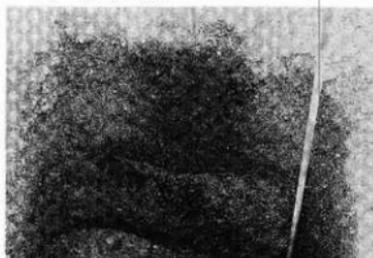


2 表土層 調査風景 (E→W)

図版III-2

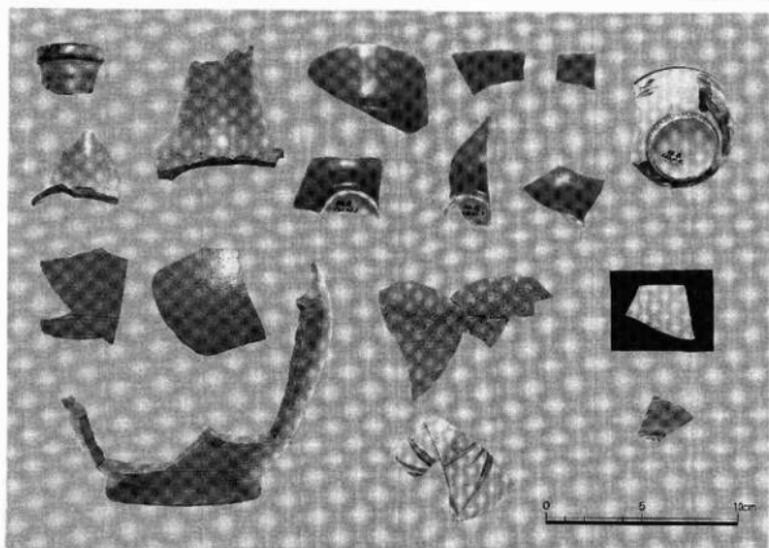


1 小ビット群 検出

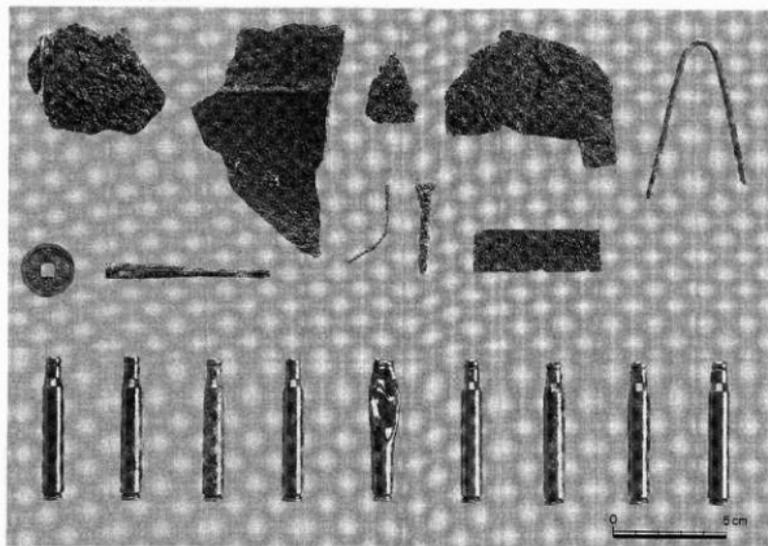


2 小ビットセクション

図版III-3



1 表土層出土の陶磁器



2 表土層出土の金属製品

図版III-4



1 火山灰除去作業風景 (SE→NW)



2 I 黒層 調査風景 (S→N)

図版III-5



1 I 黒層 調査風景 (焼土検出 S→N)



2 I 黒層 調査風景 (完掘前 W→E)

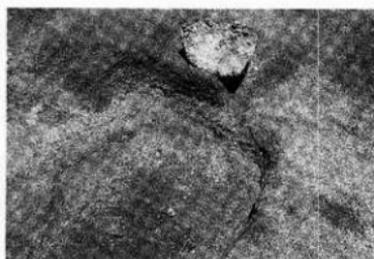
図版III-6



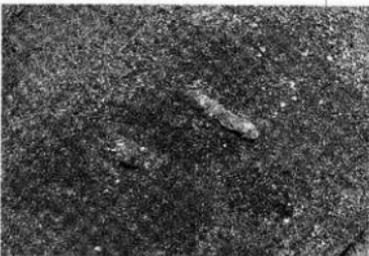
1 IP-1



2 IP-1 墓標穴



4 副葬品等出土状況

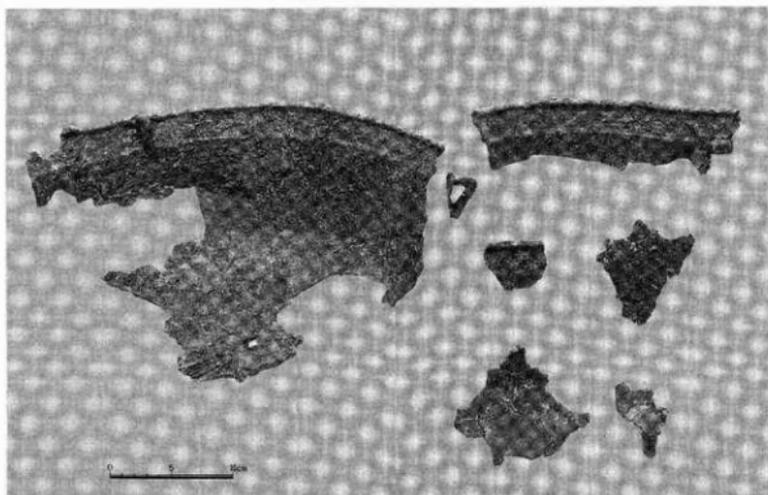


3 刀子・骨片 出土状況

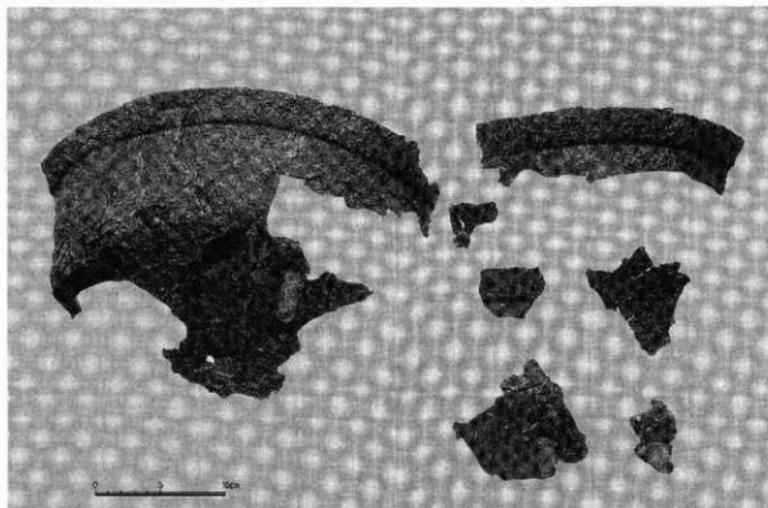


5 鉄鍋出土状況

図版III-7



1 IP-1 出土内耳鉄鍋（内面）



2 IP-1 出土内耳鉄鍋（外面）



3 IP-1 出土刀子

図版III-8



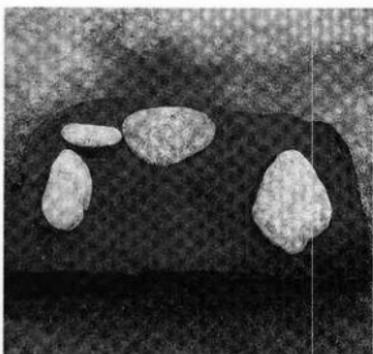
1 IS-58



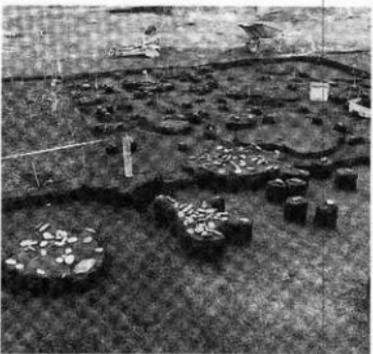
2 IS-40



3 IS-3



4 IS-41

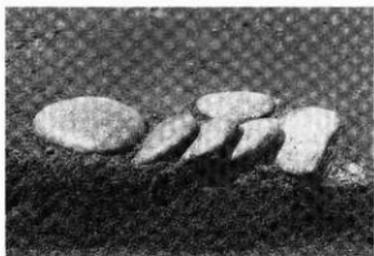


5 IS-12・9・8ほか集石検出状況



6 IS-13・37

図版III-9



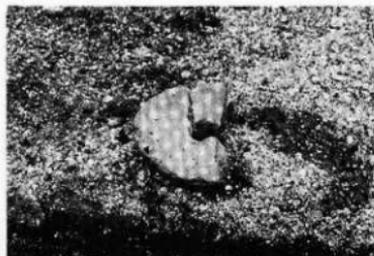
1 IS-44 セクション



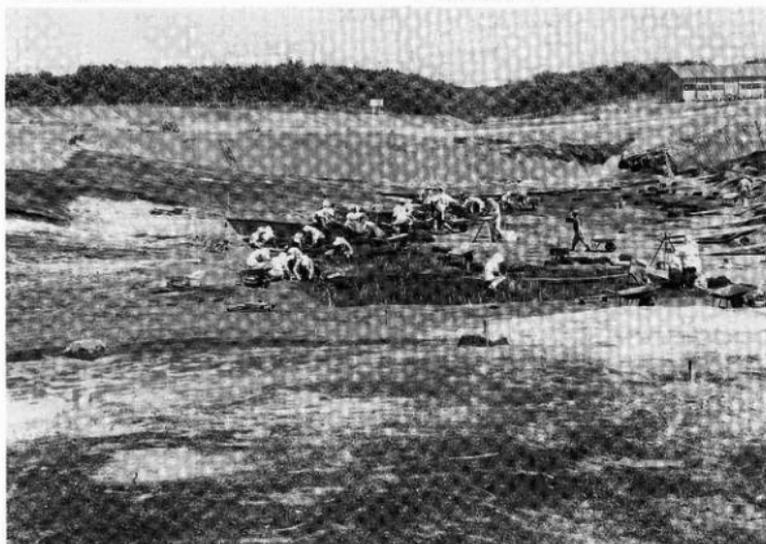
2 IS-44



3 土鍾出土状況



4 紡錘車出土状況

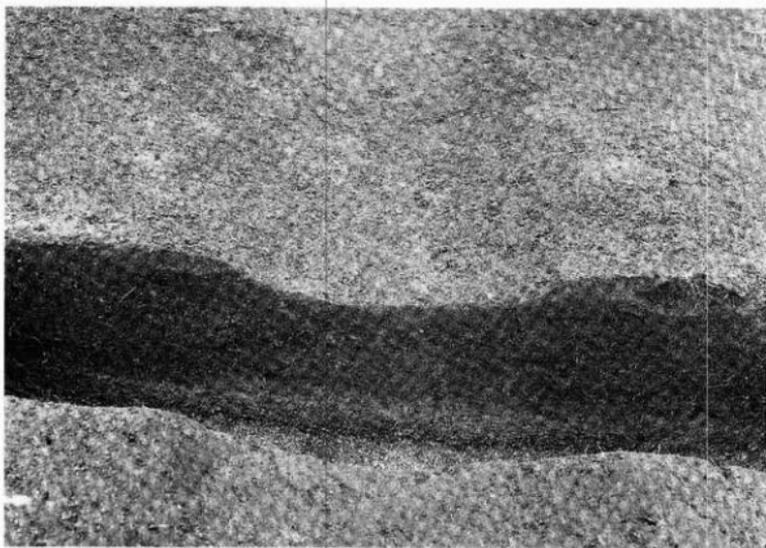


5 調査風景

図版III-10

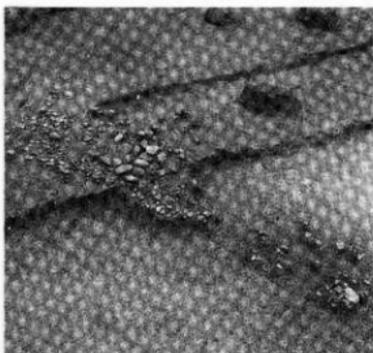
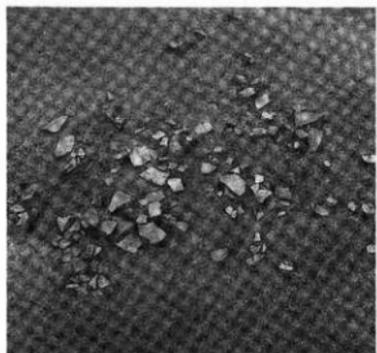
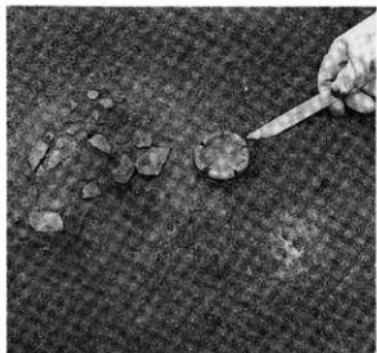


1 道跡-1



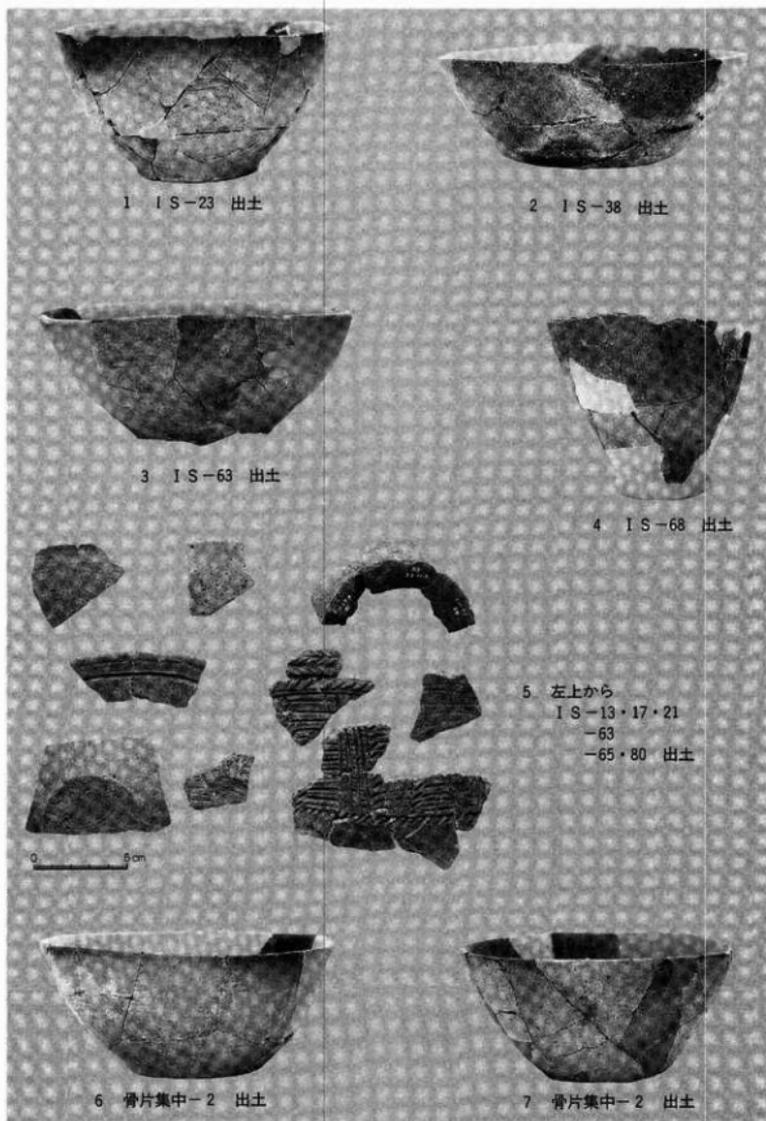
2 道跡-1 セクション

図版III-11



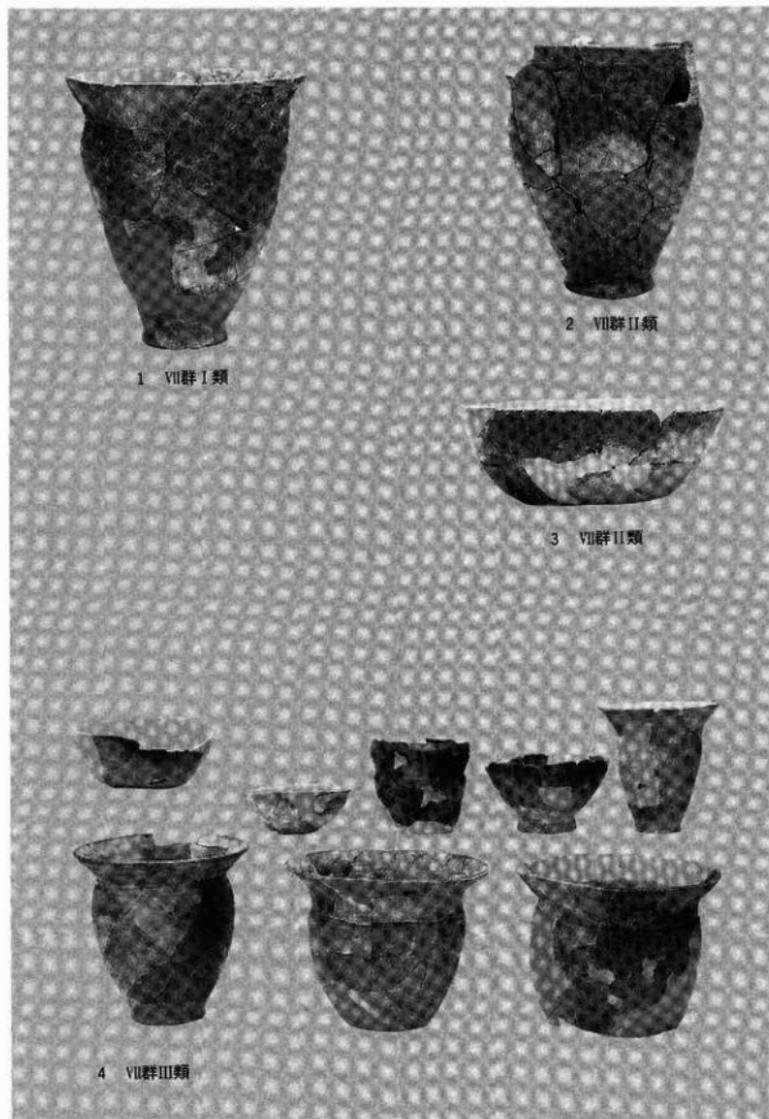
土器出土状況

図版III-12

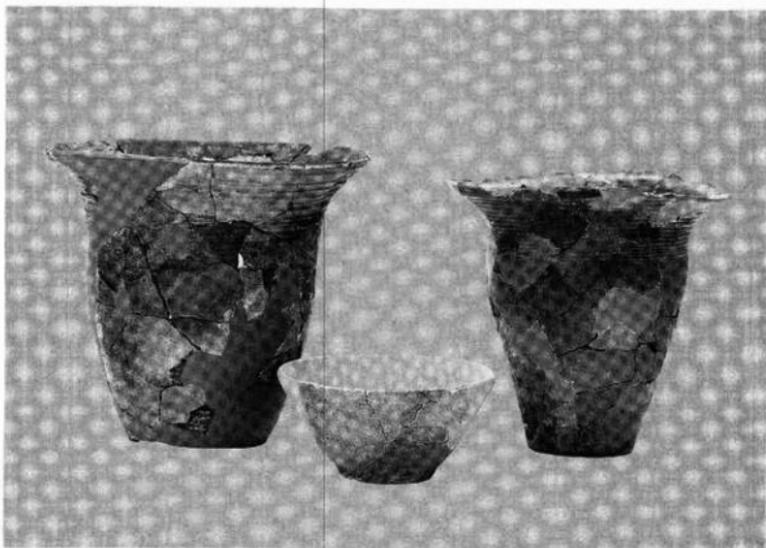


集石・骨片集中出土の土器

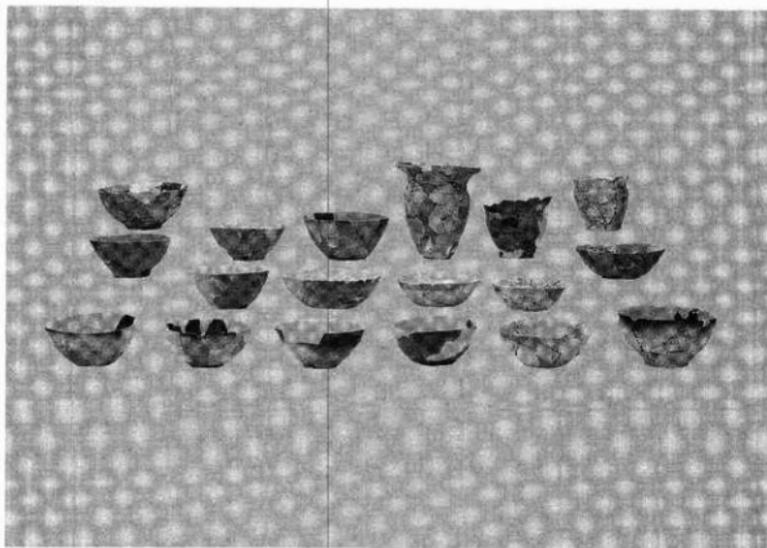
図版III-13



図版III-14

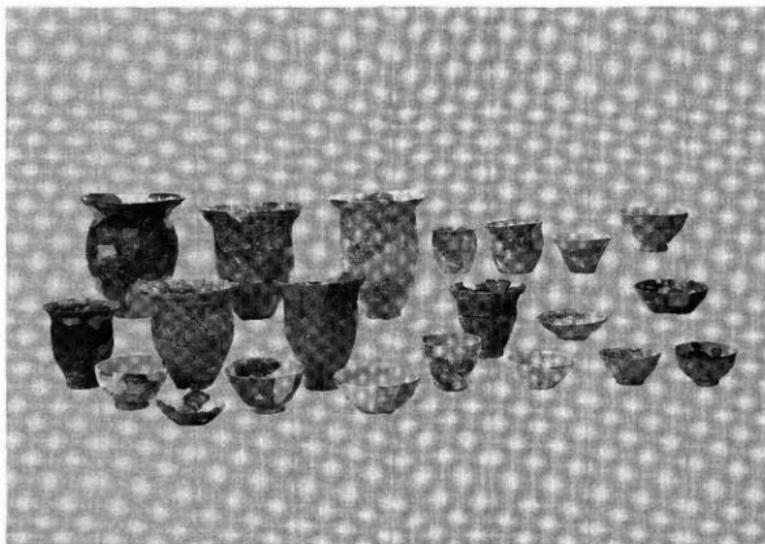


1 VII群IV類

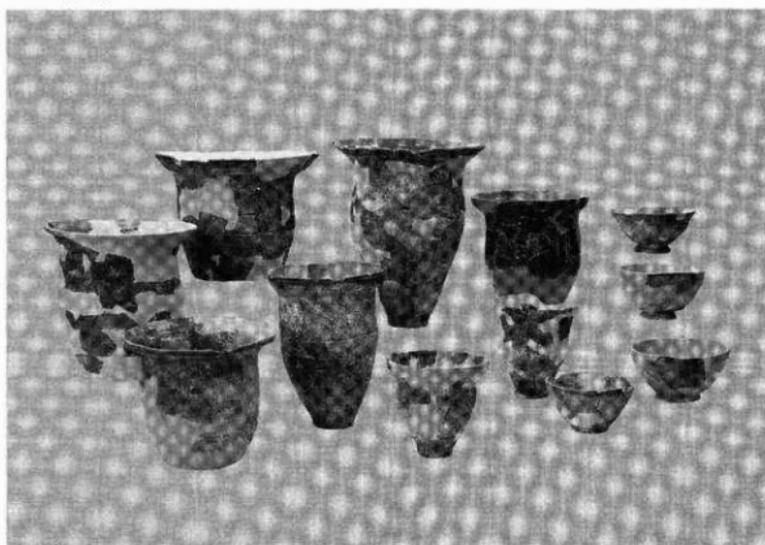


2 VII群V・VI類

図版III-15

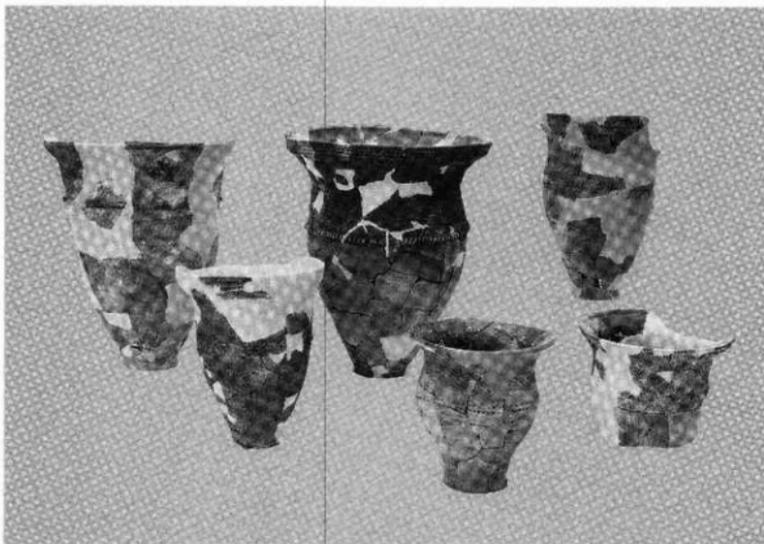


1 VII群VII類

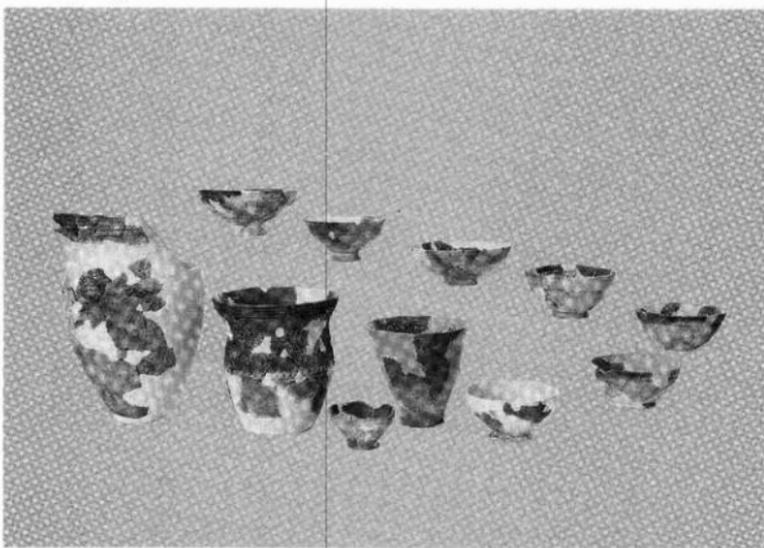


2 VII群VIIa類

図版III-16

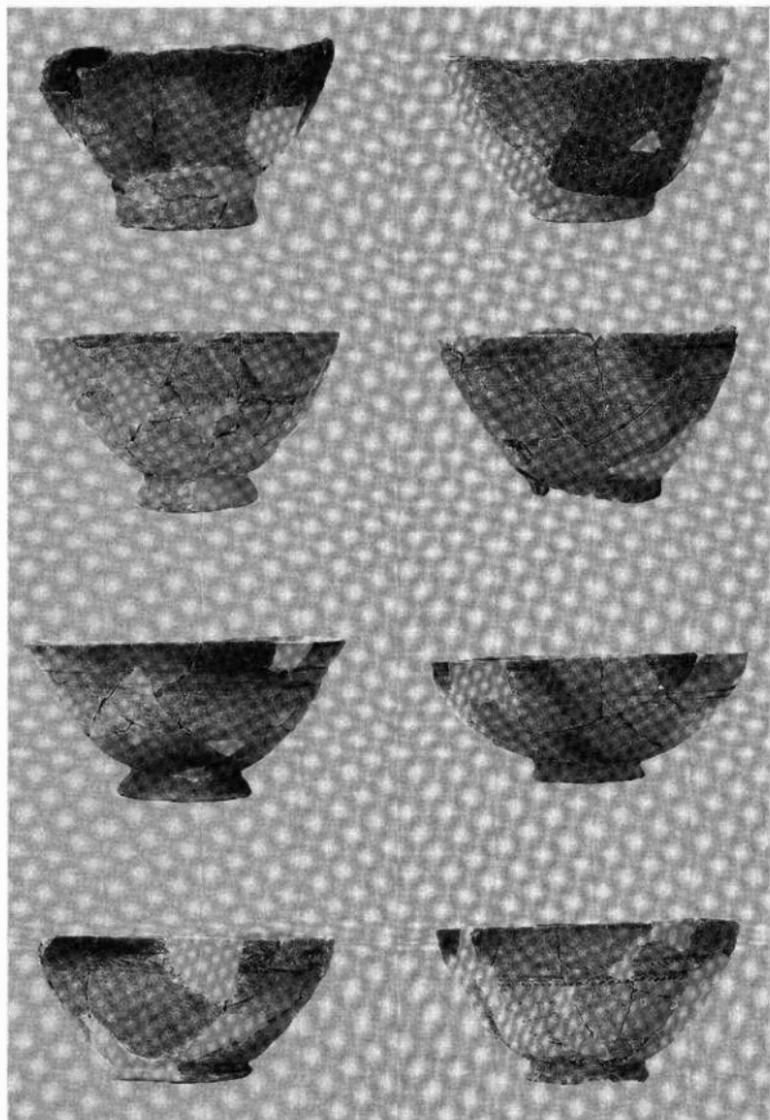


1 VII群VIIIb類



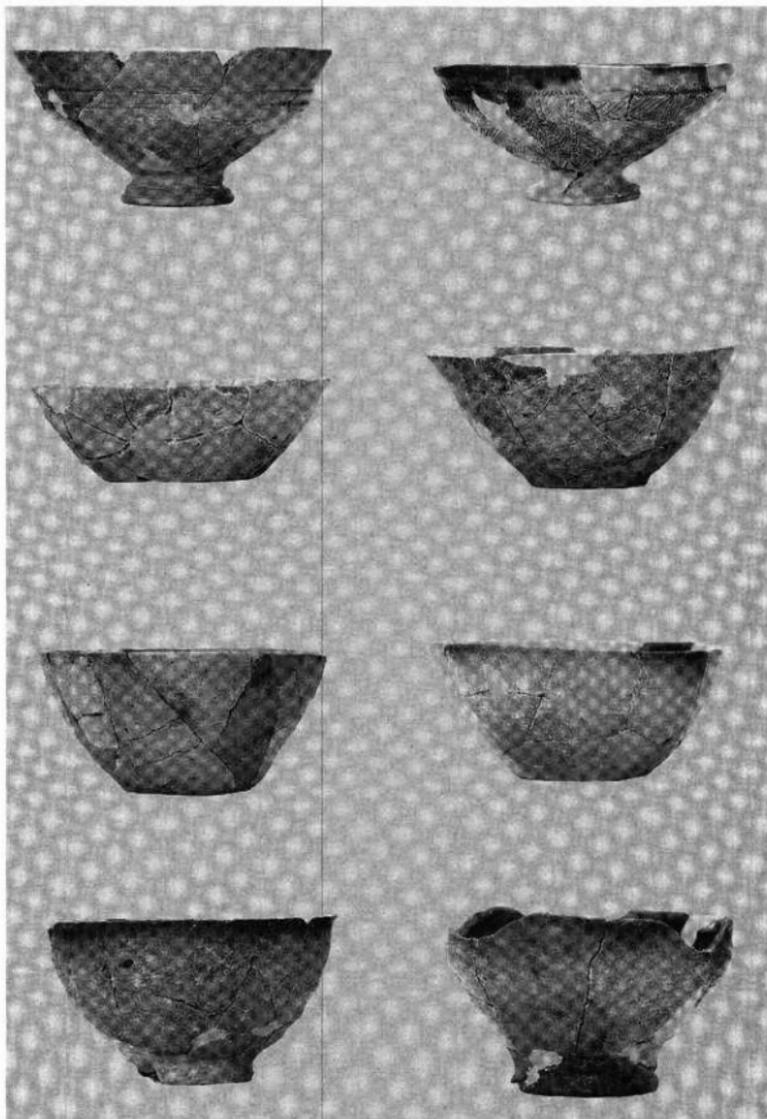
2 VII群IX類

図版III-17



坏

図版III-18



坏

図版III-19

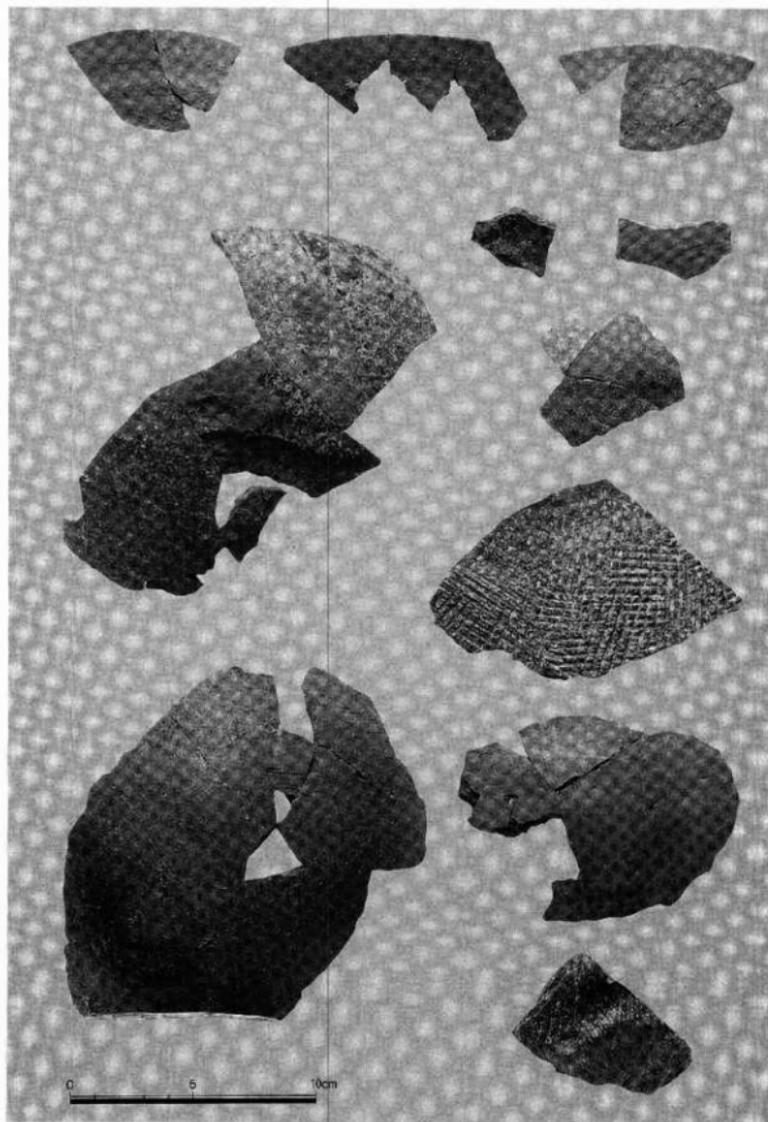


鉢

甕

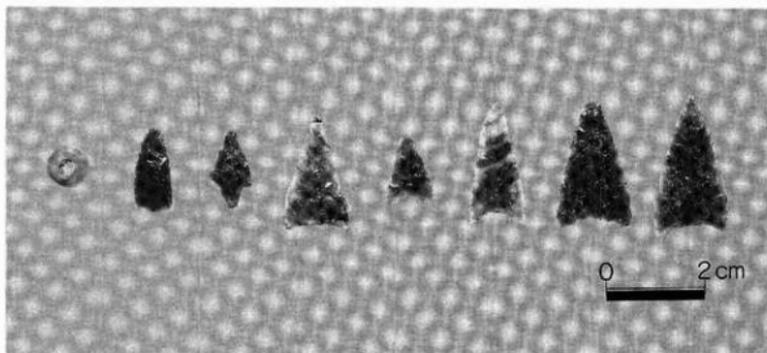
甕底面の砂粒付着状態

図版III-20

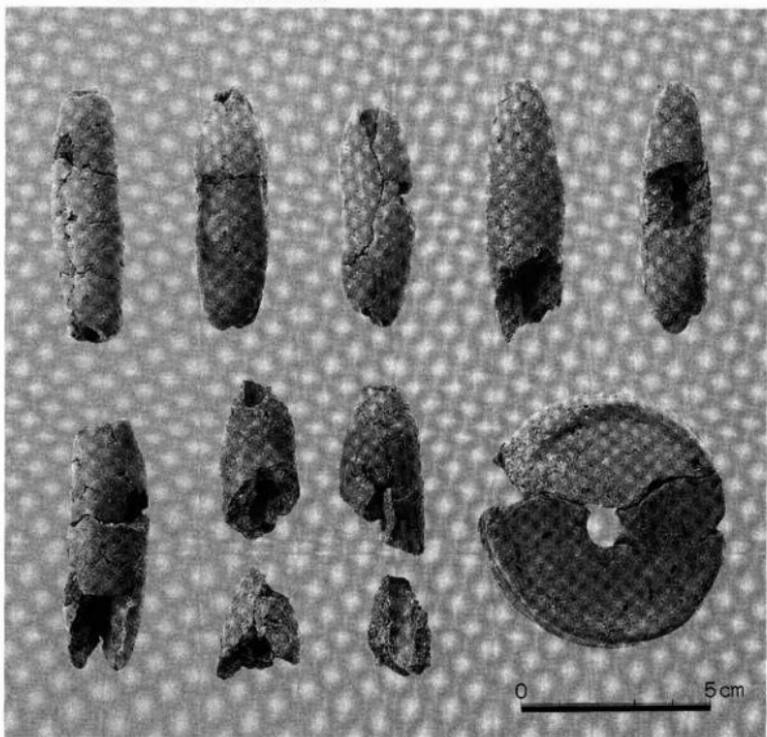


須恵器

図版III-21

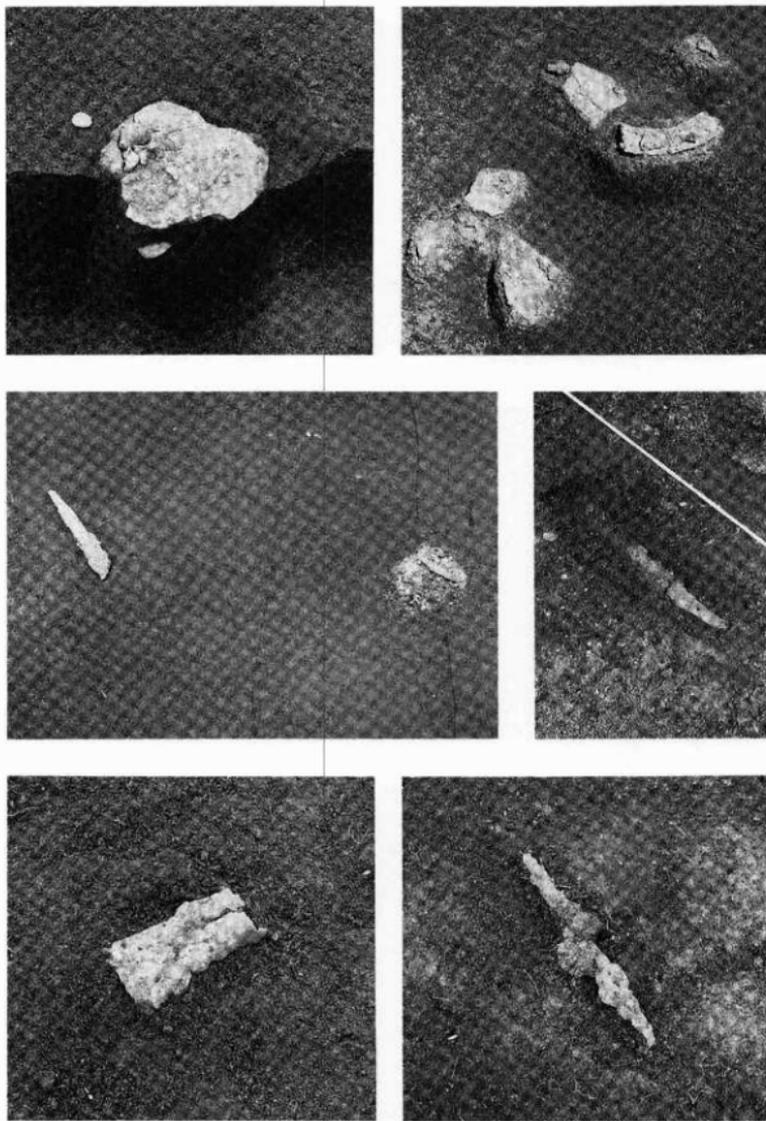


1 IF-14出土ガラス玉・I黒層出土石鏃



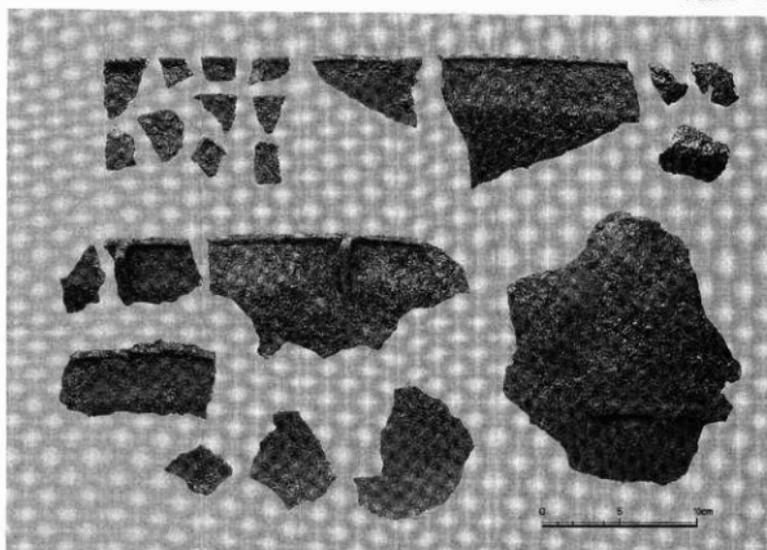
2 土鏃・紡錘車

図版III-22

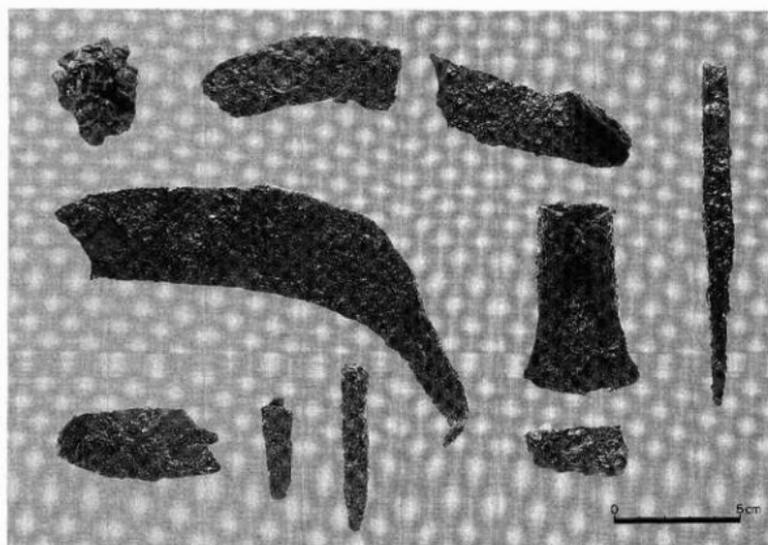


金屬製品出土状況

図版III-23

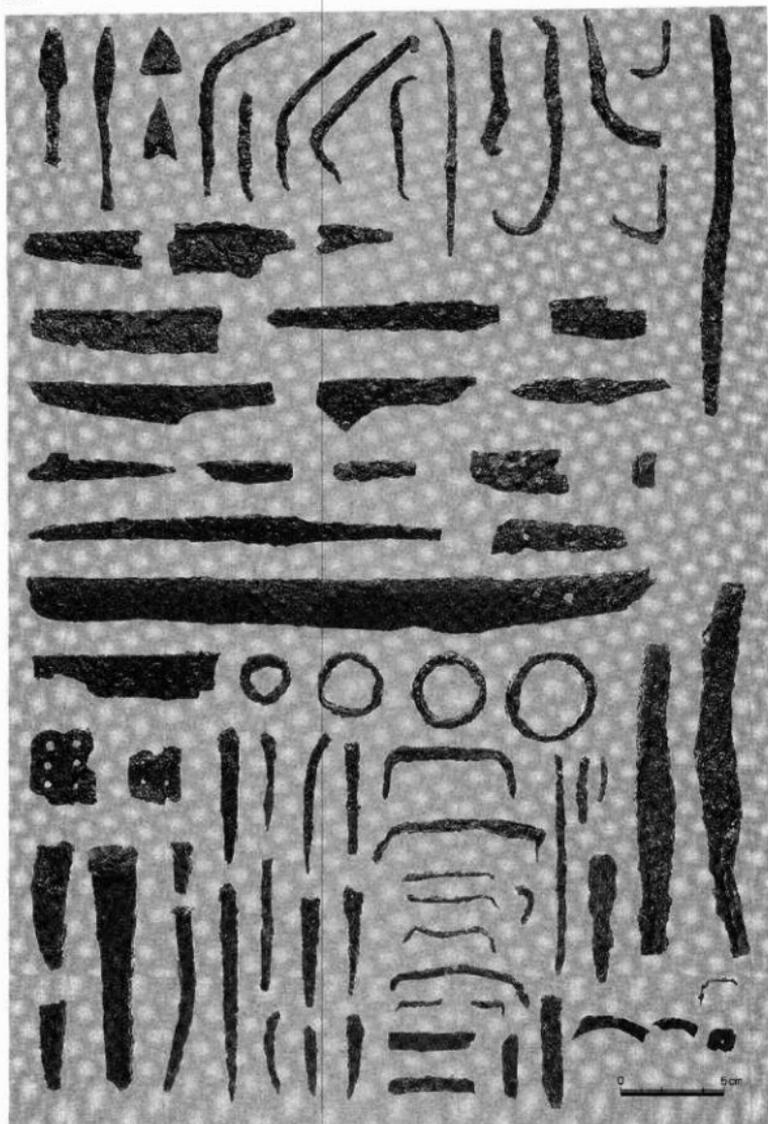


1 鉄鍋



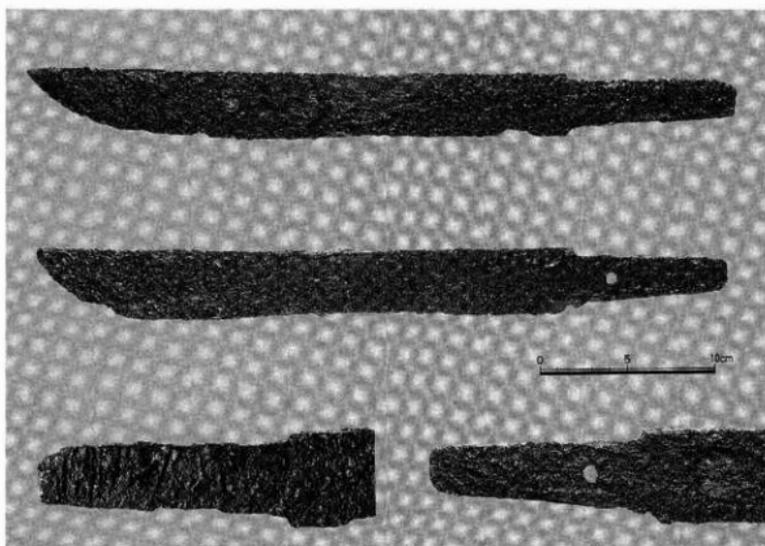
2 滓・鎌・斧・素材?ほか

図版III-24

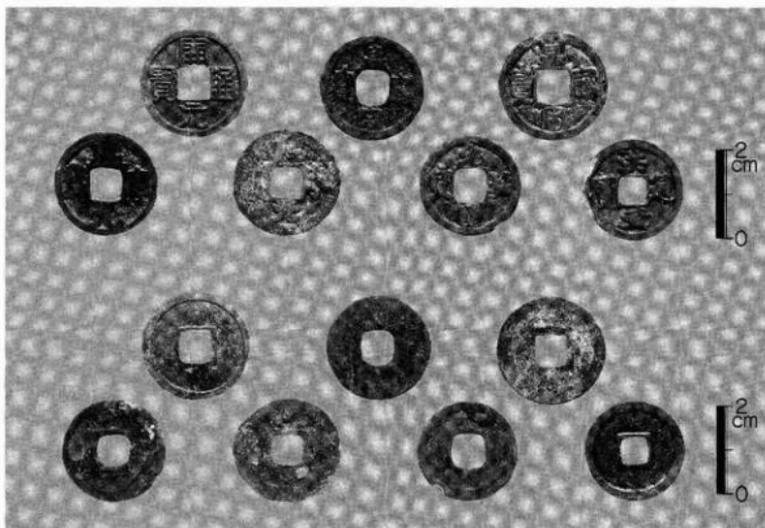


鍔・鉤・ヤス・刀子・刀・環・小札・釘・鋸ほか

図版III-25

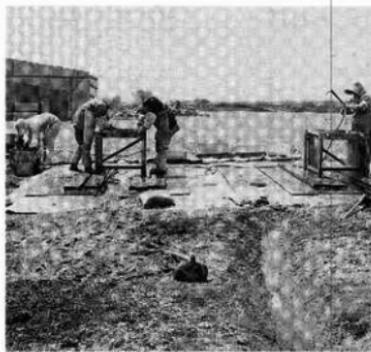


1 刀とその茎



2 古銭 (表裏)

図版III-26



土壤水洗・選別

北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第89集

美沢川流域の遺跡群 XVII

—新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成6年3月25日 発行

編集 財団法人北海道埋蔵文化財センター

〒064 札幌市中央区南26条西11丁目

TEL (011)561-3131

印刷 三陽印刷株式会社

〒063 札幌市西区西町北15丁目1番12号

TEL (011)661-2311

